

京都府遺跡調査概報

第 36 冊

近畿自動車道敦賀線関係遺跡

- (1) 私市円山古墳
- (2) 三宅遺跡
- (3) 福垣北古墳群
- (4) 館2号墳
- (5) 赤田遺跡
- (6) 馬場池東方遺跡
- (7) 火柴原古墳状隆起
- (8) 興遺跡
- (9) 観音寺遺跡

1989

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に開所した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターも、はや9年目を迎えました。この間、公共事業は年々増大し、それに伴って、発掘調査は、たんに件数の増加にとどまらず、年ごとに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するために、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。こうした発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』その他の各種印刷物を逐次刊行し、関係者の利用に供するとともに、「小さな展覧会」・「研修会」を開催して、一般の普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、昭和63年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて行った「近畿自動車道敦賀線関係遺跡」に関する発掘調査概要を収めたものであります。発掘の対象となった遺跡は、綾部市私市円山古墳、同三宅遺跡、同福垣北古墳群、同館2号墳、同赤田遺跡、同馬場池東方遺跡、福知山市火柴原古墳状隆起、同興遺跡、同観音寺遺跡の9件であります。このうち、私市円山古墳は京都府最大の円墳として注目を集め、日本道路公団・京都府教育委員会・綾部市教育委員会その他関係機関の御努力により、工事計画を変更の上、現状保存されることとなったものであります。調査に携わった者として、喜びにたえません。あらためて、関係者の御尽力に敬意を表したいと思います。

本書が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしか役立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された日本道路公団大阪建設局をはじめ、京都府教育委員会、綾部市教育委員会、福知山市教育委員会などの関係諸機関ならびに、調査に直接参加・協力いただいた多くの方がたに厚くお礼申し上げます。

平成元年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本書に収めたのは、「近畿自動車道敦賀線関係遺跡」の発掘調査概要である。
2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は，下記のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
(1) 私市円山古墳	綾部市私市町字円山	昭63. 4. 11 } 昭63. 12. 23	日本道路公団大阪建設局	鍋田 勇 大崎 康文 高野 陽子 石崎 善久
(2) 三宅遺跡	綾部市豊里町字三宅	昭63. 4. 21 } 平元. 1. 25	//	竹原 一彦
(3) 福垣北古墳群	綾部市豊里町字福垣	昭63. 4. 14 } 昭63. 8. 31	//	田代 弘
(4) 館 2 号 墳	綾部市館町字フロノ谷	昭63. 10. 3 } 昭63. 11. 1	//	田代 弘
(5) 赤 田 遺 跡	綾部市位田町字赤田	昭63. 5. 19 } 昭63. 8. 12	//	黒坪 一樹
(6) 馬場池東方遺跡	綾部市私市東町	昭63. 11. 7 } 平元. 2. 23	//	黒坪 一樹
(7) 火柴原古墳状隆起	福知山市字石原	平元. 2. 1 } 平元. 3. 15	//	竹原 一彦
(8) 興 遺 跡	福知山市字興	昭63. 11. 24 } 平元. 3. 15	//	田代 弘
(9) 観音寺遺跡	福知山市字観音寺	昭63. 11. 24 } 平元. 3. 15	//	岡崎 研一

3. 遺構の写真は各調査担当者が，遺物の写真は田中 彰が担当した。
4. 本書の編集は，調査第1課資料係が担当した。

目 次

はじめに.....	1
(1) 私市円山古墳.....	3
(2) 三宅遺跡.....	80
(3) 福垣北古墳群.....	88
(4) 館2号墳.....	92
(5) 赤田遺跡.....	95
(6) 馬場池東方遺跡.....	101
(7) 火柴原古墳状隆起.....	105
(8) 興遺跡.....	106
(9) 観音寺遺跡.....	113

挿 図 目 次

(1) 私市円山古墳

第 1 図	周辺主要遺跡位置図	5
第 2 図	周辺地形およびトレンチ配置図	7
第 3 図	墳丘測量図	9
第 4 図	第 7 トレンチ墳丘裾土層断面図	12
第 5 図	第 1 埴輪列および葺石部分図	13
第 6 図	墳丘下部・造り出し断面図	16
第 7 図	造り出し出土土器実測図	17
第 8 図	形象埴輪実測図(1)	20
第 9 図	形象埴輪実測図(2)	21
第 10 図	ヘラ記号拓影	23
第 11 図	円筒埴輪実測図	24
第 12 図	朝顔形埴輪実測図	25
第 13 図	主体部検出状況および断ち割りトレンチ配置図	27
第 14 図	墳頂部土層断面図	28
第 15 図	第 1 主体部実測図	30
第 16 図	第 1 主体部遺物出土状況図	33
第 17 図	第 1 主体部棺内西側遺物出土状況図	34
第 18 図	第 1 主体部出土短甲・付属具実測図	36
第 19 図	第 1 主体部出土鉄剣実測図	39
第 20 図	第 1 主体部出土鉄剣 2 鹿角装部分図	40
第 21 図	第 1 主体部出土胡籙実測図	41
第 22 図	第 1 主体部出土鉄鍔実測図	42
第 23 図	第 1 主体部出土鏡実測図	43
第 24 図	第 1 主体部出土玉類実測図	44
第 25 図	第 1 主体部出土壺実測図	45
第 26 図	第 2 主体部実測図	47
第 27 図	第 2 主体部遺物出土状況図	49
第 28 図	第 2 主体部遺物出土状況部分図	50

第 29 図	第 2 主体部出土冑(外面)実測図	51
第 30 図	第 2 主体部出土冑(内面)実測図	52
第 31 図	第 2 主体部出土鍔実測図	54
第 32 図	第 2 主体部出土鉄刀実測図	55
第 33 図	第 2 主体部出土刀子実測図	56
第 34 図	第 2 主体部出土鉄鍬実測図(1)	57
第 35 図	第 2 主体部出土鉄鍬実測図(2)	58
第 36 図	第 2 主体部出土農工具実測図(1)	60
第 37 図	第 2 主体部出土農工具実測図(2)	61
第 38 図	第 2 主体部出土鏡実測図	63
第 39 図	第 2 主体部出土玉類実測図	64
第 40 図	第 2 主体部出土白玉実測図(1)	65
第 41 図	第 2 主体部出土白玉実測図(2)	66
第 42 図	第 2 主体部出土豎櫛実測図	67
第 43 図	第 3 主体部遺物出土状況図	68
第 44 図	第 3 主体部出土鉄鍬(北群)実測図	70
第 45 図	第 3 主体部出土鉄鍬(南群)実測図	71
第 46 図	第 3 主体部出土農工具実測図	72
第 47 図	各主体部出土の鉄鍬型式	75

(2) 三宅遺跡

第 48 図	調査地位置図	81
第 49 図	調査区平面図	83
第 50 図	第Ⅳ調査区土坑実測図	85
第 51 図	土坑出土土器実測図	86

(3) 福垣北古墳群

第 52 図	地形図	88
第 53 図	1 号墳墳丘測量図	89
第 54 図	4・7 号墳墳丘測量図	89
第 55 図	出土遺物実測図	90

(4) 館 2 号墳

第 56 図	古墳分布図	92
第 57 図	1・2 号墳墳丘測量図	93

第 58 図	2号墳墳丘断面図	93
第 59 図	石鏃実測図	94
(5) 赤田遺跡		
第 60 図	トレンチ配置図	95
第 61 図	調査地全景	96
第 62 図	青灰色粘土面の広がり	96
第 63 図	溝SD01	97
第 64 図	土層断面および柱状図	97
第 65 図	SH01カマド部半割状況	98
第 66 図	須恵器杯実測図	99
第 67 図	磨製石斧実測図	99
(6) 馬場池東方遺跡		
第 68 図	調査区配置図	101
第 69 図	第Ⅰ区全景	102
第 70 図	第Ⅱ区全景	102
第 71 図	土層柱状図	102
第 72 図	焼土坑完掘状況	103
第 73 図	出土遺物実測図	103
第 74 図	石器実測図	104
(7) 火柴原古墳状隆起		
第 75 図	地形測量図	105
(8) 興遺跡		
第 76 図	トレンチ配置図	107
第 77 図	中世遺構実測図	108
第 78 図	弥生時代遺構実測図	108
第 79 図	各トレンチ断面模式図	109
第 80 図	土坑実測図	109
第 81 図	溝断面図	110
第 82 図	出土土器実測図	110
第 83 図	弥生土器実測図	111
(9) 観音寺遺跡		
第 84 図	トレンチ配置図	113
第 85 図	弥生土器実測図	115

表 目 次

第 1 表	近畿自動車道敦賀線関係遺跡一覧表	2
(1) 私市円山古墳		
第 2 表	第 1 主体部出土遺物構成表	31
第 3 表	第 2 主体部出土遺物構成表	48
第 4 表	第 3 主体部出土遺物構成表	67

図版目次

(1) 私市円山古墳

図版第1	(1)遠景	(2)近景
図版第2	(1)全景	(2)墳丘
図版第3	墳丘全景	
図版第4	(1)第Ⅰ埴輪列 (3)第Ⅱ埴輪列	(2)葺石 (4)第Ⅱ埴輪列
図版第5	(1)第7トレンチ全景 (3)第6トレンチ第Ⅰ埴輪列	(2)第6トレンチ全景
図版第6	(1)造り出し基部葺石 (3)造り出し形象埴輪・土師器出土状況	(2)造り出し埴輪列
図版第7	(1)第1～3主体部検出状況	(2)第1・2主体部全景
図版第8	第1主体部全景	
図版第9	(1)第1主体部棺上面検出状況 (3)第1主体部遺物出土状況(2)	(2)第1主体部遺物出土状況(1)
図版第10	(1)第1主体部短甲・付属具出土状況	(2)第1主体部短甲・付属具出土状況
図版第11	(1)第1主体部遺物出土状況(3)	(2)第1主体部遺物出土状況(4)
図版第12	第2主体部全景	
図版第13	(1)第2主体部被覆粘土検出状況 (3)第2主体部遺物出土状況	(2)第2主体部全景 (4)第2主体部遺物出土状況
図版第14	(1)第2主体部短甲出土状況	(2)第2主体部短甲出土状況
図版第15	(1)第2主体部鏡・刀子出土状況	(2)第2主体部農工具類出土状況
図版第16	(1)第2主体部東側被覆粘土横断面	(2)第2主体部棺側横断面
図版第17	(1)第3主体部全景	(2)第3主体部全景
図版第18	(1)第3主体部鉄鏃出土状況	(2)第3主体部農工具類出土状況
図版第19	(1)家形埴輪1	(2)家形埴輪2～4
図版第20	(1)形象埴輪	(2)円筒埴輪
図版第21	(1)第1主体部短甲・付属具	(2)第1主体部短甲・付属具
図版第22	(1)第1主体部短甲 (3)第1主体部短甲	(2)第1主体部短甲

図版第23	第1主体部胡籙金具	
図版第24	第1主体部帶金具・鉄劍	
図版第25	第1主体部鉄鏃	
図版第26	(1)第1主体部玉類	(2)第1主体部鏡
	(3)第1主体部豎櫛	
図版第27	(1)第2主体部冑	(2)第2主体部冑・鍔
	(3)第2主体部冑・鍔	
図版第28	(1)第2主体部冑	(2)第2主体部冑
図版第29	(1)第2主体部鉄刀	(2)第2主体部鏡
	(3)第2主体部刀子	
図版第30	第2主体部鉄鏃	
図版第31	第2主体部農工具類(1)	
図版第32	第2主体部農工具類(2)	
図版第33	(1)第2主体部玉類	(2)第2主体部玉類
図版第34	第3主体部鉄鏃(1)	
図版第35	第3主体部鉄鏃(2)	
図版第36	第3主体部農工具類	
(2) 三宅遺跡		
図版第37	(1)第Ⅱ調査区三宅4号墳東部周溝	(2)第Ⅱ調査区北部畑地および中世溝
図版第38	(1)第Ⅱ・第Ⅵ調査区SD04	(2)第Ⅳ調査区土坑群
図版第39	(1)SK497土器出土状況	(2)SK515遺物出土状況
(3) 福垣北古墳群		
図版第40	(1)E地点掘削状況	(2)6号墳主体部検出状況
図版第41	(1)1号墳全景(掘削前)	(2)1号墳全景(掘削後)
(4) 館2号墳		
図版第42	(1)2号墳全景(掘削前)	(2)2号墳全景(掘削後)
(5) 赤田遺跡		
図版第43	(1)B地点全景	(2)竪穴住居SH01検出状況
(7) 火柴原古墳状隆起		
図版第44	(1)調査前全景	(2)調査後全景
(8) 興遺跡		
図版第45	(1)A地区SD01, SD04検出状況	(2)A地区SK06検出状況

図版第46 (1)A地区SK01検出状況

(2)A地区SK01土師器出土状況

(9) 観音寺遺跡

図版第47 (1)遠景

(2)第15トレンチ溝検出状況

図版第48 (1)第5トレンチ溝検出状況

(2)第5トレンチ溝内堆積状況

近畿自動車道敦賀線関係遺跡 昭和63年度発掘調査概要

はじめに

近畿自動車道舞鶴線は、兵庫県吉川J・C～京都府福知山J・Cの区間が、昭和63年3月に開通し、福知山～舞鶴間(22.7km)が第8次施工区間として計画されていた。平成元年2月、この路線が福井県敦賀市まで区間延長されることになり、「近畿自動車道敦賀線」と名称変更された。

近畿自動車道敦賀線関係遺跡とは、自動車道福知山～舞鶴間の路線帯に分布する埋蔵文化財の総称である。この区間内には、福知山市域に7遺跡、綾部市域に15遺跡が確認されている(第1表参照)。財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、日本道路公団大阪建設局の依頼により、昭和61年度から上記遺跡の発掘調査に着手し、昨年度までに12遺跡の調査を実施した。特に、畝状堅堀14条を面的調査し、中世城郭研究に貴重な成果を得た平山城館跡調査、平野部に削平された前方後円墳1基、円墳6基を検出した野崎古墳群調査、緑釉陶器・硯等の出土遺物により官衙的色彩の強い遺跡と考えられる小西町田遺跡調査など、当地域の歴史を解明するうえで多大な成果を得ている。

今年度は、私市円山古墳・三宅遺跡・福垣北古墳群の継続調査のほか、館古墳群・赤田遺跡・馬場池東方遺跡・興遺跡・観音寺遺跡・火柴原古墳状隆起の発掘調査を実施した。各遺跡の発掘調査期間・調査面積は下記のとおりである。

- (1) 私市円山古墳 (約1,850㎡) 昭和63年4月11日～昭和63年12月23日
- (2) 三宅遺跡 (約3,000㎡) 昭和63年4月21日～平成元年1月25日
- (3) 福垣北古墳群 (約2,500㎡) 昭和63年4月14日～昭和63年8月31日
- (4) 館2号墳 (約150㎡) 昭和63年10月3日～昭和63年11月1日
- (5) 赤田遺跡 (約1,500㎡) 昭和63年5月19日～昭和63年8月12日
- (6) 馬場池東方遺跡 (約1,200㎡) 昭和63年11月7日～平成元年2月23日
- (7) 火柴原古墳状隆起 (約120㎡) 平成元年2月1日～平成元年3月15日
- (8) 興遺跡 (約2,000㎡) 昭和63年11月24日～平成元年3月15日
- (9) 観音寺遺跡 (約1,400㎡) 昭和63年11月24日～平成元年3月15日

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克、同主任調査員引原茂治、同調査員竹原一彦・黒坪一樹・岡崎研一・田代 弘・鍋田 勇が担当した。

第1表 近畿自動車道敦賀線関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	年代	所在地	調査年次	備考	位置 図号
1	狐塚古墳	古墳	古墳時代中期	福知山市字石原小字平野	昭63	測量調査	
2	火柴原古墳状隆起	古墳?	古墳時代?	福知山市字石原	昭63		
3	小谷古墳	古墳	古墳時代	福知山市字観音寺			
4	西山館跡	城館跡	鎌倉～室町時代	福知山市字観音寺			
5	興遺跡	集落跡	弥生時代	福知山市字興	昭63	継続	24
6	観音寺遺跡	集落跡	弥生時代	福知山市字観音寺	昭63	継続	25
7	小貝遺跡	集落跡	縄文～鎌倉時代	綾部市小貝町	昭63		28
8	私市円山古墳	古墳 経塚	古墳時代中期 鎌倉時代	綾部市私市町字円山	昭62 ・63	(改)円山城館跡	1
9	馬場池東方遺跡	散布地	不明	綾部市私市東町	昭63		
10	小西町田遺跡	集落跡	弥生～平安時代	綾部市小西町字町田	昭62		30
11	三宅4号墳	古墳	古墳時代後期	綾部市豊里町字三宅	昭63		8
12	三宅遺跡	集落跡	弥生～鎌倉時代	綾部市豊里町字三宅	昭62 ・63		32
13	福垣城館跡	城館跡	室町時代	綾部市豊里町字福垣	昭62		
14	福垣北古墳群	古墳	古墳時代中期 ～後期	綾部市豊里町字福垣	昭62 ・63	(改)以久田野古墳状隆起	9
15	館2号墳	古墳	古墳時代	綾部市館町字フロノ谷	昭63		12
16	赤田遺跡	城館跡	室町時代?	綾部市位田町字赤田	昭63	(改)赤田城館跡	
17	カジャ谷古墳	古墳跡	中世?	綾部市七百石町字カジャ谷	昭61		
18	平山城館跡	城館跡	室町時代	綾部市七百石町字平山	昭61 ・62		
19	平山東城館跡	城館跡	室町時代	綾部市七百石町	昭61 ・62		
20	奥大石古墳群	古墳	古墳時代	綾部市七百石町			
21	野崎古墳群	古墳	古墳時代	綾部市高槻町字野崎	昭61	(改)野崎遺跡	
22	ヌクモ古墳群	古墳	古墳時代	福知山市字石原			22

調査に際しては、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・綾部市教育委員会・福知山市教育委員会・綾部史談会・福知山史談会・地元各自治会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局・京都府立丹後郷土資料館等関係諸機関・諸氏より多大な協力を得た。また現地作業については、地元各地区の有志の方がた・学生諸氏に年間を通じて作業に従事していただき、記して感謝の意を表したい。

なお、私市円山古墳については、日本道路公団、京都府・綾部市両教育委員会等関係機関の御努力により現地保存されることになった。関係機関の御理解に深く感謝したい。

(水谷 寿克)

(1) 私市円山古墳

1. はじめに

私市円山古墳の立地 京都府の北部は、旧国では、最北に位置する丹後国と丹波国から構成されるが、地域文化圏としてみたときには、丹後・中丹波・口丹波(丹波は、兵庫県側にもう1地域存在)の大きく3地域として語られることが多い。そのうち、中丹波は、京都府北部最大の河川である由良川の中流域を中心とする地域であり、現在の行政単位では、綾部市・福知山市・夜久野町がその主要地域を占めている。この地域は、西流する由良川を中心に、東西約18km・南北約2kmの狭小な沖積平野として、地理的にひとつのまとまった様相を呈している。

私市円山古墳は、京都府綾部市私市町円山に所在し、位置的には、東西に長い平野のほぼ中央部にあたる。古墳の立地は、由良川へ注ぎ込む支流の犀川・相長川に挟まれた山塊の最南端で、流域の平野を見おろす小高い丘陵上である。古墳は単独で存在している。

古墳の墳頂部は、標高約94mであり、麓の平地部との標高差は約60mを測る。麓からは古墳を見上げることになり、また、かなりの遠隔地からでも古墳を望むことができる。反対に、古墳からの眺望はまさにすばらしい。眼下にはゆるやかに流れる由良川を臨み、綾部・福知山の両市街地を含む由良川中流域のほぼ全域を見渡すことが可能である。このように、立地という点では、中丹地域の中でも卓越した条件を備えもつ古墳であるといえる。

(鍋田 勇)

位置と環境 京都府の北部を流れる由良川は、丹波山地をぬって西流し、福知山盆地で北に転じて日本海に注いでいる。由良川の上・下流域にはそれほど広い平野はないが、中流域においては、東西に狭長な沖積平野が綾部市から福知山市にかけて広がっている。この川の中流域に注ぐ支流は、ほとんどが全長20kmたらずの小河川であるが、これらの流域では耕地に適した谷平野が山地の奥深くにまで入り込んでいる。

由良川中流域の歴史的環境を主要な考古資料をもとに概観すると、まず旧石器時代については、数点の土器が表面採取されている程度で、遺構は確認されていない。縄文時代の遺物が出土した遺跡としては、草創期の武者ヶ谷遺跡、早期から晩期の荒堀遺跡、後期の半田遺跡などがあるが、そのいずれもが遺構の伴わないものである。

弥生時代になると、各支流域に活動の痕跡を見ることができる。代表的なものを取り上げると、盆地の西方牧川流域では弥生時代中期末の方形周溝墓と弥生時代末から庄内期にかけての円形堅穴住居が検出された石本遺跡が、和久川によって形成された豊富谷には、

丘陵尾根上に30基以上もの方形台状墓をもつ豊富谷丘陵遺跡が存在する。とりわけ、この台状墓は、弥生時代に築造が始まり古墳時代中期にまで継続して営まれ、近接する丹後・但馬地方と同じ様相を示している。

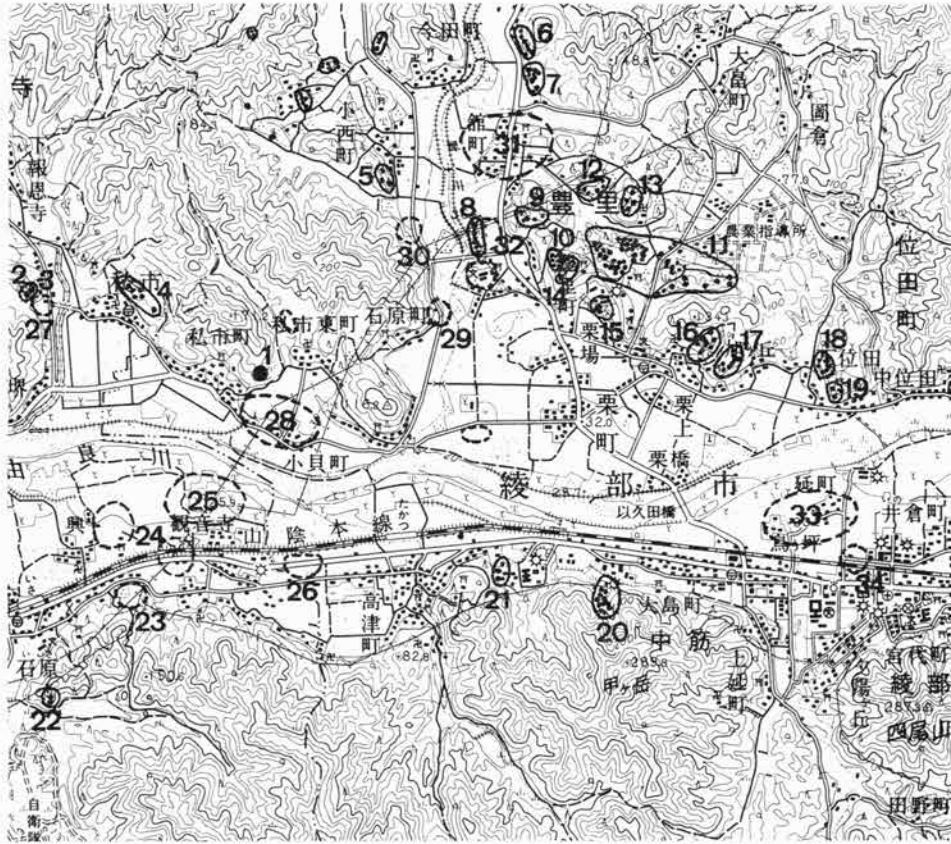
土師川流域では、宮遺跡、ケンケ谷遺跡、奥谷西遺跡が、一連の同一集落的性格をもつ遺跡群とされ、土器には播磨地方の影響が認められる。八田川流域の独立丘陵である久田山には、後期にまでさかのぼる台状墓や方形周溝墓の確認された久田山南遺跡が位置している。また、由良川南岸の自然堤防上には、弥生時代中期以降の円形住居、古墳時代以降の方形住居など数十基が検出された青野遺跡や、弥生時代後期から古墳時代中期にまでおよぶ竪穴住居15基が確認された青野西遺跡などがある。

由良川中流域には、約900基の古墳が分布している。その多くは後期の群集墳であり、また大半は丘陵上に立地している。この地域には丹後・但馬と同様、弥生時代の方形台状墓の系列を引く墓制が古墳時代にも引き継がれる様相がみられ、その例として、成山古墳群と宝蔵山古墳群があげられる。しかし、一方の丹後地方では古墳時代前期から中期にかけて神明山古墳(全長190m)、網野銚子山古墳(全長198m)、蛭子山古墳(全長145m)など、周囲とは隔絶した規模の大前方後円墳が築造されている。それに比べて由良川中流域では、5世紀代には段築・埴輪・葦石などの施設を備えた綾部市菖蒲塚古墳・聖塚古墳、福知山市妙見1号墳がみられるようになるが、いずれも方墳であり前代からの系譜を引いている。南丹波においても、方墳が数多く築造されるが、同時に前方後円墳も築造されており、この地域とは様相を異にする。

5世紀後半になると、前方後円墳が出現する。犀川流域の以久田野古墳群中に存在する沢3号墳は、典型的な中期後半の墳形で、この地域の前方後円墳としては唯一、段築・埴輪・葦石を備えた古墳である。大型方墳に代わってこの地域の首長墓系譜を受けるものと考えられるが、方墳から前方後円墳への墳形の変化が、畿内との結合の強化を示すものなのかどうかは速断できない。

6世紀には埋葬主体に横穴式石室が採用され、群集墳の造営が開始される。犀川下流域の丘陵上に分布する以久田野古墳群は、前方後円墳5基を含む、総数120基からなる丹波地方最大の群集墳である。この古墳群の一支群と考えられる福垣北古墳群の調査により、5世紀前半から中頃に造墓の始まることが確認された。同じく犀川の左岸丘陵上に位置する高谷古墳群は、木棺直葬墓と横穴式石室の計5基からなる小規模群集墳である。5世紀末から築造が始まり、7世紀後半まで存続すると考えられており、出現の早さとその存続期間の長さが注目される。

木棺直葬系の群集墳である三宅古墳群は、現在は円墳4基が残るのみであるが、最近の



第1図 周辺主要遺跡位置図

- | | | | |
|--------------|-----------|------------|----------|
| 1 私市円山古墳 | 2 高龍塚古墳 | 3 奉安塚古墳 | 4 西稻葉古墳群 |
| 5 成山古墳群 | 6 神子田古墳群 | 7 高谷古墳群 | 8 三宅古墳群 |
| 9 福垣北古墳群 | 10 福垣古墳群 | 11 以久田野古墳群 | 12 館古墳群 |
| 13 りょうごん寺古墳群 | 14 殿山古墳群 | 15 沢古墳群 | 16 上村古墳群 |
| 17 上村北古墳群 | 18 宮越古墳群 | 19 稲荷古墳群 | 20 大島古墳群 |
| 21 高津古墳群 | 22 スクモ古墳群 | 23 興南遺跡 | 24 興遺跡 |
| 25 観音寺遺跡 | 26 高津遺跡 | 27 立石遺跡 | 28 小貝遺跡 |
| 29 石原遺跡 | 30 小西町田遺跡 | 31 館遺跡 | 32 三宅遺跡 |
| 33 延遺跡 | 34 岡町遺跡 | | |

調査で計12基から構成されていたことが明らかとなった。1号墳は荒神塚と呼ばれ、短甲、金銅張りの馬具などの遺物が出土していることから盟主墳と考えられている。

八田川流域の久田山古墳群は、この地域では以久田野古墳群に次ぐ規模をもつ群集墳で、前方後円墳2基を含む総数70基あまりで構成されている。しかし、いずれも未調査のため、詳細については不明なことが多い。造墓活動は7世紀代に入ると少なくなり、後葉にはおわりを告げる。

(大崎 康文)

2. 調査の経過

この遺跡は、近畿自動車道舞鶴線の道路計画に伴う事前の遺跡分布調査により、円山城館跡として新たに認知された。調査を開始する直前に大型の古墳であることが判明し、昭和62・63年度に発掘調査を実施した。以下、両年度の概略を記す。

〔昭和62年度の調査〕 調査はまず墳丘の平板測量を行い、墳丘の形態と規模について検討した後、合計5か所にトレンチを設定し、試掘調査を行った。これにより、墳丘は3段築成の大型円墳であること、2つの平坦面に埴輪列が巡ること、造り出しを有すること等、墳丘の概要を把握することができた。

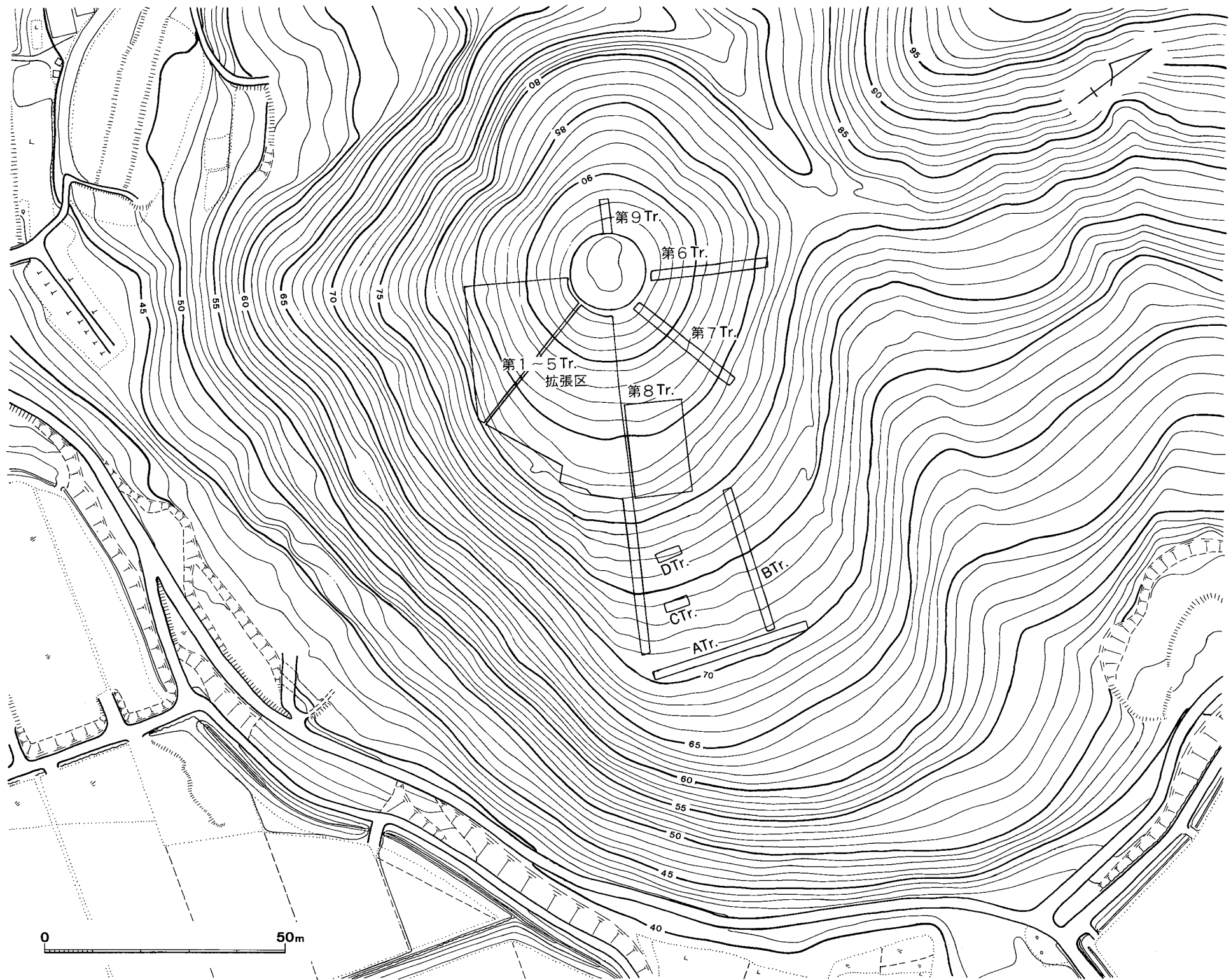
埋葬施設については、墳頂部を全面的に掘り下げて、主体部の検出を行った。墳頂部では、結果的に城館に伴う遺跡・遺物は確認できなかったが、中世の経塚(私市円山^(注2)経塚)が新たに見つかり、主体部の検出と並行して調査を実施した。主体部は、墓壙の上面の検出まで行い、この時点で、計4基の主体部の存在が予想された。

〔昭和63年度の調査〕 4～6月は、墳丘の調査を主として行った。昨年度に設定した第1～5トレンチを拡張し、墳丘の南東側4分の1と造り出しを含む調査区とした。墳丘斜面は、表土を除去するとすぐに葦石が検出される状況であったが、転落・移動しているものが多く、現位置をとどめている葦石の確認作業に手間取った。埴輪列は、トレンチで位置を確認していたため、比較的容易に検出が進んだ。しかし、埴輪は、多くが原位置をとどめていたものの、基底から第2段までがかるうじて遺存している状態であった。

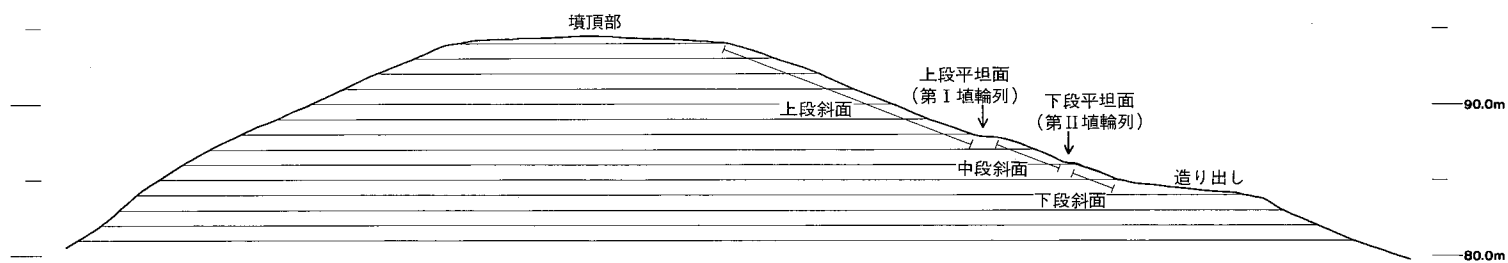
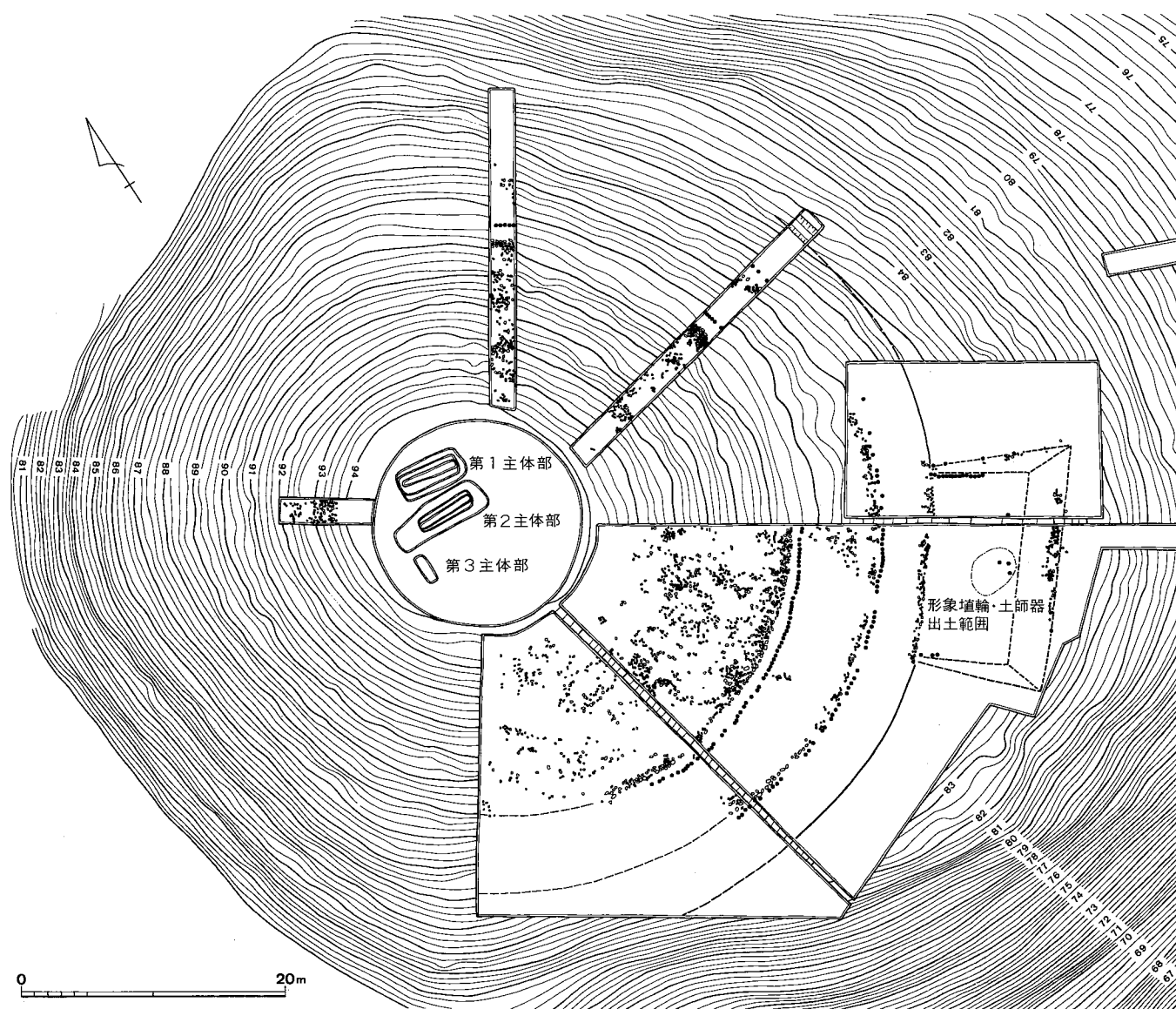
7～9月は、第6～8トレンチを設定し、墳丘の調査も続行したが、調査の中心は、埋葬主体部へと移行した。すでに墓壙の上面まで検出していたため、切り合いをもたない第1～3主体部について並行して調査を行った。第1・第2主体部では、予想していたとはいえ、豊富な遺物が出土し、なかでも、遺存状態の悪かった鏡・管玉や草摺の漆膜・鉄地金銅張りの胡籙金具などは取り扱いに苦慮した。その後、第2主体部と切り合い関係をもつ第4主体部の調査に着手したが、上面で検出した主体部状の輪郭は、盛土による土色変化であることが判明し、これは主体部でないことが確認された。各主体部は、遺物の検出、実測、写真撮影等が終了したのち、遺物の取り上げを行った。その後、9月11日には、現地説明会を実施した。当日は、約1,000名の参加者があり、関心の高さを窺わせた。

10月は、墳丘では第9トレンチを追加設定した。また、墳丘から南東側へのびる尾根上にA～Dトレンチを設定し、古墳に関わる施設等の確認を行ったが、顕著な遺構は検出できなかった。主体部については、断ち割りを行い、墓壙・棺の構造を再検討した。

11～12月は、葦石・埴輪列の実測作業を主として行い、実測終了後、埴輪を取り上げた。12月23日には、現地における作業をすべて終了した。(鍋田)



第2図 周辺地形およびトレンチ配置図



第3図 墳丘測量図

3. 墳丘の調査

(1) 墳丘の形態・規模・外表施設

A. 形態と規模

1～5トレンチ拡張区、および6～9トレンチの墳丘調査によって、墳丘の形態は、造り出しを有する円墳であることが判明した。円丘部については、墳丘裾の両端を確実に認定することができなかつたので、墳頂部の中心から造り出しにおける墳丘裾までの長さを半径とみなし、円丘の直径を71mと推定した。墳丘の高さは約10mを測る。造り出しは、やや撥状に広がる方形の区画であり、幅約18m・長さ10mを測る。したがって、造り出しを含めた全長は81mとなり、全国的にも大型の円墳の部類に属する。なお、この古墳では、円丘部の直径に比べて、方形区画の長さが短いことから(直径の約7分の1)、いわゆる帆立貝式古墳の名称は使用していない。

墳丘は3段築成であり、外表施設として葦石・埴輪を備えている。各部の名称については、第3図に示すように、墳丘の裾から、下段斜面・下段平坦面・中段斜面・上段平坦面・上段斜面・墳頂部と呼称する。また、埴輪列については、上段平坦面に巡るものを第Ⅰ埴輪列、下段平坦面に巡るものを第Ⅱ埴輪列とする。なお、墳頂部においては、形象埴輪・円筒埴輪とも出土しているが、原位置を保った状態ではなかつた。そのため、墳頂部における埴輪樹立の形態については不明である。

さて、墳丘の形態と構造に関わるいくつかの問題点について以下に述べたい。

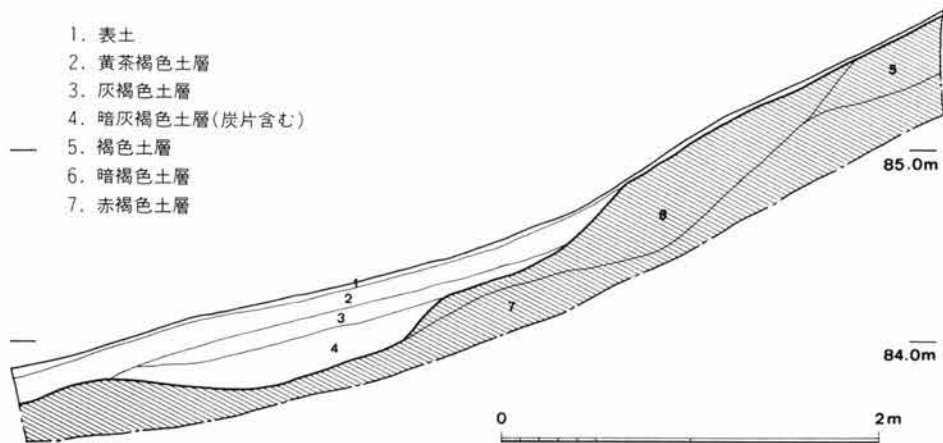
①墳丘は、墳頂部の約1m弱以外は、大部分地山を削り出すことによって形成されている。つまり、3段築成というのはあくまで外見上のことであり、盛土から古墳を構築するさいのように構造上の必要から生じたものではない。なお、削り出された土量については推定できないが、同規模の古墳を盛土により構築するよりも全体の労働力はかなり少ないであろう。この古墳は、丘陵の頂部に立地し、葦石の運搬には多大な労働力が必要とされるため、墳丘の基礎部分の構築にあたっては、最大限に自然地形を利用することで労働力の削減を図ったものと思われる。

②調査開始前の所見では、墳丘の裾と考えられたテラスから墳頂部までの墳丘斜面において1段しか明瞭なテラスは確認できなかった。そのため、当初は、2段築成の墳丘と考えていたが、結果的に上段平坦面とした明瞭なテラスと墳丘の裾との間に第Ⅱ埴輪列を検出し、ここに下段平坦面が存在していることが判明したため3段築成とするに至った。しかし、この下段平坦面は、検出段階では明らかに平坦な面として検出できていない。すなわち、葦石と埴輪の存在により平坦面の想定をしたわけであるが、埴輪はゆるやかな斜面

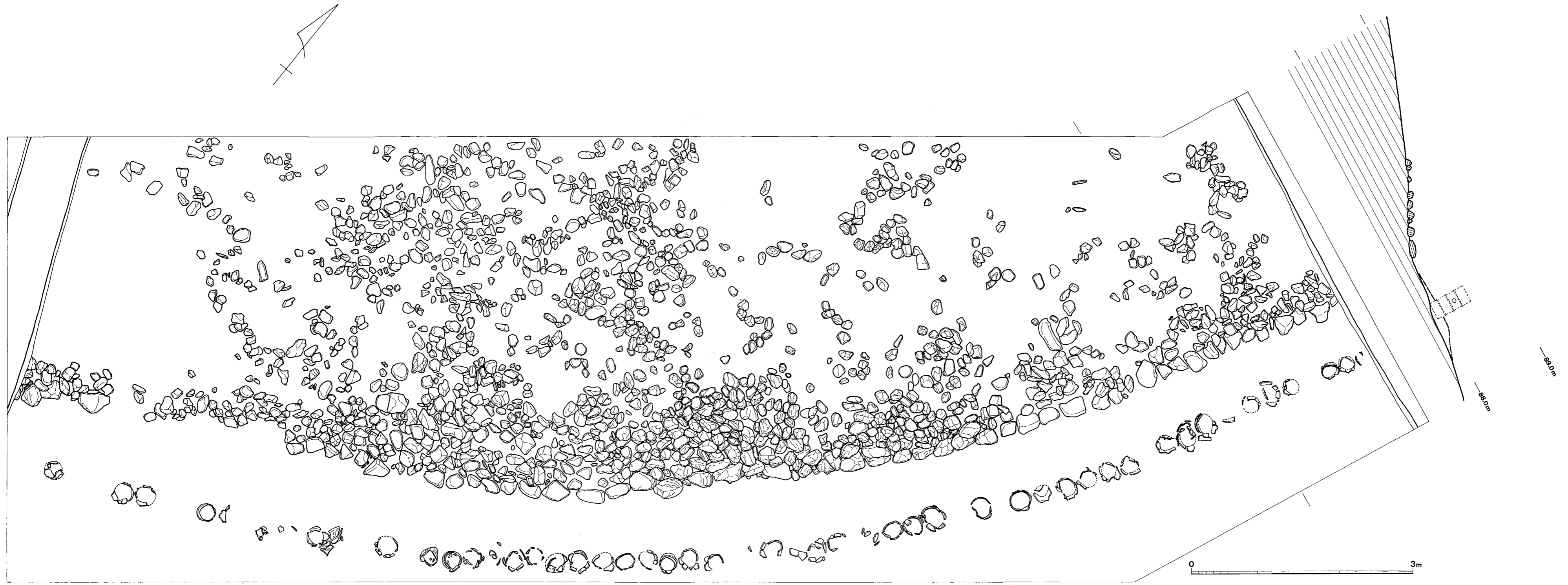
上においてかろうじて原位置を保った状態であった。①とも関連するが、築造当初は、埴輪を樹立できる程度の狭い平坦面を整えた程度のもので、その後肩部の土砂が流出したものである。埴輪の遺存状況を見ると、第Ⅰ埴輪列に比べて第Ⅱ埴輪列の方がかなり悪いが、この点も平坦面の造りの差に起因しているといえるだろう。

③3段の斜面のうち、下段斜面には葦石が施されていない。また、墳丘の裾には埴輪列が巡らされない。そのため、この下段斜面を墳丘とは一線を画して捉える見解も可能ではある。このような形態をとる例として加悦町の鳴谷東1号墳をあげることができる。鳴谷東1号墳^(注3)では、平野部に面して墳丘のさらに下段に「基壇」と称される地山を削りだした斜面が存在している。しかし、この古墳では、この場合下段平坦面をもって墳丘裾と考えることになり、②に記したようにこの平坦面があまり明瞭なものではないこと、造り出しが下段斜面に取り付いていること、第7トレンチで下段斜面の裾に小規模ながら溝が存在することが確認されたことなどによって、この下段斜面も墳丘を構成する重要な部分として捉えるのが妥当であろう。葦石のない下段斜面は、墳丘を一回り大きくみせるための手段としてとられた措置とも考えられる。

④この古墳の墳丘の形態は、調査担当者の主観的判断では、造り出しからみた時が最も整った印象を受ける。この古墳が平野部からみえる姿を意識していることは、すでに記したが、福知山側から望むことができる墳丘の北西側(造り出しの反対側)においては、今回調査対象地に含まれなかったものの、斜面の傾斜が急であり、墳丘の形もあまり整っていない。また、平野部からは見えない墳丘の北東側斜面(第6トレンチ)では、葦石・埴輪とも確認している。これらのことから、地形的な制約も無視はできないが、この古墳の築造にあたっては、造り出しを通る墳丘主軸を中心として、造り出しからみえる範囲内を特に



第4図 第7トレンチ墳丘裾土層断面図



第5図 第1埴輪列および葦石部分図 (Scale=1/40)

重視した可能性も指摘し得る。このことは、逆に造り出しの重要性(ここで行われたであろう葬送儀礼の重要性)を示唆していると考えられよう。

B. 外表施設

葺石 上段斜面・中段斜面および造り出し周縁の葺石を検出した^(註4)。下段斜面に石が葺かれていない点が特徴的である。葺石は、調査前に確認されたように一部は現地表面上に露出しており、他の大部分はほぼ表土直下において検出した。葺石の遺存状況は、上段斜面の基底石付近が最も良好であり、現位置をとどめた状態を検出できた。この部分は、上段斜面からの落石が多く、第Ⅰ埴輪列を覆いかくす状態であった。それでも上段斜面では、散在的にはあるが埴輪部付近まで葺石が残存している。中段斜面では、わずかに基底石が残存するにすぎず、中段斜面上の葺石はほとんどが落石した状態であった。

上段斜面基底石付近では、比較的大きな基底石から直角もしくは左斜め上方に向けて階段状につながる葺石を確認することができる。いわゆる区画石であり、無秩序に石を葺いているのではないことが理解できる。埴輪部付近から斜面途中に残っている石は、移動している可能性が多分にあるが、中には比較的大きな石で基底石付近の区画石に対応する並び方が認められるものも存在する。この点を重視すると、基底石から埴輪部にまでつながるいくつかの区画石を軸として石が葺かれたものと考えることができる。

埴輪列 上段平坦面で第Ⅰ埴輪列を、下段平坦面で第Ⅱ埴輪列を検出した。

埴輪は、現位置を保っているものの、多くが底部のみもしくは第2段までしか遺存しない状態であった。また、第Ⅰ・Ⅱ埴輪列とも埴丘の南側では葺石とともに途中で途切れており、おそらくこの部分の傾斜が急であるために流失しているものと思われる。

遺存状況の良好であった第Ⅰ埴輪列では、埴輪6～8本が直線的に並び、これらを作業工程上の一単位として把握することが可能である。すなわち、埴輪を固定する掘形については、部分的にしか確認できなかったものの、そこでは溝状につながるようすが観察されることから、埴輪の樹立にあたっては、直線的に2m前後の溝を掘り込み、そこに6～8本の埴輪を樹立するという作業が繰り返行われたのであろう。なお、個々の埴輪は、あまりすきまなく接するような状態で樹立されているが、部分的には空白となる場所も存在している。ただし、柱穴については、第Ⅰ・第Ⅱ埴輪列とも確認できなかった。

朝顔形埴輪は、ほぼ確実に原位置を知り得たのが第Ⅰ埴輪列で1か所、第Ⅱ埴輪列で2か所にすぎない。ただし、後者の2か所は朝顔形埴輪としては隣接するものと考えられ、両者の間には6本の普通円筒が配されている。先に記した埴輪樹立時における一作業単位に一本の割合で朝顔形埴輪が含まれていると考えることも可能であろう。

埴輪には、須恵質と土師質の両方が存在するが、数的には前者11本に対し後者が150本と

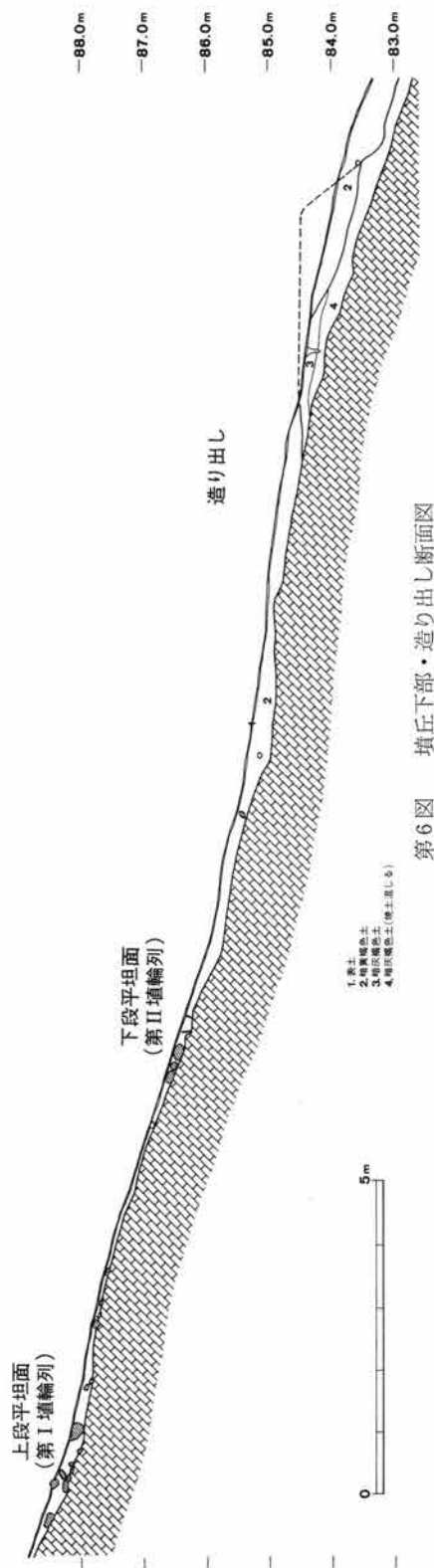
後者が圧倒的に多い。色調の明瞭に異なる須恵質の埴輪は、列のなかでも目立つ存在であったと思われるが、配置に特に規則性を見いだすことはできず、特別な扱いがなされたような状況は看取できない。

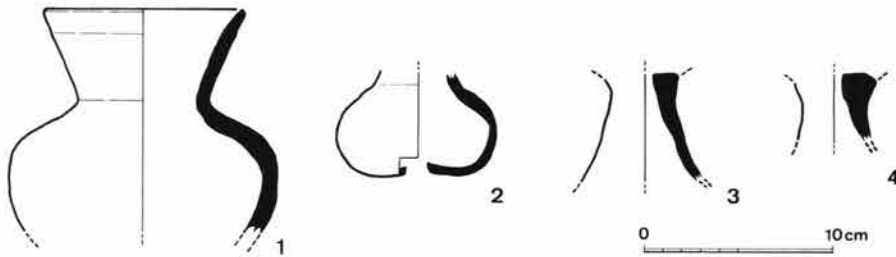
C. 造り出し

造り出しの形態は、やや撥状に広がる方形の区画であり、葺石の施されない下段斜面に取り付く点に大きな特徴をもつ。円丘部と接続する基部で幅約15.5mを測り、最大で約18mを測る。長さは、約10mを測る。

葺石は、造り出しの周縁部に葺かれている。円丘部と接続する基部では、下段斜面にわずかに張り付けたような状態で、3～4段に石が葺かれている。検出時には、下段斜面の全面に葺かれたものの一部である可能性も考えられたが、造り出し以外の埴丘裾に石が全く見られないことや、基底石の配置が「┌」状に明らかに直線的に構成されることにより、造り出しの範囲を区画する葺石であると判断した。造り出しの前面では、中央部付近において現位置を保つものが見られたが、基底石は遺存していない。両側面は、造り出しから埴丘裾のテラスにかけてなだらかに移行しており、この斜面上に石が葺かれている。

埴輪列は、北側側面において葺石を挟み、内側と外側で確認した。内側の埴輪列は、個々の埴輪がほぼ接しながら直線的に配置され、15本が1条の溝内に並べられていた。外側の埴輪列は、約1～3.5mの間隔を置いて単独に配置され、内側の埴輪列とは平行には並ばず、前面に向けて広がっている。南側の側面では、





第7図 造り出し出土土器実測図 (Scale=1/4)

内側の埴輪列のみが検出されたが、南側ではかなり土砂が流出しているようであり、埴輪も3本がほぼ原位置を維持している状態であった。外側の埴輪列は検出できていない。造り出しの内側で接して並ぶ埴輪列は、両側面で確認したものの、基部および前面においては確認できていない。そのため、内部を方形に囲って巡らされたものではなく、両側にのみ平行して配置された可能性もある。

形象埴輪は、造り出しの中央やや前面よりから集中して出土した。確認できた種類は、家・楯・蓋・短甲等である。出土状況からは、これらが近接した場所に樹立されていたことが推定される。この場所では、原位置を保つ3本の埴輪基底部分が発見されたが、他の円筒埴輪と比べ径が小さいことから形象埴輪の基底部分である可能性が高い。また、形象埴輪と混在して若干の土師器が割れた状態で出土している。(鍋田)

(2) 出土遺物

A. 土器(第7図)

造り出しからは、形象埴輪とともに若干の土器が出土した。すべて土師器であり、須恵器は出土していない。確認できた器種は、壺・高杯である。

1・2は、壺である。1は、胴部の張りが大きい直口壺である。内外面ともナデによりていねいに仕上げている。2は、扁平な体部を有しているが、口縁部の形状は不明である。底部に焼成前に穿たれた孔がある。3・4は、高杯の脚部で、杯部は確認できていない。内部は中空であり、棒に粘土を巻き付けて成形した簡易なものである。

いずれも儀礼用の土器と考えられるものであり、出土点数は少ないものの、造り出しにおいて土器を使った葬送儀礼が行われたことを示す点で重要である。(鍋田)

B. 埴輪

a. 形象埴輪(第8・9図)

<造り出し> 造り出しより出土した埴輪は、いずれも細片化し、調整が観察できないほどに表面が著しく摩滅していた。破片数は、150点程度である。

出土位置は、確実に原位置を保っていると考えられるものはほとんどないが、多くは、

造り出し中央部で検出された。個々の埴輪における破片数が少ないため、復原はきわめて困難であった。しかし、家形埴輪については、形状・大きさ・厚さ・焼成・色調などにより分類して、あえて図上で復原した。その結果、少なくとも4個体の家形埴輪が存在したことが推定できる。また、その他の形象埴輪については、少なくとも楕形埴輪2、短甲形埴輪1、草摺形埴輪2、蓋形埴輪1個体の形象埴輪が存在したことが推定される。

家形埴輪1 (第8図1) 屋根部は、勾配のゆるい寄棟を示す破片と、棟木の端を表す妻側が半月形の破片をもつため、入母屋造りと推定される。下屋根の軒先には、横の押縁が施される。堅魚木は、この埴輪のものであるかどうかは確定できない。壁体と屋根部の接合部には、外側から、粘土を貼り付け補強している。壁体には、貼り付け粘土による柱の表現がみられる。裾回り台は、断面「ㄣ」状の張り出しを設けるもので、摩滅の少ない破片には、上方と下方にそれぞれ1条の沈線が認められる。全体にやや厚手である。焼成はやや軟質で、淡橙褐色を呈する。

家形埴輪2 (第8図2) 屋根部の大部分は失われているが、比較的大きく幅は広い破風板をもつ。下屋根にあたる部分で同一個体の推定できる破片はなく、切妻造りとして復原した。壁体の屋根部との接合面には刻み目が点々と施され、接合を強化している。窓あるいは出入口状の空間を左右にもつ破片は、平側にあたるものと推定される。壁体に施されている綾杉文は柱を表現したものであろう。基部には横方向に剝離痕が認められ、裾回り台があったことがわかる。この剝離痕は幅が細く、断面タガ状のものとして復原した。全体にやや厚めで、胎土は他に比べて精良である。焼成は良好で、明橙褐色を呈する。

家形埴輪3 (第8図3) 屋根部は、網代を表現した切妻造りあるいは寄棟造りの屋根を有する。縦の押縁と横の押縁とで囲まれた空間の中に格子を施し、さらに格子の中に5～6条の沈線を施す。破片数が少ないため、押縁と押縁との間隔、屋根部と壁体との接合の状況は不明である。壁体には窓および出入口と、綾杉文が施されている。裾回り台は、家1と同タイプの断面「ㄣ」状のものと推定される。裾回り台の下部には、半月状の彫り込みがある。全体に厚さはやや薄めである。焼成は比較的良好で、淡橙褐色を呈する。

家形埴輪4 (第8図4) 屋根部の破片は、寄棟を示す比較的急な勾配のものである。軒先には横の押縁が施される。裾回り台は、家1・3と同様の断面「ㄣ」状のものであるが、それらよりも大型で、厚手である。破片は2点のみであるが、一部に赤色顔料が残ることや、家形埴輪の中では最も大型であることから、中心的な建物であったことが推定される。焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。

家形埴輪部材 (第9図1～6) 1・2は、破風板である。ともに押縁を有し、同一の家形埴輪の一部をなすものである。焼成はやや軟質であり、淡橙褐色を呈する。家形埴輪1

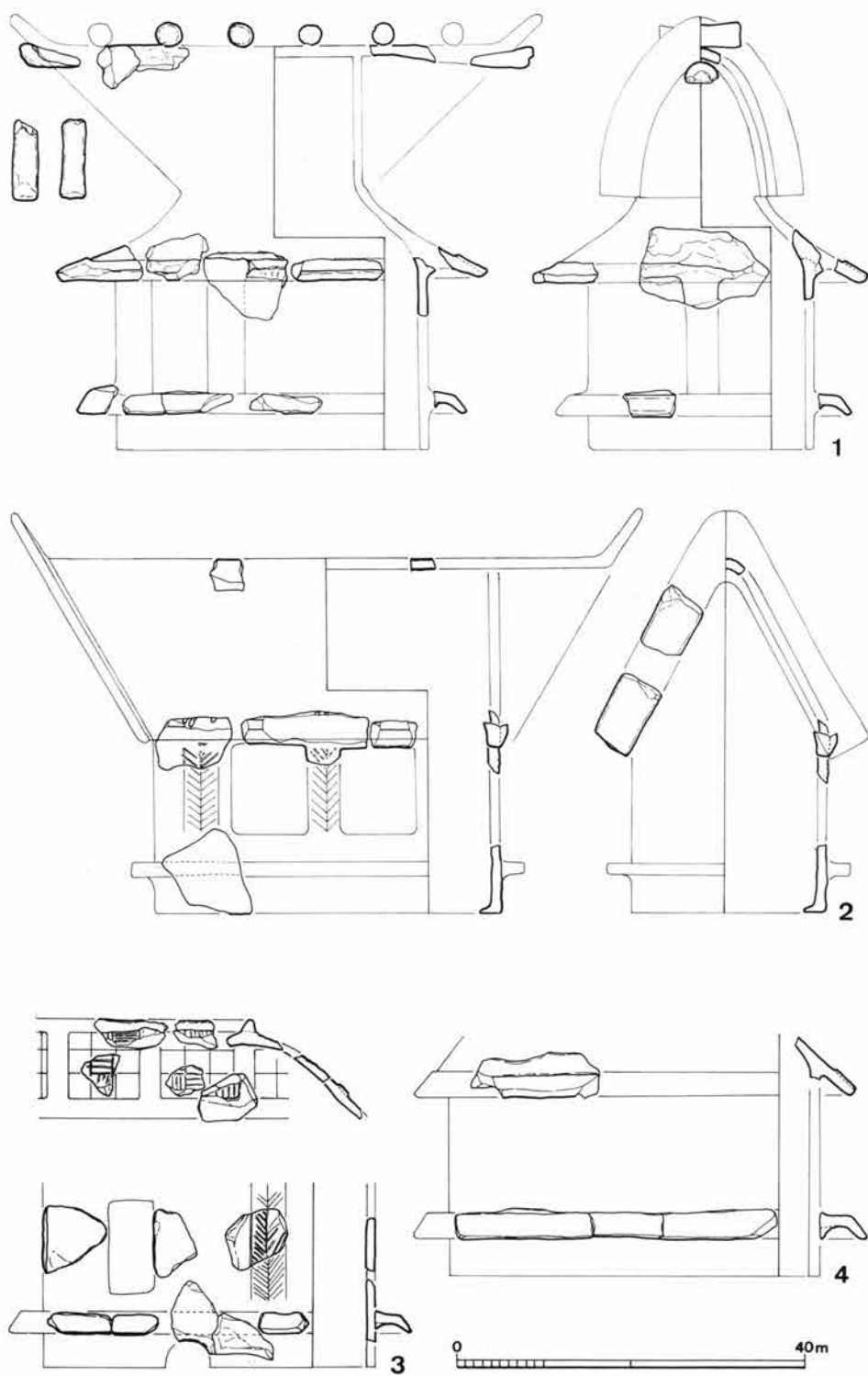
・3のいずれかの一部とも考えられるが確定できない。3は、梯子状の文様が刻まれている。切妻造りの屋根部軒先、あるいは壁体の一部と推定される。やや薄手で、焼成は良好である。淡橙褐色を呈する。4は、棟木の両端にあたる部分の破片である。中央に半月状の彫り込みと、その両側に刺突による文様が入る。焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。5・6は、堅魚木の破片である。厚さ約2.5cmで、中央部を若干細くしている。焼成は軟質で、淡黄褐色を呈する。

短甲形埴輪(第9図9・10) 9・10ともに三角板革綴の形式を模している。三角板を線刻によって、革綴を方形貼付文によって表現している。三角板の一辺は約5cmでやや大きいいため、短甲形埴輪の一部と推定される。

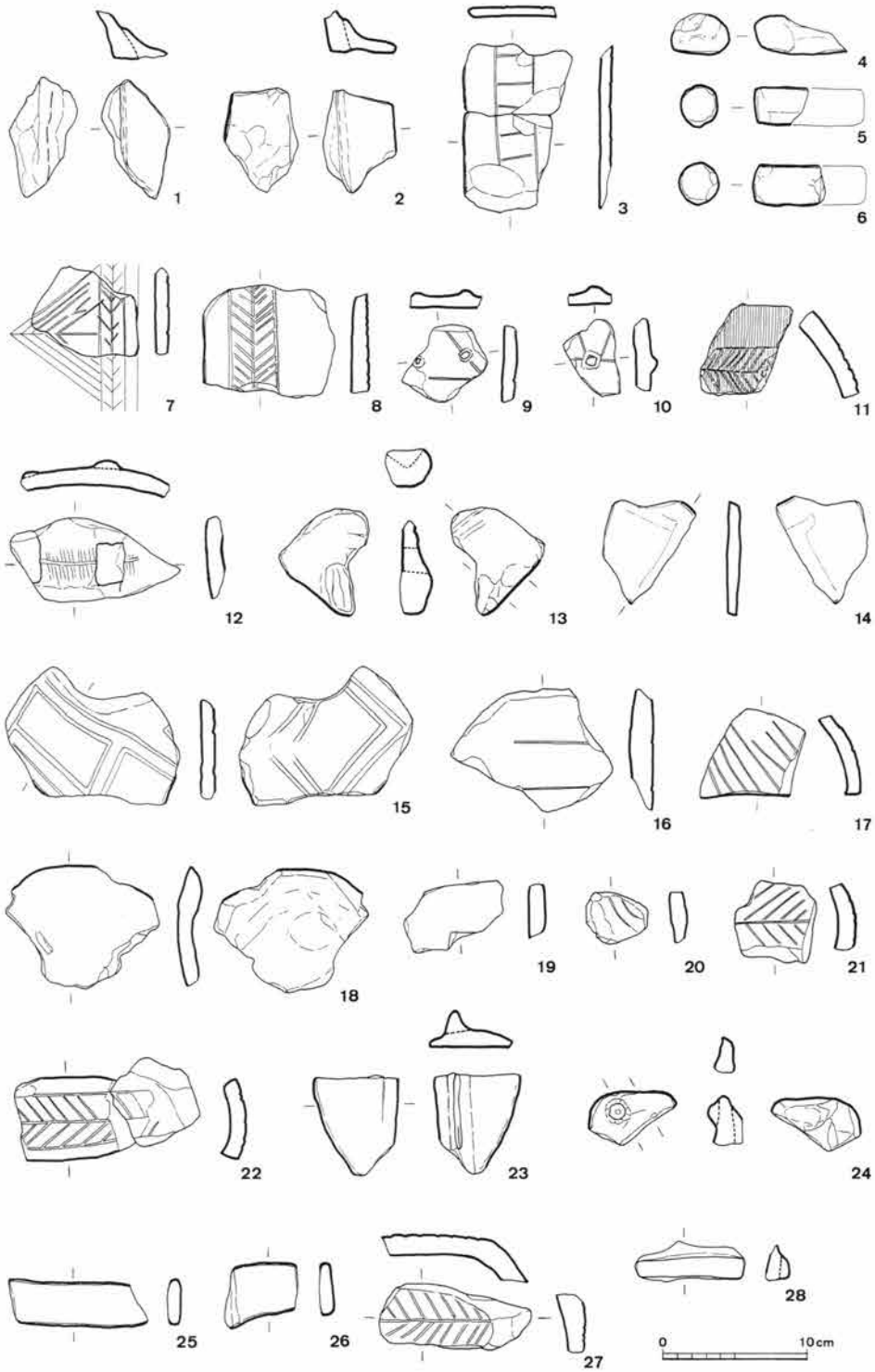
草摺形埴輪(第9図11・12) 草摺部分だけで完成品となるものか、短甲形埴輪の一部をなすものかは判別できない。11は、縦に荒いハケメを施したのち、横に綾杉文体が線刻される。横の断面は湾曲気味である。やや厚手で、焼成は須恵質に近く、暗茶褐色を呈する。12は、縦に荒いハケメを施したのち、横に一本の沈線を入れる。さらに、方形粘土を5cm程度の間隔をおいて貼り付けている。横の断面は湾曲している。縦の断面は、上下の両端が著しく摩滅しているが、これも本来は若干湾曲するものと推定される。方形粘土は腰紐を通すための金具を表現したものであろうか。焼成は軟質で、淡黄褐色を呈する。11とは明らかに異なる個体である。

蓋形埴輪(第9図13～15) 13は、「T」字形立ち飾りの軸部である。表面の摩滅は著しいが、一部に2本の沈線による文様が認められる。粘土の接合痕がよくわかる例である。14・15は、ともに「T」字形立ち飾りの一部である。14は、表面の摩滅がきわめて激しく、わずかに沈線の痕跡が認められる程度である。15では、太い沈線による文様を両面に施している。いずれも焼成は軟質で、淡黄褐色を呈し、同一個体の可能性がある。

その他の形象埴輪(第9図16～24) 16は、平行に2条の沈線が施されており、草摺あるいは家形埴輪の一部とみられる。比較的厚手で、焼成は良好であり、明橙褐色を呈する。17は、約1cmの間隔で斜線文が施されており、一部に赤色顔料が残っている。断面は湾曲している。肩甲の一部とみるには斜線文の間隔が狭いようである。水鳥ないしは鶏形埴輪の羽根を表現したものであろうか。比較的薄手で、焼成は良好であり、黄褐色を呈する。18は、無紋の扇形状の破片であり、破風板の頂部の形状に似ている。断面は、若干湾曲しており、裏側から中央部をやや窪ませている。焼成は良好で、明橙褐色を呈する。19の破片は、外縁部は残っていないが、下方に「ㄱ」状の切り込みがある。短甲形埴輪の前胴壁上上縁部の可能性がある。焼成は、9・10よりも軟質で、色調は淡黄褐色を呈する。20は、細片であるが、円弧状の文様をもつ。楕形埴輪・靱形埴輪の一部であろうか。焼成は良好



第8図 形象埴輪実測図(1) (Scale=1/8)



第9図 形象埴輪実測図(2)

で暗茶褐色を呈する。22は、2つの破片を接合したものである。中央には綾杉文が施され、断面はやや湾曲気味である。焼成は良好で、明橙褐色を呈する。23は、表面の摩滅が著しいが、わずかに沈線による文様の痕跡が認められる。裏面には縦に断面三角形の突帯を貼り付けている。焼成は軟質で、淡黄褐色を呈する。24は、片面に貼り付け粘土による方形の突起を、もう片面には断面三角形の貼り付け粘土による隆起をもつ。破片の一辺には接合痕が認められる。焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。

〈墳頂部〉 墳頂部から出土した形象埴輪は、約15点である。多くは墳丘周辺に転落したものと考えられる。25・26は、裏面に剝離痕が認められることにより、家形埴輪の貼り付け式の柱を表現したものと推定できる。27は、表面に幅の広い綾杉文を施し、断面は、「ㄣ」状に屈曲する。28は、断面が円筒埴輪のタガ状の破片であるが、湾曲はしない。25～27は、いずれも焼成は良好で、明橙褐色を呈し、同一個体の可能性もある。以上により、墳頂部にも少なくとも1個体以上の家形埴輪が存在したことがわかる。(高野 陽子)

b. 円筒埴輪

私市円山古墳では、墳丘を取り巻く2つの埴輪列および造り出しから、調査範囲内において合計161本の原位置を保つ円筒埴輪(朝顔形を含む)を検出した。その多くは、上半部が破損・流失し、底部(第1段)から第2段にかけて遺存するのみであった。完全に接点を有して復原できたものは、円筒埴輪の2本のみであり、他は図上での復原である。

円筒埴輪は、特に焼成の違いによって、次の4タイプに分類することができる。

A；青灰色を呈するいわゆる須恵質の硬質埴輪、B；淡黄褐色を呈するものの、Aタイプに準じる硬質埴輪、C；淡黄褐色を呈するやや軟質の埴輪、D；淡赤褐色を呈するやや軟質の埴輪。これらの違いは、特に遺存状況において明瞭な差として表れている。A・Bタイプは、器壁が摩耗することなく、全体の復原も可能であったのに対し、C・Dタイプではほとんどの個体において調整が確認できないほど風化が著しい状態である。

出土した比率は、Aタイプ7%、Bタイプ17%、Cタイプ5%、Dタイプ71%である。

形態の特徴 Aタイプ(3)、Bタイプ(1・2)、Dタイプ(4)とも基本的な形態は、3つのタガをもち4段で構成される。全体のプロポーションとしては底部から口縁部まで直立気味に立ち上がるが、口縁部はゆるやかに外反している。3は、器高46.5cm・口径28.0cm・底径22.4cm、タガ間の長さ約9cmを測る。

口縁端部の形状は特徴的であり、2ではわずかに端部を外側に折り返し、明瞭な段を形成する。3では、手法は異なるもののナデにより類似した口縁端部となっている。口縁端部と第3タガまでの長さは、他のタガ間の長さと同じことから、タガとは明らかに形態を異にするものの、この端部は見かけ上においては4番目のタガという印象を与えるもの

である。この口縁端部と類似した形態を有する埴輪は、河内地域に分布の中心がみられ、また、中丹では、綾部市福垣北7号墳、福知山市中坂2号墳で出土している。^(註5)

タガは、断面形が台形を呈するものと、わずかに「M」字状に窪むものがみられるが、きわだった差はない。ナデによりていねいに仕上げている。

透孔は、すべて円形である。確認できたものについては、A・Bタイプは第3段に、C・Dタイプは第2段にそれぞれ2孔ずつ穿たれている。

底面には、一部に棒状の圧痕を有するものが存在する。そのうちの多くは、方向を違えた数か所の圧痕が観察される。

なお、A～Dタイプに共通して見られる特徴として、焼成後に第1段を部分的に打ち欠いた埴輪の存在があげられる。第11図の4・第12図の2のように、器壁の厚さの半分程度まではぎ取られたような状態のものが多く、一部は、底部を欠損した状態となっている。

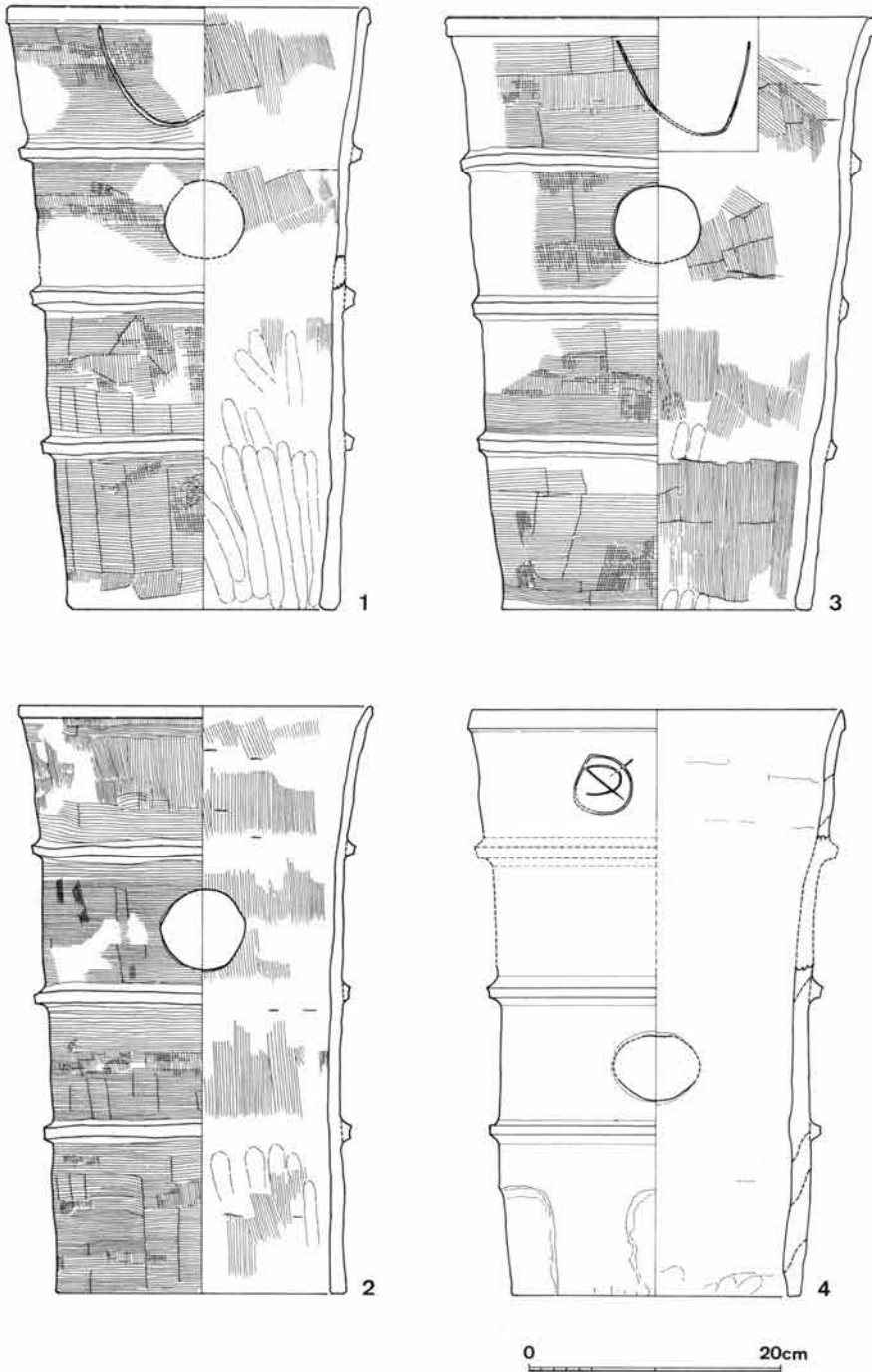
内外面の調整 調整の観察可能なA・Bタイプでは、外面は1次調整にタテハケ、2次調整にヨコハケを施す。ヨコハケは、器壁上で工具を停止する手法で、川西氏の分類によるB種ヨコハケである。^(註6) 外面のヨコハケは第1段から第4段にまですべて施されている。第2～4段では、意識的に段の中央部にはヨコハケを施さないものも観察される。

内面は、ナデおよびタテハケを施す。口縁部に近い部分では、ナメハケや一部ヨコハケも施されている。全体的に内外面ともていねいな調整がなされている。

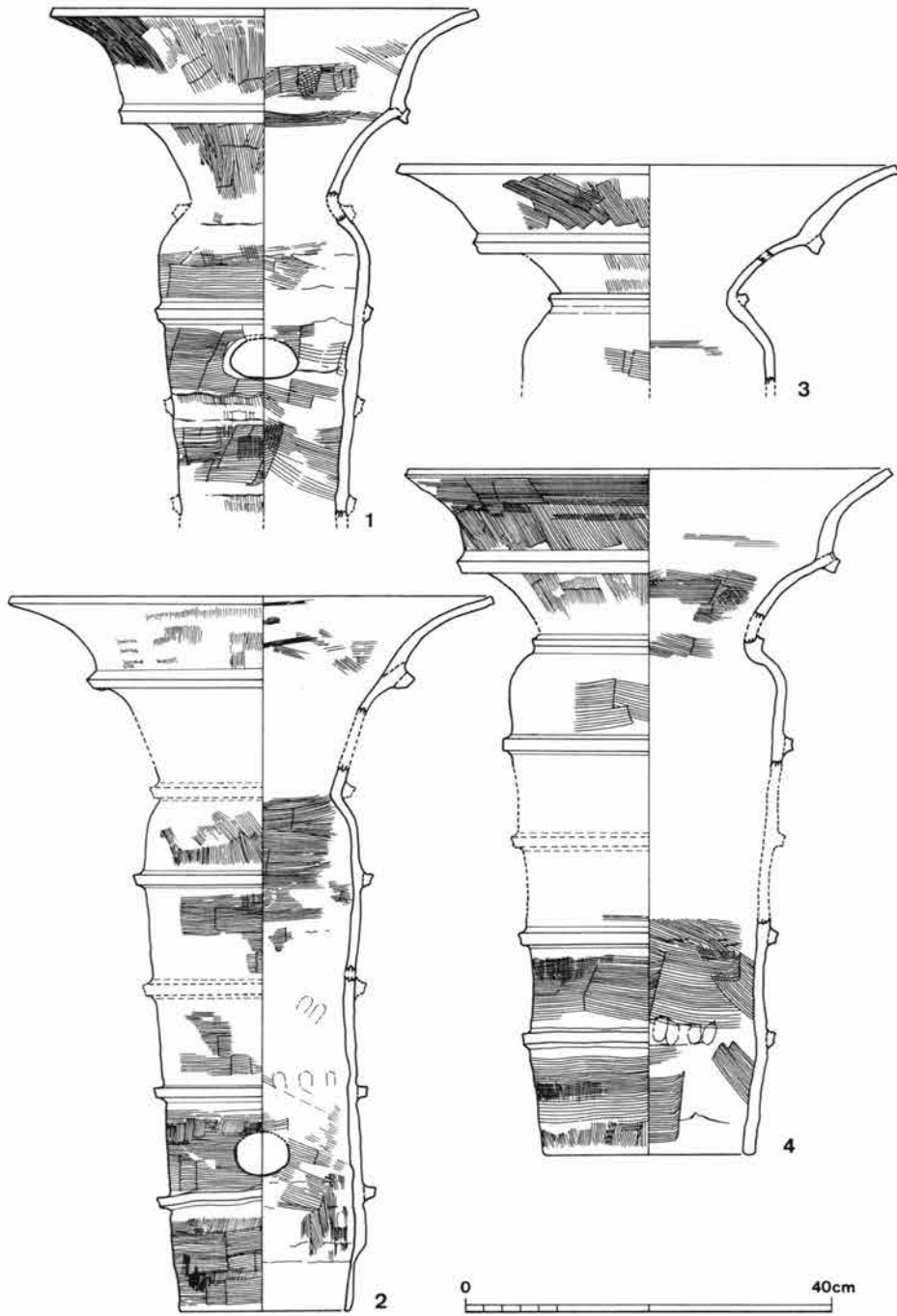
ヘラ記号 ヘラ記号は、大きく3タイプに分類される。第10図の1・2は、「U」字状に描かれるもので、第4段に施されている。先に分類したA・Bタイプの埴輪に見られる。



第10図 ヘラ記号拓影 (Scale=1/4)



第11図 円筒埴輪実測図 (Scale=1/6)



第12図 朝顔形埴輪実測図 (Scale=1/8)

4～7は、曲線と直線を組み合わせ、やや複雑に描かれたもので、Bタイプの第4段および朝顔形埴輪の口縁部に見られる。第11図の4は、Dタイプの中では、唯一第4段にヘラ記号を有する埴輪であるが、4～7とは若干形状を異にしている。8・9は、逆「U」字状の中央に1条の直線を加えたもので、Dタイプの第1段のみに見られる。

朝顔形埴輪は、4点を図化した。6つのタガをもち、7段で構成されると考えられる。4で、推定器高66.8cm・口縁部径52.8cm・底径31.2cmを測る。焼成・調整とも円筒埴輪で分類したA・Bタイプに共通する。透孔は、2段および4段に配されている。1では、第4段に半円状の透孔が認められる。朝顔形埴輪の外表面および口縁部の内面には、現状で黒色を呈する顔料が塗布されている。(鍋田)

4. 内部主体の調査

(1) 主体部検出の状況と位置関係

私市円山古墳では、墳頂部において、計3基の主体部を検出した。調査区域内では墳頂部以外の場所(造り出し部・古墳斜面等)からは、埋葬主体部は検出していない。

墳頂部は、南北約18m・東西約17mの円形に近い平坦面を形成していた。調査開始前には、墳頂部のほぼ中央部に葦石の集石がみられたほかは、特に既掘坑等の後世の攪乱や土砂の自然流出を思わせるような状態は確認できなかった。

墳頂部における主体部の検出は、北東・南西方向と北西・南東方向の基準ラインを交差させ、墳頂部を4地区に分割したのち、基準ラインに沿う幅1mの2つの「L」字型トレンチの掘り下げを先行させ、何らかの変化を確認した段階でそれぞれの面的な精査を行う方針とした。これは、墳頂部の面積が広いことと、埋葬主体部までの深さを早く確認するためである。北西―南東方向の基準ラインは、造り出しを通る墳丘の主軸を想定して設定したもので、墳頂部においてもそのラインを利用したため、結果的には、東西および南北方向に長軸をとる主体部とは、約45°のずれを生じることとなった。

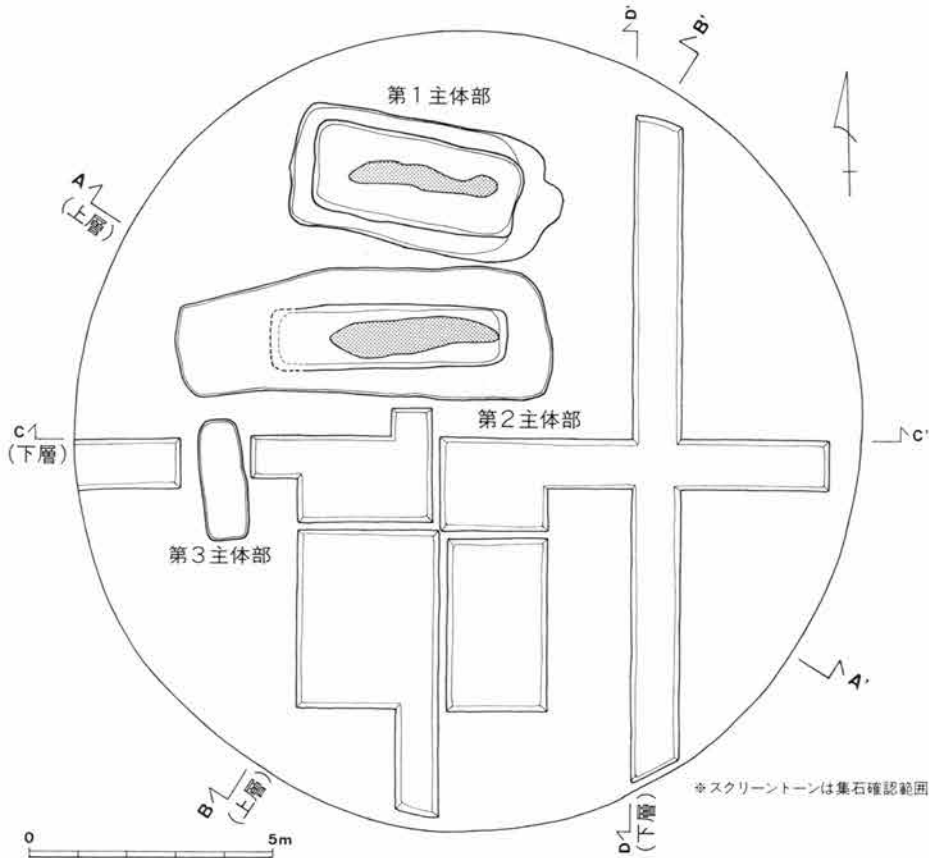
さて、トレンチによる下層確認→面的精査は、おおよそ次の3段階を経て行った。

①表土除去後、広範囲に3～5cmの小石が認められ、また、中心付近には、葦石の集石が確認された。この面では、埴輪片とともに瓦器椀・土師皿・丹波焼等、中世の土器片が出土し、最終的にこれらは経塚に伴う遺構・遺物であることが判明した。また、当初予想された城館に伴う遺構・遺物を確認することはできなかった。

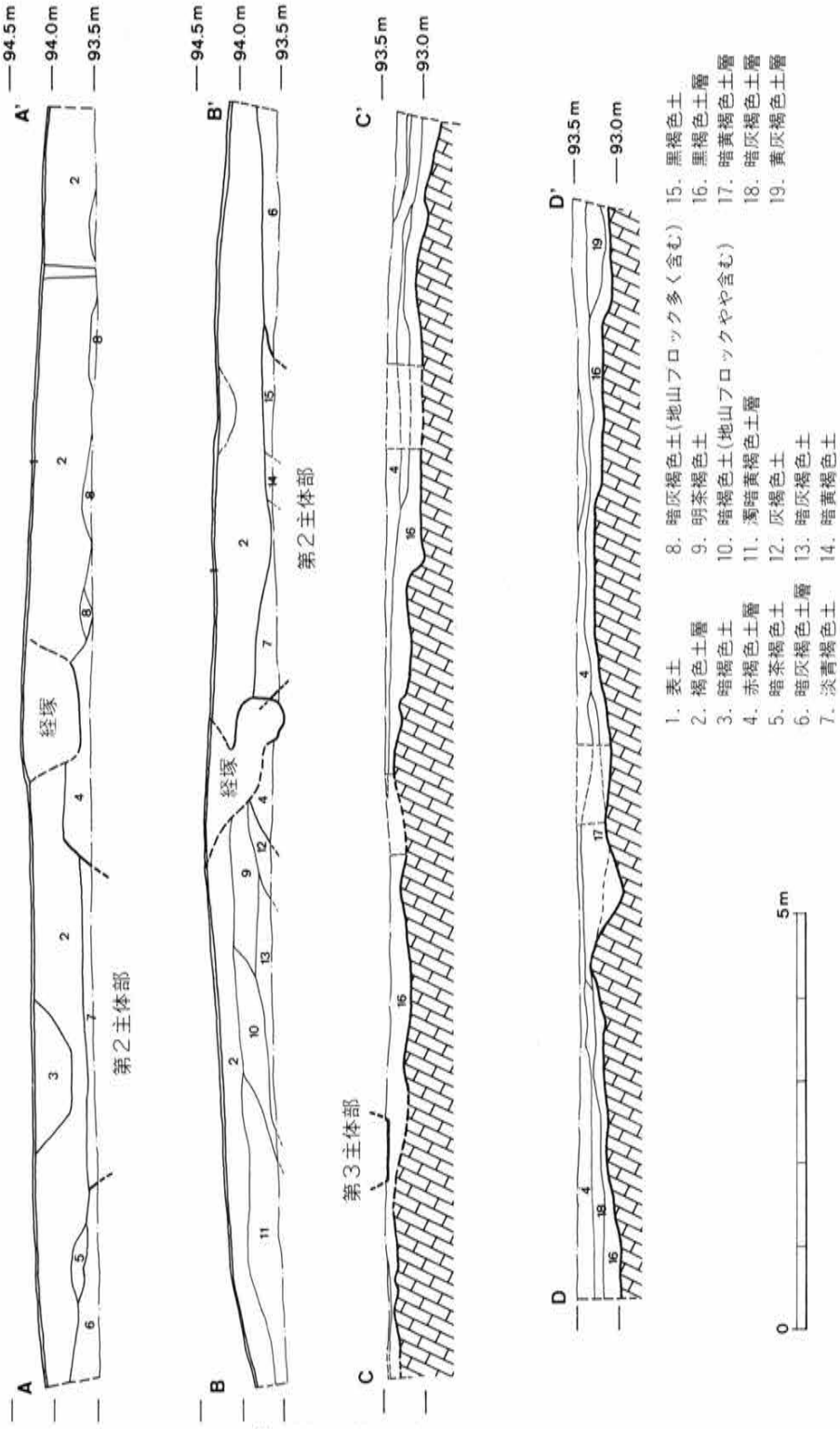
②地表面から約40cm掘り下げたところで、遺物を含まない新たな2列の集石を検出した。この集石は、上面で検出したものとは明らかに異質のものと思われたが、この時点では、性格のわからないまま簡単な記録を済ませたのみで、さらに下層の調査へと移った。また、

遺構ともなわない状態で勾玉が1点だけ出土した。そのため、主体部が攪乱を受けている可能性が考えられた。結果的には、この出土位置が第3主体部の上層にあたることが判明し、後に記すように削平された第3主体部ともなう遺物であるとの判断に至った。

③地表面から約50cm掘り下げ、墓壙と思われるラインを検出した。この面では、盛土による土色変化がいたるところでみられたため主体部の認定に手間取ったが、繰り返し精査を行い、ほぼ同レベルで第1～3主体部を検出した。この検出面で注意されることは、第2主体部の棺の木口とみられる粘土がすでに検出されたこと、第3主体部の遺物が一部見え始めていたことである。以上の2点は、主体部検出時において墓壙の上面を確認し損ねたか、もしくは、すでに削平されていた可能性を示唆するものであった。また、この精査中、②の段階で検出した2列の集石は、第1・第2主体部の直上に位置することがわかり、いずれも主体部に関連した施設であることが確認された。そのため、墓壙の検出も②の段階で行い得た可能性も考えられたが、最終的には、最後の埋葬主体部である第1主体部の



第13図 主体部検出状況および断ち割りトレンチ配置図



第14図 墳頂部土層断面図

築造時に第2・第3主体部の上面が削平されたものと判断した。

墳頂部で確認した3基の主体部の位置関係は、墳頂部のほぼ中央部に第2主体部が位置し、そのすぐ北側に第1主体部が平行して位置する。この2基は、墓壇の長軸を東西方向にとる。第3主体部は、長軸を南北方向にとり、墳頂部の南東隅に配置されている。

これら3基の主体部間に切り合い関係はみとめられない。また、各主体部の床面のレベルを比較すると、第1主体部：約92.85m、第2主体部：約93.05m、第3主体部：約93.48mとなり、第1主体部が最も低い点に注意される。(鍋田)

(2) 第1主体部

A. 主体部の構造

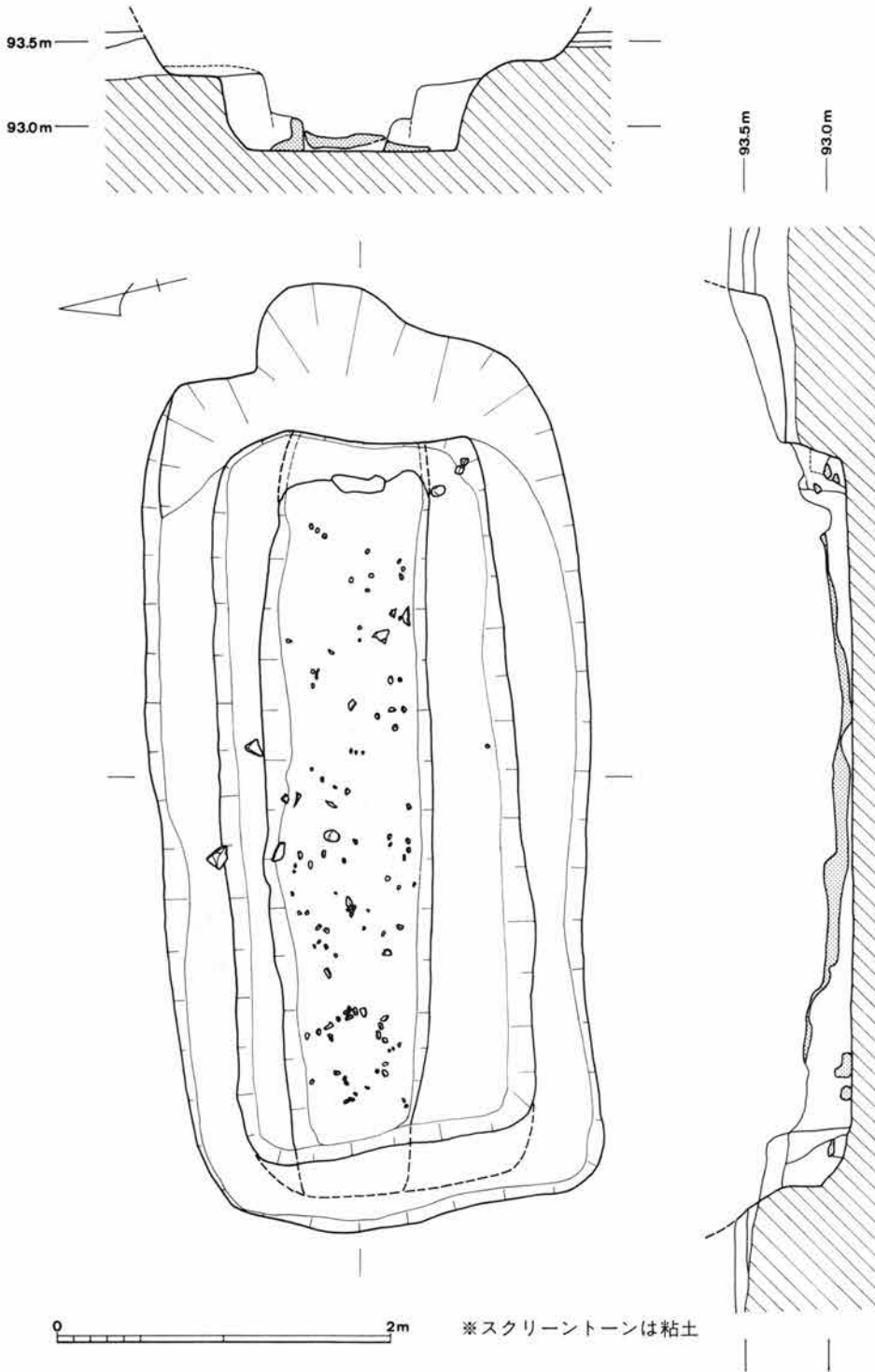
第1主体部は、2段に掘り込まれた墓壇内に、組合せ式箱形木棺を安置し、棺の周囲を礫混じりの灰白色粘土で被覆する構造をもつものである。

1段目の墓壇は、盛土から掘り込まれほぼ地山面にまで達している。東側がやや不整形ながらも、隅丸長方形を呈する。2段目の墓壇は、1段目のほぼ中央に地山面から掘り込まれているが、検出時には2段目墓壇の北側のラインを正確に検出できず、実際よりも墓壇の幅を狭く考えたまま掘り進んだ。これは、1段目の墓壇を掘り下げた際に、墓壇の北側で埴輪片が出土し、それらが墓壇の段上の上のっていると判断したこと、同じレベルで棺の落ち込みに伴うラインが確認され、これを2段目墓壇の北側のラインとしてしまったことによる。以上のことが判明したのは、主体部の断ち割り調査後である。

墓壇の規模は、1段目が長さ5.6m・幅2.6m・検出面からの深さ0.2mを測る。2段目は、長さ4.2m・幅1.6m・深さ0.5mを測る。

2段目墓壇掘り下げ後、2～5cm大の礫を混ぜた灰白色粘土が検出された。これは、検出状況から、棺の被覆粘土であることが判明した。粘土は通常の粘土礫とは異なり、棺の上面全面・木口・側面を覆うにとどまり、底部には粘土床などの施設は設けられていなかった。後述する第2主体部に比べると粘土の質はかなり悪く、また、使用量も少ないことから、さらに簡略化が進んだものと考えられる。

棺の形態は、被覆粘土が、棺上面を覆う粘土と、棺側面を覆う粘土が一体化して、落ち込んでいたため、本来の痕跡を明らかにするのは困難であったが、比較的旧状をとどめていると考えられる底部付近の粘土が垂直に立ち上がること、棺底部が水平なことなどから考えて、組合せ式の箱形木棺であると考えられる。また、東側の木口を覆う被覆粘土が両側板を覆う粘土の間に落ち込んでいたため、長側板が木口板をはさみこむ形態であったことが推測される。底板については、確証はないもののおそらく有していたものと考えている。棺の規模は、棺底部で長軸3.8m・幅0.45mを測るが、この数値は被覆粘土が土圧に



第15図 第1主体部実測図

より棺内部に張りだしている状態での数値であり、本来はもう少し大きな物であったと思われる。棺の高さについては、遺構から推測することは不可能であるが、棺内に納められていた短甲の復原高から考えて、40cm以上であったとすることができる。

棺の安置に際しては、まず、墓壙下段に組合せ式箱形木棺を置き、周囲を粘土で被覆したのち、裏込めの土を墓壙掘形と、粘土のすきまに充填し、その後に墓壙全面を埋めたものと考えることができる。棺蓋上の被覆粘土はおそらく、裏込めの土を充填したのちに施されたものであろう。

B. 副葬品の出土状況

第1主体部から出土した遺物は、第2表に示すとおりである。出土した位置から棺外のもの、棺内のものに区別できる。

棺外遺物としては、土師器甕の細片が被覆粘土上に密着した状態で検出された。土師器甕細片は、被覆粘土上いたるところから検出され、棺を粘土で被覆したのち、土師器の細片をばらまくという儀礼があったものと推測される。

棺内の副葬品は、その配置から、東側の一群と、西側の一群に分けることが可能である。

東側の副葬品は、鉄剣2口である。鉄剣1は棺側南側、鉄剣2は棺側北側に沿って、いずれも切っ先を西に向けた状態で検出された。

第2表 第1主体部出土遺物構成表



西群の副葬品は、鉄剣2口以外の遺物すべてである。棺の最も西木口側では、前胴を西側に向けた三角板革綴短甲が頸甲・肩甲を装着した状態で置かれていた。短甲とその付属具は、土圧によって鉄板が部分的にずり落ちてはいたが、全体的には良好な遺存状態であった。冑は、短甲内に収められた状態であった。

三角板革綴短甲の東には、短甲に接する形で草摺が置かれていた。草摺は、革製のものと推測され、本体である革はすでに腐敗してなくなっており、表裏面に塗られていたと考えられる黒漆膜のみが遺存していた。漆膜上には、連続する三角文や、列点がみられることから、和泉黄金塚古墳、摂津豊中大塚古墳^(注7)同様、草摺であると判断した。棺の腐食に伴う粘土・礫の崩落により、旧状はとどめていなかったが、連続する三角文が円形にめぐることから判断して、短甲の後胴に接して、棺内に立てた状態で埋納されたと考えられる。

草摺の北には小型仿製鏡が、鏡面を上にして置かれていた。草摺との位置関係は、鏡の下から漆膜が検出されていることから、鏡は草摺に立てかけるような状態で埋納されていたものと考えられる。鏡の上面には、暗灰色を呈する有機質が付着しており、鏡は布などに包まれた状態で副葬されたものと考えられる。

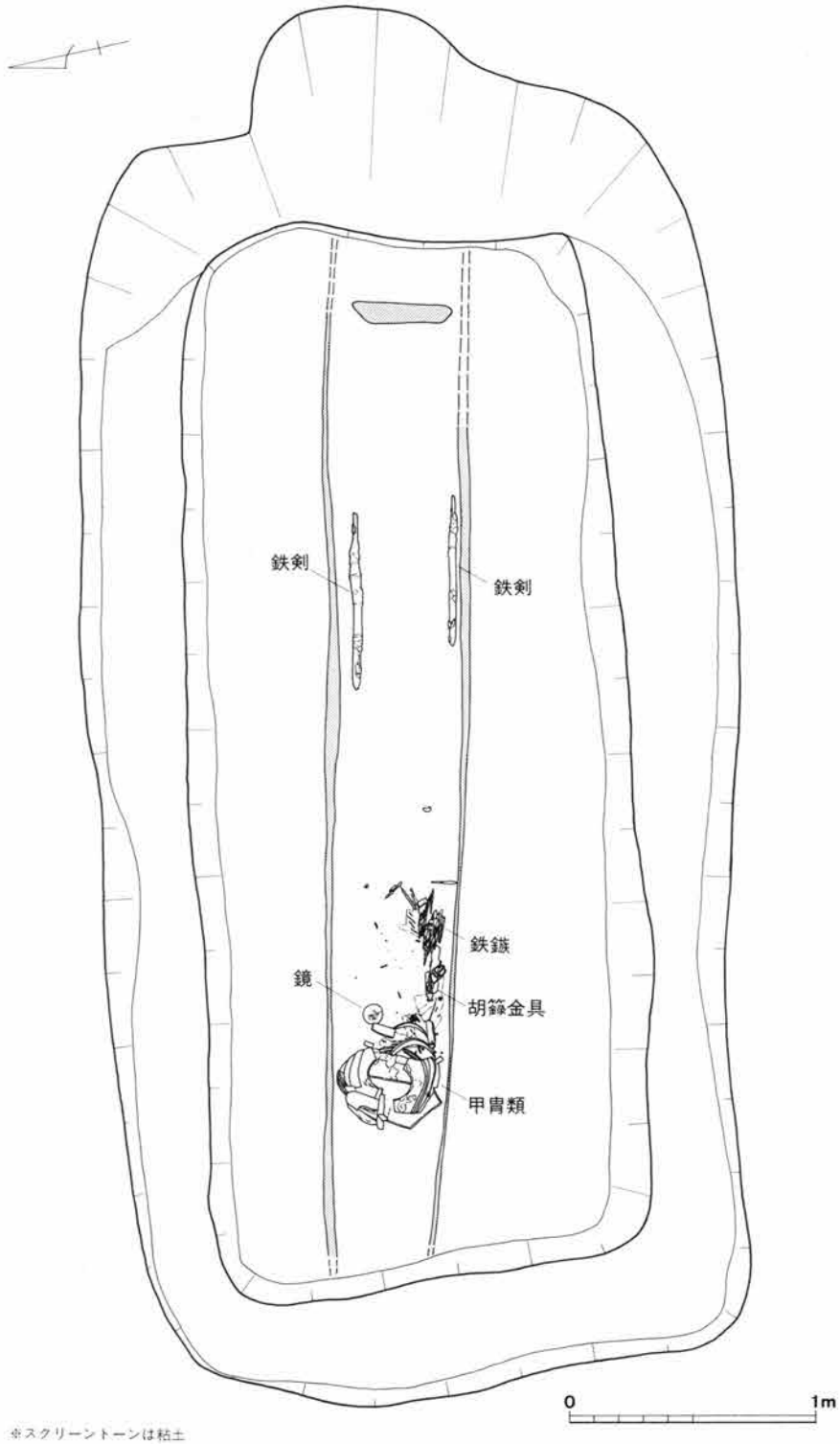
草摺の南では、胡籙・帯金具および鉄鎌が検出された。鉄鎌は、切っ先を東側に向け、一束の状態で検出されたため、胡籙内に収められていたものと考えられるが、3点のみ、切っ先の方向を違い、やや離れた状態で出土している。

胡籙の吊手飾金具は、吊手飾金具Aが吊手飾金具Bの上に重なって検出された。金具A・Bそれぞれの装飾面を向かい合わせた状態で出土している。吊手飾金具Bの部品B1は、やや西に離れた場所で検出された。「コ」字形飾金具1は、吊手飾金具Aの部品A2を挟み込むような状態で、「コ」字形飾金具2は、鉄鎌の切っ先付近から検出されている。帯金具は、吊手飾金具Bのさらに下側から、装飾面を上にした状態で検出された。

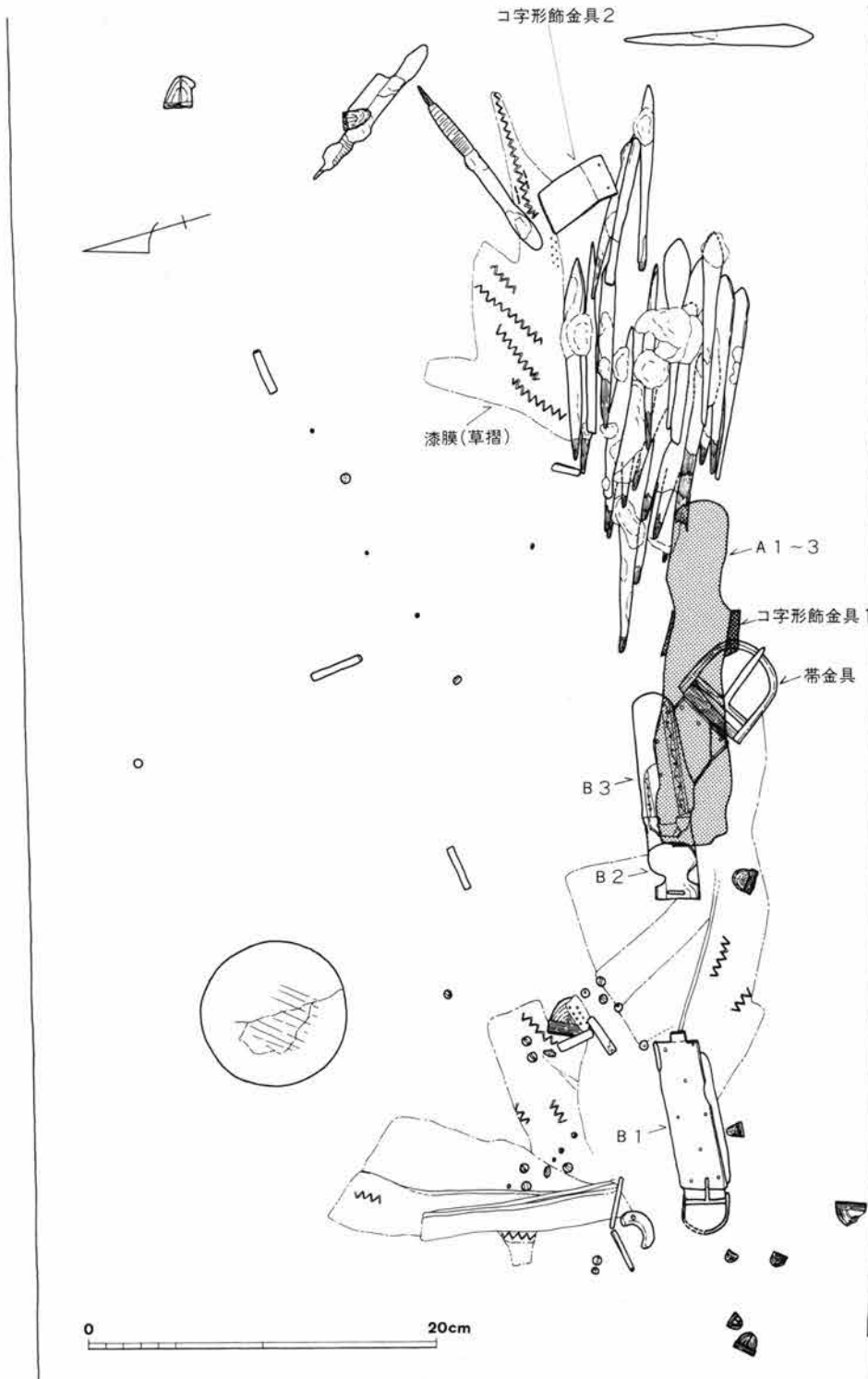
胡籙は草摺にもたせかけられていたと考えられ、この古墳の出土状況でも草摺の腐食に伴う二次的な移動を受けているものと考えることが可能である。また、鉄鎌群の下側からは、布状のものが検出されており、胡籙の本体に布が使用された可能性が考えられる。

鉄鎌付近および短甲付近では矢柄が検出されており、短甲との位置関係から矢の長さは、約60cm前後と推定できる。

草摺の上からは、櫛・玉類が散らばった状況で検出された。この、玉類・櫛は草摺の腐食に伴い二次的な移動を受けているものと考えられる。玉類は大きく2群に分けてとらえることができる。第1群は短甲に接する形で検出された水晶製小玉を中心とする一群であり、一定のまとまりが見受けられ、本来は接続されていたものと思われる。なお、この玉類の付近からは微量ではあるが赤色顔料が検出された。第2群はガラス小玉を中心とする



第16図 第1主体部遺物出土状況図



第17図 第1主体部棺内西側遺物出土状況図

一群であるが、その検出状況は比較的まばらであり一定の規則性を見出すことはできない。いずれも、草摺の上から検出され、草摺の下からは玉類は検出されなかった。この他に、棺中央部付近で1点のみ瑪瑙製の勾玉が検出された。

さて、棺内に埋葬された被葬者について、性別・年齢等を知る直接の手がかりとなる人骨等は確認することができなかった。したがって、これらの点については不明と言わざるを得ないが、棺内副葬品の配置状況からみると、被葬者は一人で、頭位を東に向けていたものと推測される。 (石崎)

C. 副葬品の観察

甲冑(第18図、図版第21・22) 三角板革綴衝角付冑、三角板革綴短甲と、短甲に付属する頸甲、肩甲、草摺がある。^(注8)

〈冑〉 短甲内に納められた状況のまま取り出しが終了していないため、詳細は不明である。短甲の前胴と、後胴のすきまから伏板および地板第1段を観察することができる。地板第1段は、三角板で構成され、それぞれの地板と伏板は革紐によって綴じられる。下半部が観察できないものの、通有の三角板革綴衝角付冑であると思われる。頂部には、通有の三尾鉄ではなく、二尾となる金具が付属している。鍔は、第2主体部と同様の板鍔を有する。

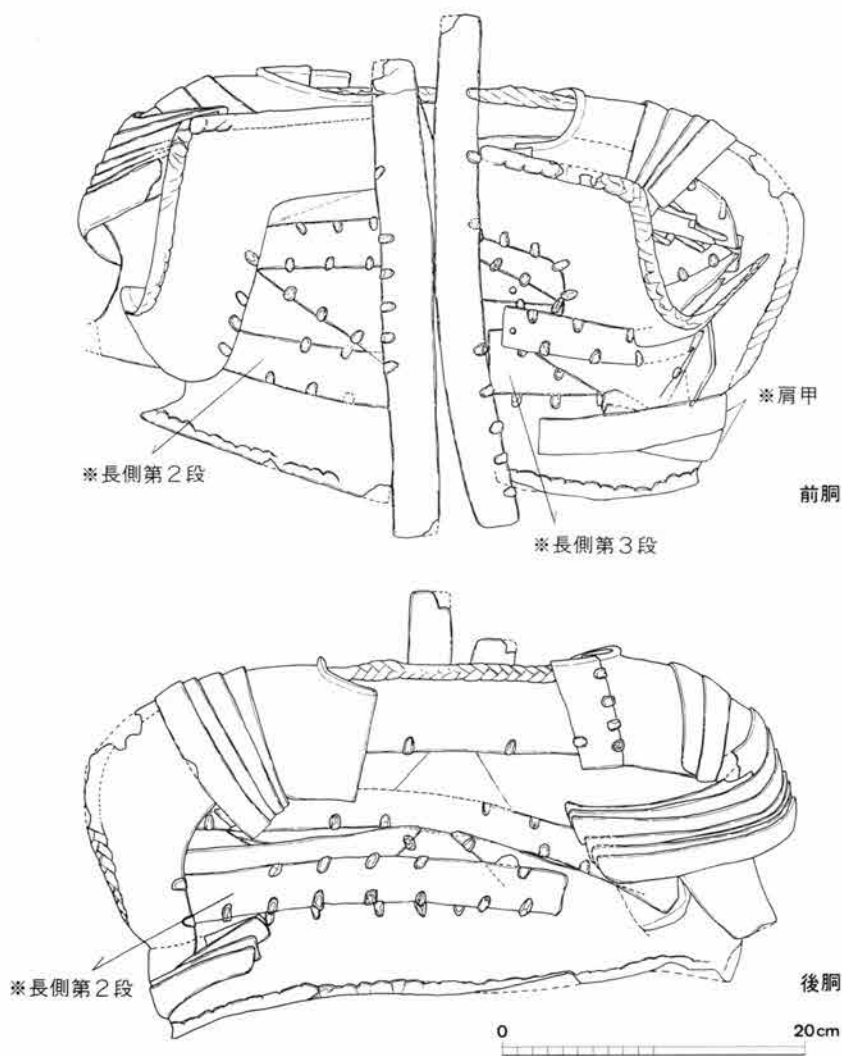
〈短甲〉 前胴縦上3段・長側4段、後胴縦上3段・長側4段からなる胴一連、通有の三角板革綴短甲である。復原高は、前胴中央で、37cm前後、左右幅は、押付板で45cm前後、裾板で38cm前後、前後幅は、裾板部で31cm前後を測る。形状は、原形をよくとどめているが、前胴左側が、前のめりに倒れ込み、また、鉄板の綴革がはずれ、鉄板がずりおちた状態で錆化している部分もある。

鉄板の連結は、前胴引合板に近いものが上重ねになり、引合板・帯金・押付板・裾板が地板に上重ねになる原則が守られている。前胴三角板の配し方は、小林氏の分類によるA型に属する。革綴は、冑と同様に、同じ孔に2回以上革紐をくぐらせ、内面で次の孔へ移る方法で、地板裏面において革紐が鋸歯状に進行する。

前胴縦上第1段は、正面から脇まで連続する「S」字状の鉄板を用いている。右側の縦上第1段は、引合板・縦上第1段との連結がはずれ、縦上第2段にかぶさるような状態となっている。引合板と連結する部分で、幅6.7cm、脇付近で6.8cmを測る。覆輪は、基本的に4本の革紐を用いて革組覆輪が施されていると思われる。

前胴縦上第2段は、左側の遺存状況が良好で、小型の三角形鉄板2枚で構成されている。縦上第3段と接続する下側の三角板には、ワタガミ緒孔が認められる。

前胴縦上第3段は、幅3.0cmの帯金であり、引合板・縦上第1段に下重ね、縦上第2段・



第18図 第1主体部出土短甲・付属具実測図 (Scale=1/5)

長側第1段に上重ねされる。

前胴長側第1段は、4枚もしくは6枚の地板で構成されると思われるが、脇の下側の地板が観察できないため、確定できていない。引合板に接続する正面の鉄板は、底辺約8.5cm・高さ約6.8cm・斜辺約11.3cmの直角三角形を呈する。

前胴長側第2段は、幅2.8cmの帯金である。

前胴長側第3段は、右側は、裾板との連結がはずれ、完全に短甲内部に落ち込んだ状態であり、観察できない。左側も、連結がはずれ、下半が裾板内部にずり落ちている。

長側第4段の裾板は、1枚の鉄板でなり、両端がそれぞれ引合板に接続される。下縁に

向かってゆるやかに外反する形状を呈する。下縁の覆輪は、遺存状況が悪く、観察しにくい。後胴第1段と同様の手法によるものと思われる。

後胴第1段の押付板は、左右45cm前後、中央の幅11.0cmを測る。上縁には、前胴第1段と同様の手法による覆輪が施されている。

後胴第2段は、錆化が著しく形状を把握しにくい。二等辺三角形の鉄板を中央に配置し、両脇には、押付板・第3段のすきまをうめる地板を配していると思われる。

後胴第3段は、幅2.6cmの帯金である。

後胴長側第1段は、三角形の地板で構成されるが、下半が後胴長側第2・3段とともに裾板内部に落ち込んでおり、十分に観察できない。

後胴長側第2段は、幅2.9cmの帯金である。裾板の上部にまでずれ落ちている。

〈頸甲〉 革綴打延式で、正面の引合板を2枚使用し、合計5枚の鉄板から構成される。出土時は、後部の引合板がはずれ、落下した状態であった。

正面の立面形は、肩がやや下降し、上部の幅の広い、いわゆる逆台形状を呈する。そのため、全体の形態としては、藤田和尊氏分類のⅡ-c頸甲(注9)に属する。しかし、正面の引合板が2枚使用されていることで、やや特殊な例として捉えられる。

〈肩甲〉 最下段で幅2.5cm前後、長さ33cm前後の鉄板を半円状に曲げ、腕寄りの鉄板が肩寄りの鉄板の上になるように重ね合わせたものである。下段のものよりも上段の鉄板のほうが幅が広い。左肩甲では4段、右肩甲では9段が原位置をとどめており、落下していたものを合わせると、左右11段ずつの肩甲であると考えられる。各々の鉄板の接続の方法、頸甲との接続の方法は錆化が著しく不明である。(鍋田)

〈草摺〉 出土状況でのべたように、革本体はすでに腐食しており、表裏面に塗布された漆膜だけが遺存していた。漆膜の表裏面には、連続する三角文や小孔が認められることから、和泉黄金塚古墳、摂津豊中大塚山古墳他出土のものと同様、草摺と推定しているものである。粘土や礫の崩落により、旧状は損なわれているが可能な限りの観察を行う。遺存していた漆膜には、幅約2~3cmを測る帯状の単位がいくつか認められる。この帯状の部分は、野中古墳出土の鉄製草摺などから推定して、革を帯状にした部分の痕跡であると考えられる。この古墳では、多い所で4段の帯状単位の重なりが観察された。いずれも、下段に相当すると推定される部分が上に重なり、次の段と重なる長辺部分には袋状になった折り返しが認められた。この袋状の折り返しの意味については、明確な解釈を示し得ないが、紐状のものを通していった可能性が考えられる。

次に、表裏面にみられる文様について述べる。表面には連続する小さな三角文が認められる。この三角文は先ほど述べた帯状の単位に平行して走っており、多い所では2条の文

様帯が認められる。三角文の各頂点には小孔が認められる。この小孔を通して縫い取られた痕跡は1回のみであるが、裏面の漆膜にも同様の連続する三角文が見受けられ、2本の針により同一の孔に表裏から糸を通し、文様を描き出す手法であると考えられる。

鉄剣(第19図、図版第24) 1・2とも、鹿角製の装具をもつ鉄剣である。1は、全長72.2cm・身部長56.2cm・茎部長16.0cm、身部最大幅4.2cm・茎部の中央部幅1.8cmを測る。身部断面形は、鑄のあまり明瞭でない菱形を呈している。身部の両面には、鞘の木質が遺存している。X線写真によると、関は、両角関であることが確認される。また、茎は関部から茎中央部にかけてゆるやかに幅が狭くなり、中央部から柄尻にかけて3孔の目釘孔が存在することが観察される。鹿角製装具は、柄縁の部分にわずかに鹿角と思われる痕跡が遺存していることから確認できるものであり、形態等詳細については不明である。

2は、全長73.8cm・身部長59.4cm・茎部長14.4cm、身部最大幅3.8cm・茎の中央部幅2.1cmを測る。身部断面形は、鑄のあまり明瞭でない菱形である。身部の両面には、鞘の木質が遺存している。関は両角関であり、茎は関部から柄尻に向けて先細りとなる。X線写真によると、2孔の目釘孔が確認できる。鹿角製装具は、この古墳出土の刀剣中、最も遺存状況の良好なものであるが、それでも全体を把握できる程は遺存していない。第20図に示すように、鹿角製装具の装着されていた部分は柄縁および鞘口である。柄縁装具は、関部から柄の木質の残っているまでの約2cmにわたり鹿角の痕跡が遺存しているもので、一部は柄の木質に覆いかぶさるような状態となっている。鞘口装具は、装飾面が1cm×1.9cmの大きさで辛うじて残っている。文様は、関部に近い方に直線、約5mm離れてゆるやかな弧線が2単位つながっている状態を観察することができるが、これらは線として刻まれたものではなく、中央部を削り落とすことによって、わずかな段をつくり表現したものである。この文様は、直弧文の一部であると思われる。また、この面には水銀朱と思われる赤色顔料が認められる。さらに鞘口の端部(断面形では、鹿角部分と鞘の木質の間)にも水銀朱と思われる赤色顔料が使用されている。

胡籙金具(第21図、図版第23) 吊手飾金具および「コ」字形飾金具からなる。^(注10) 吊手飾金具および「コ」字形飾金具の材質は、鉄地金銅張り、金具B1に付随する刺金付鉸具、帯金具(鉸具・方形金具)は、金銅製である。

吊手飾金具A・Bとも、3つの部品から構成される。各部品の装飾面における文様は、蹴り彫りにより周縁に2条の直線文を施し、その間に波状列点文を配する極めていいなつくりと高い装飾性をもつものである。波の1単位の間隔には、若干の差異が認められる。

裏面には、布および革と思われる痕跡が一面に付着しており、金具B3では革の痕跡が

金具を巻き込んだような状態になっている。また、布は1枚ではなく、2枚以上が重ねられた状態を観察できる。布は、経糸と緯糸を一本おきに交差させて織る平織りである。

金具A1・B1は、長方形の金具に、鉸具を取り付ける軸受けと、金具A2・B2に接続するための、断面形が半円形の鈎状の部分が作り出されている。B1では、付属する鉸具が遺存していたが、A1ではすでに失われていた。各々、周縁に6個、中央に2個の金銅製の鉸が認められる。金具B1の方がA1より長い。

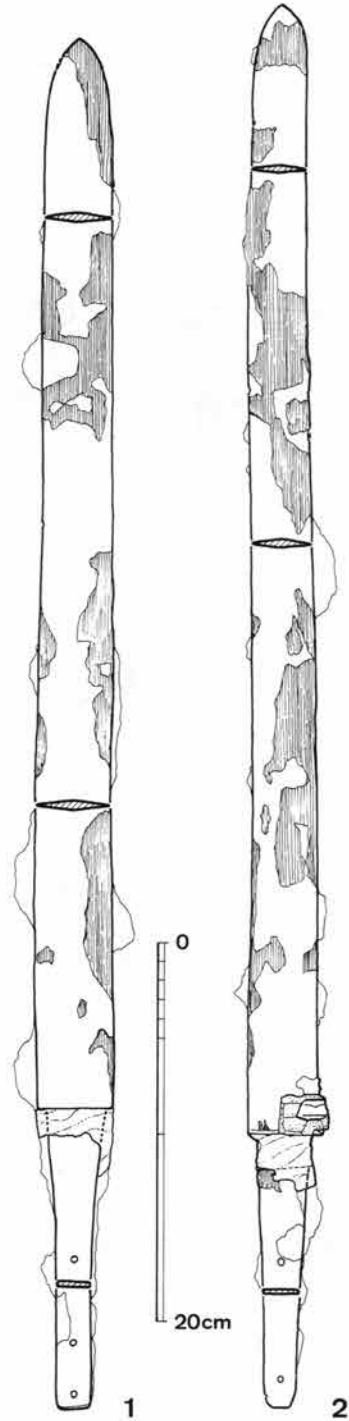
金具A2・B2は、中円双方形を呈し、両端にA1、B1、A3、B3の鈎手を受けるための長方形の孔が開けられている。また、鉸は認められない。この金具にも、他の金具同様、蹴り彫りによる2条の直線文と波状列点文が施されている点に注意される。

金具A3・B3は、長方形の金具の上端に、金具A1・B1同様の断面形が半円形の鈎状の部分を作り出したもので、下端は全体にやや丸みを帯びている。鉸は周縁に4個、中央に2個認められる。金具A3・B3とも、それぞれ上部の金具A1・B1よりも明瞭に短い。

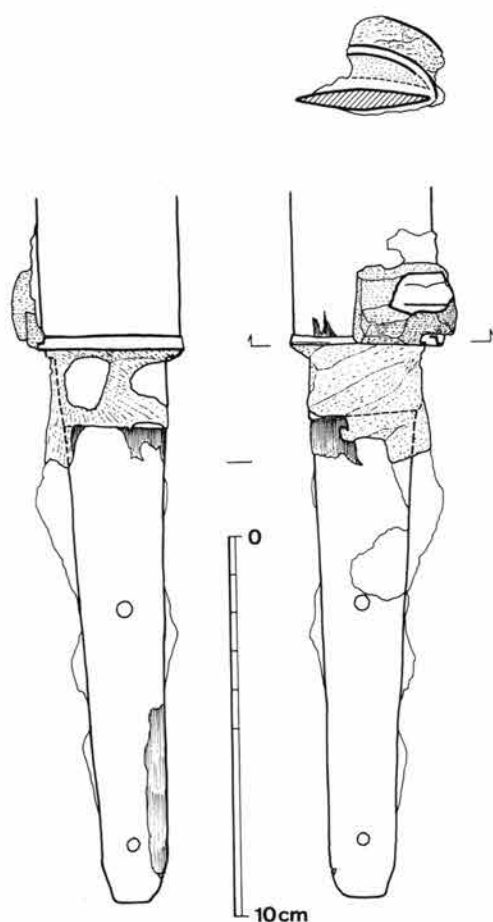
「コ」字状金具は、長方形の金具の両端を折り曲げたもので、正面に1個、側面にそれぞれ2個、計5個の鉸が認められる。

帯金具の鉸具は、吊手飾金具Bに付属する鉸具よりもかなり大型で、方形の金具が付属する。方形の金具には周縁に5個の鉸が認められる。

さて、胡籙の本体については、先に記した布とともに革が使用されたと考えられる。胡籙金具が3つの部品から構成され、可動的な形態を有していることは、こうした本体の特質にも関連していると思わ



第19図 第1主体部出土鉄剣実測図 (Scale=1/4)



第20図 第1主体部出土鉄剣 2 鹿角装部分図
(Scale=1/2)

れる。

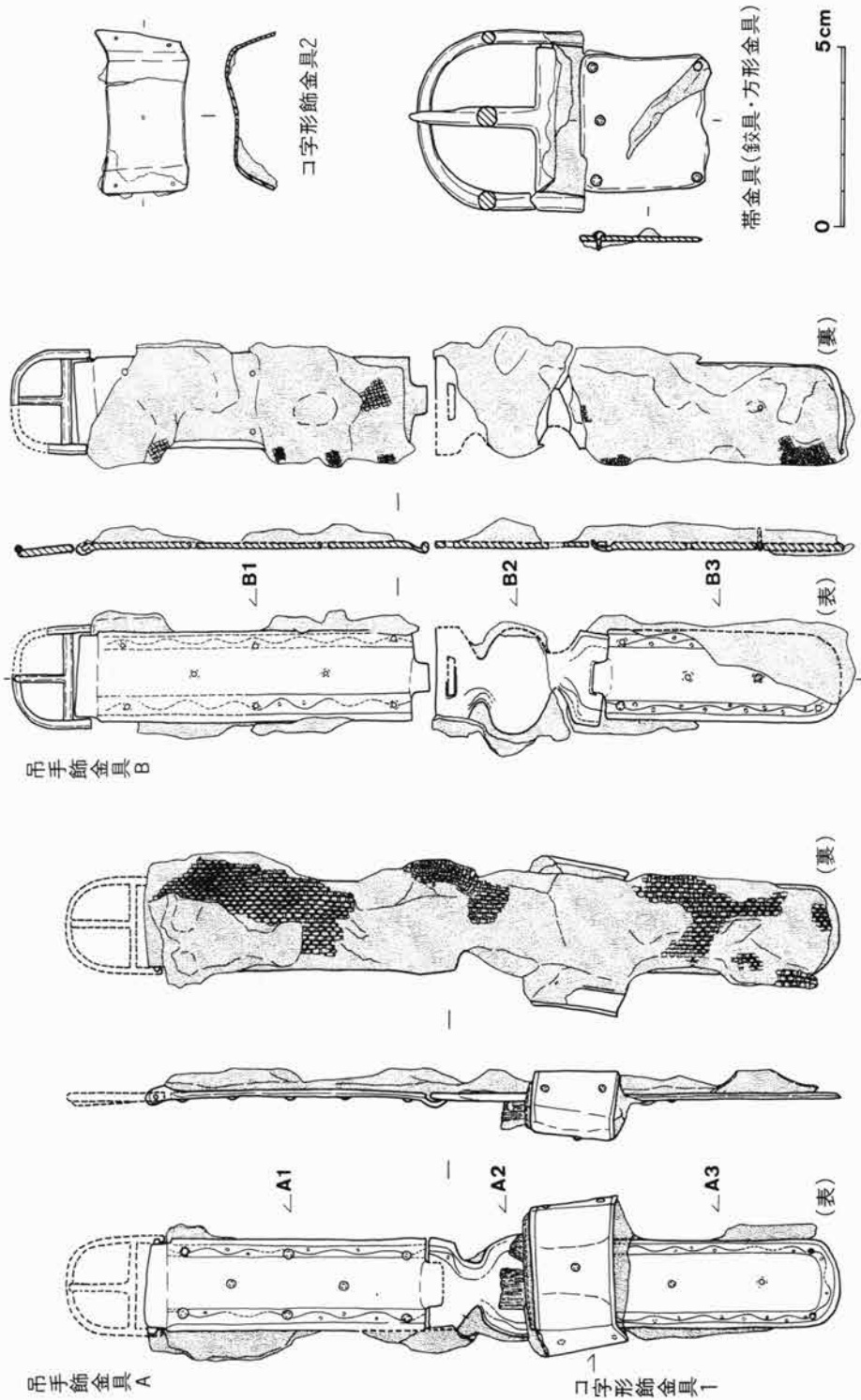
鉄鏃(第22図, 図版第25) 出土した38点すべてを図化した。形態的には、全体的に細身のプロポーションであり、鏃身部から頸部へゆるやかに移行するもので、鏃身部と頸部の区別が不明瞭である。鏃身部と頸部を含めた長さは、7cm前後、鏃身部の幅は、1.2cm前後を測る。鏃身部は、すべて片丸造りである。型的には、単一であり、異なる型式の鏃を含まない点がむしろ特徴的である。いわゆる長頸鏃と比較すれば、頸部が充分には発達しておらず、長頸鏃の祖形式と考^(注11)えて大過ないと思われる。茎部は、いずれも矢柄の遺存状況が良好であり、矢柄と鏃本体を固定するため、桜とみられる樹皮が巻かれている。

鏡(第23図, 図版第26) 面径8.7cm・縁高0.4cmを測る斜縁の小型仿製鏡である。きわめて遺存状況が悪く、錆の進行による劣化が著しいため、完全な状態で取り上げることができなかった。そのた

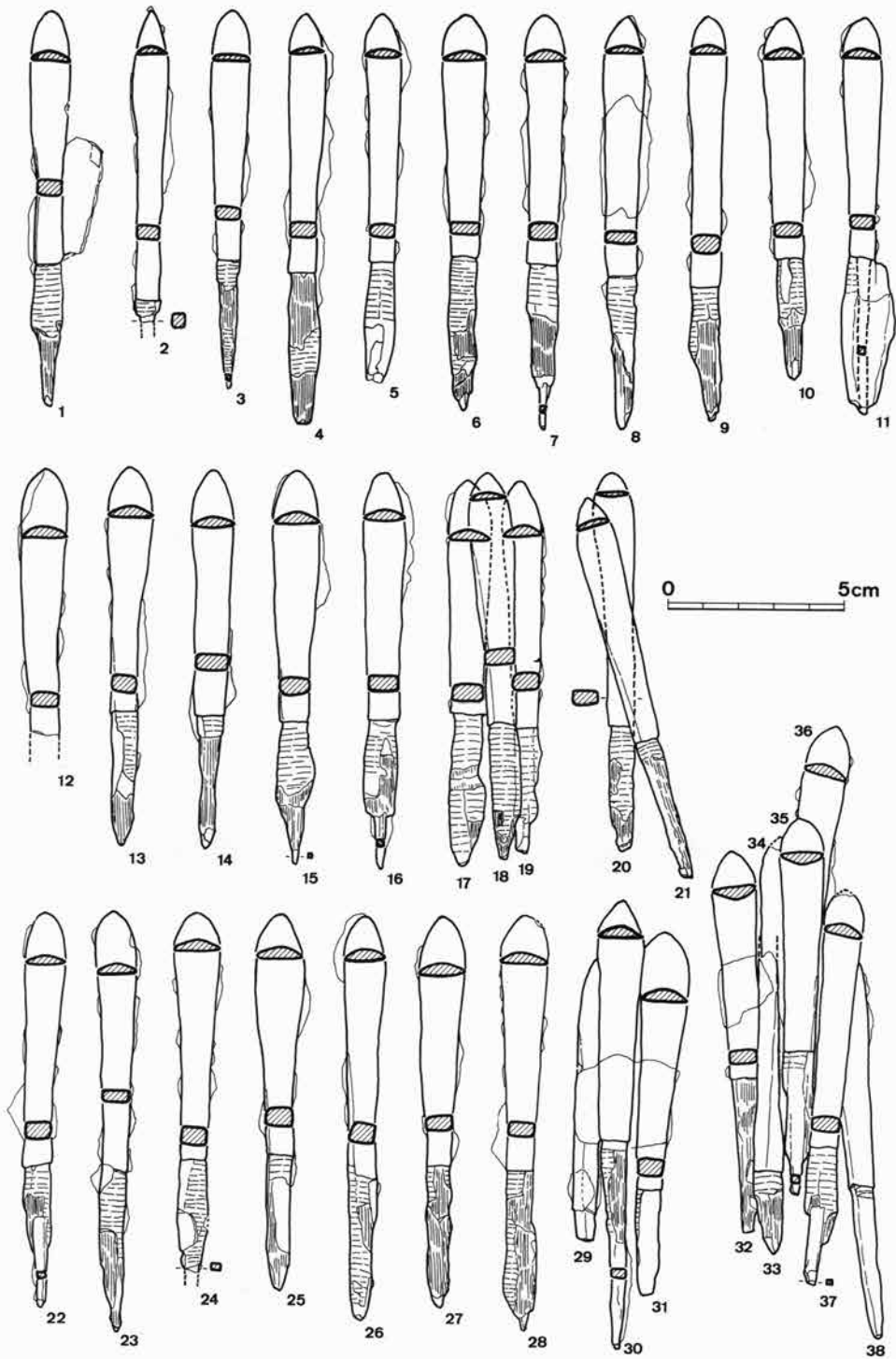
め、特に主文帯について不明な点が残る。第23図は、観察可能な範囲で復原図化したものである。外区の文様は、無文の斜縁に続き、幅0.4cmを測る鋸歯文帯により飾られる。内区は外区とは幅0.4cmの無文帯により画される。内区外縁に幅0.4cmを測る楯歯文帯がめぐる。

^(注12)
玉類(第24図, 図版第26) 1・2は、瑪瑙製の勾玉である。充分に発色していないため、色調は乳白色を呈する。全体にていねいに仕上げられよく丸みを帯びるが、プロポーションとしては「コ」の字形に近いものである。穿孔は片面からなされる。

3・4は、細身の管玉であり、材質はいわゆる碧玉に含まれる溶結凝灰岩製である。淡緑白色を呈する。穿孔は両面穿孔である。5・6は、緑色凝灰岩製の管玉である。3・4に比べ径は太く、短い。5は、片面穿孔、6は、両面穿孔である。



第21図 第1主体部出土胡鍔実測図 (Scale=1/2)



第22図 第1主体部出土鉄鏃実測図 (Scale=1/2)

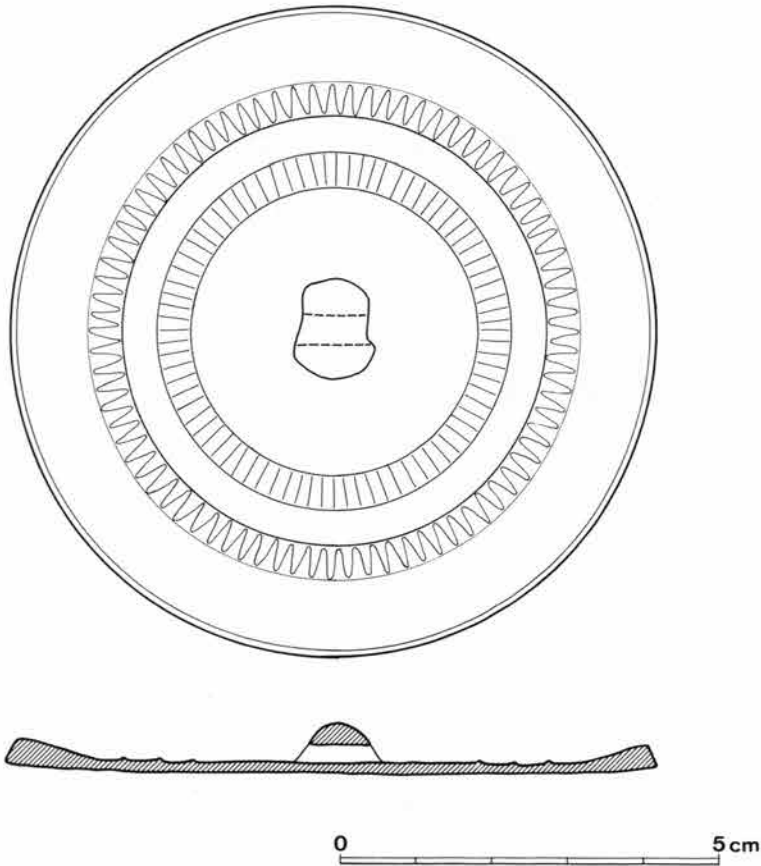
7～22は、水晶製の小玉である。径0.3～0.5cmを測る。研磨による不整形な面を残しているが、全体にていねいな作りである。穿孔はすべて片面穿孔である。

23は、水晶製の棗玉である。部分的に欠損しているが、ていねいに仕上げられている。穿孔は、片面穿孔である。

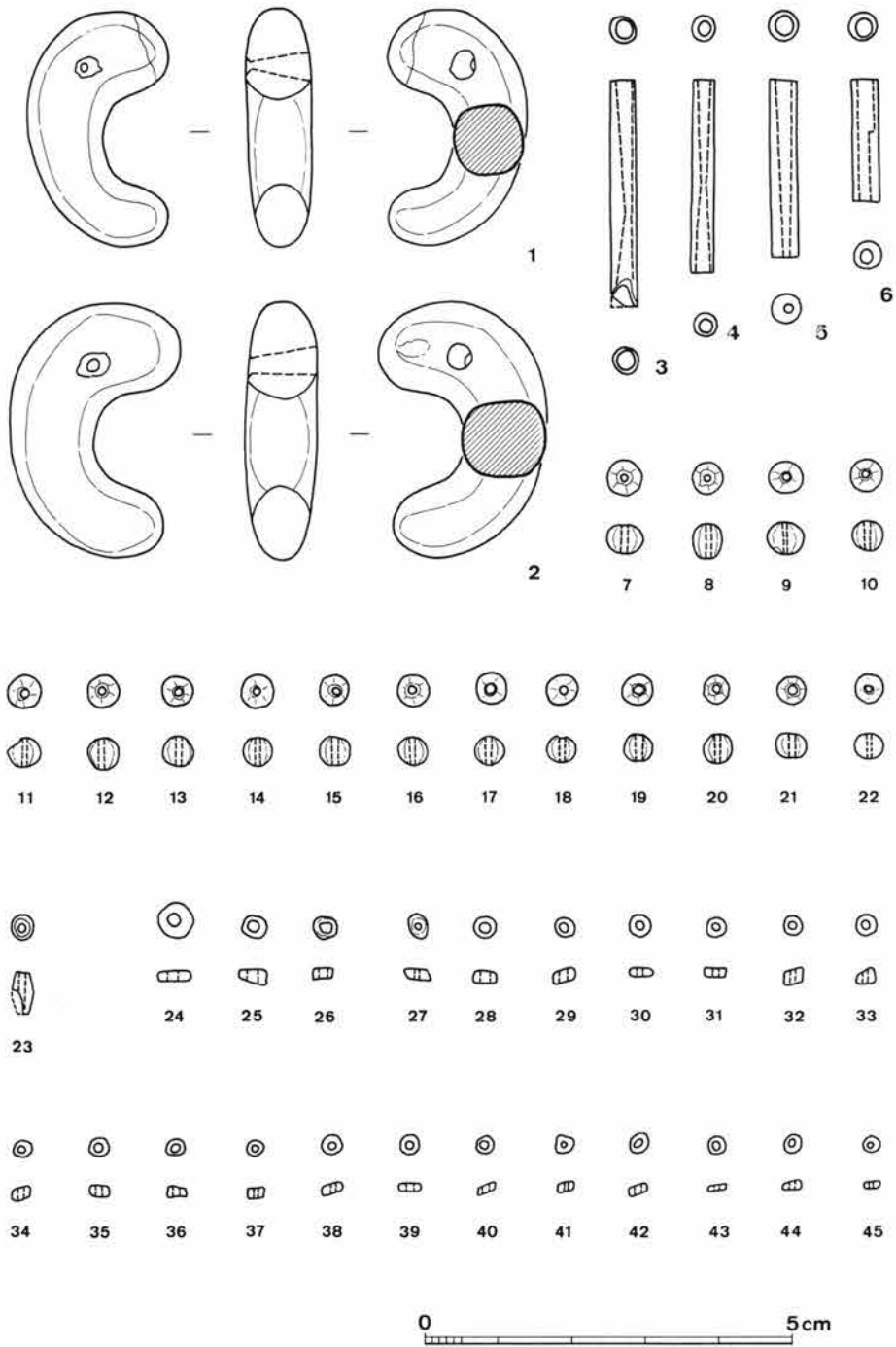
24～45は、ガラス小玉である。図示した22点のほか、破損したものが4点ある。スカイブルーを呈するもの8点の他はすべてコバルトブルーを呈する。

櫛(第25図、図版第26) いずれも通有の堅櫛である。出土した11点中、図示し得たのは8点である。ムネに塗布された漆の皮膜のみが遺存していた。ムネ幅約1cmを測る小型のものと、ムネ幅約1.5～2cmを測る中型のもの2種類に分類できる。ムネ幅4cm前後を測る大型品は出土していない。縦糸はいずれも、竹ヒゴを一括して縛ったものである。帯状の巻縛りは、無数の横線が観察できることから細糸で横に巻き上げたものと考えられる。

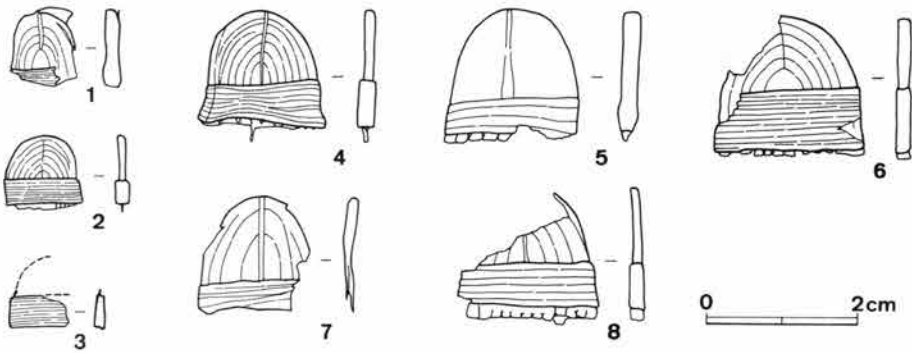
(石崎)



第23図 第1主体部出土鏡実測図 (Scale=1/1)



第24図 第1主体部出土玉器実測図 (Scale=1/1)



第25図 第1主体部出土堅櫛実測図 (Scale=1/1)

(3) 第2主体部

A. 主体部の構造

第2主体部は、2段に掘り込んだ墓壇内に組合せ式の木棺を安置し、棺の一部を粘土により被覆する構造をもつ。

第1節で述べたように、1段目の墓壇を検出した際に、棺の木口と思われる粘土が検出されたため、1段目墓壇の上部はかなり削平を受けていると考えられる。検出面における墓壇の形状は、主軸をほぼ東西方向に取るややいびつな長形状を呈している。特に、墓壇の北西隅は不自然に内側に入り込んでおり、西側ほど墓壇の幅が狭くなっている。墓壇の規模は、長さ7.6m・幅1.8~2.6mを測る。遺存していた1段目墓壇の深さは、約10cmである。1段目の墓壇は、墳頂部の盛土から掘り込まれ、旧表土を取り除き、ほぼ地山面にまで達している。棺を据え付けるための2段目の墓壇は、1段目墓壇の中央やや東よりに、隅丸長形状に掘り込まれており、長さ4.5m・幅1.3mを測る。1段目墓壇の東側で約1m×2.5m、西側で約2m×2mの平面が存在するため、棺の規模に比して1段目の墓壇が必要以上に大きく感じられる。このように広い棺外を有しながらも、そこには、楯や槍といったような棺外の副葬品は置かれていない。そのため、この平坦面は、副葬品配置のためではなく、むしろ、作業工程上の都合によるものと解釈されよう。

さて、2段目墓壇内に収められた棺は、組合せ式の木棺と推定されるが、これは棺を被覆した粘土が良好に遺存していたことで確認することができた(第26図)。両木口で検出した粘土は、墓壇内を掘り下げると、棺の中央部に向かって下がりながら続き、東側で木口から約0.7m、西側で約1.1mの棺の上部を被覆する粘土であることがわかった。この粘土は、平均で約4cmの厚さをもつ。しかし、棺の中央部分においてはこのように明瞭な被覆粘土を検出することはできず、棺底付近にわずかにブロック状の粘土が見られたにすぎない。したがって棺の上部については全面を覆うのではなく、木口付近のみ重点的に施した

ことが推測される。また、木口付近上部の被覆粘土は、断面形が蒲鉾状にアーチを描くもので、木棺の蓋の形状をとどめているものと考えられる。

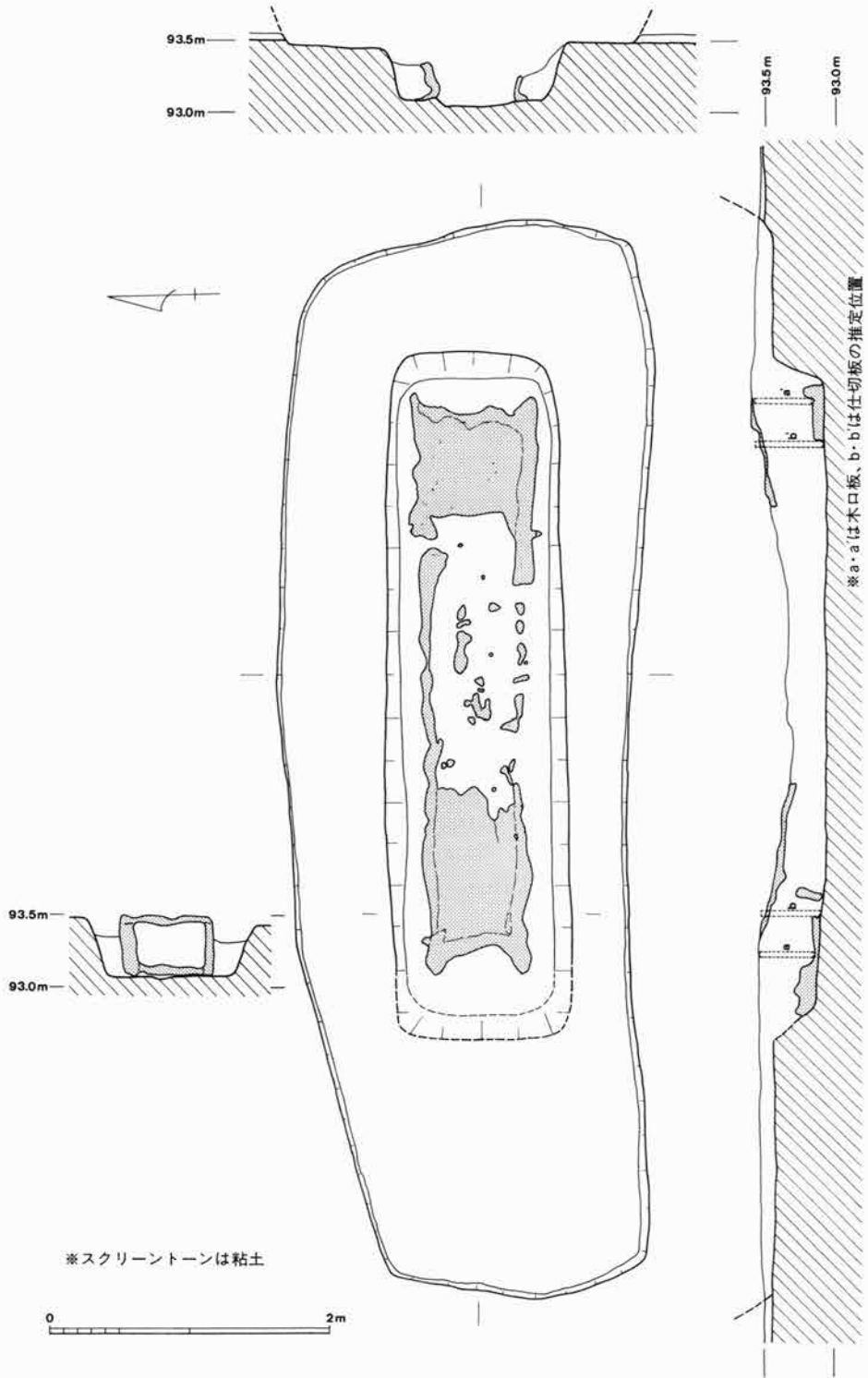
粘土は、棺の上面のほか、棺側面と棺底木口付近にも用いられている。棺側の粘土は、地面からほぼ垂直に立ち上がり、棺上の粘土に接続する。そのため、棺上に粘土を用いた木口付近では、遺存状況も良好であったが、棺の中央部分では土圧により粘土の上部が棺の内側へ折れ曲がるようにして入り込んでいた。先に記した棺底付近で見られたブロック状の粘土は、この棺側の粘土が落ち込んだものと判断される。棺底木口付近の粘土は、厚さ約8cmの粘土塊を棺底地山直上に据え付けたもので、東側で長さ50cm・幅60cm、西側で長さ40cm・幅50cmを測る。側面はいずれも棺側の粘土と接続している。また、それぞれの粘土塊の棺内側には、棺内において垂直に立っていたと思われる粘土が存在している。東側では、刀に覆いかぶさるようにして検出されたもの、西側では、短甲の脇に接して検出されたものである。いずれも、据え付けられた粘土塊と接続したものである。東側の粘土は、検出した状況から、棺の内部に倒れ込んだことが明らかである。これらは、粘土塊の内側に仕切り板が存在し、それを木口側から支えた粘土であることが推定される。棺の両端には、明確に木口板の存在を裏付ける痕跡を検出することはできなかったが、棺底の粘土塊および棺側板に挟み込まれた状態で存在したものと推定される。また、棺底には、両木口に据え付けられた粘土との間に板を置いていた可能性が高い。したがって、木棺は、底板1・側板2・蓋1・仕切板2・木口板2の最低8枚以上の板によって構成され、棺内は、遺体を収めた主室と両側の副室とに分かれていたのであろう。

B. 副葬品の出土状況

第2主体部から出土した副葬品は、第3表に示すとおりである。出土した位置は、大きくみると、棺内と棺内副室に分けることができ、さらに棺内のものは東側の一群と西側の一群に分けることができる。なお、第2主体部においては、棺外の副葬品は全く確認することができなかった。

棺内東群の副葬品は、勾玉・鉄刀・鏡・刀子である。勾玉・管玉は、小範囲にまとまって出土しており、連結した一連のものである可能性が高い。鉄刀は、棺に沿って北側と南側に配されており、いずれも切っ先を西側に向けている。鏡・刀子は、北側の鉄刀に接して出土した。鏡は鏡背を上に向けており、また、鏡の上面には、有機質が遺存していたことから、何かに包まれていた可能性が高い。刀子は切っ先を西に向け鏡の上に重なっていた。

棺内西群の副葬品は、勾玉・管玉・ガラス小玉・鉄鏃・鉄刀・短甲・冑・刀子・竖櫛である。勾玉・管玉・ガラス小玉は、棺の中央から西側にかけて、広範囲に散在している。



第26図 第2主体部実測図

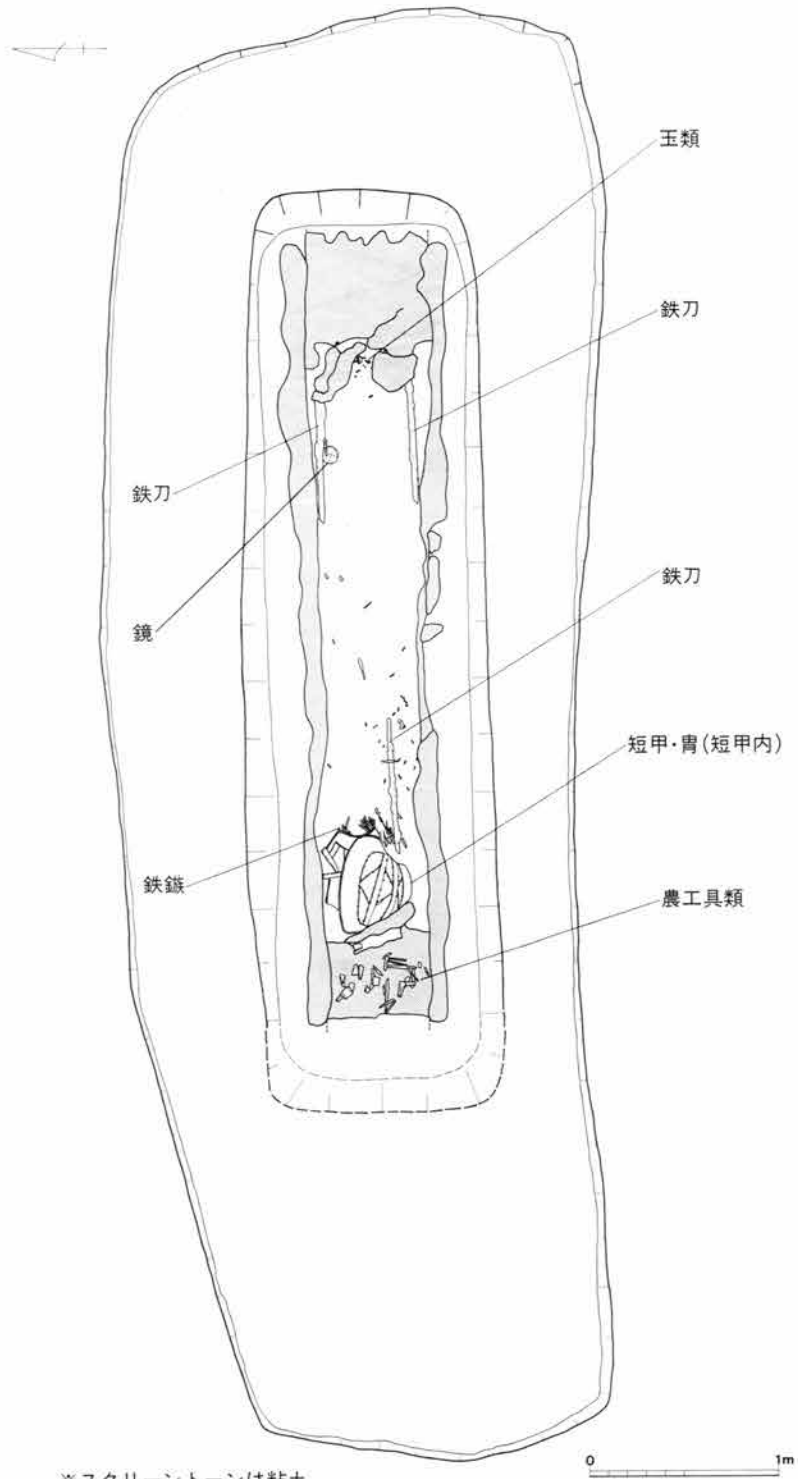
これらの玉類は、意識的にまかれた可能性が高い。鉄刀は、切っ先を西側に向け、棺と平行にやや南側に配されている。鉄刀の北側には、やはり切っ先を西側に向けた鉄鍬が束になって出土しており、矢の束と鉄刀が並べられていたことがわかる。

短甲は、主室内の最も西側に置かれていた。短甲上部の棺の被覆粘土がほとんど陥没していなかったために、形はゆがんでいたものの、大きく型くずれすることはなく、ほぼ原形を保った状態であった。冑・鍔は、この短甲内部に収められていた。また、冑は鍔との連結がはずれ、鍔の内部に落ち込んでいた。そのため冑の遺存状態はきわめて良好であった。副葬品の埋納時には、冑を先に納めた後、短甲を上からかぶせるようにしていることがわかる。なお、短甲内には、冑とともに、刀子・勾玉・白玉・堅櫛が出土しており、これらの副葬品埋納過程における取り扱いが注意される。

棺内副室では、西側から農工具が一括して出土した。これらは、木口に据えられた粘土塊の上で検出されたものである。各農工具の配置には、特に規則性は認められない。なお東側の副室からは遺物は出土していない。

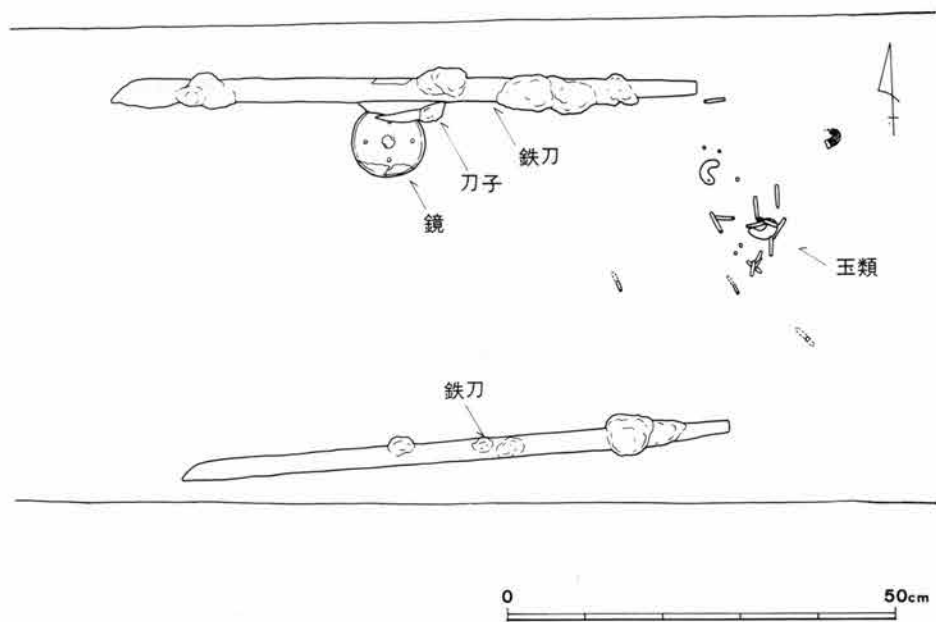
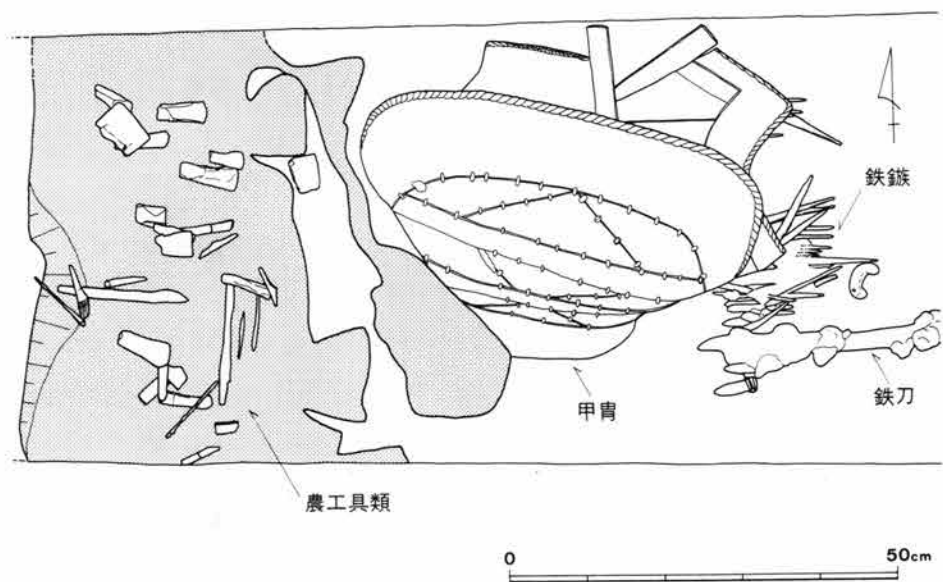
第3表 第2主体部出土遺物構成表

—棺内—	—甲冑類—	—冑—	1 (三角板革綴衝角付冑)
		—鍔—	1 (板鍔)
		—短甲—	1 (三角板革綴短甲)
	—武器類—	—鉄刀—	3 (2口は鹿角装)
		—鉄鍬—	60
		—刀子—	4
		—矢柄—	(漆膜のみ遺存)
	—鏡—	—振文鏡—	1
	—玉類—	—勾玉—	—瑪瑙製— 1
			—緑色凝灰岩製— 3 (丁字頭1)
		—溶結凝灰岩製— 2	
	—管玉—	—緑色凝灰岩製— 38	
		—溶結凝灰岩製— 1	
	—小玉—	—ガラス製— 7	
		—滑石製(白玉)— 165	
	—櫛—	—堅櫛—	9
—棺内(副室)—	—農工具類—	—鍬先—	4
		—鎌—	5
		—手鎌—	5
		—斧—	7
		—鉈—	2
		—刀子—	7
		—鑿?—	2
—棺外—	—なし—		



※スクリーンは粘土

第27図 第2主体部遺物出土状況図

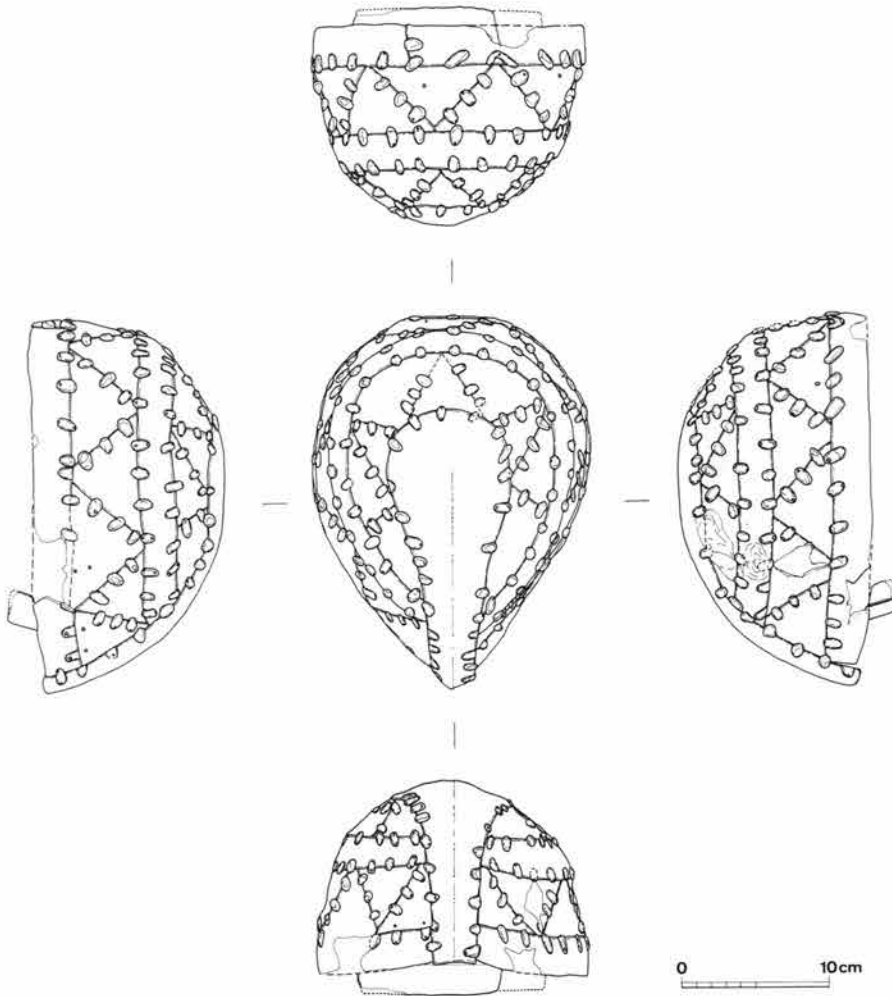


第28図 第2主体部遺物出土状況部分図

さて、棺内に埋葬された被葬者については、第1主体部と同じく性別・年齢等を知る直接の手がかりとなる人骨等は確認することができなかった。したがって、これらの点については不明と言わざるを得ないが、棺内副葬品の配置状況からみると、被葬者は一人で、頭位を東に向けていたものと推測される。つまり、棺内東群の副葬品は、被葬者の身体付近に置かれ、西群のものは、足元側に一括して置かれていたものと考えられる。

C. 副 葬 品

甲冑 <冑> (第29・30図, 図版第27・28) 伏板・地板第1段・胴巻板・地板第2段・腰巻板および衝角底板・竖眉庇から構成される通有の三角板革綴衝角付冑である。三尾鉄は付属しない。 着装状態で復原前後 25.0cm・左右18.5cm・全高14.5cm・鉢部高12.9cm



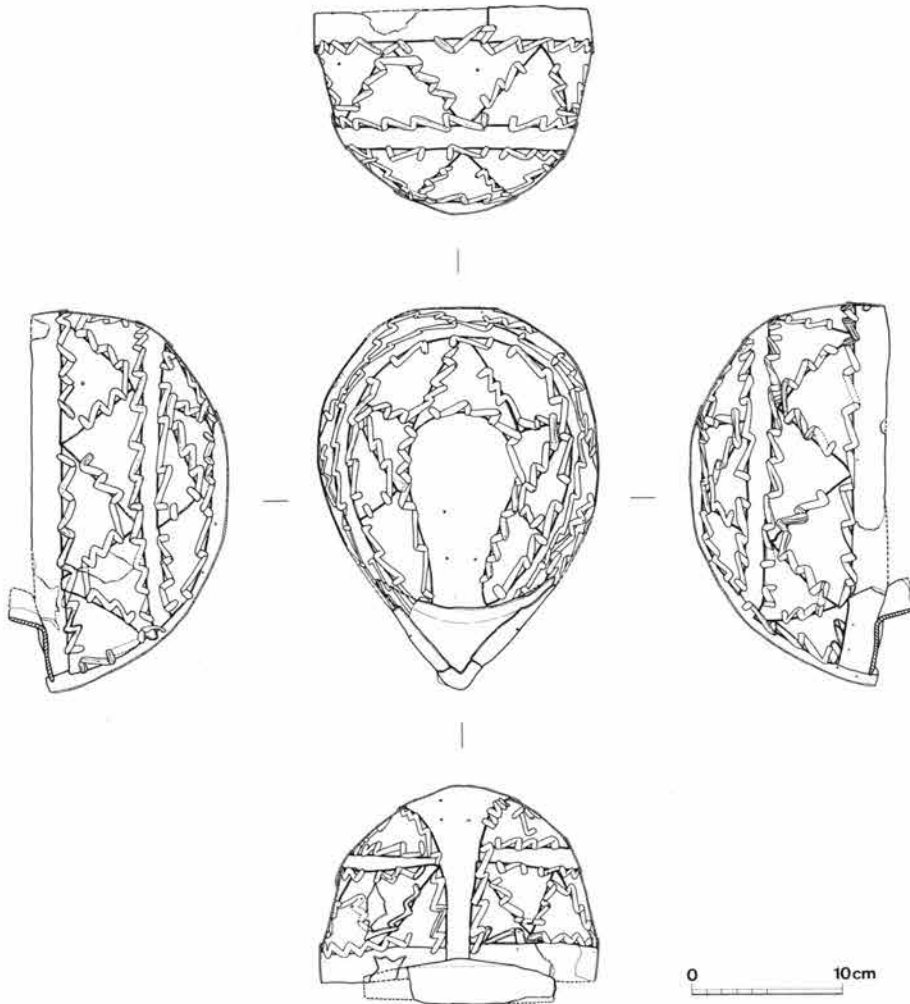
第29図 第2主体部出土冑(外面)実測図 (Scale=1/5)

を測る。

短甲内に収められていたために、遺存状況はきわめて良好である。

伏板は、前後25.3cm、頂部での最大幅8.2cm、先端部で2.9cmを測る。上からみて杓子状を呈する。横からみると、頂部からゆるやかに弧を描き、衝角部を形成する。衝角部は「く」字状の断面形を呈し、内側の角度は約95~100°を測る。衝角部の先端は、内側へ折り曲げられており、衝角底板をささえる役割を果たしている。

地板第1段は、後部中央地板で幅4.8cmを測り、9枚の三角板より構成される。衝角部を通る前後の中心ラインに対し、基本的に左右対称となるように三角板が配置される。地板は、衝角部に近いものほど上重ねに連結され、後部中央の地板がすべて下重ねされる。



第30図 第2主体部出土冑(内面)実測図 (Scale=1/5)

胴巻板は、幅2.8cm・長さ54.0cmを測る1枚の帯金よりなる。地板第1・第2段に対して上重ね、伏板に対しては下重ねにされる。帯金上部は、地板第1段と接続するための孔が21か所、下部は、地板第2段と接続するための孔が23か所、両端に伏板衝角部と接続するための孔がそれぞれ1か所、合計46か所の穿孔が認められる。

地板第2段は、伏板付近で幅約4.2cm、後部中央で4.5cmを測り、全体的に地板第1段よりもやや大きな地板13枚で構成される。第1段と同様に、前後の中心ラインに対し、基本的に左右は対称となるように地板が配置される。また、地板の重ね方も同じ方法をとる。後部中央のほか、3枚の地板には、板鋸を装着するための孔が、それぞれ1孔ずつ認められるが、錆化のためすべては確認できない。

腰巻板は、幅2.6cmの2枚の帯金よりなり、後部中央よりもやや右寄り、接続している。革綴は、帯金上部と地板第2段との革綴の途中で、帯金を経由し、続けて行われている。衝角部付近は、衝角底板・豎眉庇を接続するため、前端から約7.3cmを幅1.3cmで内側へ折り曲げている。接続の方法は、小林氏の第1技法^(注13)、野上氏の上接式^(注14)に属する。

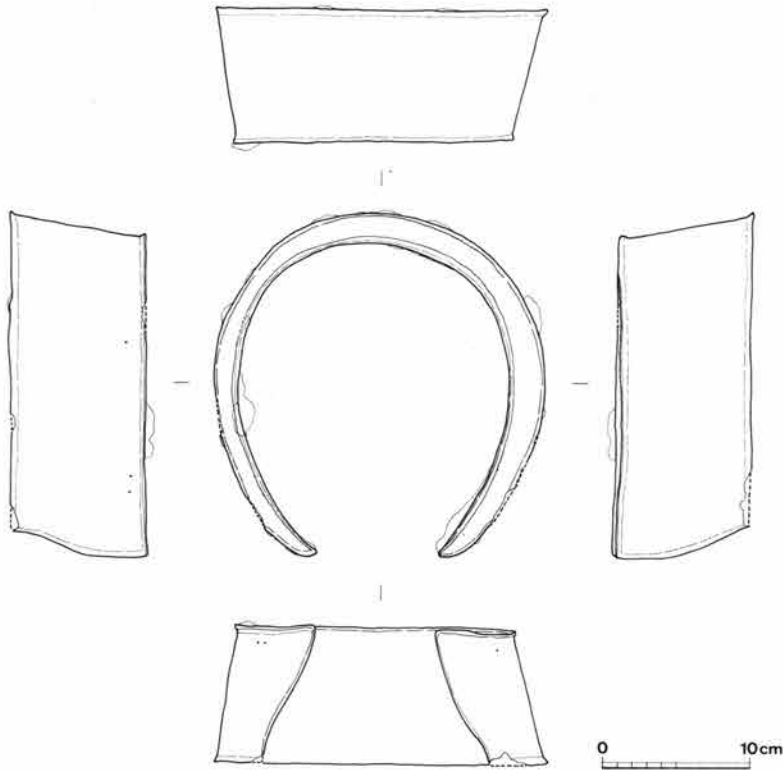
衝角底板・豎眉庇は、1枚の鉄板で構成されるが、衝角底板の一方は欠損している。前後4.7cm、左右は復原で12.1cmを測る。衝角底板になる部分は、底辺約10cm・斜辺約7cmの三角形を呈するが、底辺は、先端に向かってゆるやかに弧を描いており、そのため、底板から垂直に折り曲げられた豎眉庇も弧状に湾曲している。豎眉庇の幅は、中央部で2.5cmを測る。衝角底板には、左右2か所ずつの孔が穿たれ、腰巻板と革綴されている。

鉄板使用枚数は、地板22枚、伏板1枚、胴巻板1枚、腰巻板2枚、衝角底板・豎眉庇1枚の合計27枚である。

なお、伏板頂部には、三尾鉄を取りつけるための孔が、内側から3か所確認できるが、孔の配置から本来は4か所に穿孔されていると思われる。しかし、三尾鉄は出土しておらず、また、痕跡も確認できないことから、取り付けられていなかったのであろう。

革綴は、同じ孔に2回以上革紐をくぐらせ、内面で次の孔へ移る方法で、結果的に、地板裏面において綴革が鋸歯状に進行するものである。

<鋸>(第31図、図版第27) 1枚の鉄板よりなる板鋸である。着装状態で、上部前後21.4cm、左右18.9cm・下部前後20.8cm・左右22.3cm・高さ9.2cmを測る。上端から下端に向けて裾の広がる形状を呈する。前端部はそれぞれ、下方に向けてえぐり取るように曲線を描きながらカットされている。縁はすべて、幅0.4cmを外方に曲げている。覆輪は施されない。胄本体との連結用の孔は、錆化のため、すべてを確認することはできないが、現状で4個の孔が認められ、復原すると、両側の前後に2孔1組で1か所ずつ穿たれていると思われる。さらに、胄本体の後部地板にも連結用の孔があることから、鋸後部にも、もう



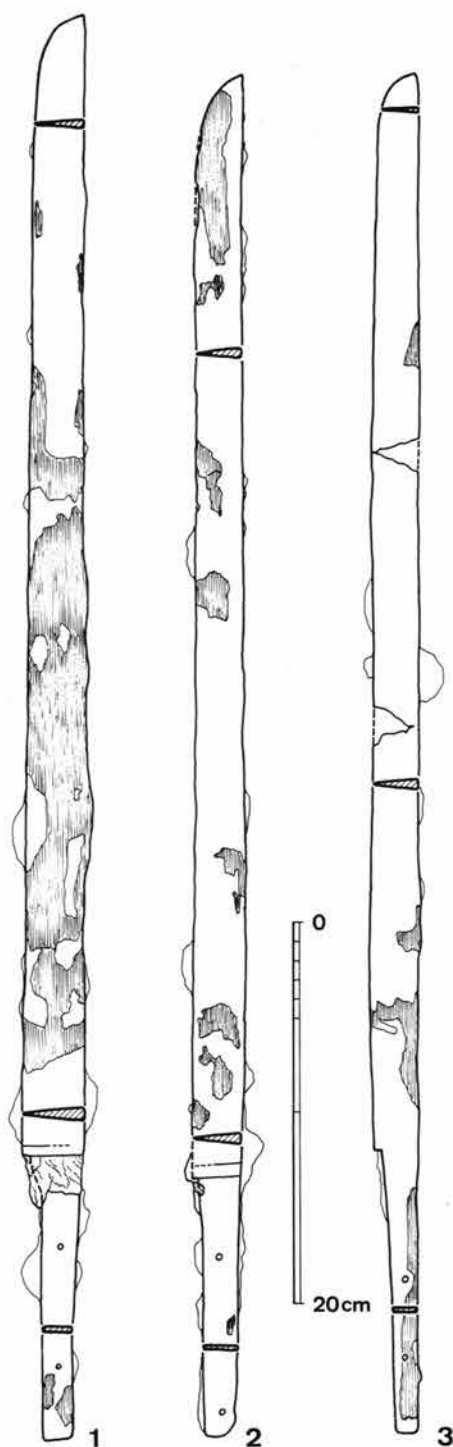
第31図 第2主体部出土鍔実測図 (Scale=1/5)

1か所存在する可能性が強く、合計5か所で胄と鍔がつながれていたと考えられる。

<短甲> 前胴縦上3段・長側4段、後胴縦上3段・長側4段からなる胴一連、通有の三角板革綴短甲である。第1主体部出土の短甲に比べ、一回り大きなサイズである。鉄板の連結および革綴の方法、前胴の三角板の配置は、第1主体部のそれと基本的に同じである。異なる点としては、覆輪の手法および前胴縦上第2段に三角板が使用されず1枚の鉄板であることをあげることができる。

鉄刀(第32図, 図版第29) 1・2は、棺内東側の被葬者の両脇に置かれ、3は、西側の足元側に置かれていたものである。1は、全長74.8cm・身部長59.8cm・茎部長15.0cm, 身部幅2.6~3.2cm・茎中央部幅1.6cmを測る。X線写真によると、関は角関状を呈し、茎は関付近から曲線を描きながら急に細くなる。なお、この柄縁部分には、鹿角状のものがその痕跡をとどめており、鹿角製装具を有していた可能性がある。また、茎には2孔の目釘孔がある。さらに、肉眼では全く観察できないが、身部関付近には、はばきの存在を思わせるラインを認めることができる。身部の両面には、鞆の木質が良好に遺存している。

2は、全長71.7cm・身部長57.9cm・茎部長13.8cm, 身部幅2.4~2.8cm・茎中央部幅



第32図

第2主体部出土鉄刀実測図
(Scale=1/4)

1. 8cmを測る。1に比べると一回り小振りである。X線写真によると、関は、角関状を呈し、1と同様に身部関部付近にはばきの存在を思わせるラインが観察される。また、茎部関付近には、わずかながら鹿角状の痕跡が認められ、鹿角製の柄縁装具を有していた可能性もある。茎部には、2孔の目釘孔が存在する。

3は、全長71.5cm・身部長56.4cm・茎部長15.1cm、身部幅2.2~2.4cm・茎中央部幅1.3cmを測る。関の形状は、角関である。茎部には、2孔の目釘孔が存在する。身部および茎部には、それぞれ鞘・柄の木質が遺存している。

刀子(第33図, 図版第29) 棺内から出土した4点を図化した。刀子は他に棺内の西側副室内から鉄製農具とともに出土した7点があるが、埋納時における取り扱いが異なっているので、別途取り上げる。

1は、鏡の上面に接した状態で置かれていた。全長9.5cm・刃部長6.7cm・茎部長2.8cm、刃部中央部幅1.0cm・背最大幅0.4cmを測る。茎部には柄の木質が良好に遺存しており、目釘も差し込まれた状態を保っている。目釘の長さは、1.8cmを測る。関は、通常とは異なり、刃部から茎部へ向けて斜めの段をもち、幅の広がる形状であり、茎部は関から茎尻まで斜めにカットされている。

2~4は、いずれも短甲内から、勾玉・白玉・豎櫛とともに出土した。2は、刃部先端を欠いており、現存長8.2cm・現存刃

部長5.8cm・茎部長2.4cm, 刃部中央部幅0.6cm・関部幅1.1cm・茎中央部幅0.9cmを測る。刃部は、先端から関部へかけて背の方に向かって内湾するゆるやかな曲線を描いており、実際の使用による研ぎ減りの可能性も考え得る。3は、両端を欠損している。現存長6.4cm, 刃部中央部幅1.0cm・関部幅1.2cm・茎部幅0.9cmを測る。関の形状は、斜関である。4は、刃部の先端からほぼ半分を欠損している。現存長は6.4cm・茎部長3.3cm, 刃部幅1.1cm・茎中央部幅1.1cmを測る。関の形状は、両関状を呈している。茎部には、柄の木質が遺存している。

鉄鏃(第34・35図, 図版第30) 60点すべてを図化した。型的には、A; 鏃身部に関を有し、鏃身と頸部の区別が比較的明瞭なもの(1~23・50~60), B; 全体的に細身のプロポーションで、鏃身部から頸部へゆるやかに移行するもの(36~47), C; 両者の中間タイプ, の大きく3タイプに分類可能である。

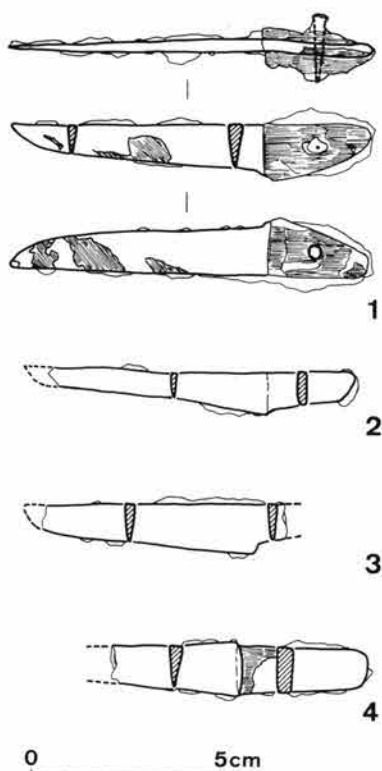
Aタイプは、柳葉鏃の影響を受けた長三角形の鏃身をもち、長頸鏃の祖型とも考えられる。鏃身部の幅は1.2cm, 長さ2cm前後, 頸部長さ2cmを測り、鏃身部と頸部の長さが、ほぼ等しい点に特徴がある。また、14・15などのように、やや小型のものも含まれている。鏃身部はいずれも片丸造りである。

Bタイプは、長頸鏃祖形型式と考えられるもので、鏃身部の幅1.2~1.4cmを測り、すべて片丸造りである。

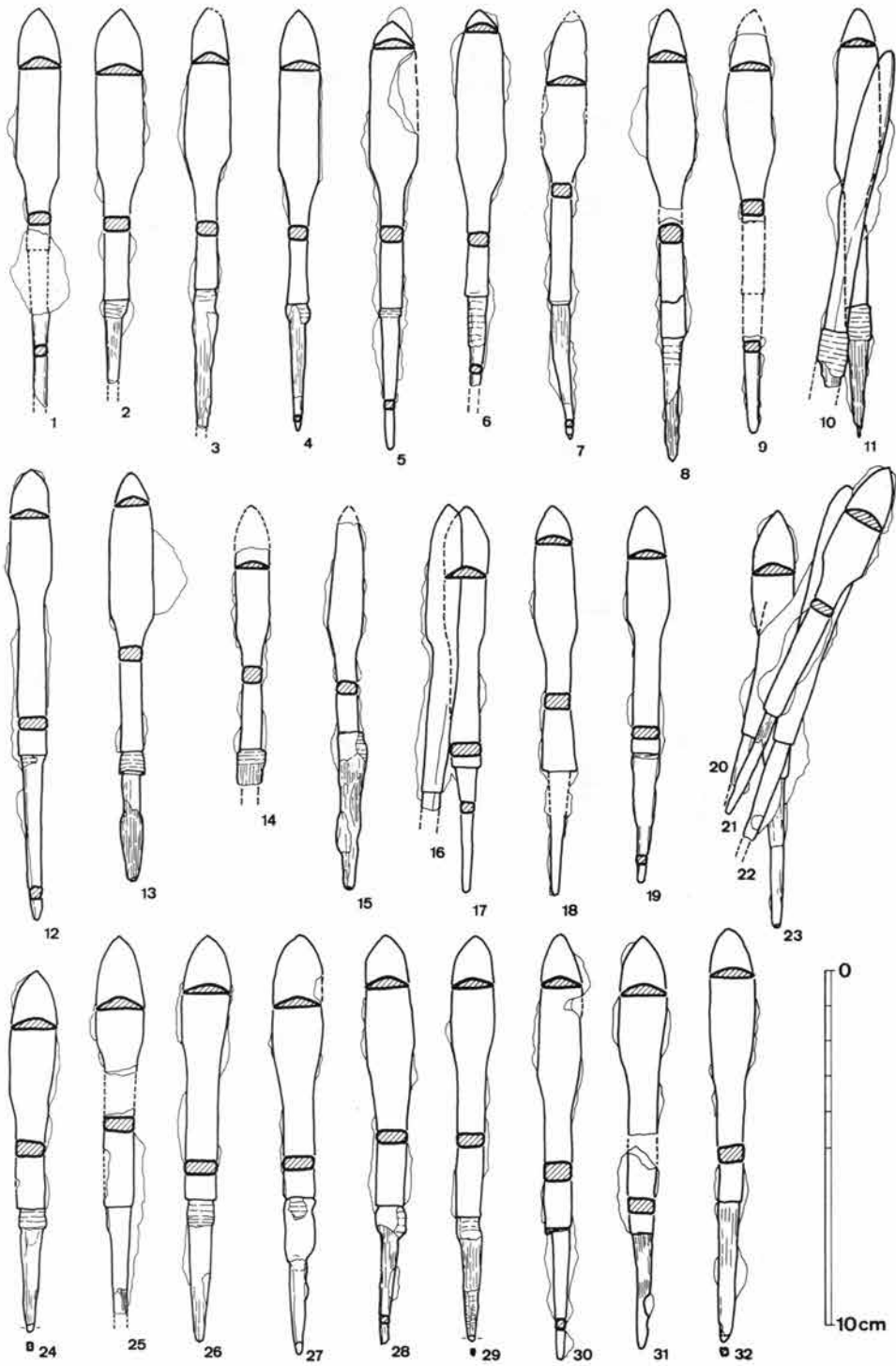
^(注15)
農工具類(第36・37図, 図版第31・32)

<鍬(鋤)先>(第36図1~4) 方形の鉄板を左右から折り返したいわゆる鍬・鋤先で、都出氏によって「鉄製方形板耕具刃先」と呼称されるものである。^(注16)

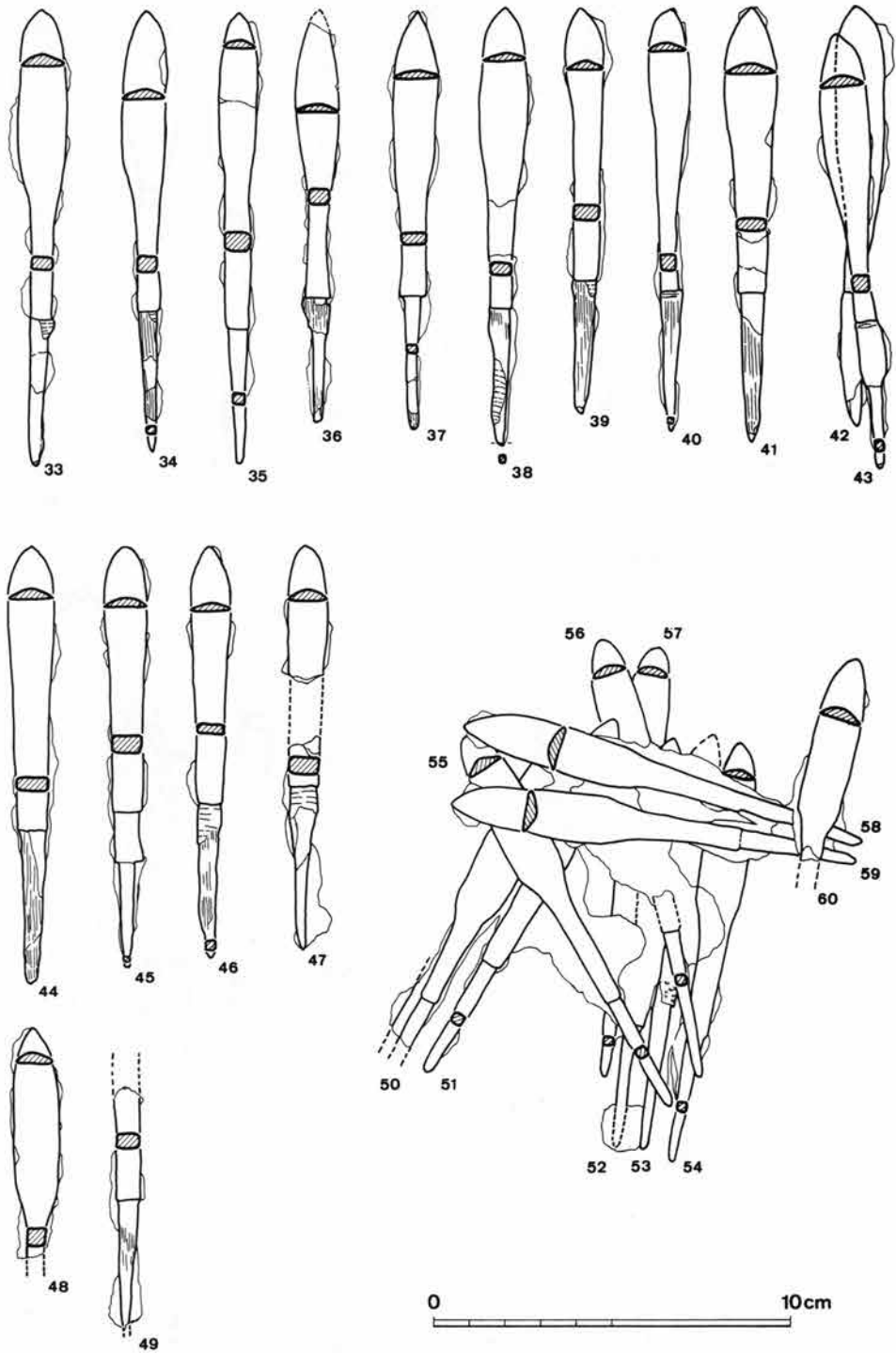
これらは、縦と横の長さの比および大きさから2種類に分類可能である。1・2は、縦約4cm・横5~6cmを測り、縦:横=2:2.5~3と横長になるタイプであり、3・4は、縦約4cm・横約3cmを測り、縦:横=4:3と縦長になるタイプである。都出氏の分類によれば、いずれも(刃幅数cm以下の)Cグループに属し、古墳副葬用の祭器としての鉄製模造



第33図 第2主体部出土刀子実測図 (Scale=1/2)



第34図 第2主体部出土鉄鏃実測図 (1) (Scale=1/2)



第35図 第2主体部出土鉄鏃実測図 (2) (Scale=1/2)

品と考えられている。本例は、出土の状況から、小型化した副葬用祭器の最たるものとしてとらえることができよう。また、先に記した横長タイプと、縦長タイプについては、その違いを機能差として積極的に評価できないまでも、少なくとも形態として明らかに2タイプが存在したととらえることは可能であろう。

〈鎌〉(第36図5～9) 帯状の長方形鉄板の一方の長辺を刃とし、一方の短辺付近に柄を装着する直刃鎌である。鎌はすべて直刃である。

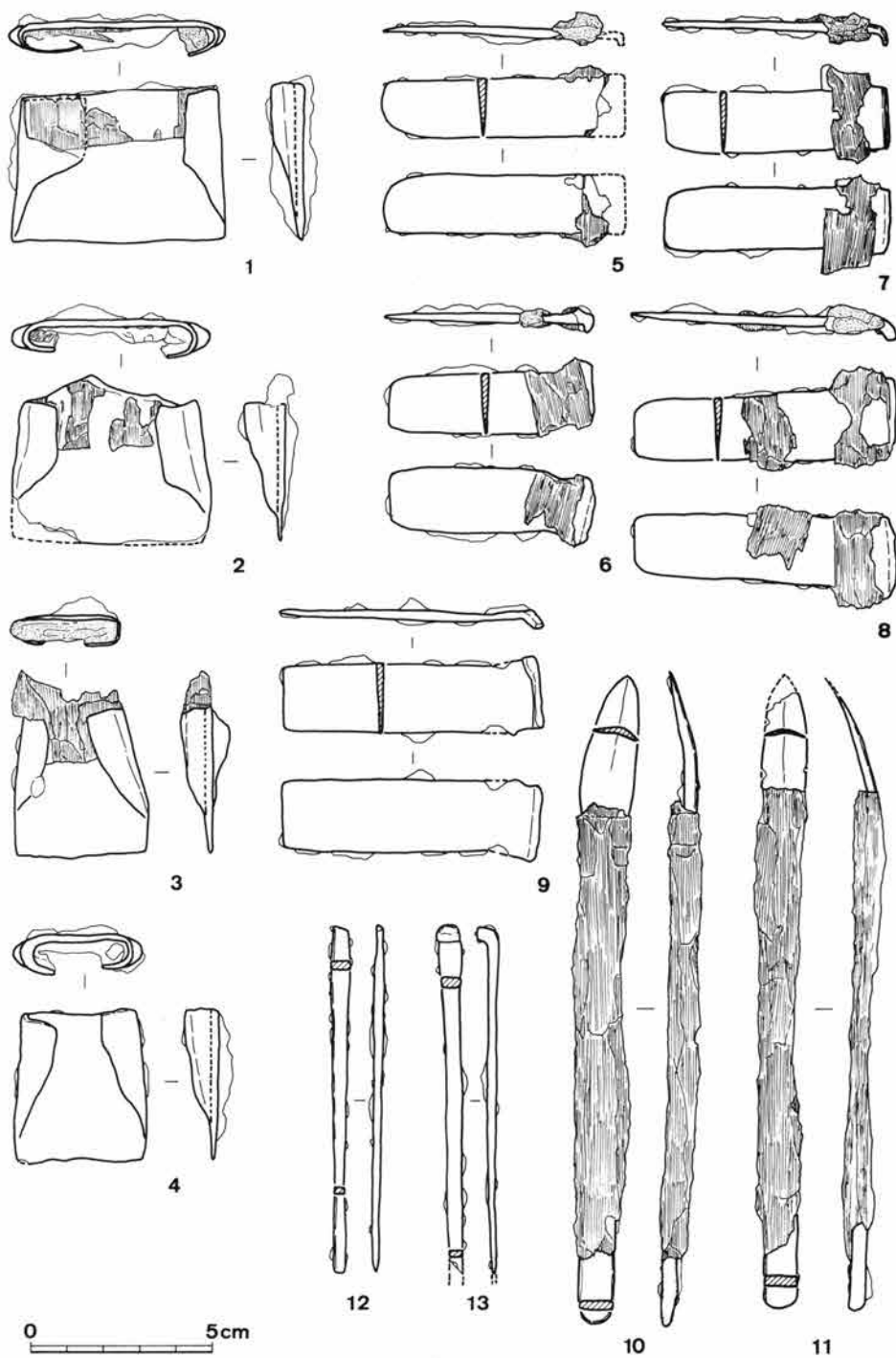
大きさでは、長さで6cm前後のもの(6・7)と7cm前後のもの(5・8・9)に分け得るが、幅はいずれも1.6～2.0cmの間に収まり、大きさからは顕著な差は見い出せない。柄を装着する基部の形状は、すべて短辺を刃に対し直角に折り返すものであるが、6・9については基部全体を背の方へ斜めにわずかに押し上げ、刃部に対して若干の角度がつけられている。これは、柄の装着方法による違いと思われる。すなわち、6は刃部に対して柄が鈍角に装着される(9は木質が遺存していないため不明であるが、おそらく6と同様であろう)が、他は刃部に対して柄がほぼ直角に装着される。ただし、6についても一般的な傾向としてみた場合は、柄を装着する角度は約100°と比較的小さなもので、また、基部の折り返し方法も一隅を折り曲げるタイプではないので、いわゆる鈍角鎌というよりも直角鎌の中にとらえるべきかもしれない。

〈手鎌〉(第37図15～19) 細い帯状長方形鉄板の一方の長辺を刃とし、他の長辺側に長辺と平行する木目をもつ柄を装着する手鎌である。15がほぼ完存と思われるほかは、一端もしくは両端が欠損している。15は、長さ6.7cm・最大幅1.3cm・厚さ0.1cmを測る。形態的には、16のみ鉄板の上半部を木質が覆っているが、他は鉄板の上端部にわずかに木質が遺存するという点で違いがみられる程度である。

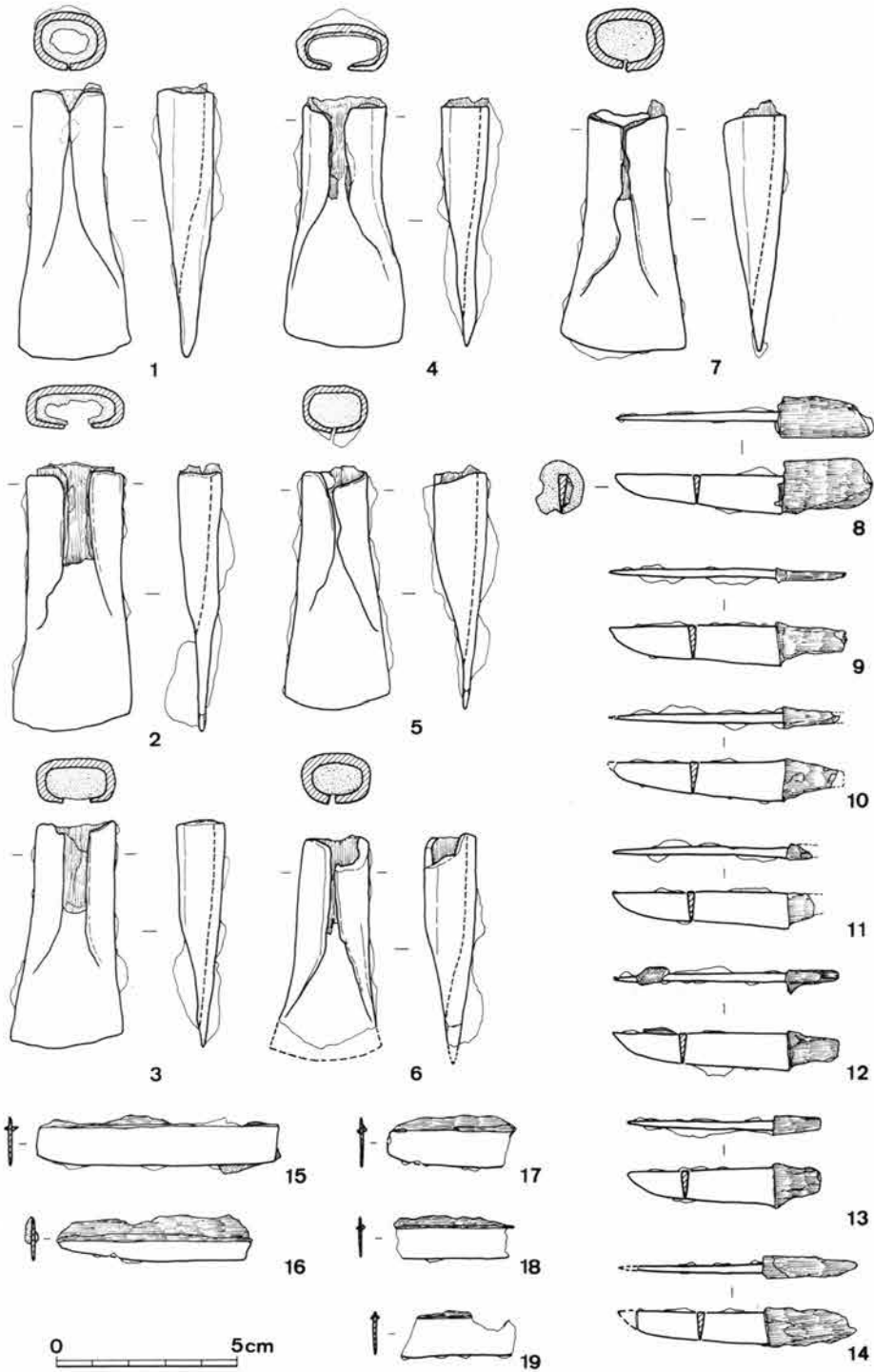
〈斧〉(第37図1～7) 7点が出土している。長方形鉄板の両長辺を折り曲げ、柄を挿入する袋部を形成する斧である。いずれも袋部内の木質が良好に遺存している。

形態的には、袋部の断面形が、横長の長方形を呈するタイプ(2・3・4)と、楕円状を呈するタイプ(1・5・6・7)が認められる。この違いは、柄の基部の形状によると思われる、機能的な差を表わすものではないであろう。また、詳細にみるとそれぞれに若干の個体差が存在するが、それらは鍛造品であるがための差とみなし得る程度のものである。全体的には、全長7cm前後・刃部幅3cm前後を測る小型品である。

〈鉈〉(第36図10・11) 2点が出土している。11の先端が欠損している以外は、柄の木質を含め、良好な遺存状態である。形態的には、2点ともほぼ同形同大である。10は、全長17.8cm・刃部長3.8cm、刃部最大幅1.4cm・柄部幅0.9cmを測る。刃部は鑄を有し、約20°の反りをもつ。柄は、木質の状況から、刃部より下側約12cmにわたって両側から挟



第36図 第2主体部出土農工具実測図 (1) (Scale=1/2)



第37図 第2主体部出土農工具実測図(2) (Scale=1/2)

み込むようにして装着しており、柄尻は約2cmが鉄を露出したままの状態である。そのため端部は角を落し、丸みを帯びさせている。

＜刀子＞(第37図8～14) 7点が出土している。刃部長が5cm前後のものと4cm前後のものがみられるが、ほぼ大きさ・形状を等しくする同一タイプである。8は、特に柄の遺存状態が良好であり、茎部に柄を装着したのち、ぐらつかないように小さな木片を楔としてはめ込んでいる状態が観察できる。

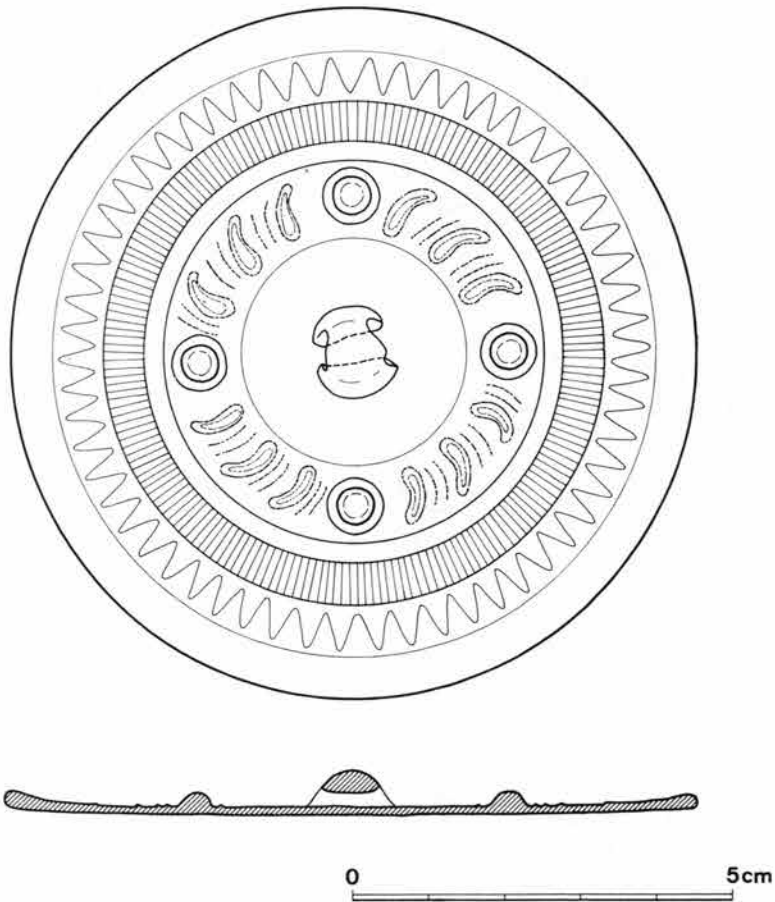
これらの刀子と棺内出土のそれ(第33図)と比較した場合、後者の刀子が個体差をもち、異なるタイプを寄せ集めているのに対し、前者は同一タイプのみで構成されている。このことは、後者が日常に使用されていたこと、逆に前者が副葬用として特別に誂えたものであることを示唆するのではないかと考えられよう。

＜鑿＞(第36図12・13) 断面形が長方形を呈する細い棒状の鉄製品であり、12の先端部の形状が扁平となることから鑿と判断したものであるが、通常の形態と比較した場合、幅がきわめて狭いことから疑問の余地も残る。また、上端部の形状から、釘である可能性も考えられる。12は、全長9.6cm・最大幅0.5cm・厚さ0.3cmを測る。鑿とすればかなり小型化したものといえよう。形状は、頭部付近の幅が最大で、先端に向けて細くなり、刃部へと続く。頭部はやや斜めにカットされている。13は、刃部付近で欠損している。頭部の形状は12と異なり、端部を直角にわずかに折り曲げている。頭部付近に最大幅を持つ点では、2と共通する。

鏡(第38図、図版第29) 面径9.1cm・縁高0.2cmを測る振文鏡である。全面にわたり淡緑色を呈しており、遺存状況は悪く、劣化が進んでいる。また、鏡背の一部には赤色顔料が遺存している。

鈕を中心に、主文帯は4つの乳を配置し、乳の間に振り紐状の文様を配置している。文様は、樋口氏の分類による振文鏡V型の文様をさらに簡略化した様相を呈し、振り紐状の文様は、勾玉状にわずかに浮きでているにすぎない。その外側には、1条の圏線、櫛歯文帯、そして鋸歯文帯が巡っている。縁は、端部がやや丸みを帯びているが、型式としては平縁に属する。

玉類(第39図、図版第33) 勾玉は、7点が出土した。1が短甲内から、3・4が頭部付近、他は、棺内中央から西側にかけて出土したものである。材質は、1・5・6が濃緑色を呈する流紋岩質溶結凝灰岩で、いわゆる碧玉の部類に属する。2・3・4は淡緑色を呈する流紋岩質凝灰岩である。軟質のため、風化が進んでいる。7は瑪璃製で茶橙色に発色している。形態的には、逆「C」字状のものと「コ」字状のものが存在する。2のみ丁字頭である。穿孔は、4のみ両面で、他は片面穿孔である。管玉は、計38点が出土している。



第38図 第2主体部出土鏡実測図(Scale=1/1)

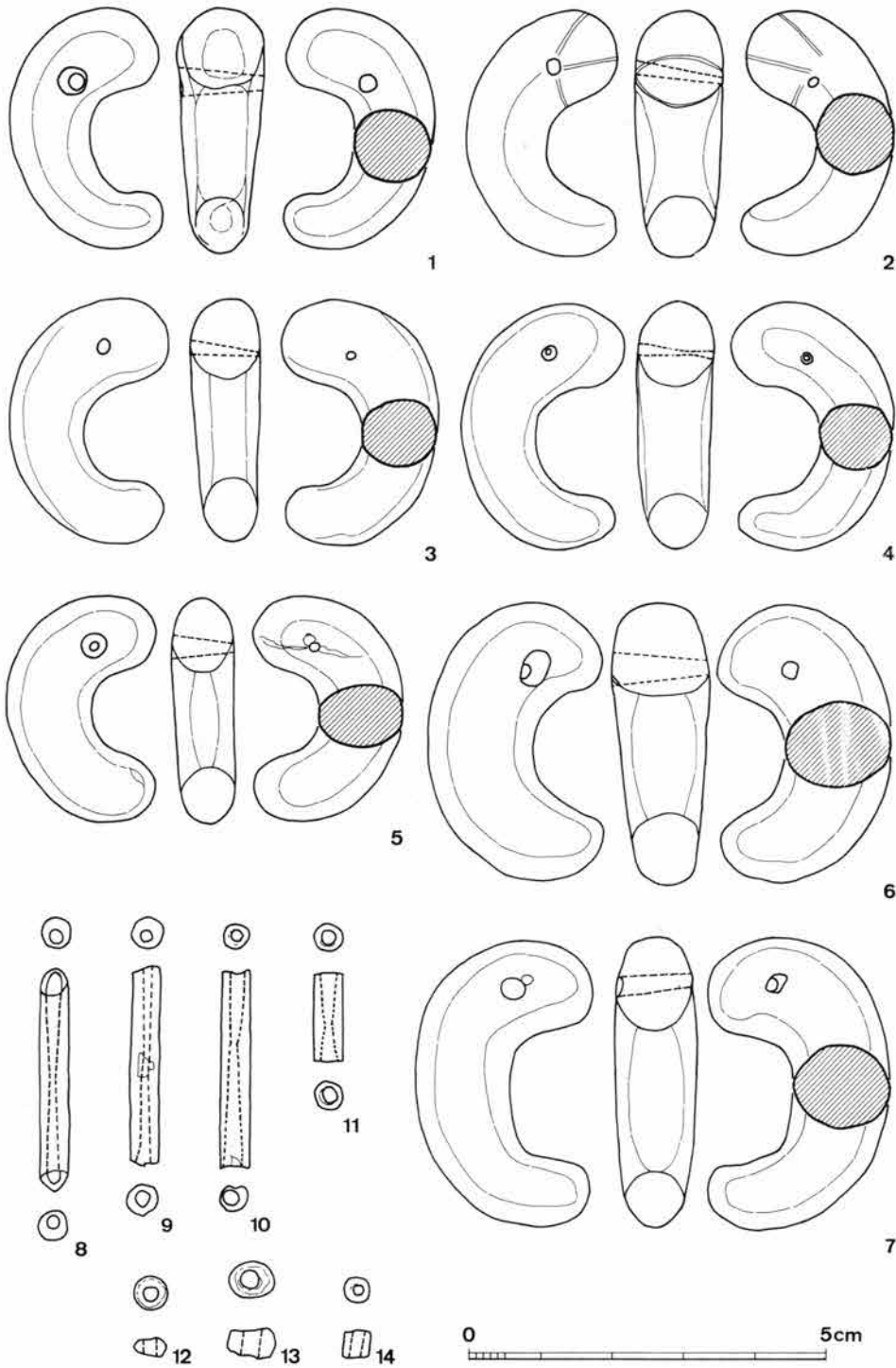
8～10は、淡緑色の流紋岩質凝灰岩である。他のものは、風化が著しく取り上げができなかったものもある。11は、濃緑色の流紋岩質溶結凝灰岩で、この材質の管玉は、1点のみ出土している。ガラス小玉は、計7点が出土した。白玉は、短甲内から165点が出土している。

櫛(第42図) 出土した9点中、7点を図化した。いずれも通常の竖櫛である。第1主体部のもと同様に、ムネ幅1cm前後の小型品と、ムネ幅2cm前後の中型品に分類可能である。数的には、後者の方が多い。(鍋田)

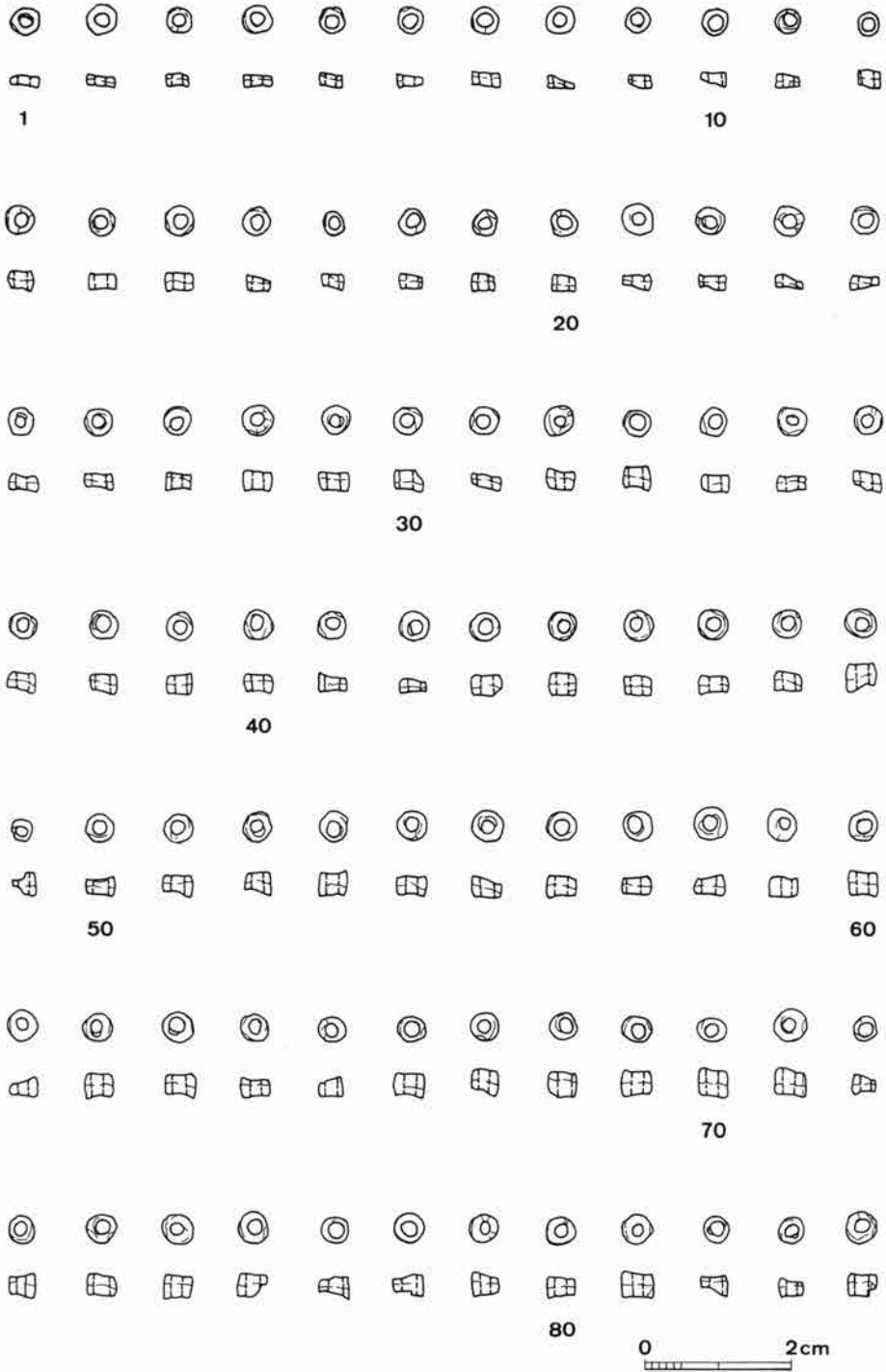
(4) 第3主体部

A. 主体部の構造

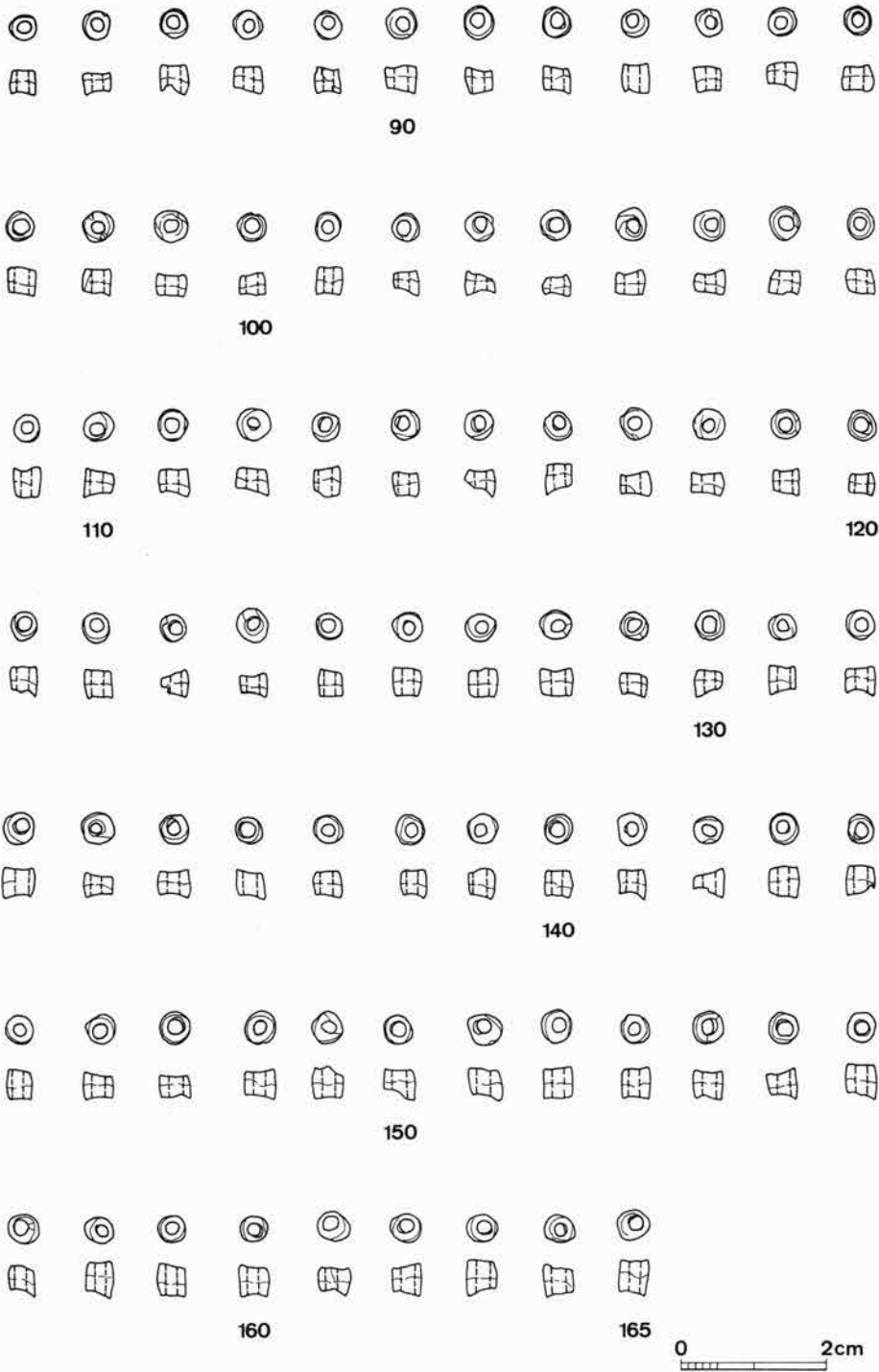
第3主体部は、長軸を南北方向にとる隅丸長方形の土壇であり、第1・第2主体部とは、著しく形状・構造を異にしている。



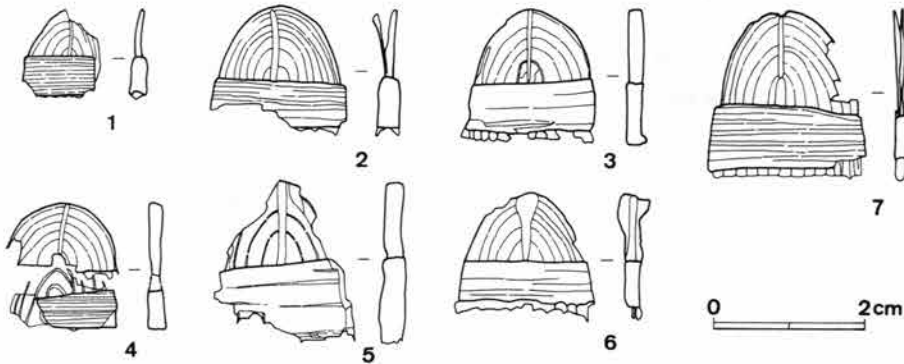
第39図 第2主体部出土玉類実測図 (Scale=1/1)



第40図 第2主体部出土白玉実測図 (1) (Scale=1/1)



第41図 第2主体部出土白玉実測図 (2) (Scale=1/1)



第42図 第2主体部出土竖櫛実測図(Scale=1/1)

土壙の規模は、長軸2.4m・短軸1.0mを測るが、深さは、検出面から約5cmときわめて浅い。これは、第1節で記したように、土壙を検出するまでの状況および土層の観察から、土壙の上部は、第1主体部の築造時に大部分を削平されたためと考えられる。

棺の構造については、土壙の床面において棺の痕跡は確認できていないため、不明と言わざるを得ない。また、実際に遺体が埋葬されたのか疑わしい点もあるが、土壙の大きさからみれば、一人分の人体埋葬は十分に可能なスペースをもつことから、現段階では、木棺直葬の埋葬主体部として考えておきたい。また、調査経過で記したように主体部の検出途中、上層で1点だけ出土した勾玉がこの第3主体部にともなう可能性が高いこともその傍証として加えることができよう。

なお、この施設を第2主体部に付随した副葬品の埋納土坑ととらえることも可能ではあるが、土坑内に空きスペースがありすぎる点、そして後述するように遺物の内容が質的、数量的に貧弱であることなど、消極的な理由ながらここでは否定しておきたい。

B. 副葬品の出土状況

第3主体部から出土した遺物は、鉄製農工具類(鍬先2・鎌2・斧1・鉋1・刀子1)、鉄鎌41、漆膜(矢柄?)、鞆口金具?1である。

第4表 第3主体部出土遺物構成表

土坑内	— 武器類	— 鉄鎌41
		— 矢柄(漆膜のみ遺存)
		— 鞆口金具?1
	— 農工具類	— 鍬先2
		— 鎌2
		— 斧1
		— 鉋1
		— 刀子1

遺物は、大きくは2群に配置されている。土坑北側の農工具類の1群と、南側の鉄鎌の1群である。農工具類は、0.4m×0.3mの範囲内にまとめられており、いずれも木質が遺存していることから、柄を装着した状態で副葬されていたことがわかる。斧・鉈以外はミニチュア化したものである。第2主体部と同様に、農工具類の配置に特に規則性は見いだせず、また、容器に入れられていたような状態も確認できない。

南側の鉄鎌の1群は、2つの束に分かれていたため、さらに北群(20本)と南群(21本)に区別できる。これらは、それぞれの切っ先が反対方向を向くように配置されている。南北の鉄鎌群は、いずれも1本1本の鉄鎌が平行に並ぶのではなく、切っ先方向にむけて広がるような配置であるため、矢の中央付近で束ねられていたことが推定される。

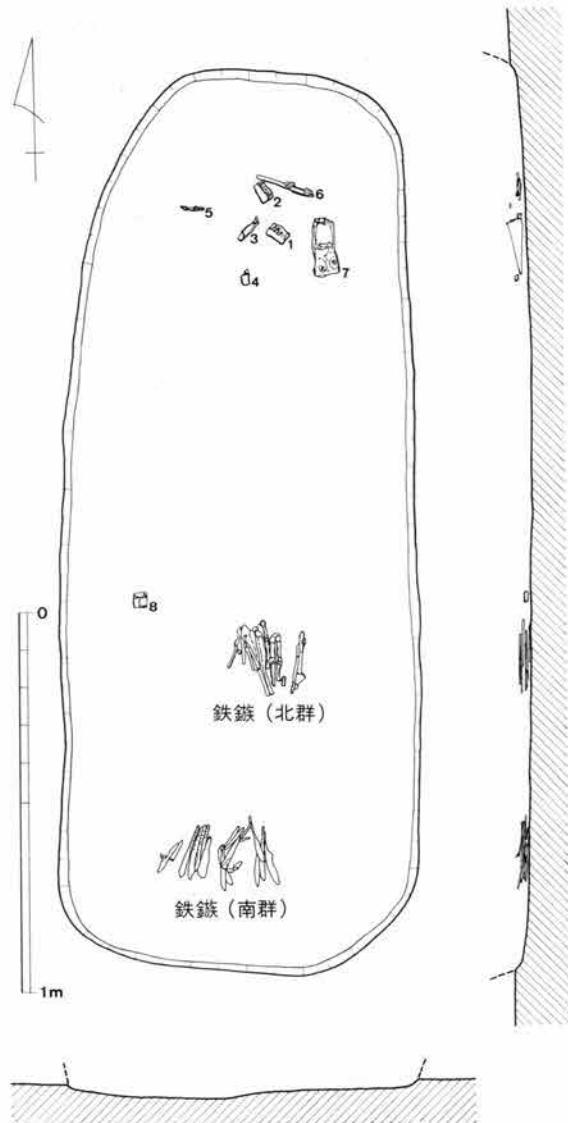
また、鉄鎌の上部には一部矢柄と思われる漆膜が遺存しており、矢羽の部分が反対側の鎌の切っ先とはほぼ等しい位置にあったと考え、矢の全長は約70cmと推定可能である。

鞘口金具は、北群の鉄鎌から西側へ約25cm離れた場所から単独で出土した。刀の鞘口金具と思われるが、刀身は出土していない。

C. 副葬品の観察

鉄鎌 北群20本(第44図)、南群21本(第45図)のすべてを図化した。

北群は、長頸鎌祖形型式と考えられるもので、鎌身部の関部ははっきりとはせず、鎌身



第43図 第3主体部遺物出土状況図
(遺物の番号は実測図と対応)

から関部への移行がゆるやかに行われるものである。全体的に細身のプロポーショナルであり、鎌身部の幅は、1.0~1.2cm、関部までの長さは、2・12・16・17を除き、7.8cmを測る。鎌身は、片丸造りである。矢柄の遺存状態も良好である。

南群は、柳葉鎌の影響を受けた長三角形鎌もしくは長頸鎌の祖形形式と考えられるもので、北群に比べてやや鎌身の幅が広く、鎌身部の関部を有する点に特徴がある。鎌身部の幅は、1.2~1.8cm、鎌身部長さ5~6cm、頸部長さ2cm前後を測る。鎌身は、17点中15点が両丸造りで残りは片丸造りである。2・16・17は、全体のプロポーショナルとしては、北群のタイプに属するが、鎌身が両丸造りという点で異なっている。

農工具類(第46図1~7)

〈鍬(鋤)先〉 1・2は、方形鉄板を左右から折り返した鍬・鋤先であり、第2主体部出土の横長タイプである。1は縦3.0cm・横(刃部幅)5.0cm、2は縦3.2cm・横(刃部幅)5.6cmを測り、縦横の比率では第2主体部出土のものよりもさらに横長になっている。また、いずれも柄の木質が遺存しており、柄を装着した状態での副葬であったと思われる。

〈鎌〉 3・4は、直刃鎌である。3は、完存で全長7.5cm・幅1.9cm・厚さ0.2cmを測る。柄の装着基部は、約0.4cmを短辺に沿って折り曲げてあり、柄は、刃に対して直角に装着される。4は、先端付近のみが残っているもので、刃部幅1.6cmを測る。

〈斧〉 7は、全長14.8cmを測る袋状鉄斧である。明らかに実用の製品であり、第2主体部出土の鉄斧と比較すればその差は歴然としている。袋部内には、木質が遺存しているが、本体と区別がつかないほど錆化が著しい。

〈鉈〉 6は、刃部先端を欠損しているが、全体の遺存状況は良好である。現存長14.8cm・刃部最大幅1.0cm・柄部幅0.8cmを測る。刃部は鑄を有し、約30°の反りをもつ。柄の装着方法および全体の形状は第2主体部出土のものとはほぼ同一である。

〈刀子〉 5は、全長6.3cm・刃部長4.2cm・茎部長2.1cm、刃部中央部幅0.9cm・茎中央部幅0.6cmを測る。大きさ・形状とも第2主体部出土の刀子と類似する。

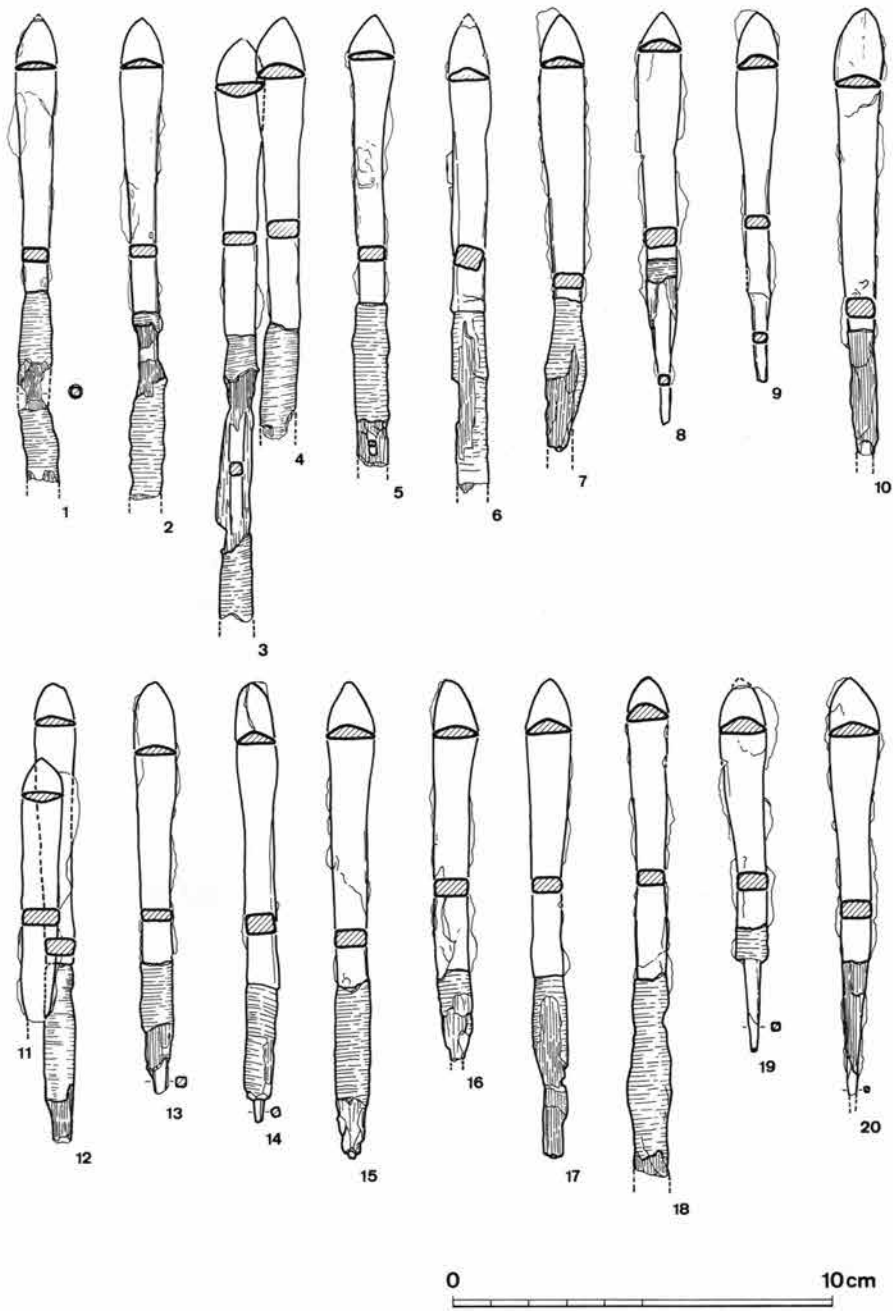
その他(第46図8) 平面形で長さ2.2cm・幅3.0cmの中空の鉄製金具である。断面形から判断して刀に付随するものと考えられ、内面に木質が遺存していることから、刀の鞘口金具の可能性が考えられる。(鍋田)

6. 小 結

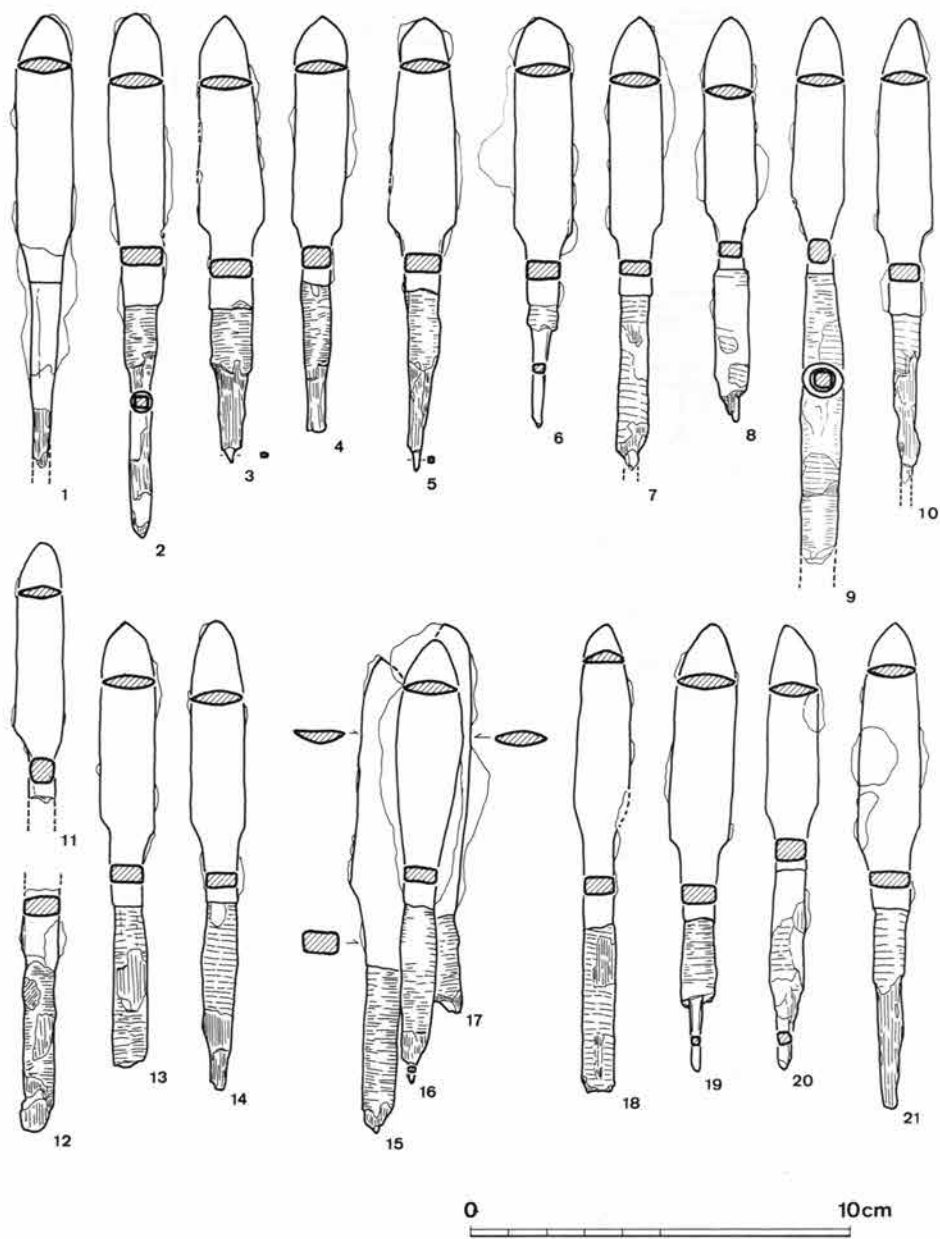
私市円山古墳の発掘調査の概要を報告したが、以下、調査成果に関し簡略にまとめる。

(1) 墳丘

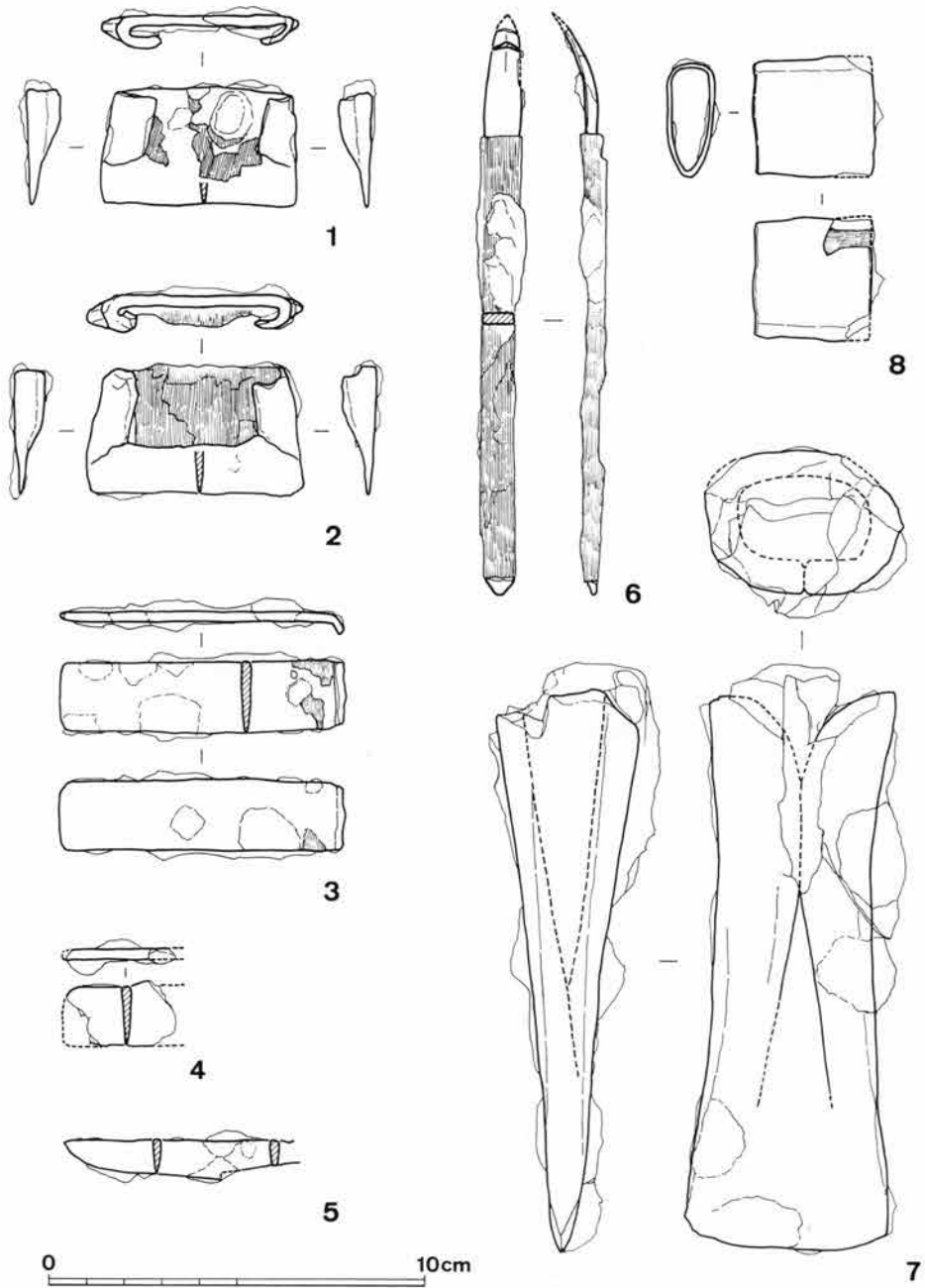
今回の調査で私市円山古墳は、円丘径71m、造り出しを含めた全長81mを測る、京都府



第44図 第3主体部出土鉄鏃(北群)実測図(Scale=1/2)



第45図 第3主体部出土鉄鍬(南群)実測図 (Scale=1/2)



第46図 第3主体部出土農工具実測図 (Scale=1/2)

内では最大規模の円墳であることが判明した。墳丘は、葦石・埴輪列とも遺存状況は比較的良好であり、築造当初の姿を窺い知ることが可能である。この古墳の墳丘規模の大きさ、多量の葦石と埴輪の存在は、中丹地域のなかでは最大の労働力が投下され、築造された古墳であることを示している。

(2)出土遺物

第1・第2主体部から出土した、武具・武器・鏡・玉類などの豊富な副葬品は、政治的・軍事的にこの地域を支配した被葬者の性格を如実に表わすものである。

個々の遺物では、短甲・冑、胡録金具をはじめとする武具類は、遺存状況が良好であり、それ自身において資料的価値の高いものである。以下では、この古墳から出土した遺物のなかでも、被葬者の性格や古墳築造時期を探る上で重要な要素となるものについて取り上げ、それぞれの遺物のもつ意味や問題点の整理を行いたい。

甲冑 甲冑は第1主体部、第2主体部からそれぞれ1領ずつが出土した。このことは、それぞれの甲冑が個人所有であったことを示していると考えられる。第1主体部出土の甲冑と第2主体部のそれを比較した場合、いずれも三角板革綴短甲ではあるが、後者は、前胴竪上第2段に三角板を使用していないなど、形式的にわずかながら新しい要素が認められる。この点は、第2主体部→第1主体部の築造順位と矛盾する結果となるが、両型式が存在した時期に行われたことを示していると思われる。さらに、後者が、短甲と冑で構成されるのに対し、前者は、さらに短甲の付属具および草摺を備えた武具一式である点が注目される。

さて、旧丹波国の範囲において甲冑を保有する古墳は、これまでに数例が知られるにすぎず、また、断片資料も多いことから、不明な点が多い。そのなかで、京都府弥栄町ニゴレ^(注18)古墳、同綾部市聖塚古墳、そして、兵庫県篠山町雲部車塚古墳の三例は注目される。この古墳と聖塚古墳およびニゴレ古墳の短甲がいずれも三角板革綴短甲で、なおかつ1領ずつの保有であることは、それぞれの被葬者に対してほぼ同時期に配布が行われたことを示し、当該時期の丹波在地首長に対する畿内政権の政策の一端として捉えることが可能かもしれない。例えば、旧丹波国を現在の丹後と丹波地域として考えた場合、古墳時代前期から大前方後円墳を築き得た、いわば旧来の伝統をもつ丹後地域に対し、新興の勢力ともいえる丹波地域については、限られた資料とはいえ、丹後と同等、もしくはそれ以上の扱いをしていることが窺えるのである。

さらに推測を進めれば、これらの古墳被葬者に対する短甲の配布は、雲部車塚の被葬者を介在として行われた可能性も指摘できる。雲部車塚は、全長140mの前方後円墳で、内部主体に長持形石棺をもつきわめて畿内的な古墳であり、石室内から8領の短甲が出土して

いる。形式的には、横刃板鋌留短甲を含み、藤田編年の7期に属するが4期まで遡る短甲を有していたことも示唆されている。雲部車塚の築造年代が先述の3古墳よりもやや下がるとしても、その被葬者が丹波地域での支配体制を確立した時期を勘案すると、畿内政権から安定した武具の供給を受けていた雲部の被葬者が、型式としては旧式の三角板革綴短甲を在地の有力首長に配布したという想定も可能であろう。

以上のように、資料的制約が大きいとはいえ、甲冑の保有形態から考えると、大枠において旧丹波国の範囲では、前期の丹後地域主導型から、中期には、雲部車塚の被葬者を頂点とする丹波地域主導型の政治体制へと移行していったようすを知ることができるものと思われる。

胡籙金具 胡籙金具の研究は、近年、広範囲にわたる資料の収集と総合的な評価が行われ、着実に研究成果が進展しつつある。なかでも、田中新史・早乙女雅博両氏の意欲的な研究は、高く評価される。^(注19)以下、田中氏の研究成果を援用する。

田中氏は、5～6世紀に使用される胡籙金具を、形態的に分類したのち、I～X期に編年し、各時期における金具の形態変化とその背景について言及している。

当古墳出土の胡籙金具は、形態・材質とも全く同一のものは出土例がないが、形態的には、BIb(1対式中円部造り出し形吊手飾金具)とBV(「コ」字形飾金具)に分類され、時期的には、吊手飾金具が3枚構成であることと、鉄地金銅張製品であることなどの特徴から、II～III期に対応するものと考えられる。すなわち、この胡籙金具は、材質に鉄地金銅張という新しい要素をもちつつも、形態的には、きわめて高い装飾性を有するものであり、国内で胡籙の生産を開始した初期段階の製品と考えられよう。

なお、田中氏の指摘にもあるように、当該時期の胡籙金具を有する古墳(福井市天神山7号墳、千葉県内裏塚古墳、福岡県月の岡古墳等)が畿内から離れた地域の有力古墳であることは特に注目すべき問題であり、こうした古墳との関連も注意される。

鉄鏃 鉄鏃は第1～3主体部のいずれからも出土した唯一の遺物であり、3者の築造順位を知るうえで、また、他の古墳との比較資料として有力なものである。

まず、各主体部から出土した鉄鏃の型式を整理すると次のようになる(第47図参照)。

〔A〕 鏃身部に関を有し、鏃身部と頸部の区別が比較的明瞭なもの

鏃身部長>頸部長…第3主体部南群 (A-a)

鏃身部長≒頸部長…第2主体部Aタイプ (A-b)

〔B〕 全体的に細身のプロポーションで鏃身部から頸部へゆるやかに移行するもの

第3主体部北群、第2主体部Bタイプ、第1主体部

〔C〕 両者の中間に位置づけられるもの

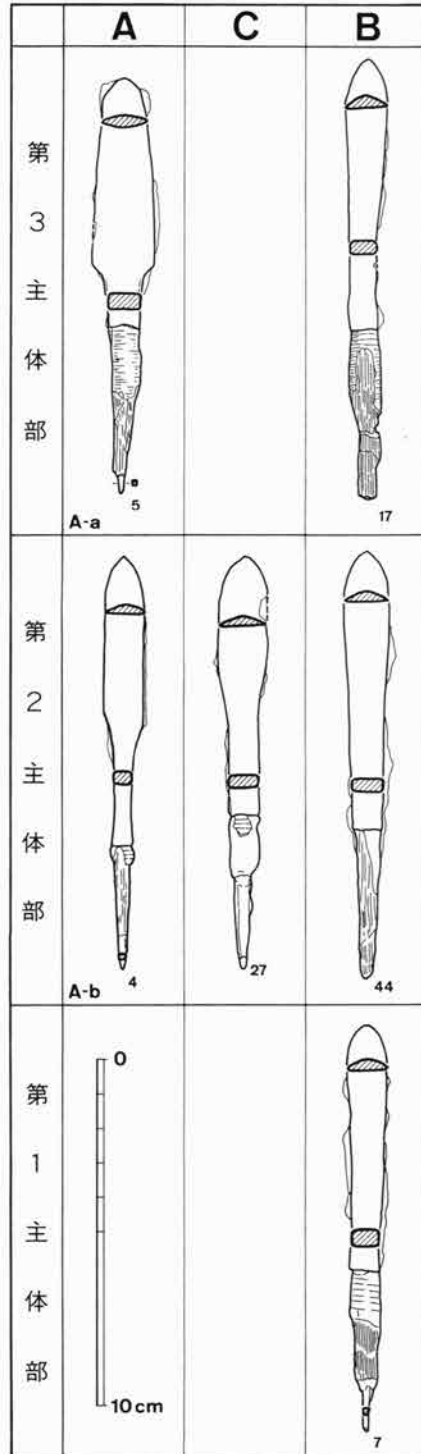
第2主体部Cタイプ

すでに記したように、Aは柳葉鉄の影響を受け、長三角形タイプの鉄身を有するもので、後のいわゆる長頸鉄の祖形として考えられる。Bもまた長頸鉄の祖形としてとらえることが可能である。時期的には、いずれも長頸鉄の出現直前の様相をもつといえるが、当該時期の古墳としては、形式的に多種類の鉄鉄を含まず、比較的シンプルな構成であることが特徴的である。

それでは、各鉄鉄の形式的な変化と主体部間の関係について具体的にみてみよう。Aの鉄鉄は、第2主体部と第3主体部から出土しているが、両者には、鉄身部長と頸部長の比に明らかな差があり、前者をA-a、後者をA-bとして区別した。形式的な変化として頸部の長大化を認めるならば、A-a→A-bという変遷を考えることができる。

Bの鉄鉄は、第1～3主体部のいずれからも出土しており、各主体部間に形式的な差は、見い出せない。なお、第1主体部からは、Bの鉄鉄しか出土していないため、これを型式の簡素化としてとらえた場合、第2・3主体部に後出するものと考えられる。また、中間型式としたCが、第2主体部からのみ出土していることを重視すれば、Aの鉄鉄は、A-a→A-bという変化をとげたのち、Cを経て、Bに集約された可能性も考え得る。

以上の点を総合すると、各主体部出土の鉄鉄でみるかぎり、第3→第2→第1主体部という変遷をたどることができる。第2→第1



第47図 各主体部出土の鉄鉄型式

主体部への流れは、他の知見とも矛盾しないため特に問題はないが、第3および第2主体部との関係については若干の疑問が残る。すなわち、当古墳は中心主体である第2主体部被葬者を埋葬するために築造されたことは明らかであり、第3主体部が第2主体部に先行して作られたことは考えられないためである。この理解にたてば、鉄鎌のA-a→A-bという型式的な変化は認めつつも、時期的な差としては過大評価すべきではなく、両者は実態としては並存する時期が存在していたとするのが最も妥当な解釈といえよう。

(3)築造年代

この古墳では、既掘されていなかったため、各遺物のセット関係を正確に把握できる点が重視され、築造年代を知る有力な手がかりとなる。

第2主体部では、三角板革綴短甲・三角板革綴衝角付冑と方形の形態をもつ鍬先・直刃鎌の組み合わせ、第1主体部では、三角板革綴短甲・三角板革綴衝角付冑および付属具と胡籙金具の組み合わせ、さらに、これらの主体部内出土遺物とB種ヨコハケを有する硬質埴輪との共存など、他古墳との比較の上でも重要なものである。

出土遺物からみると、主体部出土の遺物が中期の中でもやや古い様相をもち、墳丘の埴輪がやや新しい様相をもつといえる。こうした点から、古墳の築造時期は、古墳時代中期中頃(5世紀中葉)前後と考えておきたい。

各主体部については、第1主体部の埋土内に埴輪が含まれていること、第2・第3主体部の上部が削平されていることなどから、第2主体部→第3主体部→第1主体部の築造順位が考えられる。しかし、出土遺物の型式に顕著な差は認められないことから、比較的短期間のうちに続けて営まれたものと考えられる。

(4)主体部

第1主体部と第2主体部は、ともに東西方向に主軸をとり、墓壙の構造・規模も類似したものである。副葬品の配置からは、いずれも東に頭位を向けた1体の埋葬であることが推測される。この両主体部を比較すると、副葬品の配置に共通する要素としない要素とが存在していることがわかる。共通する要素は、短甲をはじめとする武具・武器類の配置であり、しない要素は、鏡・玉の儀礼的要素の強い遺物の配置である。

第1、第2主体部における武器・武具の副葬位置が、棺内の同一場所であることは、第1主体部被葬者の葬送儀礼中、副葬品の埋納過程、少なくとも武具武器については、第2主体部のそれが忠実にトレースされていることを物語っている。これに対して、第2主体部でみられた頭部付近の玉類、胸部付近の鏡については、第1主体部では甲冑とともに被葬者の足元側に置かれており、これらの副葬品に対する取り扱いに変化がみられる。これは、ある意味で、鏡や玉などの儀礼的遺物の重要性が第1主体部の段階では相対的に軽減

したことを示しているのかもしれない。

しかし、全体としては、第1主体部の被葬者埋葬時には、第2主体部とはほぼ同様の埋葬過程を経ているといえ、第2主体部の被葬者の葬送儀礼で、第1主体部被葬者へと受け継がれた首長権は、再び、同種の儀礼を通じて、新たな首長へと引き継がれたとの想定が可能であろう。

(5)私市円山古墳築造の意義

中丹地域は、古墳時代前期から中期にかけて弥生墳墓的な方墳が築造されたのち、定形化した方墳へと推移し、中期には、綾部市菖蒲塚古墳・聖塚古墳・福知山市妙見1号墳などの方墳がこの地域の首長墓として築造されるなど、この時期までは特徴的な古墳文化を形成している。その後、首長墓の系譜は、小規模ながらも前方後円墳へと受け継がれてい^(注20)く。この古墳は、在地的な要素としての方墳の形態をもたず、円墳の形態をとることで従^(注21)来の首長墓と一線を画している。そしてその時期は、首長墓が方墳から前方後円墳へ様変わりする時期にあたり、この古墳の築造を契機として中丹地域の古墳文化に大きな変革があ^(注22)ったことを示している。すなわち、この時期を境にして、畿内との結びつきが急速に強くなったことが想定される。私市円山古墳の築造は、地域全体の動向を大きく変革するほどの意味をもっていたと考えられよう。

なお、この地域では、部を有する地名が多く、また、この古墳も私市という地名の場所^(注23)に築造されていることなど、畿内との関連を考えるうえで重要な問題である。

以上、当古墳築造に関わる問題についてみてきたが、十分な考察までは至っていないのが実情であり、多くの人々からの御教示を生かしきれなかったことをお詫びしたい。山積する問題点については、今後の課題として取り組んでいきたい。(鍋田)

注1 『京都府遺跡地図』第2冊(京都府教育委員会 1987),『綾部市史』上巻(綾部市史編纂委員会 1976),『日本の古代遺跡』27 京都I(保育社 1986),『丹波の古墳』I(山城考古学研究会 1983),『綾部市文化財調査報告』各集(綾部市教育委員会)等

注2 鍋田 勇「私市円山経塚の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第28号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 和田晴吾他『鳴谷東1号墳第1次発掘調査概報』(『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第1冊 立命館大学文学部) 1987

注4 葺石の石材は、大部分がチャートで占められ、由良川から運ばれたものと推定できるが、採取場所の特定までには至っていない。個々の石材鑑定の詳細については、京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏により、別稿にて掲載の予定である。また、橋本氏には、短甲・鏡などの取り上げの際たいへんお世話になった。

注5 鍋田 勇「私市円山古墳出土の円筒埴輪」(『京都府埋蔵文化財情報』第33号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989 参照

注6 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2) 1978

- 注7 柳本照男他『大塚古墳』（『豊中市文化財調査報告』第20集 豊中市教育委員会）1987
- 注8 鍋田 勇「私市円山古墳出土の甲冑」（『京都府埋蔵文化財情報』第32号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1989 参照
- 注9 藤田和尊「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」（『橿原考古学研究所論集』第8）1988。なお、藤田氏からは、2枚の引合板をもつⅡ類頸甲について、古相を示すのではなく、ある程度の定型化を経た後に、材料の制約や失敗などに起因して表われたのではないかとの御教示を得た。
- 注10 鍋田 勇・石崎善久「私市円山古墳出土の胡籙金具」（『京都府埋蔵文化財情報』第31号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1989 参照
- 注11 鉄鏃の形式認定については、下記の論文を特に参照した。
杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」（『橿原考古学研究所論集』第8）1988
- 注12 玉類の石材鑑定については、奥田 尚氏に多く御教授いただいた。記して感謝いたします。
- 注13 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上・下)」（『考古学研究』20-4, 21-2）1974
- 注14 野上文助「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上」（『考古学研究』21-4）1975
- 注15 寺沢知子「鉄製農具副葬の意義」（『橿原考古学研究所論集』第4 1979）では、前期古墳を中心に、副葬された鉄製農具がもつ諸要素を検討することにより古墳の類型化を試み、農具副葬の意義について言及している。氏の分類をそのままあてはめると、この古墳はⅠa型に属し、前期において、定形化した大型前方後円墳を中心にみられる農具の副葬状況と共通している点が注目される。この古墳では、各個体ともミニチュア化しているが、同氏の指摘にもあるように、農具自身のもつ本質的な性格は、ミニチュア化によって大きく変質するものではなく、その点で、これらの農具の存在は、この古墳の被葬者像を知る上で重要な手がかりといえる。なお、Ⅰa型の古墳のうち、一墳多葬のものでは、中心主体にのみ農具が副葬されているという点は、この古墳においてもあてはまることを記しておく。農具に関わる問題については、別稿において詳細にふれることにしたい。
- 注16 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』（岩波書店 1989）第1章
- 注17 樋口隆康『古鏡』（新潮社）1979
- 注18 西谷真治・置田雅昭『ニゴレ古墳』（弥栄町教育委員会）1988
- 注19 田中新史「古墳出土の胡籙・靱金具」（『弥生・古墳時代資料図録』井上コレクション 言叢社）1988
早乙女雅博「古代東アジアの盛矢具」（『東京国立博物館紀要』第23号）1988.3
- 注20 常盤井智行「由良川中流域の古墳の動向」（『丹波の古墳Ⅰ・由良川中流域の古墳』山城考古学研究会）1983
平良泰久「方墳二態」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
奥村清一郎「大堰川水系における前・中期古墳の動向」（日野昭博士 還暦記念論集『歴史と伝承』）1988
- 注21 私市円山古墳の被葬者については、平成元年3月26日に綾部市中丹文化会館にて行われたシンポジウムでは、在地の有力首長であるとする見解が大勢を占めた。
- 注22 一例として、私市円山古墳で採用された埴輪は、以後の埴輪に多大な影響を与えている。
鍋田 勇「中丹地域における埴輪祭祀の展開」（『史想』22号 京都教育大学考古学研究会）1989
- 注23 この古墳の所在する場所が「私市」の地名を有することは、注目に値する。私部の設置は、『日本書紀』敏達6年条に記されており、この古墳の築造時期とは大きなずれがあるため、直接的な関連が想定されるわけではないが、私部設置の背景にこの地域と大和王権との密接なつながり

りが存在するとするならば、少なくともその関係を有するに至った時期をこの古墳の築造年代頃まで遡らせて考えることができるのではないだろうか。なお、丹波・丹後地域における私部については、磯野浩光「古代丹波・丹後の居住氏族について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987 においてその存在が注目されている。

付記 末筆となりましたが、私市円山古墳の発掘調査にあたっては、次の方々に現地での作業および遺物の整理に携わっていただきました。厚く御礼申し上げます(順不同、敬称略)。

橋本 稔・品田俊治・石崎善久・森美智子・高野陽子・松田浩二・遠藤ひと美・大崎康文・松室孝樹・国重和江・池田純子・武内かおり・西世津子・斎藤 優・中前幸子・林日佐子・田鶴谷京・平松久和・大西智也・川勝 修・石田雅晃・平田 裕・山口浩章・今川二郎・山本正敏・組藤敦史・飛田浩一・吉田 浩・吉田隆志・板倉礼子・市野瀬正美・横山憲一・山本美雪・重松麻里子・平野仁佳子・四野宮洋子・岡田留美・山口陽一郎・春名 浩・四方洋行・大槻哲也・大島 聡・植野一明・今村明子・大島多賀子・四方純子・伊勢田恵美子・村上千秋・荻野ツヤ子・村上綾子・河野朋子・谷畑聖子・田口直子・山本シズ子・和田正子・丹新千晶・大島淳二・大志万栄・永井保治・坪内 勇・森本武司・新田行雄・赤井克巳・清水 清・塩見敏夫・荻野秀男・川北依夫・中川 敏・野澤政次・野澤久代・高山敏子・高山良子・高山和恵・上原みさ乃・上原さつき・上原 葉・大島ふさ子・大島みさ子・大島道子・大島雪枝・森本としゑ・森本節子・森本照子・大槻昭子・田中悦子・山崎寿美枝・村上京子・四方みち子・塩見鈴江・植原幸江・森方鶴江

また、発掘調査から遺物整理の全期間を通じて非常に多くの方々から、御協力・御支援・御指導を賜りました。記して、謝意を表します(順不同、敬称略)。

樋口隆康・中沢圭二・佐原 眞・都出比呂志・森 浩一・和田晴吾・福永伸哉・川西宏幸・北野耕平・小林謙一・石野博信・吉村和昭・白石太一郎・早乙女雅博・柳本照男・和田 萃・藤田和尊・奥田 尚・新納 泉・伊藤秋男

(2) 三宅遺跡

1. 調査経過

三宅遺跡は、以久田野丘陵の西端部を流れる犀川左岸の河岸段丘上(海拔約35m)にあり、古墳時代～奈良時代にかけての集落跡と推定されている。この段丘上には、三宅遺跡の北に館遺跡、南に長砂遺跡の2遺跡が近接して存在している。三宅遺跡西端部の微高地上には9基前後の円墳からなる三宅古墳群が存在し、対する東部の以久田野丘陵上には多数の古墳群(以久田野古墳群)が築かれている。

調査対象地は三宅遺跡の北端部に位置し、近畿自動車線のルートが全長約150m・幅約70mの範囲で段丘部を横断している。段丘西端部の微高地上には茶園が営まれ、三宅4号墳(62年度調査)が存在する。この微高地は東部の水田面に対し、約1mの比高差を測る。

三宅遺跡の発掘調査は、前年度に南部地区の第Ⅰ～第Ⅲ・第Ⅴ調査区で発掘調査(第1次調査)を実施している。第1次調査では、主な遺構として弥生時代中期の方形周溝墓・古墳時代初頭の土坑群・古墳時代後期の円墳周溝と竪穴式住居跡等を検出している。これらの遺構のうち、方形周溝墓・円墳周溝・竪穴式住居跡は調査地の中でも比較的高所で検出している。古墳時代初頭の土坑は低地に群集しており、その総数は336基にのぼる。

今年度の調査(第2次調査)は、北部地区の第Ⅱ・第Ⅳ・第Ⅵ調査区が対象となった。なお、第Ⅱ調査区の南半は第1次調査で調査を終了しており、今回は残る北半部の調査となった。

2. 遺構と遺物

第Ⅱ調査区 この調査区は西部の微高地部分に設けた調査区である。第Ⅱ調査区の北部には農道が斜めに横断し、この農道から南側の畑地が第1次調査、北側の水田が今年度調査となった。

第1次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓・三宅10～12号墳に伴う周溝・埋葬主体部のほか、時期不明の土坑・ピット等を検出している。

今年度調査地では耕作土直下に洪積層と砂質土層(地山層)が広がり、この地山を切り込む各時期の遺構を検出した。検出した遺構のうち代表的なものとして、弥生時代と推定する方形周溝墓、古墳時代後期の円墳に伴う周溝、鎌倉時代の溝等が挙げられる。

弥生時代の遺構として、調査地北端部で直角に曲がる幅約50cmの浅い溝(SD15)と土壇(SK04)を検出した。これらの遺構は、第1次調査で検出した方形周溝墓に続くと思われる、



第48図 調査地位置図

それぞれ周溝と埋葬主体部と判断する。この遺構に伴う遺物の出土は見られない。

古墳時代の遺構として、新たに1基の円墳痕跡(三宅13号墳)を検出したほか、三宅4号墳に伴う溝SD16を検出した。三宅13号墳は調査地北端に存在し、段丘の縁辺部に位置する。古墳の東側に浅い溝が存在し、南側では溝の続きとみられる地下水中のマンガンを吸着した段丘礫が円弧を描いて存在した。このような状況から、他の古墳と同様に周溝を持つ円墳と考え、この三宅13号墳の直径はおよそ14mと推定する。

調査地西端では、段丘下降斜面と三宅4号墳に伴う溝を検出した。検出した溝SD16は墳丘の全周に掘られたものではなく、墳丘の東側にのみ存在することから、段丘斜面からの切り離しを意識したものと判断する。溝幅は最も狭い地点で約3mを測り、溝底は、北に向かい下降する。溝底付近から中世遺物に混じり、古墳時代後期の須恵器が少量出土した。

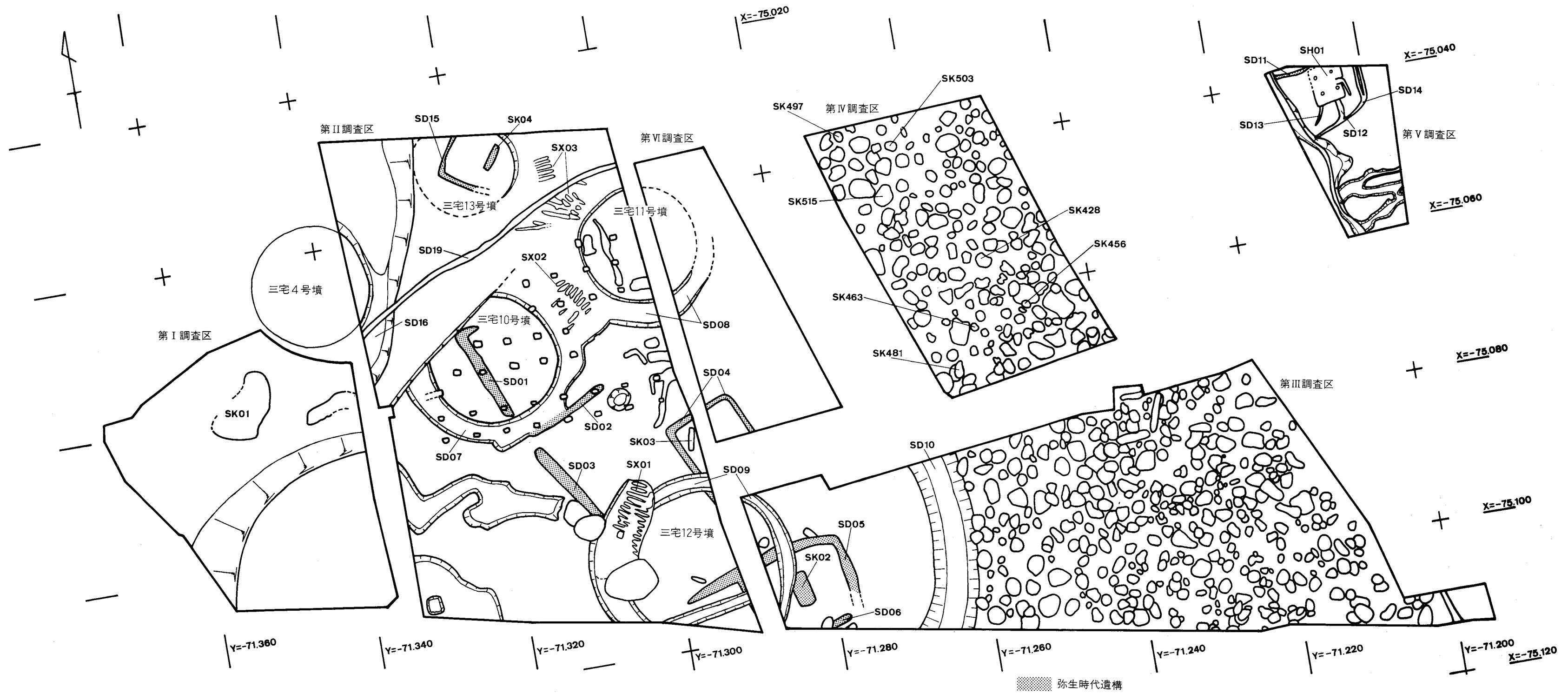
古墳時代以降の遺構として、鎌倉時代に属する溝SD19と、畑地とみられる畝状遺構SX03を検出している。溝SD19は、幅約60cm・深さ約25cmの浅い溝であり、調査区北部を斜めに横断している。溝内から瓦器碗等の土器が出土している。

畝状遺構は第1次調査分と同様に、古墳の周溝部に存在している。畝状遺構は、古墳の周溝に対して直交し、畝と溝が連続して存在する。畝と溝はそれぞれ約30cmの幅で4m前後の長さを測る。

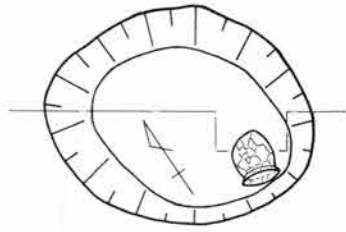
第IV調査区 この調査区は、第1次調査で多数の土坑を検出した、第III調査区の北側に設けた調査区である。この調査区では、全域から第III調査区と同様な土坑を多数検出した。検出した土坑は、大小あわせて216基をかぞえる。調査区内の地山面は、東北から西南方向になだらかに下がる傾斜を持ち、地山の土質は黄色粘土であるが、土坑検出面では砂質分が強い傾向にある。

土坑の分布状況では、重複して切り合う例は少なく、それぞれが単独で存在するものが多い。土坑の形状は一様でなく、平面形は方形・円形・楕円形・不定形に大別できる。また、規模においても大きささまざまな土坑が存在する。土坑のうち、最大規模の土坑には長軸約4.5m・短軸約2.5mを測るものがあり、対する小形の土坑には直径約60cm前後のものも存在する。土坑の深さも40~90cmとまちまちであり、土坑底の形状も不整形なままで終わる例が多い。土坑内の埋土は、地山と同じく粘土質であるが、各土坑間にはいくつかの埋土パターンが認められる。土坑埋土には、暗灰色シルト系、粘土層間にシルト層を含むもの、茶褐色・黄色粘土がブロック状に入るもの等に分けられる。

これらの土坑の内、約7割の土坑内から土器が出土している。出土土器は、第51図1~5に代表される古式土師器である。破片が大多数であるが、完形品および完形に近い土器もみられる。土坑内には土器のほか、板材が出土する例もある。遺物の出土状況として、

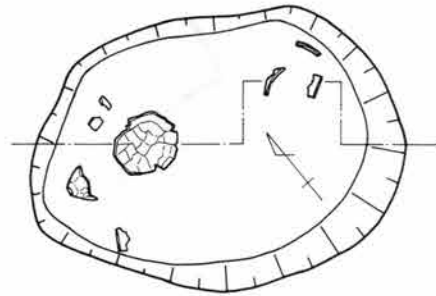
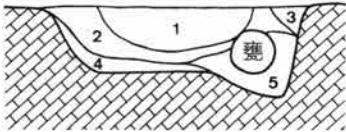


第49図 調査区平面図



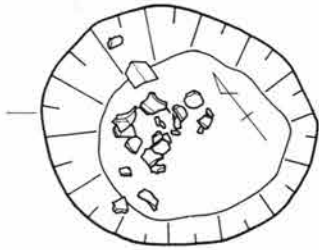
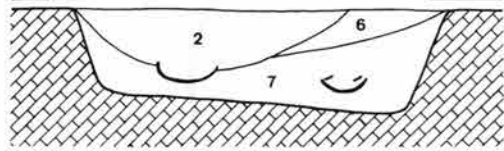
SK497

L 35 3m



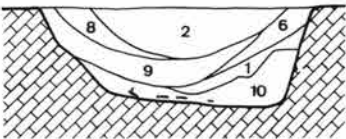
SK428

L 35 2m

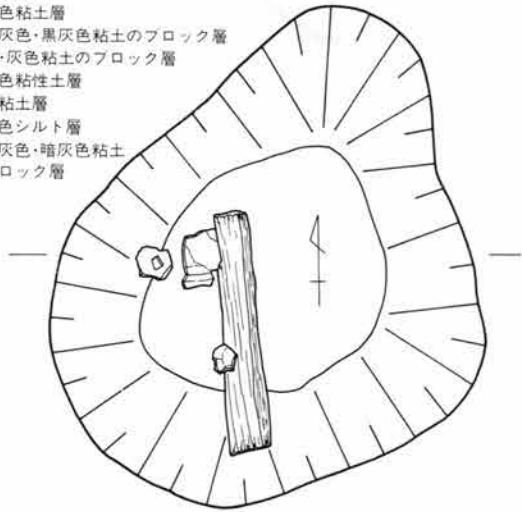


SK503

L 35 4m

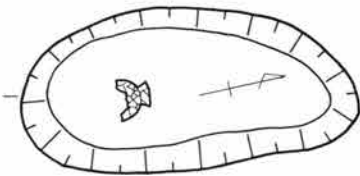


1. 黄色・灰色・白灰色粘土のブロック層
2. 暗灰色粘土層
3. 黄色粘土層
4. 黒灰色粘土層
5. 淡緑灰色・黒灰色粘土のブロック層
6. 黄色・灰色粘土のブロック層
7. 黒灰色粘性土層
8. 灰色粘土層
9. 暗灰色シルト層
10. 淡緑灰色・暗灰色粘土のブロック層



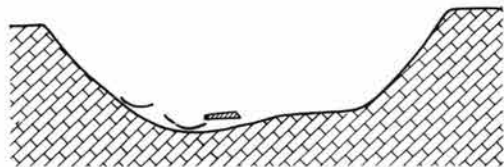
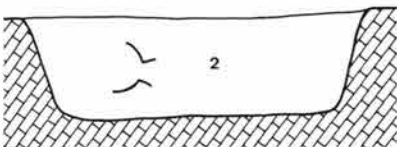
SK515

L 35 4m

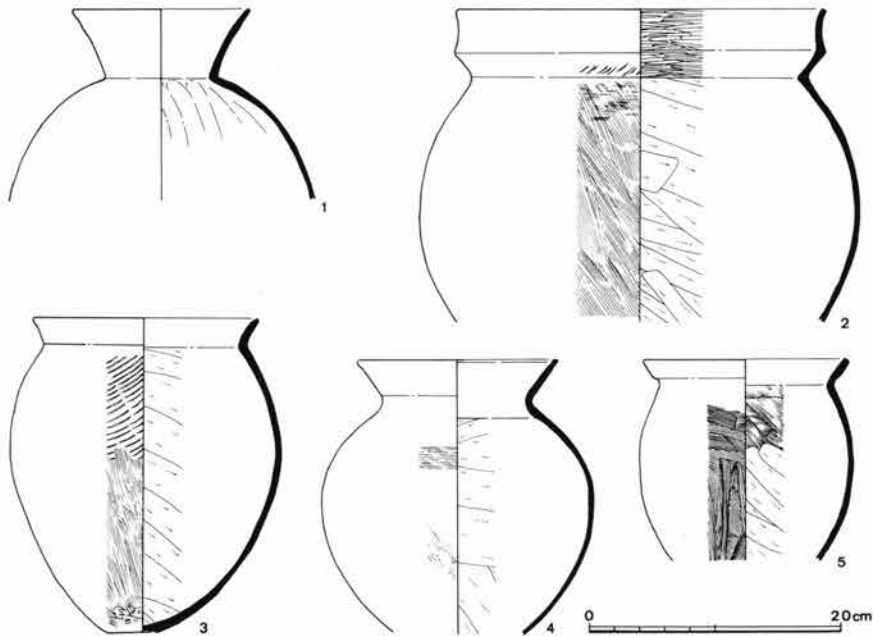


SK481

L 35 2m



第50図 第IV調査区土坑実測図



第51図 土坑出土土器実測図

土器は土坑底付近か土坑上部で出土する傾向がみられ、板材は土坑底付近出土例が多い。

壺1は、球形の体部にやや外反する直口の口縁を持つ。外面はヘラミガキされたとみられ、内面にはナデ痕跡を残す。SK481の中位出土。土坑に伴う壺の出土は、この1例のみである。甕2は、複合口縁をもつ大型甕である。胴の張りは小さく、外面はタタキ後のハケメ調整。内面は頸部までケズリを行う。口縁内面はミガキを施す。SK515出土。甕3・5は、倒卵形の体部に外反してのびる口縁をもつ。底部は小さな平底で、窪んでいる。3の体部外面は、いわゆる連続らせんタタキの後、下半部をハケメ調整する。体部内面は、頸部までヘラケズリを行う。5の体部外面はハケメ調整、内面はハケメ調整の後、下半部をけずる。3はSK497、5はSK463出土。甕4は、球形の体部に外反してのびる口縁をもち、口縁端部は肥厚して終わる。SK456出土。

第VI調査区 この調査区は第II調査区の東に位置し、段丘微高地の東端部にあたる。砂質系の地山面は西から東方向に緩やかに下がる。この調査区では第II調査区で検出していた三宅11号墳の周溝SD08と、溝SD04の続きを検出した。SD04は方形周溝墓に伴う周溝であり、調査区西南部で北東コーナーを検出した。溝幅約60cm・深さ約20cmを測る。

3. ま と め

今回の調査は前年度の第1次調査に続くものであり、三宅遺跡の性格に関しては、前回

報告と同様な成果を得た。今回の第2次調査では、第1次調査で検出した遺構の広がりを確認した。

2か年にわたる三宅遺跡の発掘調査では、以久田野丘陵西端の段丘縁辺部(微高地部)で、弥生時代中期末の方形周溝墓と古墳時代後期の円墳群(三宅古墳群)、段丘の東部では後背湿地状の低地が広がり、古墳時代初頭に属する土坑群を検出した。これら多くの遺構のうち三宅遺跡を代表する主要遺構として、低地に設けられたおびただしい数にのぼる土坑群の存在が挙げられる。

土坑群は、第Ⅲ・Ⅳ調査区の約2,400m²の範囲内に群集し、その総数は552基を確認している。土坑群の東限は丘陵裾まで、西限はSD10までであり、南北方向では調査区外にも広がる。これらの土坑群の性格に関して、現段階では土壙墓か粘土採掘坑のいずれかの可能性が考えられるが、各地の同様な土坑群の調査例を参考にしつつ整理作業を進めているところである。

土坑内の埋土の観察では、土坑が掘られた後、一気に埋め戻された土坑と、一定期間を経て埋まったと考えられる土坑が存在する。前者のタイプは、土壙墓の可能性が高い。後者のタイプは、土坑の下層もしくは中層にシルト層を含むことから、このシルト層を自然流入土とみることができ、粘土採掘坑とも考えられる。ただ、このタイプの土坑の場合、一部の土坑では土坑中央上部に、地山粘土層がブロック状態で認められる。このような事例は、土坑が埋まる最終段階で一気に埋め戻された可能性が高く、土壙墓とみることもできよう。

土坑の調査では、主要な土坑で脂肪酸分析用の土壌サンプリングを実施した。現在、これらの資料は分析依頼中であり、分析成果によっては土坑群の性格をつかむこともできよう。分析結果が待たれるところである。

(竹原 一彦)

(3) 福垣北古墳群

1. はじめに

福垣北古墳群は、綾部市の西郊にある以久田野丘陵から派生する尾根上に築造されており、11基で構成されている。当古墳群は、総数約120基ともいわれる中丹地方最大の以久田野古墳群の一角に位置し、以久田野古墳群の構造・性格を知る上でも重要な位置にある。

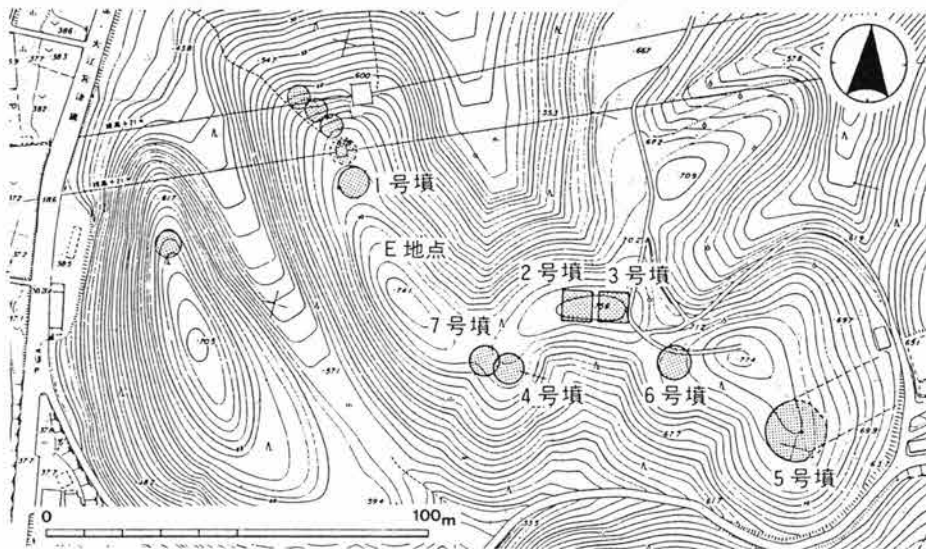
当調査研究センターでは、昨年度から、近畿自動車道敷設工事に伴い、福垣北古墳群の発掘調査を実施してきた。昨年度は、11基の古墳のうち2・3・4・5号墳の4基について、今年度は、1・6・7号墳の3基とE地点の試掘調査を実施した。

本稿では、当該年度調査分についての概要を報告することにした。

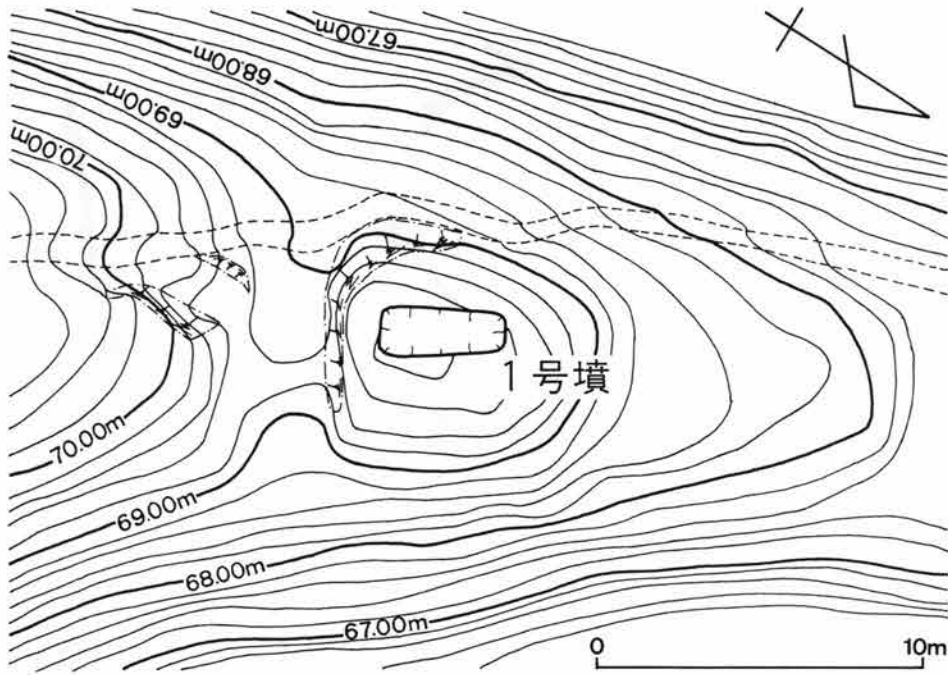
2. 調査概要

1号墳 1号墳は、今回の調査でE地点と呼んだ丘陵の中腹に位置する。この丘陵の尾根先端には5基の小円墳が裾を接して築造され、支群を形成している。1号墳はこの支群の最上部に位置している。

墳丘は、丘陵の自然地形を最大限に利用して築造されており、地山を削り出す手法とられている。盛土は封土として墳丘頂部にわずかに盛られる程度であった。墳丘形態は、



第52図 地形図

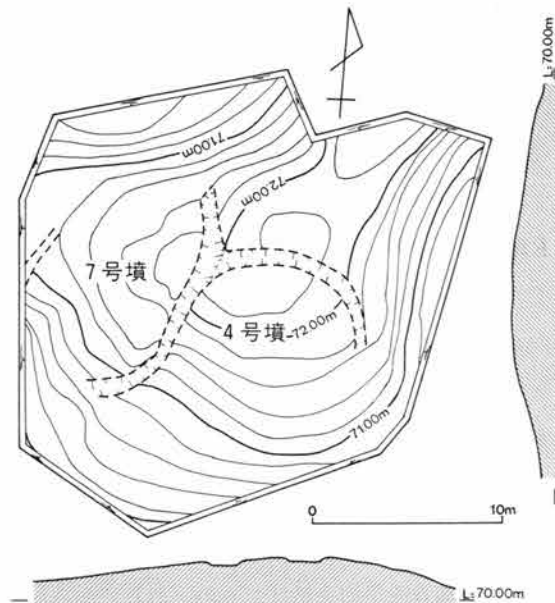


第53図 1号墳墳丘測量図

丘陵主軸に沿って長い楕円形を呈している。規模は、長径で約10m、短径で約8.5m、高さは約1mである。主体部は表土直下で検出した。主体部は、墳丘が大きく削平されているために残りが悪く、墓壇の深さは約20cm程であった。平面形態は隅丸の長方形で、規模は長さ約3.7m・幅1.4mを測る。墓壇内から鉄鏃、鉄斧、鉄鎌などの鉄製品類が出土した。墳丘裾から須恵器甕体部破片が微量出土している。

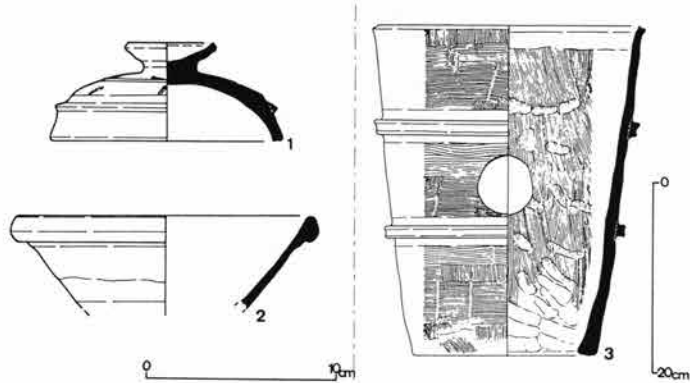
遺物が少ないので築造時期は明確でないが、鉄鏃の被棘が発達していることや須恵器の存在などから、6世紀代のものと考えておきたい。

6号墳 6号墳は、2・3号



第54図 4・7号墳墳丘測量図

墳と5号墳の間に位置する。開墾等により、墳丘は全壊状況であり、墳丘規模、形状は不明である。遺構としては主体部の一部のみを確認した。主体部は、長方形を呈する二段墓壇である。墓壇の長さ



第55図 出土遺物実測図 1：6号墳，2：E地点，3：7号墳

は3.7m、幅は1.7mを測る。棺内から鉄刀、鉄鏃、刀子が、墓壇埋土上面より土師器壺小破片が出土した。また、墳丘部の攪乱層において須恵器高杯蓋(第55図1)と鉄鎌を検出している。攪乱層出土遺物が6号墳に伴うものとすれば、6号墳の築造年代は5世紀半頃と考えることができ、2・3号墳とほぼ同時期に築造されたものと考えられる。

6号墳の位置する丘陵をやや下った地点で楕円形の小土壇を確認した。土壇内から土師器壺の破片が出土している。

7号墳 2・3号墳のある丘陵とE地点の丘陵鞍部に築造されている。4号墳築造の後、4号墳の周溝を一部壊して墳丘区画溝を作り出している。この古墳は、4号墳と同様、削平されて墳丘のほとんどが欠失し、溝だけが残っている。溝の形状から約9m×12m程度の楕円形の墳丘であったと推定することができる。7号墳は、4号墳築造後、尾根上の限られた場所を用いたため尾根主軸に直交して溝を切り、台状墓的な墳丘築造を行ったものらしい。南側の溝からは円筒埴輪数個体の破片を検出した。埴輪は、二段のタガをもつもので、B種ヨコハケを施すなど川西編年のⅣ期に該当する(第55図3)ものである。^(注3)

E地点 この地点は2～7号墳の所在する丘陵の端部側にあたる丘陵である。独立丘陵状を呈し、頂部が平坦である。隣接して同様の形状の丘陵があり、そこから城館跡(福垣城館)がみつまっていることなどから、関連施設の存在を推定して、頂部及び斜面部分を調査した。表土を剥ぎ、地山直上面を精査したが遺構の存在を確認することはできなかった。わずかに白磁碗の破片(第55図2)と燈明皿の破片を確認したにとどまる。

3. おわりに

今年度の調査成果の大略は以上のとおりである。

昨年度からの成果は、以下の諸点にまとめることができる。

①当古墳群は、分布調査などでは1基の古墳が知られていただけであったが、発掘調査の結果11基あることが確認された。これらは5世紀半ばから6世紀にかけて築造されたものである。この発見で、福垣北古墳群は以久田野古墳群を構成する一支群と考えることができるようになり、以久田野古墳群の範囲を若干西へ拡げて考える必要が生じた。

②当古墳群は、5号墳を築造契機として、尾根の基部側から端部(北から南)に向かって順次築造されていることが確認された。従来、以久田野古墳群は、5世紀後半から築造が始まると考えられてきたが、今回の調査で5世紀前半にまで遡ることが明らかとなった。

③各古墳は、区画溝を設けたり、削り出すなど丘陵の自然地形を最大限利用して墳丘を形成しており、あまり盛土をもたない点で共通している。いずれも木棺直葬で、あまり副葬品をもたない。

④出土した須恵器は古式のもので、当該地域の初期須恵器のあり方を考える上で貴重な資料となった。

(田代 弘)

注1 平良泰久「綾部市以久田野丘陵遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会) 1975

常盤井智行ほか『丹波の古墳1—由良川流域の古墳—』山城考古学研究会 1983

注2 石井清司「福垣北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注3 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64巻2号) 1977

注4 黒坪一樹「福垣城館跡」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

(4) 館 2 号 墳

1. はじめに

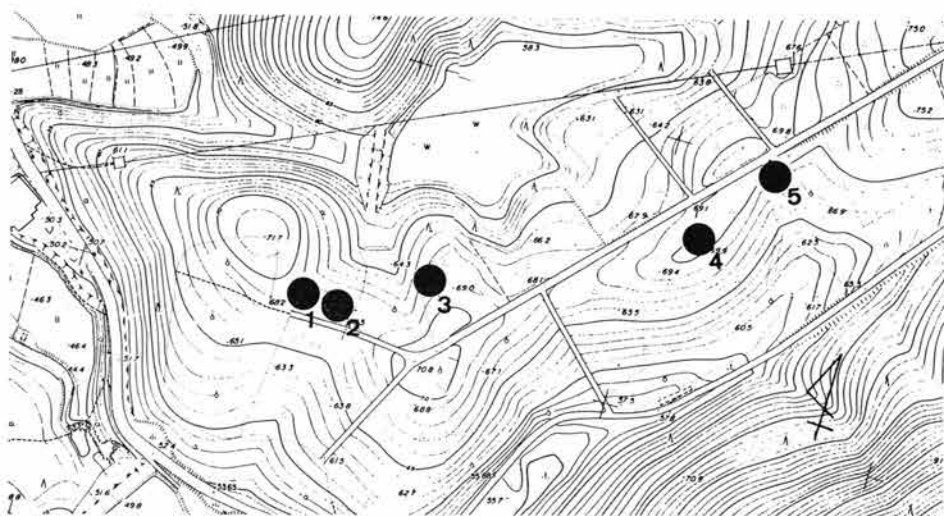
館古墳群は、5基の円墳からなる小規模な古墳群であるが、隣接地には100基以上の円墳や前方後円墳からなる^(注1)久田野古墳群があり、それらとの関係において重要視されている。

今回は、『京都府遺跡地図』^(注1)で2号墳と名付けられた古墳について調査を実施した。

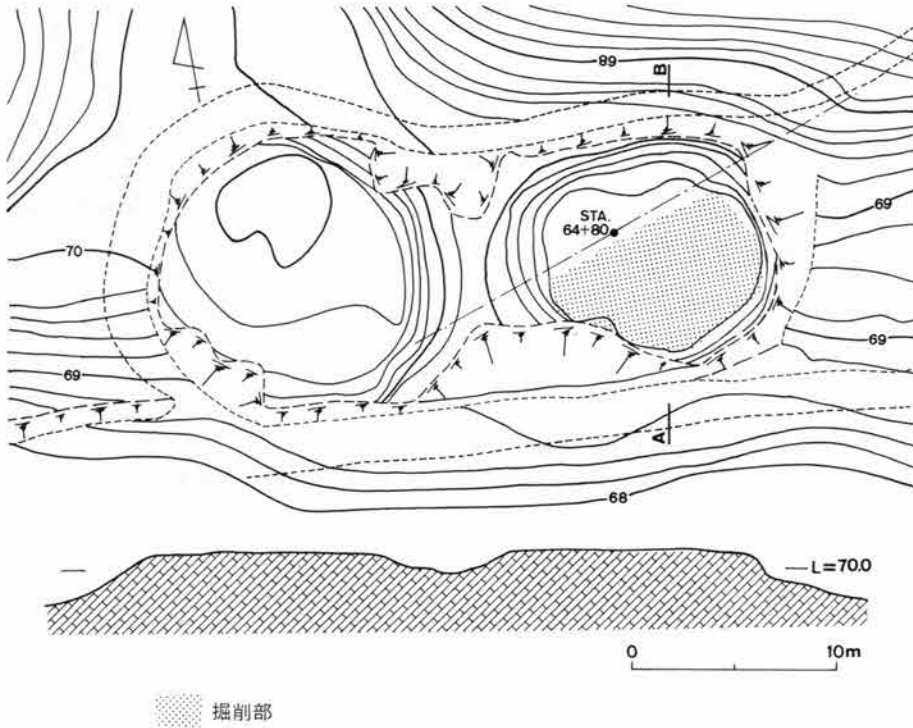
2. 調査経過

2号墳は、墳丘の3分の2が道路建設予定地に入るため、この部分を対象として調査を実施した(第57図)。調査を墳丘頂部に限定したのは、墳丘裾部が開墾等ですでに大きな破壊を受けていたことと、調査開始時点で周辺部については道路建設関係工事が施工されていたことによる。

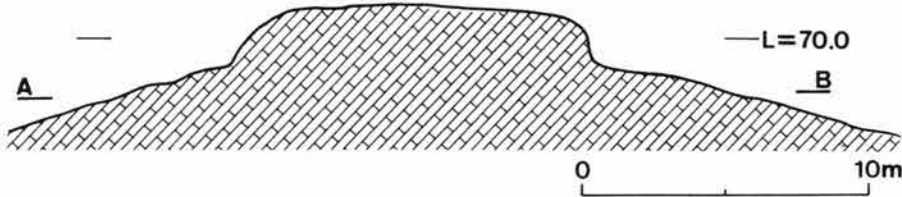
調査は、まず、1号墳と2号墳の関係、1号墳の墳丘の範囲を明らかにするために墳丘測量図を作成することから始めた。その後、2号墳の墳頂部に拡張区を設け、掘削を行った。掘削の結果、表土直下ですぐに地山があらわれた。地山は花崗岩の風化したもので、主体部や盛土、土器など、古墳を構成する遺構を検出することはできなかった。墳頂部の平坦面のようなすからみて、すでに開墾などで大きく削平された可能性が高い。続いて、任



第56図 古墳分布図



第57図 1・2号墳丘測量図



第58図 2号墳丘断面図(南北)

意に小さなトレンチを設定しながら表土下約50cmまで掘り進んだが、岩盤があらわれたため遺構の検出を断念して掘削を終了した。出土遺物は、表土で検出したサヌキトイド製凹基無茎式石鏃1点のみである(第59図)。

3. おわりに

館2号墳は、以上のように、墳頂部に大きな削平を受けていたため、主体部等を検出することができなかった。しかし、この結果をもって当古墳が古墳ではなかったとすることはできない。第57図に示したように、2号墳は1号墳と共有する溝をもって隣接しあい、

しかも削平をまぬがれた墳丘裾部分ではきれいな弧状を呈する等高線を有している。また、盛土を確認できなかった点については、以久田野丘陵上の古墳の多くが墳丘整形にあたって地山を削り出す手法をと^(注2)る点を考慮すべうなずける。これらのことから、2号墳は、墳頂部に削平を受けた円墳ということになる。

なお、2号墳の墳丘規模は、裾部の削平部分を考慮に入れると直径15m以上、高さは約1~1.5mであり、1号墳とほぼ同規模を呈するものと思われる。

(田代 弘)



第59図
石鏃実測図(実大)

注1 『京都府遺跡地図』 第2分冊(第2版)京都府教育委員会 1987

注2 石井清司「福垣北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

(5) 赤 田 遺 跡

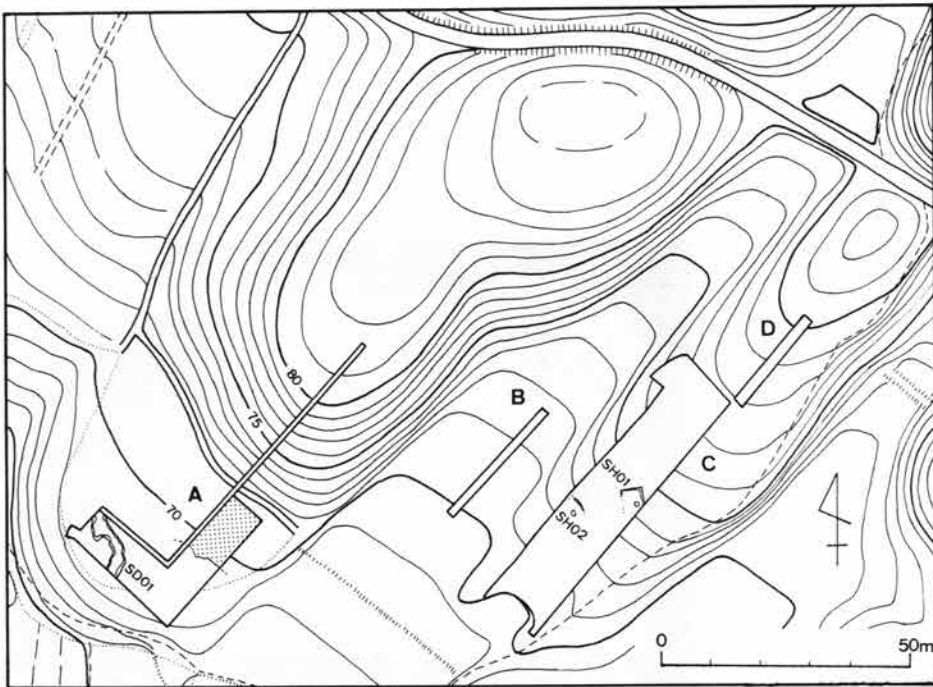
1. は じ め に

赤田遺跡は、これまで赤田城館跡と呼称され、室町時代の山城と考えられてきた。しかし、本調査において、山城跡を裏付ける考古学的資料が得られず、山城跡として捉えることがほとんど不可能となった。中世山城としては、そうであるための主な構成要素である土塁・空堀・堀切・柵・曲輪などの諸施設がなくてはならない。しかし、調査地内および周辺地を含めても、こうした拠点・攻防施設は見あたらないのである。さらに付け加えて、当初、曲輪であるとみられた段状地形(A地点北半部)の各々の平坦面が狭小なことから、ここから1点の出土遺物もなかったこと、地理的に由良川を擁する平野部を臨めず、非常に奥まった山間部で眺望が全くきかないことなども否定的要因と言わねばならない。

こうした経緯から、今回の調査結果に沿って、赤田城館跡は赤田遺跡として報告する。

2. 調 査 経 過

調査地は山城跡の中心部(曲輪)とした段状地形を含むA地点と、このA地点から東方、



第60図 トレンチ配置図

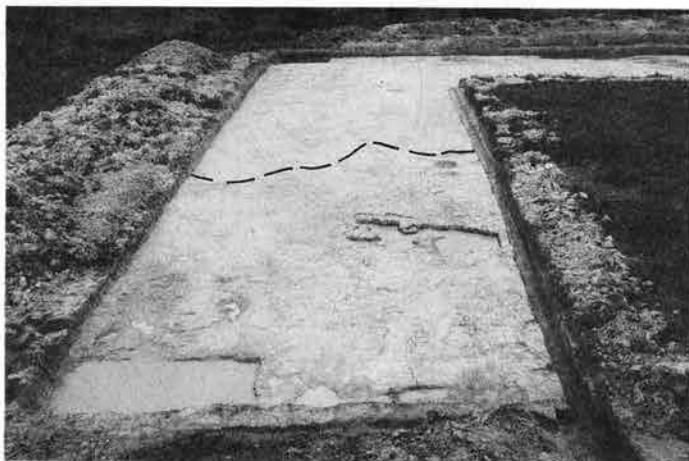


第61図 調査地全景（南西から）

細い沢を一本隔てた緩斜面地であるB地点を主な対象地とした(第60・61図)。そして、トレンチを第60図のように設定し、すべて人力にて掘削した。

A地点では、調査範囲の最頂部から南側平坦地の裾部にかけて4つの段差がつけられている段状地形部がある。ここは全面にわたる掘り下げ・地山掘削(断ち割り)を行い、遺構の検出に努めた。斜面地および各々の段平坦面からも出土遺物はなく、遺構らしき土色・土質・配石なども認められなかった。段差は、栗の植林として当地が拓かれた際につけられたものと判断した。土層は、褐色砂質土が淡黒色有機質土である表土直下に約15cmの厚さで広がり、その下は地山で、淡赤灰色粘土・黄褐色粘土などの粘土質が深く堆積していた。さらに、南側に広がる平坦地にL字形のAトレンチを入れた。北側の段状地形の裾から南に向かって淡青

灰色粘土面の広がりがあった(第62図)。この面には、浅い凹凸があり、くぼみには暗茶褐色粘土が詰まって土坑のようになっていた。上方から流れ落ちてきた山水が溜り、あたりは沼地状湿地帯の景観



第62図 青灰色粘土面の広がり（破線は南限）

をつくっていたのであろう。

また、Aトレンチの南西隅から、浅い溝SD01を検出した(第63図)。ここからすべて細片であるが、須恵器33点、土師器6点が出土した。

A地点からの遺物は溝SD01内からのほかは、同じくAトレンチの南東隅で出土した古墳時代後期の杯身1点と須恵器の細片6点がある。

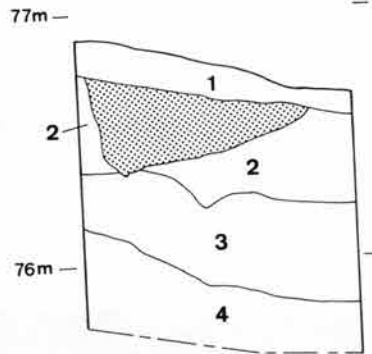
段状地形からAトレンチにかけて深い断ち割り溝を掘り、土層観察をした後、A地点の調査は終了した。

B地点では、B～Dトレンチを設定した(図版第43(1))。城館跡を裏付けるものは、本地点でも得られなかった。他の時代のものとして、Cトレンチの南半分から出土した2基の竪穴式住居跡(SH01・SH02)がある。2基のうちより北側のSH01は、比較的残りが良好で、カマドと北西コーナー部を検出することができた(図版第43(2))。

B・Dトレンチからは、地山面まで掘り下げたが、遺構・遺物とも存在しなかった。Bトレンチでは沢湿地に当たるため、木製品等の出土を、Dトレンチでは北側の古墳状隆起(調査範囲外)に関連する遺物の出土を念頭においたが出土しなかった。



第63図 溝 SD 01



1. 暗褐色土
 2. 暗黄褐色粘質土
 3. 淡茶褐色粘質土(SH 検出面)
 4. 明赤褐色シルト(地山)
- スクリーントーンは木株

第64図 土層断面および柱状図(Cトレンチ東壁)

3. 層 位

層位は、A地点では淡黒色有機質土(表土)、褐色砂質土、淡赤灰色粘土・黄褐色粘土(共に地山)の順に堆積していた。B地点では、竪穴式住居跡を検出したCトレンチの東壁を例にとると、第64図のように説明できる。まず、表土層は有機質の暗褐色土、以下、暗黄褐色粘質土、淡茶褐色粘質土、明赤褐色シルトの順に堆積していた。淡茶褐色粘質土は、竪穴式住居跡の検出面であり、自然の地形にあわせて緩やかに傾斜していく。明赤褐色シルトは、非常に固くしまった層で、地山面と言える。出土遺物は、包含層である暗黄褐色粘質土から、全体にまんべんなく散在する状況である。

4. 遺 構

今回、検出した人工の遺構は、A地点からの溝状遺構1条、B地点からの竪穴式住居跡2基(SH01・SH02)である。

溝は、屈曲する浅いもので、長さ約13m分、幅約2.5~3m、深さ20~30cmを測る。断面形は「U」字形で、埋土はやや炭化物を含んだ暗褐色砂質土である。出土遺物はごくわずかで、須恵器細片33点、土師器細片6点(甕形土器?)である。古墳時代後期のものであるが、溝内の上層に含まれていたため、溝の形成年代は不明確である。

竪穴式住居跡SH01は、長方形の平面をもち、短辺4.5m・長辺(推定)7mの大きさである。北側長辺のおそらく中央部にカマドを有していたものと思われる。赤色の焼土の範囲がカマド全体におよび、中央部に浅い窪みが円形に認められる。この窪みに煮炊き用の器が据え置かれたのであろう。炭化物は北半部に比較的多く散在していた。さらに、半割して断面をみると、カマド本体は①濃赤色粘質土、

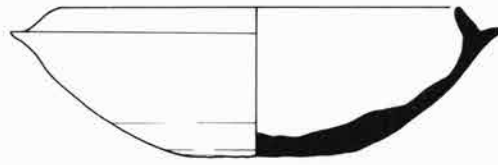
②淡赤黄色土、③橙赤色粘土、④淡赤褐色土(炭多し)で構成されていた(第65図)。なお、壁溝や柱穴



第65図 SH 01 カマド部半割状況

その他の施設は残存していない。

竪穴式住居跡SH02は、残存状態がわるく、全体形は不明である。SH01とほぼ同じ形状・規模の焼土溜りを検出し、ここをカマドと認定した。掘形のラインは、北側がわずかながら残っていた。



第66図 須恵器杯実測図(1/2)

以上の2基の竪穴式住居跡は、それらの立地上から考えて不明な点がある。第60図からわかるように、比較的残りのよいSH01を参考にすると、北西隅から南東隅までの高低差がおよそ30cmもある。すなわち、緩斜面地に形成されているので、水平で安定した生活面を得るためには、何らかの工夫が必要である。

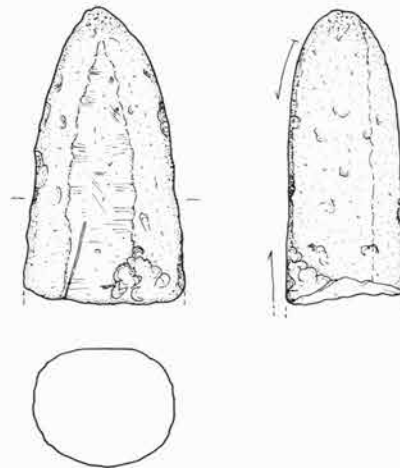
床面のレベルを揃えるためには、下位の面に土を盛るなどして高くするか、最初から掘削深度を高位と低位で違えて造っていかなければならない。土層断面の観察からは、土盛りによる整地はやっていないようであり、どうも掘り下げ方に問題があるようである。斜面地に建てられた竪穴式住居の調査例を検討すべきであろう。

5. 遺 物

出土遺物は、細片が多く図化し得るものが少ない。竪穴式住居跡内・溝内にして然りである。今回は、A・B両地点の包含層中から出土した須恵器杯(A地点南東隅)・磨製石斧(B地点中央)を示すにとどめる。杯は、口径13.3cmを測る。口縁の立ち上がりが短くなり、かなり内においている。陶邑編年TK209(7世紀前半)に比定される。

6. ま と め

今回の調査では、山城跡としての遺構・遺物はまったくなかった。曲輪であろうと思われたA地点の階段状地形は、現代の植林により形成されたものと判断した。さらにこの地形の裾部から南に広がる平坦面にかけては、浅い「沼地状の落ち込み」が広がっていること、時期不詳の溝が掘られていたことなどを確認することができた。



第67図 磨製石斧実測図(Cトレンチ)1/2

B地点は、A地点から東に広がり、湿地状の

小さな沢を隔てた緩斜面地である。ここからは、古墳時代後期の竪穴式住居跡を2基(SH01・SH02)検出した。これは、集落立地を考える上で興味深いものと言える。当地は、由良川を擁する平野部を望めない山間部である。付近には、西側約1kmに、先土器時代から古墳時代に至る遺跡を有する以久田野丘陵がある。しかし、いく筋かの谷を隔てた当地が、直接関連をもつとは考えにくい。集落と古墳が、少し距離をもって存立したことを前提とするならば、当地の北西約300m谷奥の東向き斜面地につくられた細谷古墳群(後期)との関連を考えることができるかもしれない。いずれにしても、今回検出した竪穴式住居跡の残存状況や遺物の出土量から判断して、集落規模はそれほど大きなものではなかったであろう。しかしながら、集落立地の条件に適さないと判断されそうなるにも、遺跡が存在することが明らかとなった。

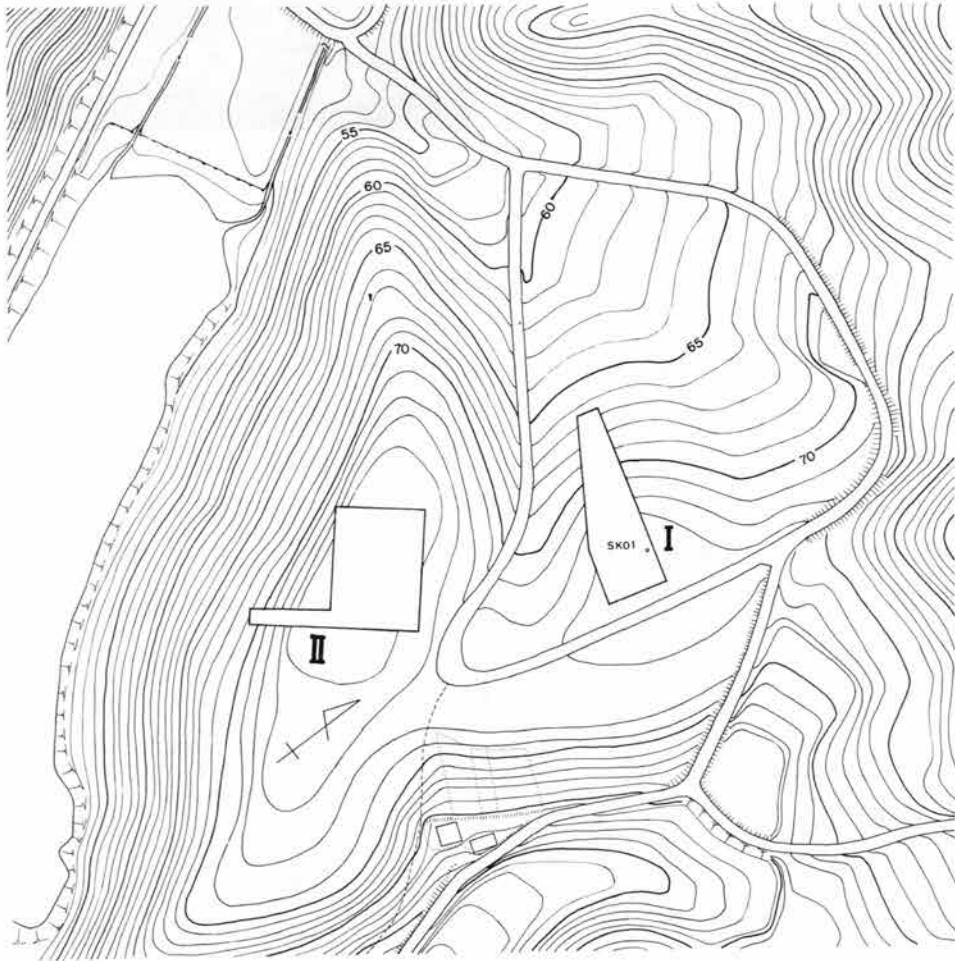
(黒坪 一樹)

(6) 馬場池東方遺跡

1. 調査経過

馬場池東方遺跡は、綾部市街地の西方で福知山市との市境に近く、由良川右岸の丘陵平坦地に位置する。調査地は植林として利用されてきた。標高は65～75mを測る。

調査はまず、調査地の中央が浅い谷筋の道で分断されているために、その北側を第Ⅰ区、南側を第Ⅱ区としてトレンチを設定することから始めた(第68～70図)。当初、Ⅰ・Ⅱ区とも、こぶし大のチャート円礫(河原石)が集積しているか所が所々に見られた。したがって、調査区はこれらの円礫集積か所をとり込むように設けた。掘削作業は、第Ⅱ区の表土除去

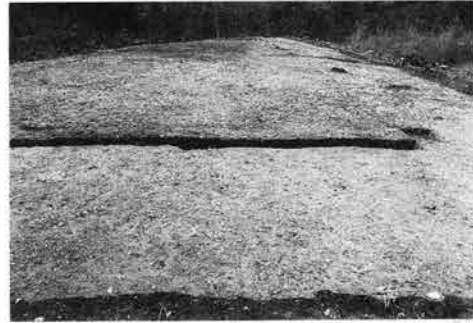


第68図 調査区配置図 (1/2,000)

のほかは、すべて人力ですすめた。

植林による浅い耕作土を除去し、暗褐色系の砂質土である遺物包含層を掘りすすむと、第Ⅰ区では暗赤褐色砂礫の、第Ⅱ区では黄褐色粘質土の地山面が広がる。先述した集積する円礫による遺構は、面的にも、土層断面にも存在しなかった。由良川の高位河岸段丘を構成する礫が露出し、あたりに散乱したものであろう。

第Ⅰ区の地山を精査中、隅丸方形の焼土坑(SK01)を1基検出した。包含層中からは、弥生時代から平安時代に至る遺物が出土しているが、これらに関する遺構はなかった。第Ⅰ区の裾部には、不整形なくぼみがあったが、これは木株の痕跡と判断した。



第69図 第Ⅰ区全景(東方向から)

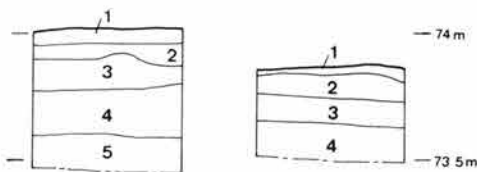


第70図 第Ⅱ区全景(南西方向から)

2. 層 位

調査区の土層は、地表～地山面までの深さが、第Ⅰ・Ⅱ区とも約80cmを測る。第Ⅰ区東壁と第Ⅱ区東壁(ともに最高位部)を例にとると、第71図の柱状図のように説明することができる。第Ⅰ区は、1. 暗褐色有機質土(表土)、2. 暗赤褐色粘質土、3. 黒褐色有機質粘質土、4. 淡褐色粘質土、5. 暗赤褐色砂礫(地山)となっている。1～4層ではチャートの小礫をまばらに含んでいた。5層は、鉄分やマンガンが横縞状に堆積している。この地山面は、自然に緩やかに傾斜していくが、部分的に段差を生じているところがある。植林や畑を拓く際に手が入ったものかもしれない。住居跡・溝等の遺構に伴うものではなかった。

第Ⅱ区は、1～4層までは第Ⅰ区と同様である。4層から下は、堅くしまった黄褐色粘質土の地山となり、さらに掘り下げると黄褐色砂礫に変わる。



第71図 土層柱状図
(右、第Ⅰ区東壁・左、第Ⅱ区東壁)

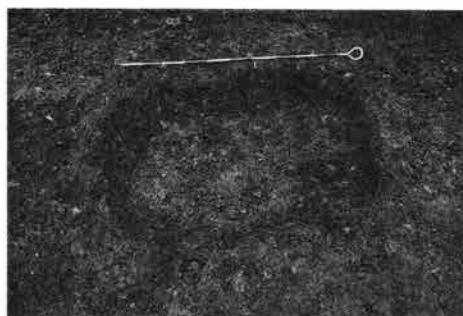
3・4層が遺物包含層と言えるもので、Ⅰ・Ⅱ区全体に安定して堆積していた。炭化物や有機質を比較的多く含む3層中から、より多くの遺物が出土

した。時期は特定できないほど、各時代の遺物が混在している。古墳時代の須恵器は第Ⅰ区の包含層中に多く、第Ⅱ区に少ない。

3. 遺 構

Ⅰ区から検出した焼土坑SK01である(第72図)。隅丸方形で、長辺1.1m・短辺0.8m・深さ15~20mを測る。埋土は、暗茶褐色土で有機質を帯びている。断面形は、浅い「U」字形を呈する。

内壁面は、縁辺部に赤い焼土塊が貼り付いたように残り、炭化物は底部に溜っていた。中からは、土師器の細片が数点出土した。焼土坑の性格・時期は不明である。

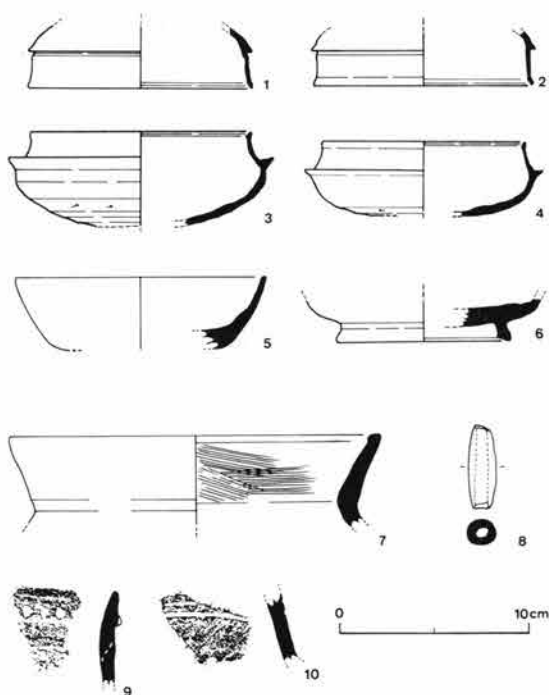


第72図 焼土坑完掘状況

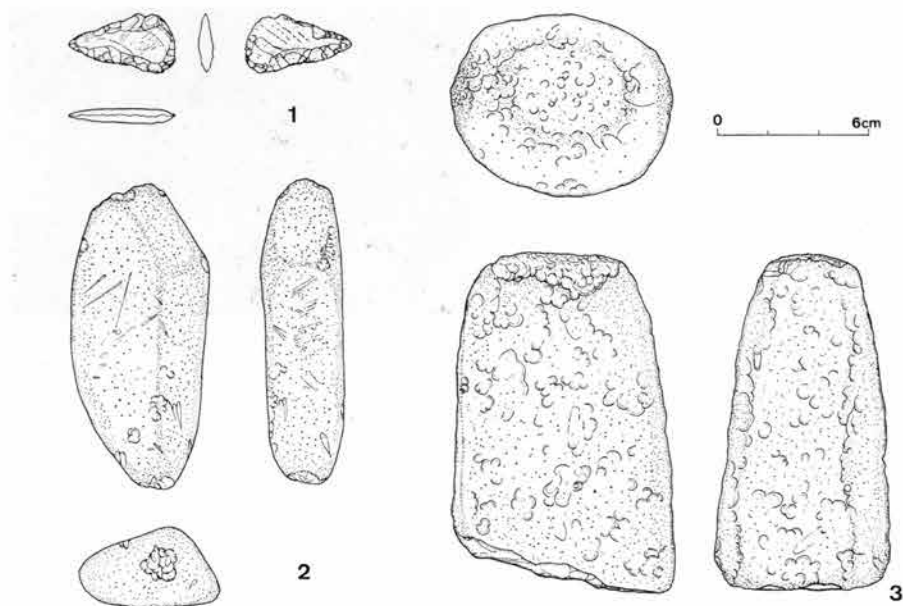
4. 遺 物

出土遺物は、発掘面積の割に少なく、整理収納箱3箱分である。図化した土器類は、第73図の10点にすぎない。

第73図1~6は須恵器杯類である。1・2の杯蓋は、口縁端部にシャープな段を残す。口径はともに11.8cmを測る。3・4は杯身で、口縁部の立ち上がりは長く、特に3は大きく内傾する。口縁端部はともに段をもつ。1~3は、陶邑古窯跡群のTK47に、4はMT15に比定されよう。ともに6世紀前半に属する。5の杯は、高台の有無は不明である。胎土中に微砂粒を多く含んでいる。焼成は堅い。奈良時代のものである。6は、高台を有する杯の底部である。底部径は9.2cmを測る。平安時代初頭の所産である。



第73図 出土遺物実測図



第74図 石器実測図

7は、土師器甕である。胎土・焼成が悪い。口縁部内面に粗いハケメをとどめる。口縁端部は明確に折り返されている。布留式期の中でも最終末に比定される例であろう。

8は土錘である。両先端部をわずかに破損している。

9は、細片ながら深鉢形土器の口縁部である。立ち上がりはほぼ直立し、口縁端部より少し下って、三角形に刻みが施されている。色調は暗褐色で胎土は粗い。縄文時代晩期のものであろう。10は壺形土器の細片である。胴部から頸部にかけてのもので、ヘラ描き凹線文が施されている。弥生時代の所産である。

以上、すべて包含層中のもので、1～8は第Ⅰ区、9・10は第Ⅱ区から出土した。

第74図は石器類である。1は、小形のサヌカイト製削器である。先端は鋭く、両側の長辺に刃部加工痕がある。2は敲石(ハンマー)、3は磨製石斧の未成品で先端を欠損する。

5. ま と め

今回の調査の結果、遺構としては焼土坑1基を検出しただけであるが、包含層中から古墳時代～奈良・平安時代の須恵器や、わずかながら縄文・弥生時代の遺物を得ることができた。土層のところで少しふれたが、第Ⅰ区からは古墳時代の須恵器類が多く出土し、平坦面がより広大な第Ⅱ区からは、弥生時代の土器類が多い(石器はⅠ区に多い)。この点から第Ⅰ区は古墳、第Ⅱ区は集落がかつて存在していたのかもしれない。(黒坪 一樹)

(7) 火柴原古墳状隆起

1. 調査の概要

石原集落から長田野丘陵に向かう府道沿いには、数か所の貯水池が存在する。その一つ「口池」の北東部、ヌクモと呼ばれる丘陵の南裾に、火柴原古墳とされた古墳状隆起が存在する。調査前の段階では、直径約10m・高さ約1.5mの円墳と考えられていた。

地形測量の終了後、マウンド中央から四方にのびる幅1mのトレンチを設定し、試掘調査を開始した。表土(5~10cm)を除去したところ、表土下には黄色の荒砂が広がっていた。この砂層は、マウンド基底部の地山面まで達していた。また、この砂層中に遺構は無く、1点の遺物の出土も見られなかった。



第75図 地形測量図

2. まとめ

火柴原古墳は、今回の発掘調査の結果、古墳とは認定できなかった。地元の古老の話によれば、過去に「口池」等の貯水池内堆積土を浚渫したそうである。火柴原古墳としたマウンドは、立地・土質から浚渫土の盛土と判断した。ただ、マウンド上の樹木の年輪から、マウンドが築かれたのはおよそ40~50年前と推定する。(竹原 一彦)

(8) 興 遺 跡

1. は じ め に

興遺跡は、由良川によって形成された沖積地の縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地上に立地している。

この遺跡は、昭和20年に小字上地で行われた道路工事に際して台付壺が発見されたことにより、弥生時代中期の集落跡として注目されるようになった。その後、分布調査成果等から各時代の遺構が重なる複合集落遺跡であると考えられるようになった。

今回、興遺跡推定範囲に隣接して近畿自動車道が建設されることになり、遺構の有無を確認する目的で発掘調査を実施した。

調査地点は、興遺跡の南東部で、同じく弥生時代中期の集落遺跡として著名な観音寺遺跡に隣接する地点にあたる。

2. 調 査 概 要

調査対象地は、道路建設予定地であるため、南北に細長い。対象地内には、府道とそれに並行してJRが敷設されており、これらによって調査地は南北に二分されている。このため、府道とJRを境界として南部地区と北部地区の2つの調査地区を設けることにした。そして、幅5m・長さ10mのトレンチを南部地区に6か所、北部地区に5か所設定し試掘を行った。その結果、南部地区では、Na5・Na6トレンチにおいて弥生土器、瓦器、土師器等の遺物とともに、同時期の遺構を確認した。また、北部地区では各トレンチから弥生土器とともに、溝などの遺構を検出したことから、Na1～Na4トレンチを除く各地点に遺構が濃密に分布することが予想された。

以上のことから、南部・北部両地区について面的な調査の必要性が生じ、当該年度は南部地区を、北部地区は次年度に本格的な発掘調査を実施することになった。

本稿では、当該年度内に実施した南部地区の調査成果の概要を報告することにした。

(1) 主な検出遺構

南部地区では、Na5とNa6地点を挟む地区に拡張区を設けた(A拡張区)。この地点では、以下に記すような遺構が検出されたこともあって、Na3とNa4をつなぐ地点も拡張して調査を行った(B拡張区)。しかし、B拡張区は削平が著しく、素掘り溝以外の遺構を確認することはできなかった。従って、ここではA拡張区で検出した遺構のうち主なものについて報告する。

なお、南部地区の基本層序は第79図のとおりである。

耕土を除去した段階で遺構面を検出した。同一面で中世、弥生時代の二時期の遺構を検出したが、この時点では弥生時代の遺構は明瞭でなかったため、この面については意図的に15~20cm程度遺構面を除去し検出につとめた。以下、中世の遺構群と弥生時代の遺構群を分けて説明する。

中世の遺構

鎌倉時代~室町時代を中心とする遺構群を検出した。掘立柱建物跡、土塋墓、不明土塋、柱穴などの遺構がある。

SB01 梁間2間、桁行2間以上の掘立柱建物跡。東西棟である。南北の柱間は約2.4mを測る。

SB02 梁間2間、桁行2間以上の掘立柱建物跡。南北棟であろう。

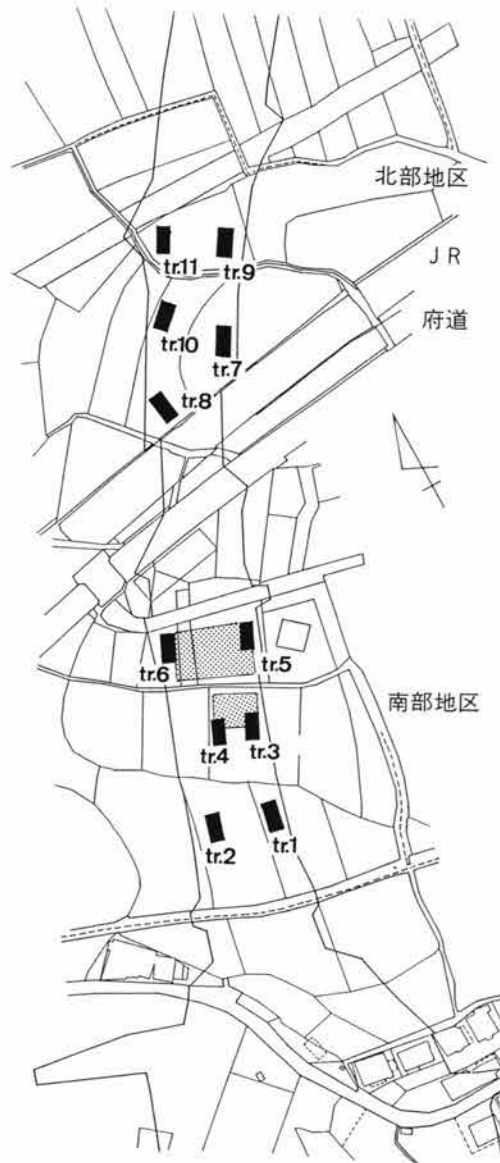
SA01 SB02と主軸方向を同じくする。4間分を確認した。

SB03 主軸をほぼ真北にもつ掘立柱建物跡。梁間3間、桁行4間である。東西の柱間は約2.5m、南北は柱間の長さが異なる。東西棟である。

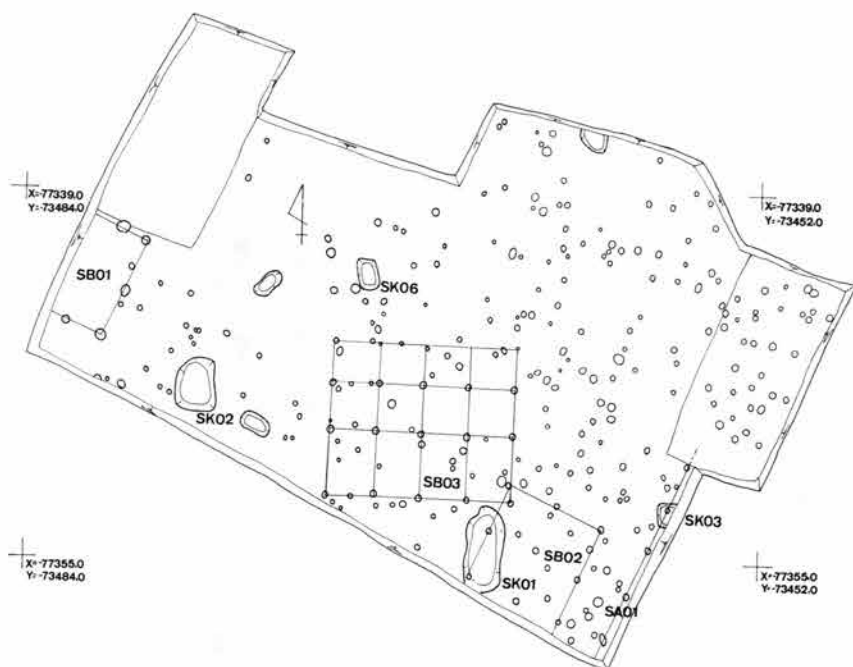
SK01 長楕円形の土坑。長辺約3.7m・短辺約1.7m・深さ約20cmを測る。人頭大の集石が部分的にみられ、土塋底から土師器皿、鉄釘が出土した。墳墓であろうか。

SK02 長楕円形の土坑。長辺2.2m・短辺約1m・深さ約20cmを測る。瓦器碗、土師器細片が出土。

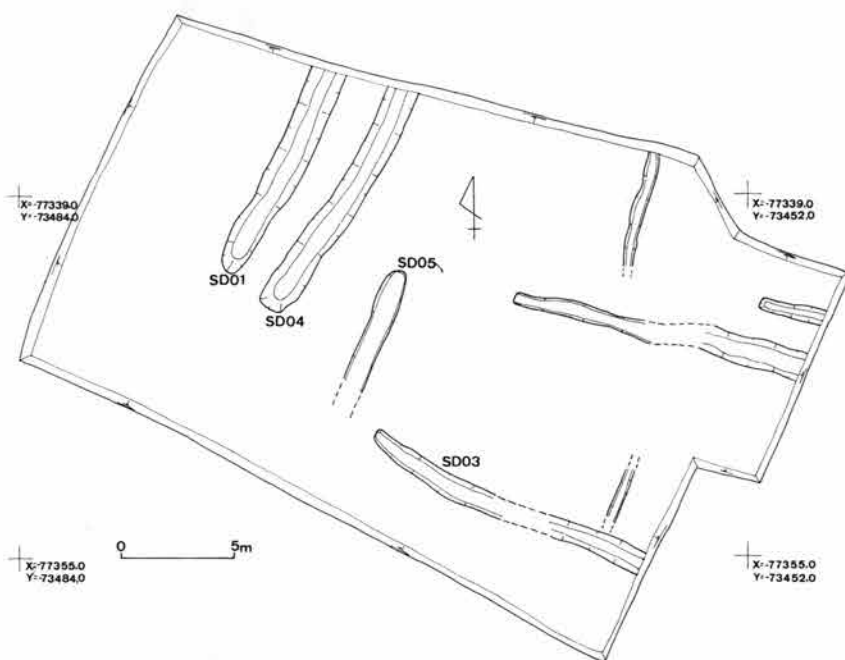
SK06 南北に主軸をもつ長方形の土坑。長辺1.4m・短辺約1m・深さ約25cmを測る。土坑底面より約15cm上層で土師器皿2点、漆痕跡2か所を検出。漆は椀であろうか。また、



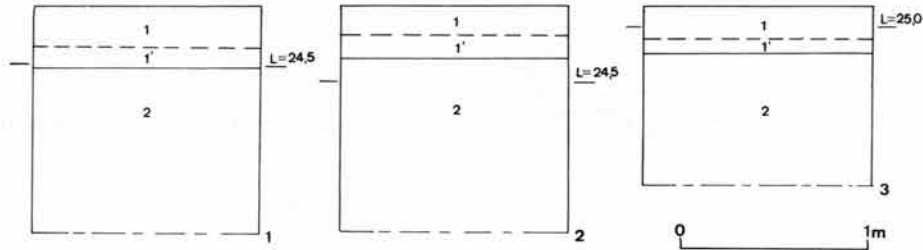
第76図 トレンチ配置図



第77図 中世遺構実測図



第78図 弥生時代遺構実測図



第79図 各トレンチ断面模式図

- (1) tr. 1; 1. 耕土 2. 青灰色粘土 (2) tr. 3; 1. 耕土 2. 黄褐色粘質土
 (3) tr. 5; 1. 耕土 2. 黄褐色粘質土

底面近くで木棺痕跡を確認した。

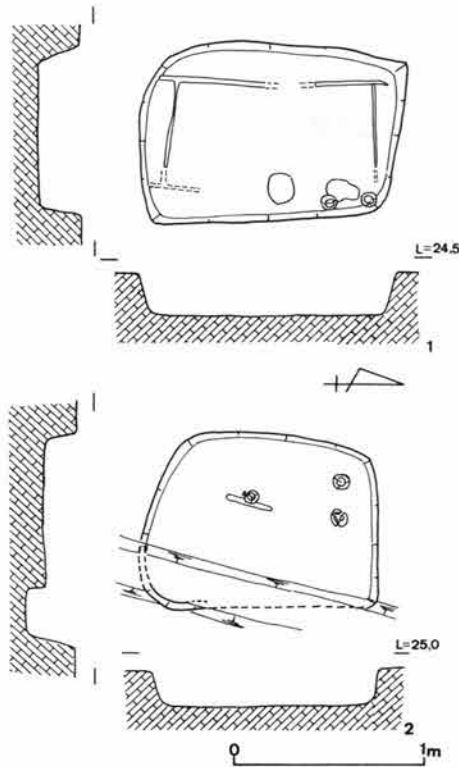
SK03 長辺約1.2m・短辺約0.9m・深さ約25cmを測る長方形の土坑。底面中央付近で土師器皿3点と鉄刀(短刀か)1点を検出。SK06同様の遺構であり、墓である可能性が高い。

下層遺構群

弥生時代中期に属するもので、溝、ピットなどを検出している。

SD01 幅約2.3m・深さ約1mで、約10mにわたって検出した。溝底より弥生時代中期の甕が出土した(第83図6)。断面形は台形である。

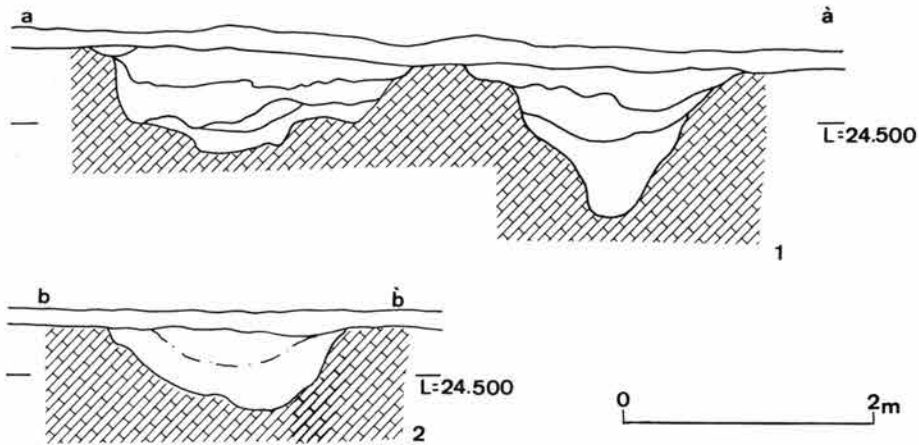
SD04 SD01と平行する溝。幅約2.3m・深さ約1.3mを測る。約11mにわたって検出した。断面形はV字形を呈する。中～下層より完形に近い台付鉢と高杯を検出した(第83図3・4)。



第80図 土坑実測図 1. SK06 2. SK03

SD03 SD01, SD04と直交する方向をもつ溝。西にむかって浅くなり、やがて消滅する。幅約1.9m・深さ約0.8m, 断面「U」字形を呈する。下層において弥生時代中期の甕, 高杯壺などを検出した(第83図5)。

この他、いくつかの溝状遺構を検出しているが、いずれも浅く微弱である。

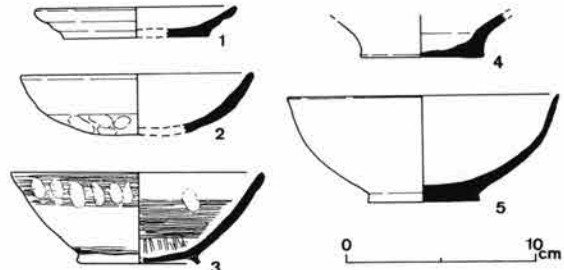


第81図 溝断面図 1. SD01・SD04 2. SD03

(2) 出土遺物

A地区では柱穴群が多く、まとまった遺物をもつ遺構は少ない。主なものを第82図に示した。

第82図1～3はSK02埋土から出土したものである。12～13世紀に属するものであろう。4・5はピット埋土で検出したものである。4は土師質、5は黒色土器である。黒色土器は内外面ともに漆黒色を呈し、底部に糸切り痕が認められる。11世紀代のものであろうか。

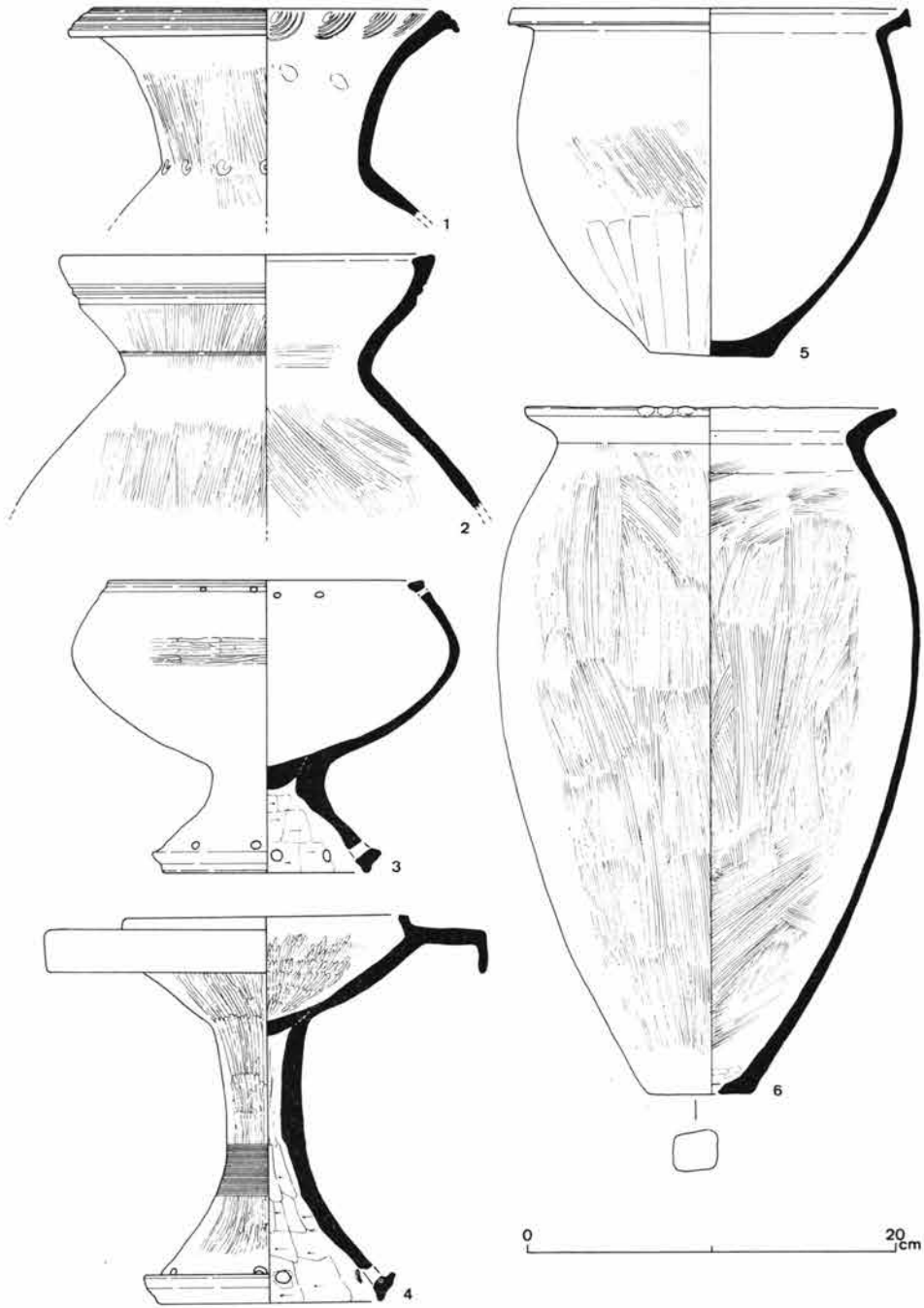


第82図 出土土器実測図 SK02: 1～3 Pit: 4・5

第83図1・2は包含層出土。3～6は先に記したように各溝から出土したものである。いずれも弥生時代中期後半(第IV様式)に属する。3～6はいずれもほぼ完存しており、当地域の弥生時代中期の土器資料として貴重なものである。

1・2は壺である。1は口径19.5cm。口縁端部を拡張し3条の凹線文を、内面には扇形文を施す。3は台付鉢。口径約17cm、器高は約16cmを測る。4は垂下する口縁部をもつ高杯である。脚柱部には棒状工具先端で施されたとと思われる幅の狭い凹線文がみられる。器体外面には赤色顔料が施されている。精製された土器である。5・6は甕。5は明褐色を呈し、作りもていねいで火を受けた痕跡がなく、鉢とすべきかもしれない。体部内面はナデ、外面はハケ調整したのち、下半にヘラケズリを施す。口径21.5cm。6は口径約20cm、器高約37cmの法量をもつ長胴の甕である。口唇部に3個一対の押圧が3か所にみられる。底部には焼成後の穿孔があり、器体外面下半には2次的焼成痕が認められる。体部内・外面をハケ調整で仕上げている。

1・2は壺である。1は口径19.5cm。口縁端部を拡張し3条の凹線文を、内面には扇形文を施す。3は台付鉢。口径約17cm、器高は約16cmを測る。4は垂下する口縁部をもつ高杯である。脚柱部には棒状工具先端で施されたとと思われる幅の狭い凹線文がみられる。器体外面には赤色顔料が施されている。精製された土器である。5・6は甕。5は明褐色を呈し、作りもていねいで火を受けた痕跡がなく、鉢とすべきかもしれない。体部内面はナデ、外面はハケ調整したのち、下半にヘラケズリを施す。口径21.5cm。6は口径約20cm、器高約37cmの法量をもつ長胴の甕である。口唇部に3個一対の押圧が3か所にみられる。底部には焼成後の穿孔があり、器体外面下半には2次的焼成痕が認められる。体部内・外面をハケ調整で仕上げている。



第83図 弥生土器実測図 SD01: 6 SD03: 5 SD04: 3・4 包含層: 1・2

3. 小 結

以上、南部地区A拡張区についての概要を略述した。以下、要点を記し結びとしたい。

①上層遺構群は大きくみて掘立柱建物と墓とみられる土坑群とからなる。掘立柱建物は主軸方位によって2時期が想定される。SB01とSB02、SA01のグループとSB03とである。

②土坑のうちSK01とSK06、SK03は遺物出土状況や遺構の形状から墓と想定される。SB02の柱穴とSK01の切り合い関係を重視すれば、掘立柱建物群が土坑群に先行するものと評価し得る。

③下層遺構ではSD01、03、04が重要な位置を占める。これらの溝は、断面観察による限り、埋土に著しい水流痕跡は認められず、遺構のベースになっている黄褐色粘質土と近似する。また、溝はそれぞれ端部が傾斜して終わっており、当初から水利目的ではなく、区画を目的として設定されたものである可能性が高い。 (田代 弘)

(9) 観音寺遺跡

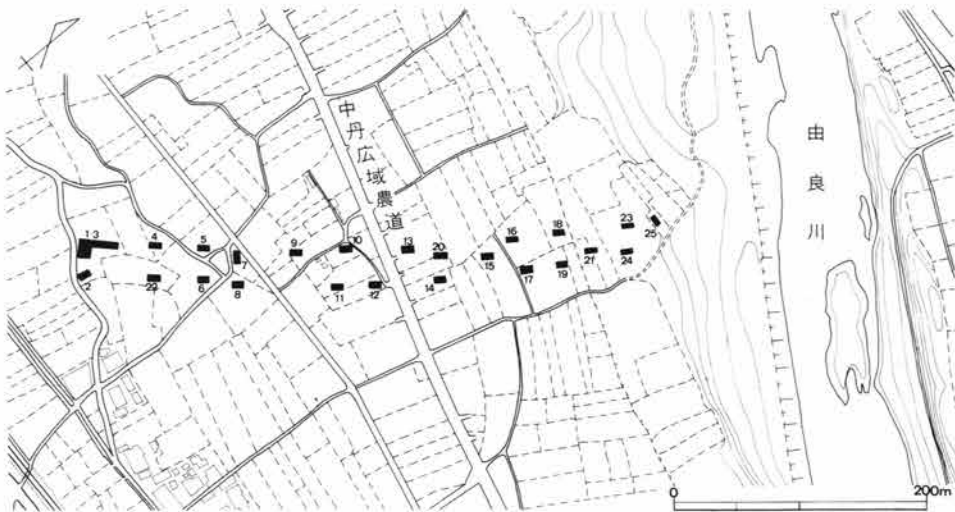
1. はじめに

観音寺遺跡は、弥生時代から中世にかけての土器の散布地であり、有樋式石剣の出土地としても周知の遺跡である。ゆるやかに流れる由良川によって形成された沖積地に位置し、現在は、遺跡の中央を中丹広域農道が縦断し一帯は田畑となっている。この遺跡は、昭和54年度に京都府教育委員会によって、広域農道建設に伴う試掘調査が行われており、遺構に伴わない遺物群などが検出されている。遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器などが出土し、これらの遺物群が包蔵されていた元の遺跡が調査地付近に存在すると考えられている。

付近の遺跡としては、調査地南方に当調査研究センターが発掘調査中の、弥生時代中期と鎌倉・室町時代を中心とする二時期の遺構群からなる興遺跡が、由良川を越えた北方に縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構を検出した小貝遺跡が位置する。小貝遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓を検出している。また、小貝遺跡北方には、私市円山古墳が位置し、観音寺遺跡からその墳丘を眺めることができる。

2. 調査の概要

今回の調査は、遺構の存在およびその広がりを確認する試掘調査であるため、予定路線範囲内に5m×10mの試掘トレンチを25か所設定し、耕土層の掘削から始め、後は層ごとに



第84図 トレンチ配置図

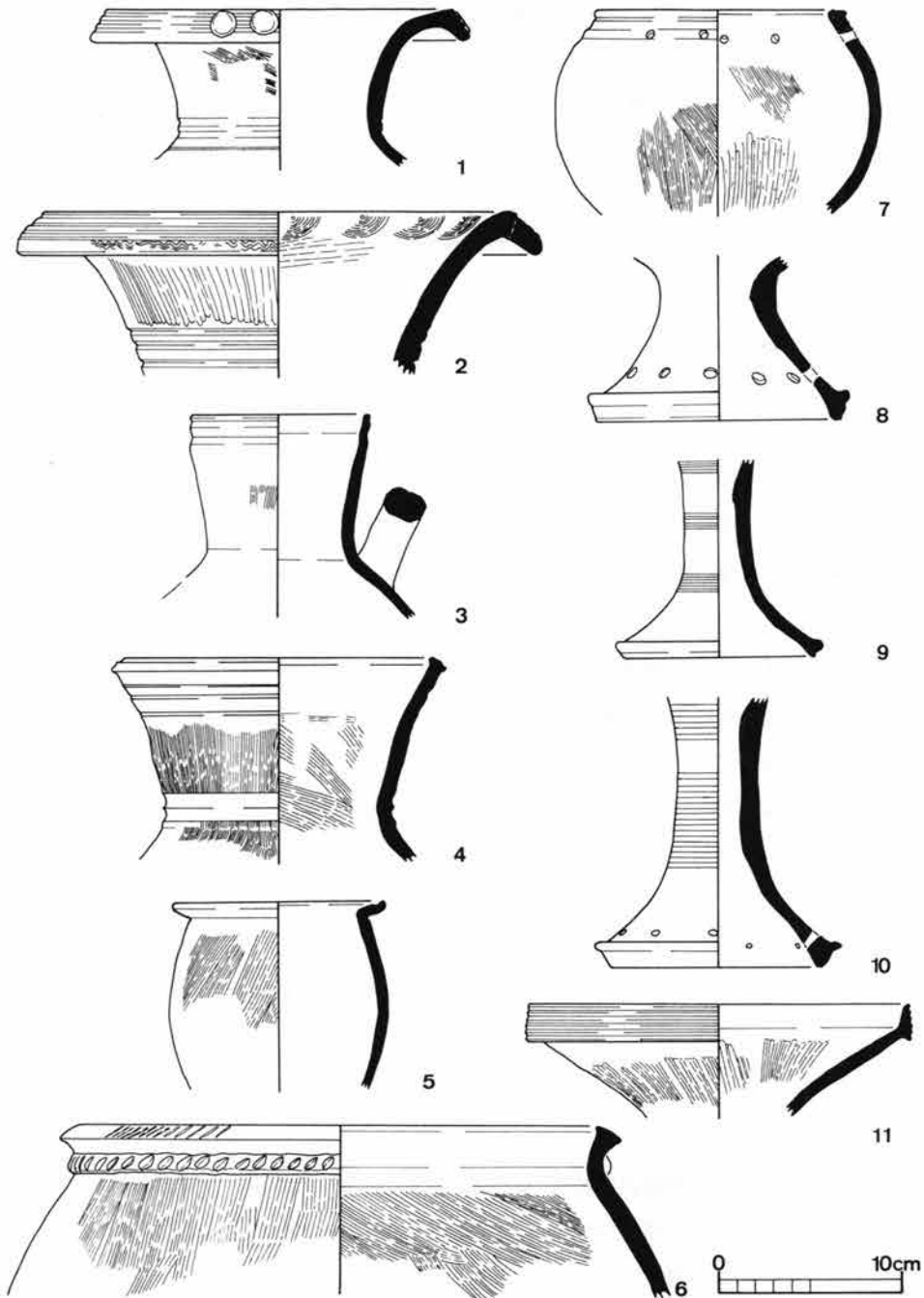
掘り下げて遺構の有無を確認した。各トレンチの堆積状況から、2か所の自然堤防状の微高地を検出した。自然堤防状の微高地からは、主に弥生土器を多く包含する茶褐色土層が厚く堆積していたが、低地になると砂と礫の堆積に大きく変化し、遺物も激減した。これは、由良川の氾濫または流路の変化によると考えられる。微高地2か所は、第84図の第5トレンチ付近と第10～19トレンチにかけての範囲である。前者の微高地については、微高地端であることから、明確な遺構としては奈良時代の溝を検出したにすぎない。それに伴う遺構は、調査地西側に広がるものと思われる。一方、後者の微高地からは、中世の柱穴、奈良時代後半の溝や弥生時代中期の溝・土坑などを検出した。遺構は、遺物包含層を切り込んでおり、堆積土と遺構内の土が土色・土質ともに明確な違いがないため、断面で確認した。このように断面による観察では比較的判別しやすいが、平面での検出は困難であった。これらの微高地には、大きく3時期の遺構が存在することが判明した。以下、検出した遺構の概略をトレンチ毎に記す。

第1・3トレンチからは、南北方向の自然流路を検出した。流路底には一部人工による掘削が認められ、弥生土器が多量に出土した。時期は、弥生時代中期から後期にかけてのもので、この付近に当時の遺構が存在すると思われる。第5トレンチからは、溝1条を検出した。時期は奈良時代のもので、前述したように微高地端にあたることから、それに伴う遺構は西方に広がっているものと思われる。第11トレンチからは、東西方向にのびる微高地の南端と、時期不明の柱穴を確認した。第12トレンチでは、弥生時代中期の土器を含む土坑を検出した。第10トレンチからも同時期の遺物が出土していることから、土坑は、中丹広域農道沿いに広がる可能性がある。第13・20トレンチからは、奈良時代の土器が出土した。樹木が立ち並ぶなかでの試掘調査であったため、遺構については不明な点が多い。第14トレンチからは、南北方向の大きな溝を検出したが、遺物は溝上層に多く見られた。第15トレンチからは、上層から中世の柱穴を、下層からは弥生時代中期の溝を3条検出した。第16・17・18・19トレンチは、他のトレンチよりも比較的安定した土と思われ、また焼土の検出から、この付近には住居跡が存在するものと思われる。以上に記したトレンチ以外は、砂と礫の堆積が見られ、出土遺物もかなり少なく摩滅していた。

3. 出土遺物

出土遺物の大半は、弥生時代で中期(4様式)と後期(5様式)のものであった。須恵器(奈良時代)などは量的に少なく、今後の調査に委ねたい。今回の調査で出土した主なものは、第85図のとおりである。

壺1は、筒状の頸部から口縁部が広く外反する広口壺で、口縁端部は「く」字状に下方



第85図 弥生土器実測図

1:15トレンチ 茶褐色土層出土 2・3・4・6・10:1トレンチ 溝内出土
 5・7:6トレンチ 灰白色砂層出土 8・9:5トレンチ 溝内出土
 11:14トレンチ 灰白色土出土

に屈曲する。口縁端部には、凹線文を施した後に円形浮文を貼り付けている。頸部には、凹線文が巡り、わずかにハケメが残る。

壺2は、頸部から大きく外反する壺で、口縁端部は「く」字状に下方に屈曲する。口縁端部には、凹線文を施した後に波状文を巡らせている。頸部には、凹線文が巡り、縦方向のヘラミガキ調整を行っている。口縁部内面には櫛描きによる扇形文を施す。

壺3は、頸部から上方に立ち上がり、口縁部には鋭い凹線文を施す。頸部外面には、ハケメが残る。

壺4は、頸部から上方に立ち上がる壺で、口縁部と頸部に鋭い凹線文を施す。頸部外面には縦方向のハケメが、内面には斜めのハケメが残る。

甕5の体部は卵形を呈し、口縁部で大きく「く」字状に屈曲し、端部は上方に短くつまみ上げる。体部外面には、縦方向のハケを施す。

甕6は、丸みを帯びた体部と「く」字状に短く屈曲する口縁部からなる。頸部には、粘土帯を貼り付けた後、櫛状の工具でキザミメを施す。口縁端部には、部分的にキザミメを施す。体部内外面には、縦方向のハケを施している。

台付鉢7・8は、同一個体のものではないが、台付無頸壺の系譜を引くものと思われ、鉢部はかなり丸みを帯びる。鉢部外面は縦方向のハケメを施しており、内面はハケメとケズリを施す。脚台部は下方に広がり、端部は上方に尖る。円形のスカシを施している。

高杯9・10は、細長い筒状から大きく広がり、脚端部は上方を向き面をなす。円形のスカシを施さない9と施した10がある。いずれも、脚部には細かい凹線文を施している。

器台11は、斜め上方に立ち上がる受け部と屈曲して直立する口縁部からなる。口縁部には擬凹線文がめぐり、ヘラミガキ調整を施している。

主な出土遺物について記してきたが、時期は11のみが第5様式に、他のものは第4様式に属すると思われる。

4. ま と め

今回の調査は、予定路線内の遺構の有無およびその範囲を確認することを目的とした試験調査であり、遺構の性格については本調査に委ねる結果となった。遺構の検出がやや困難ではあるものの、遺構内出土の遺物からは、弥生時代・奈良時代・中世の遺構がこの微高地上に複合していることが判明した。微高地は、さらに由良川に沿って続いており、路線外にもさまざまな遺構が存在するものと思われる。今回は、その一部を報告したにすぎず、その詳細については、本調査に期待するところである。 (岡崎 研一)

圖 版

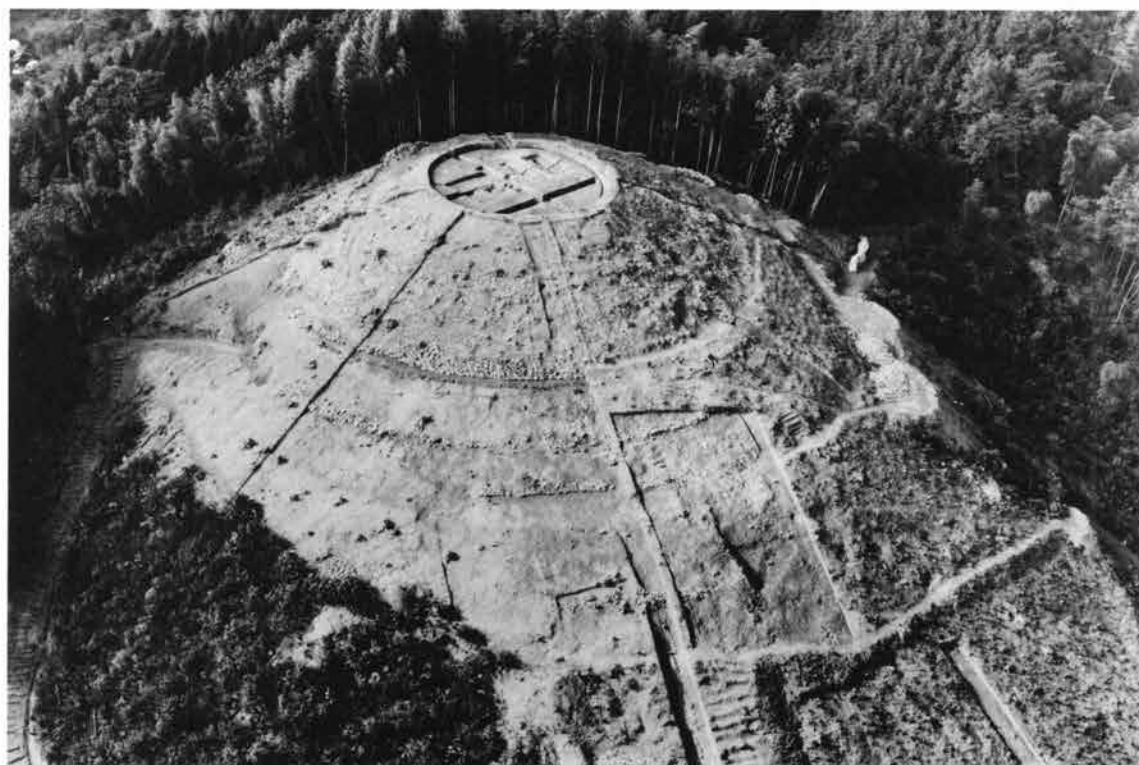
図版第1 私市円山古墳



(1) 遠景 (航空写真, 南から)



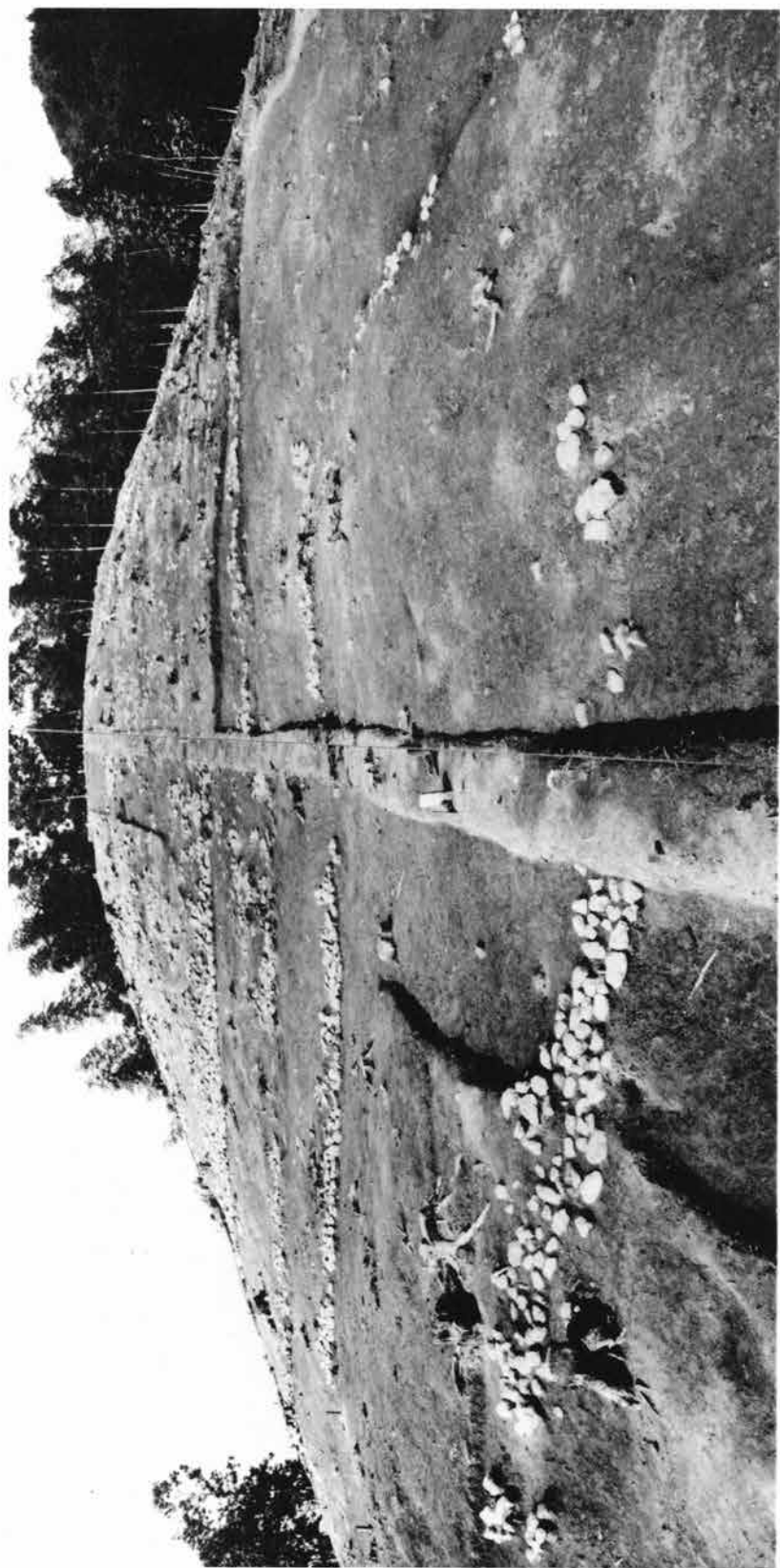
(2) 近景 (南西から)



(1) 全景 (航空写真, 南東から)



(2) 墳丘 (造り出しから)



墳丘全景 (南東から)

図版第4 私市円山古墳



(1) 第I埴輪列 (北東から)



(2) 葺石 (南西から)



(3) 第II埴輪列 (北東から)



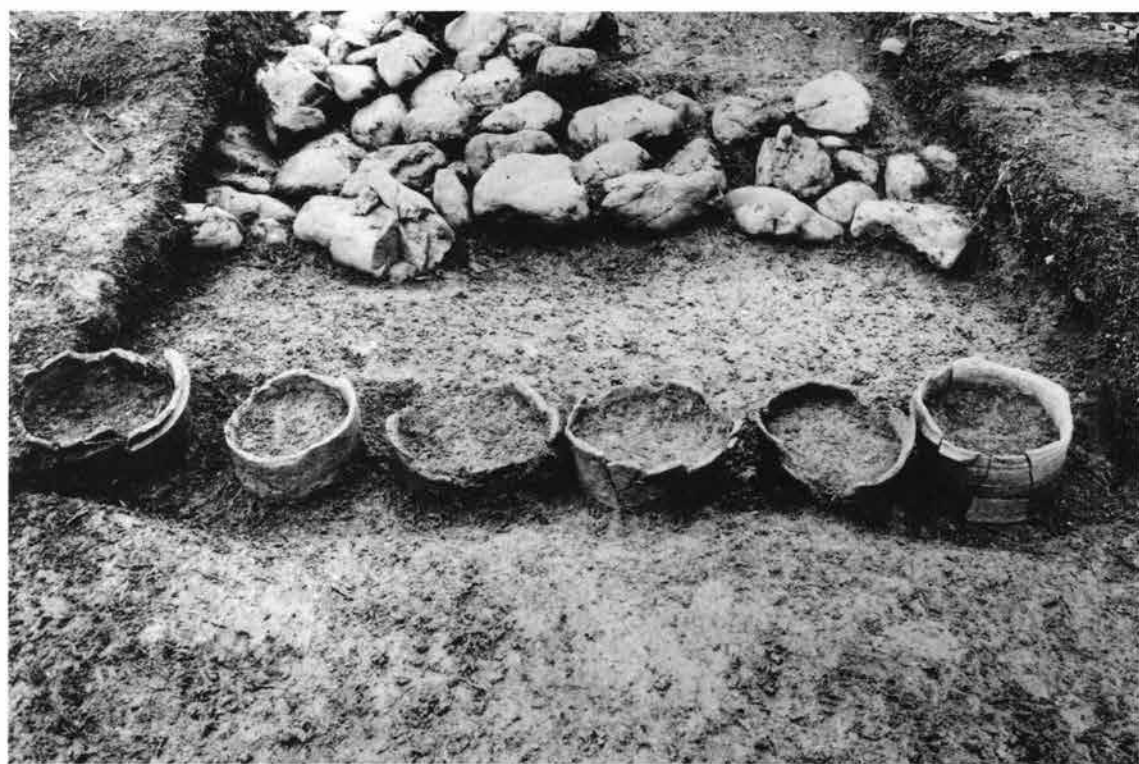
(4) 第II埴輪列 (取り上げ後, 北東から)



(1) 第7トレンチ全景 (東から)



(2) 第6トレンチ全景 (北東から)



(3) 第6トレンチ第I埴輪列 (北東から)



(1) 造り出し基部葺石 (南東から)



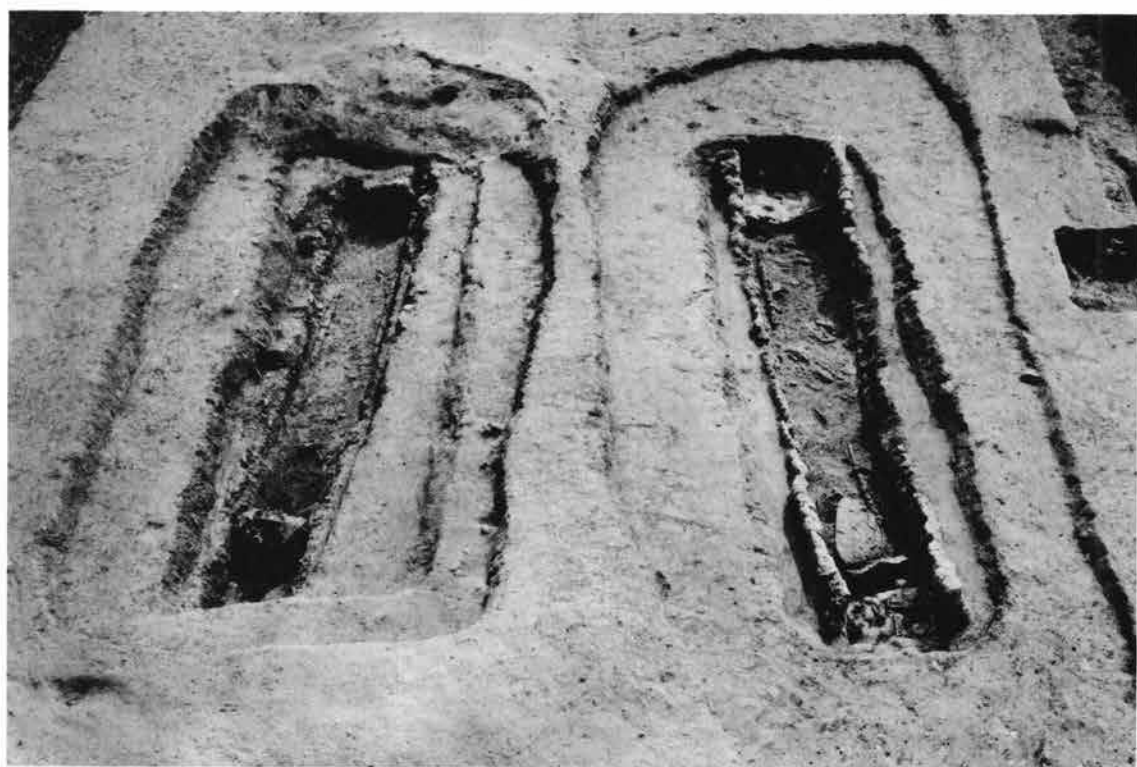
(2) 造り出し埴輪列 (北西から)



(3) 造り出し形象埴輪・土師器出土状況 (南東から)



(1) 第1～3主体部検出状況（西から）



(2) 第1・2主体部全景（西から）



第1主体部全景（東から）



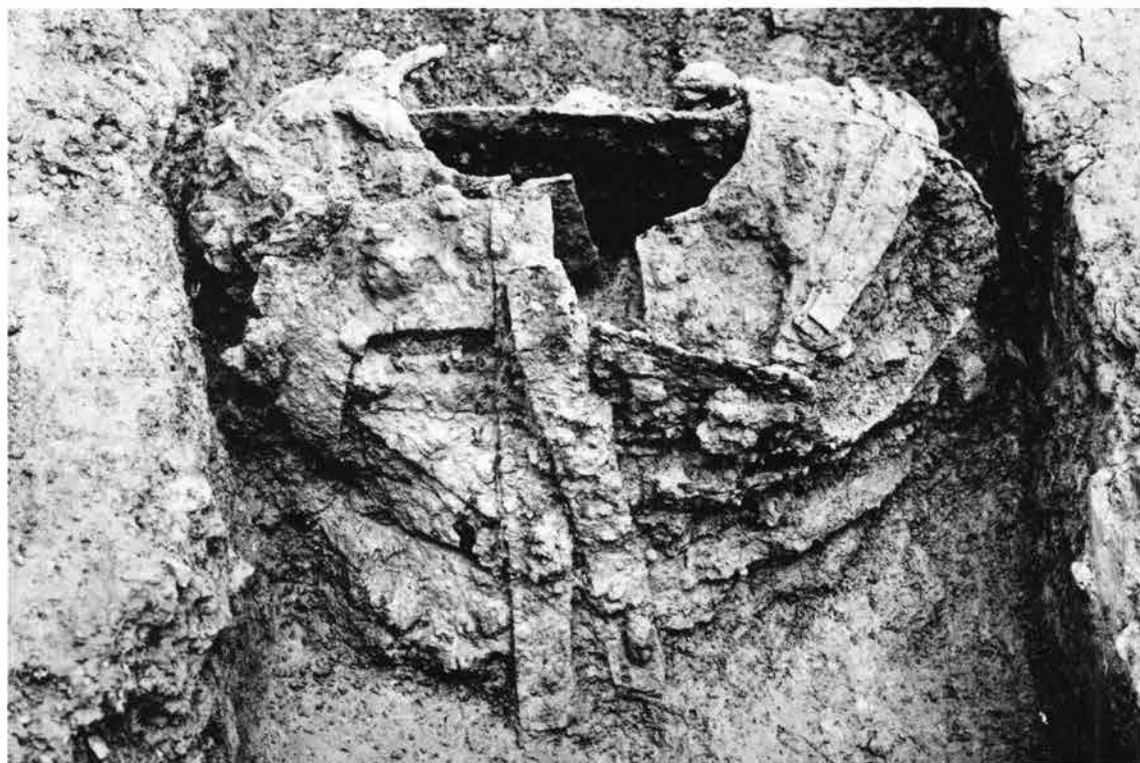
(1) 第1主体部棺上面検出状況(東から)



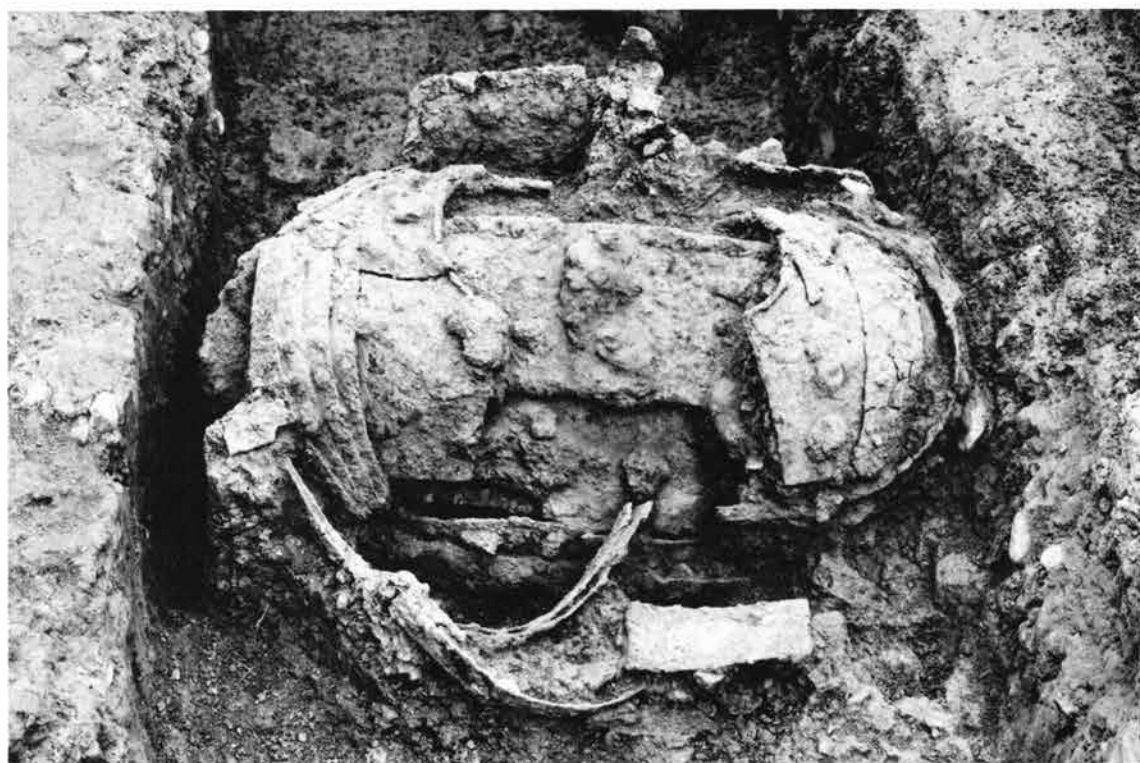
(2) 第1主体部遺物出土状況(1)



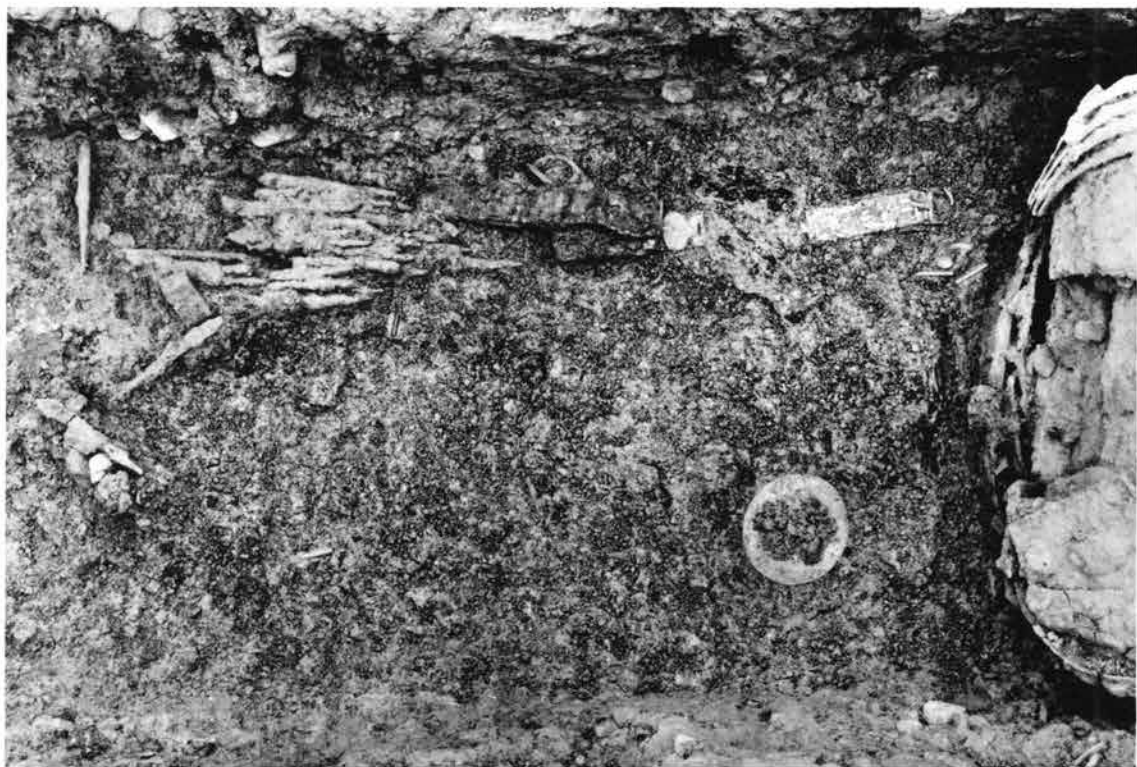
(3) 第1主体部遺物出土状況(2)



(1) 第1主体部短甲・付属具出土状況(西から)



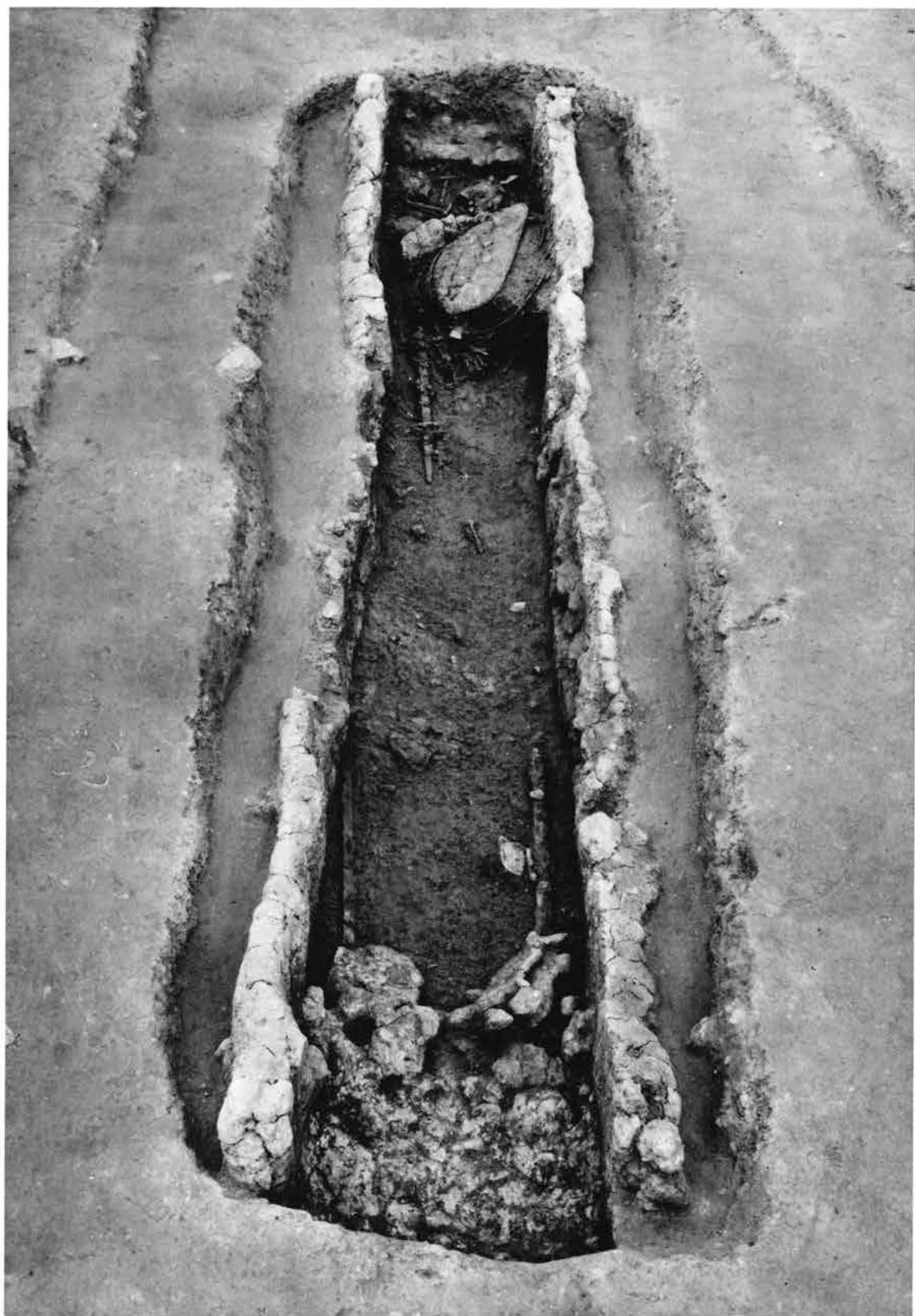
(2) 第1主体部短甲・付属具出土状況(東から)



(1) 第1主体部遺物出土状況(3) (胡籙金具・帶金具・鉄鏃・鏡・玉類・草摺)



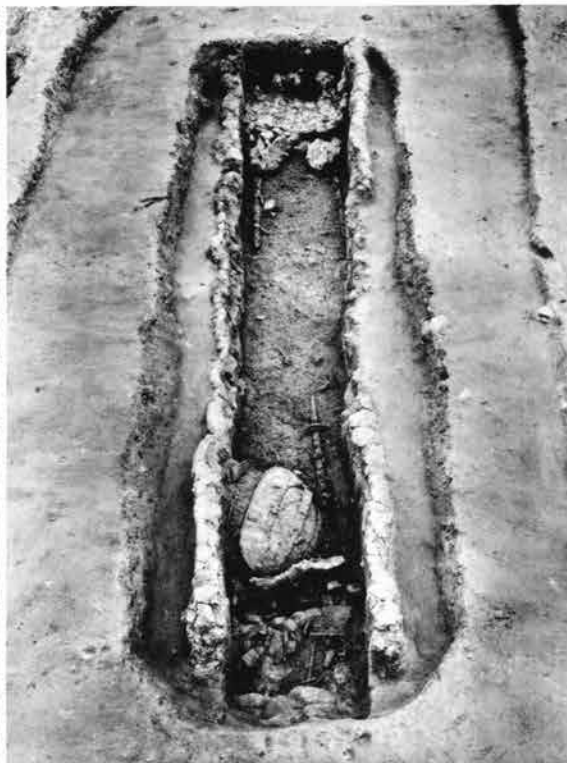
(2) 第1主体部遺物出土状況(4) (胡籙金具・鏡・玉類・草摺)



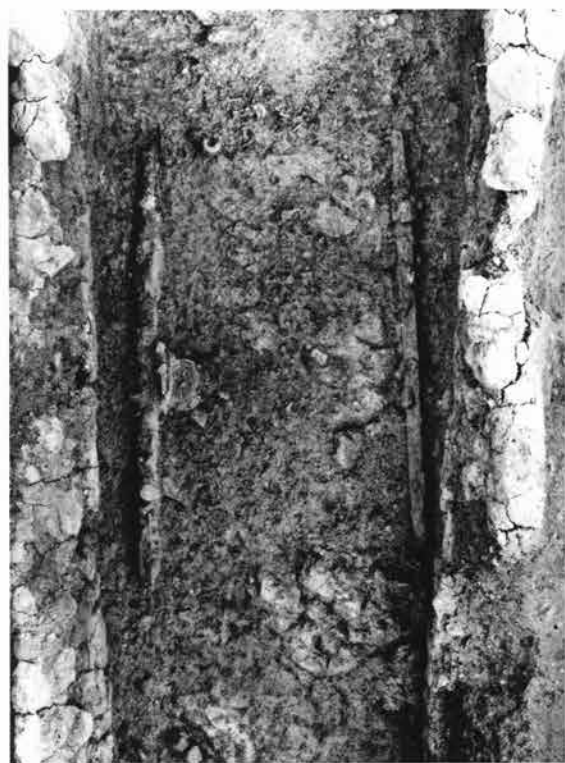
第2主体部全景（東から）



(1) 第2主体部被覆粘土検出状況（西から）



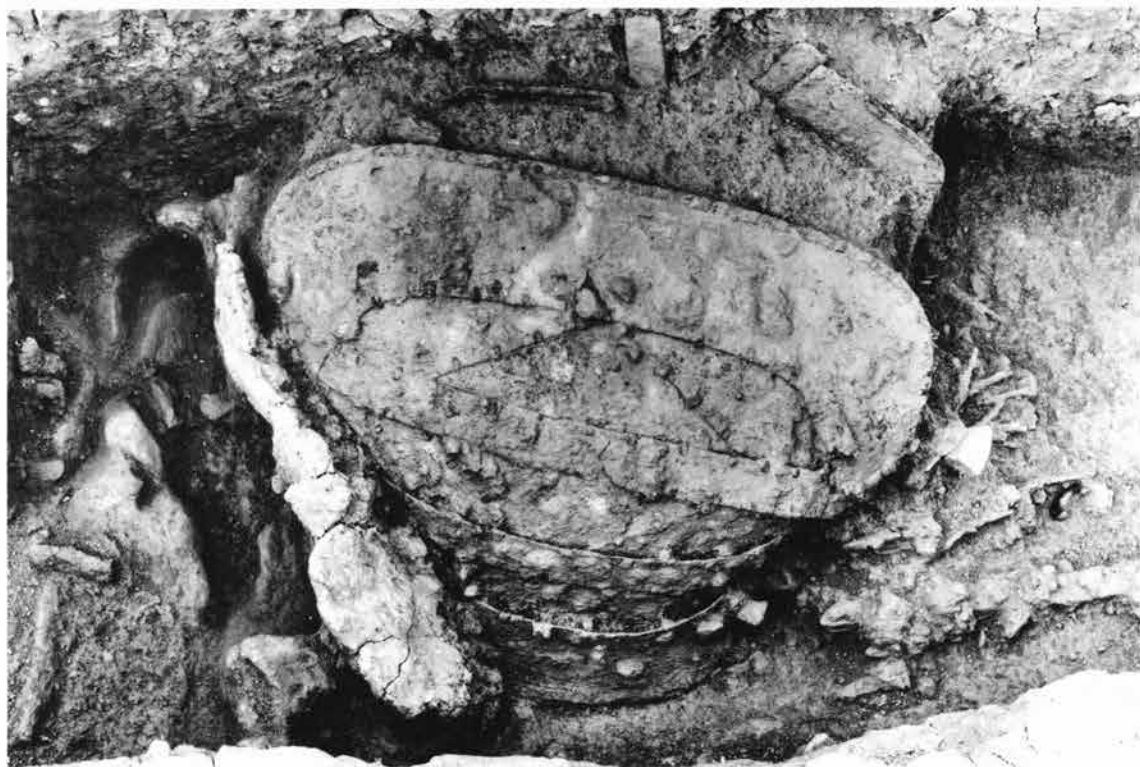
(2) 第2主体部全景（西から）



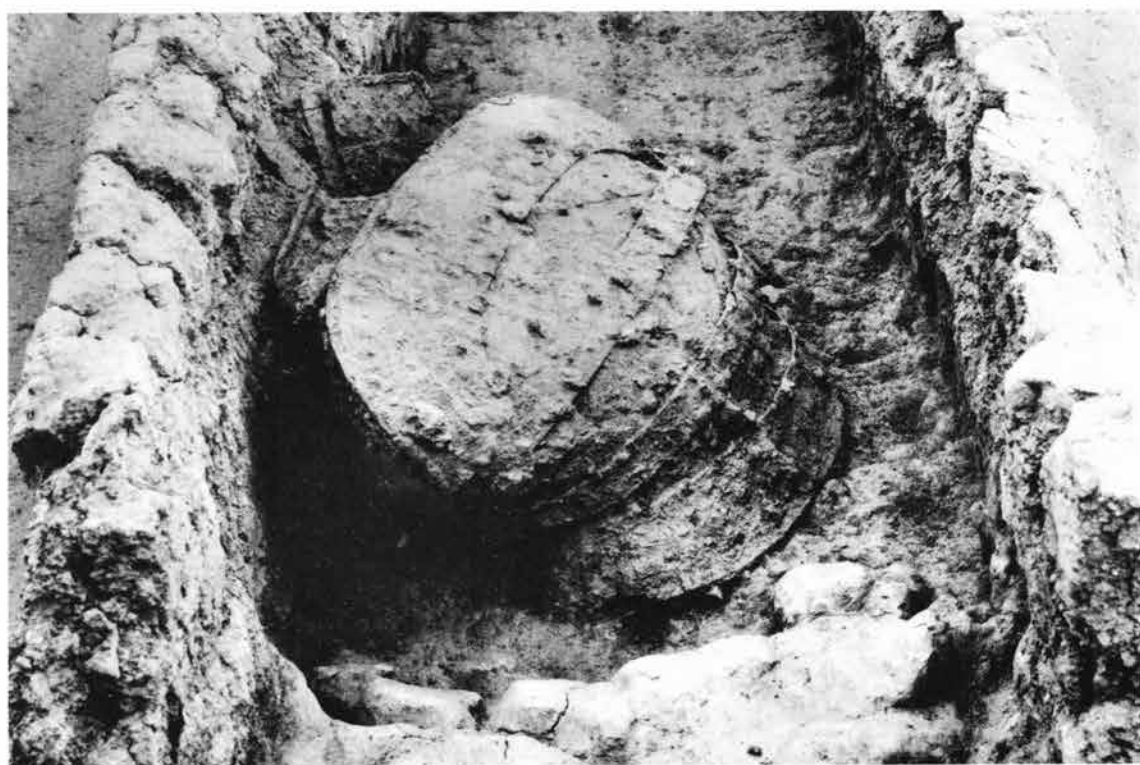
(3) 第2主体部遺物出土状況
（鉄刀・刀子・鏡・玉類）



(4) 第2主体部遺物出土状況
（短甲・鉄刀・鉄鎌・玉類）



(1) 第2主体部短甲出土状況（南から）



(2) 第2主体部短甲出土状況（西から）



(1) 第2主体部鏡・刀子出土状況（北から）



(2) 第2主体部農工具類出土状況（西から）



(1) 第2主体部東側被覆粘土横断面（西から）



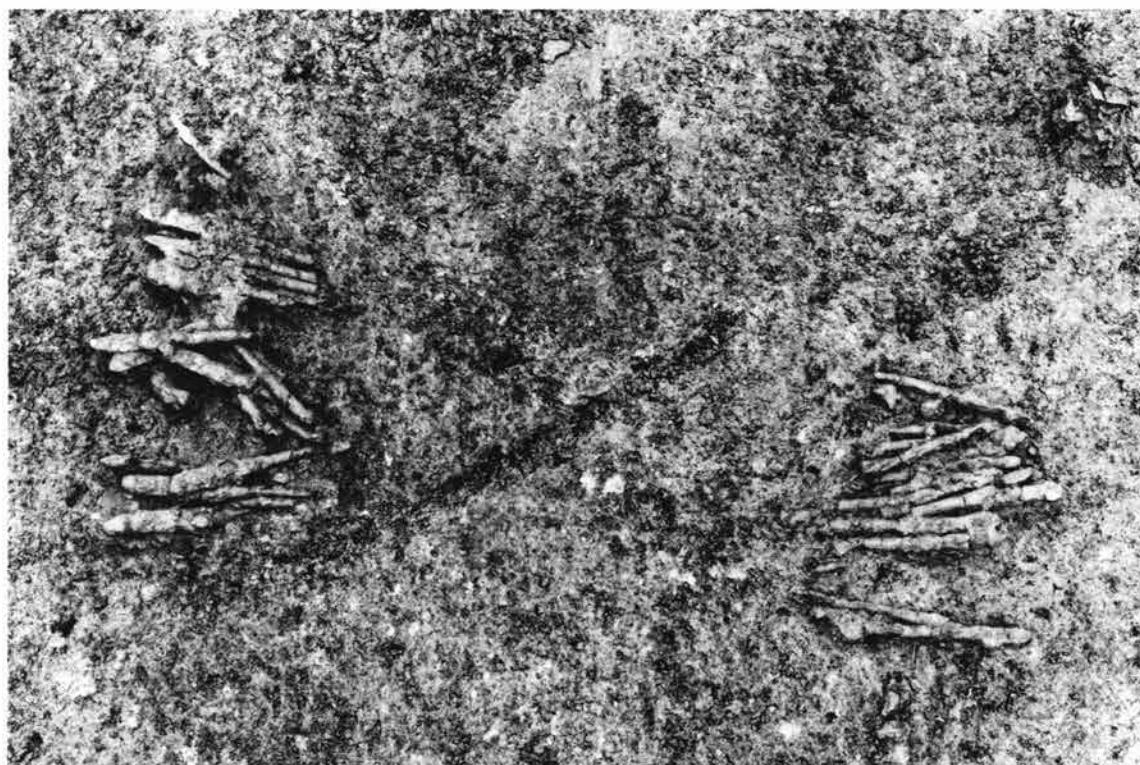
(2) 第2主体部棺側横断面（東から）



(1) 第3主体部全景（南から）



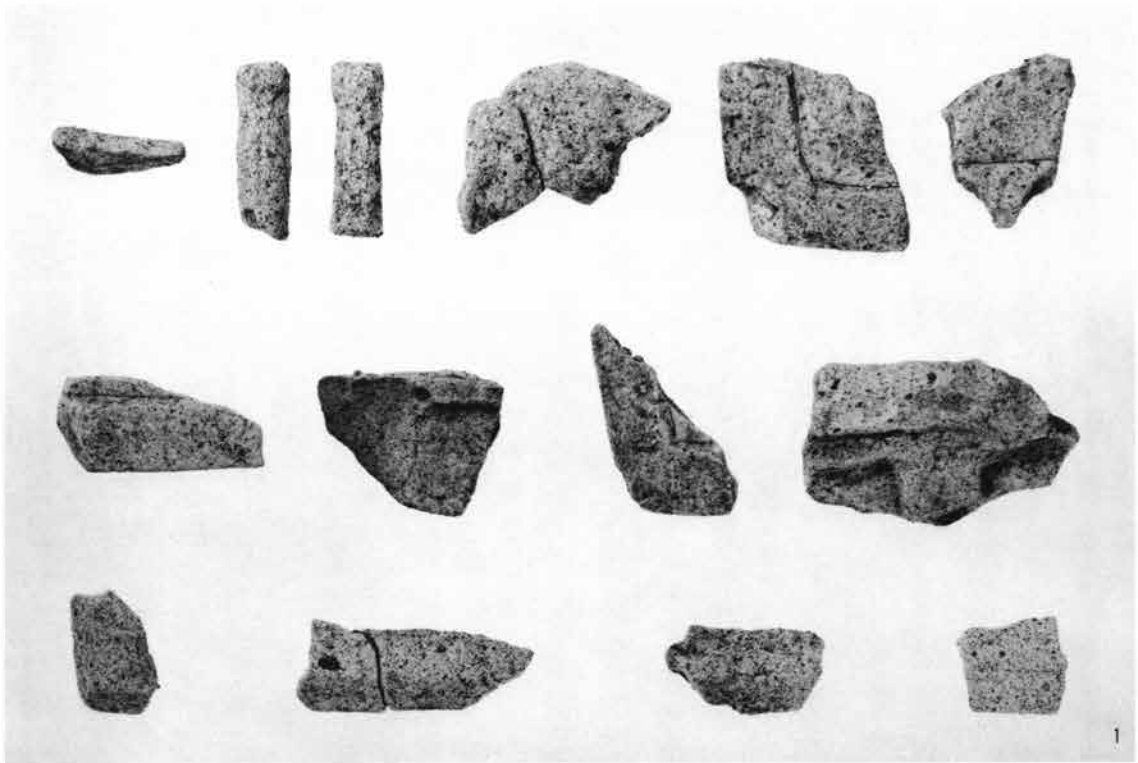
(2) 第3主体部全景（東から）



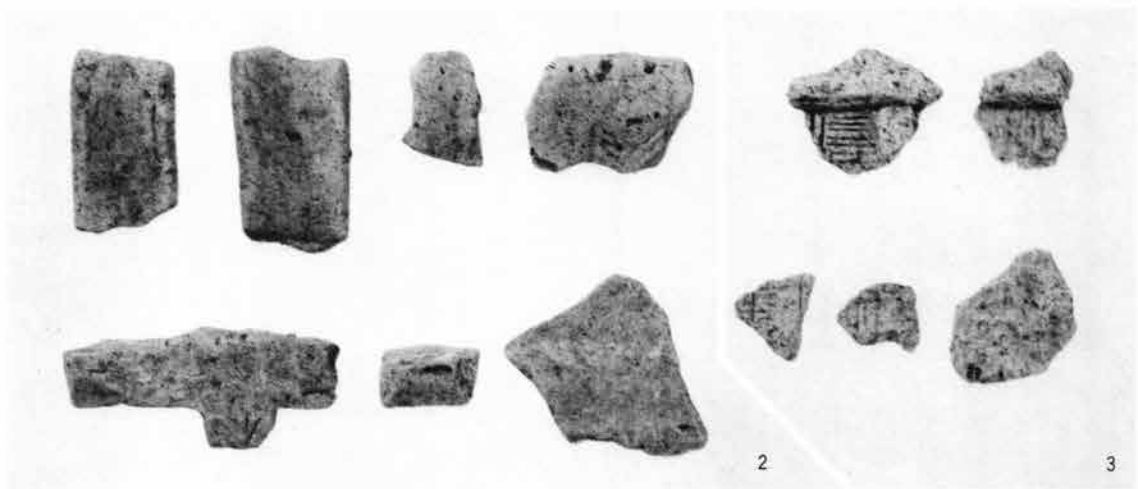
(1) 第3主体部鉄鏃出土状況（東から）



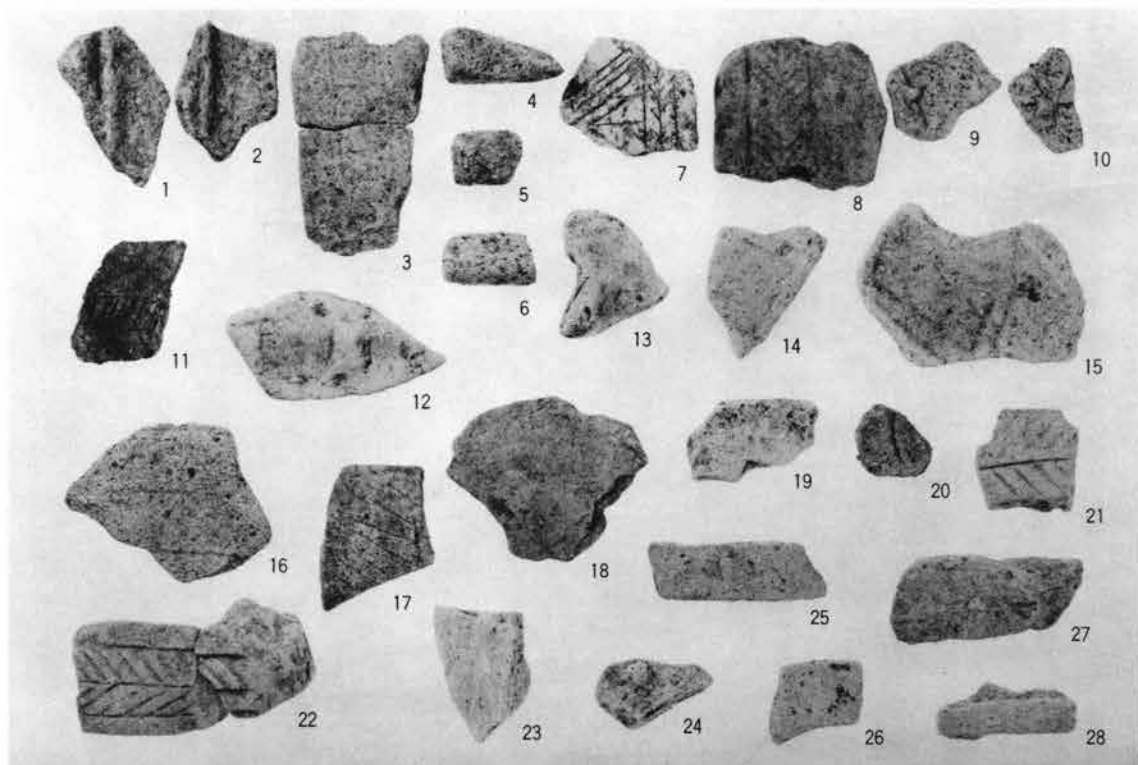
(2) 第3主体部農工具類出土状況（北から）



(1) 家形埴輪 1



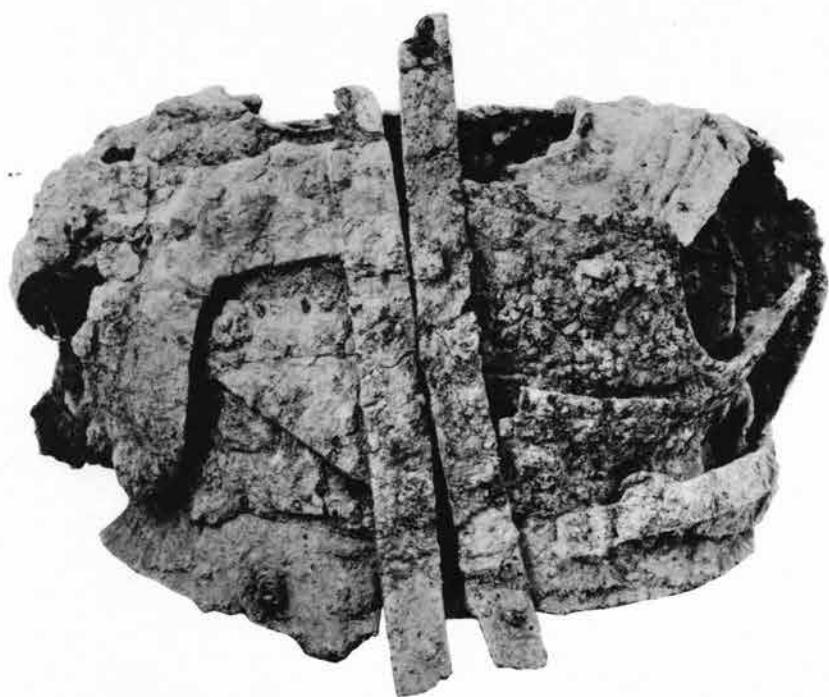
(2) 家形埴輪 2～4



(1) 形象埴輪



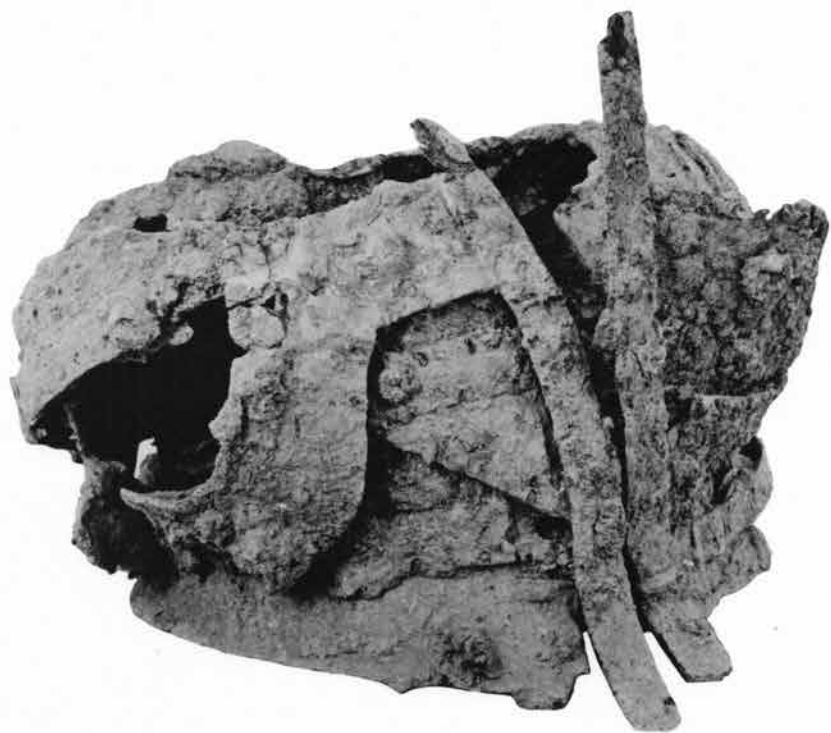
(2) 円筒埴輪



(1) 第1主体部短甲・付属具（前胴）



(2) 第1主体部短甲・付属具（後胴）

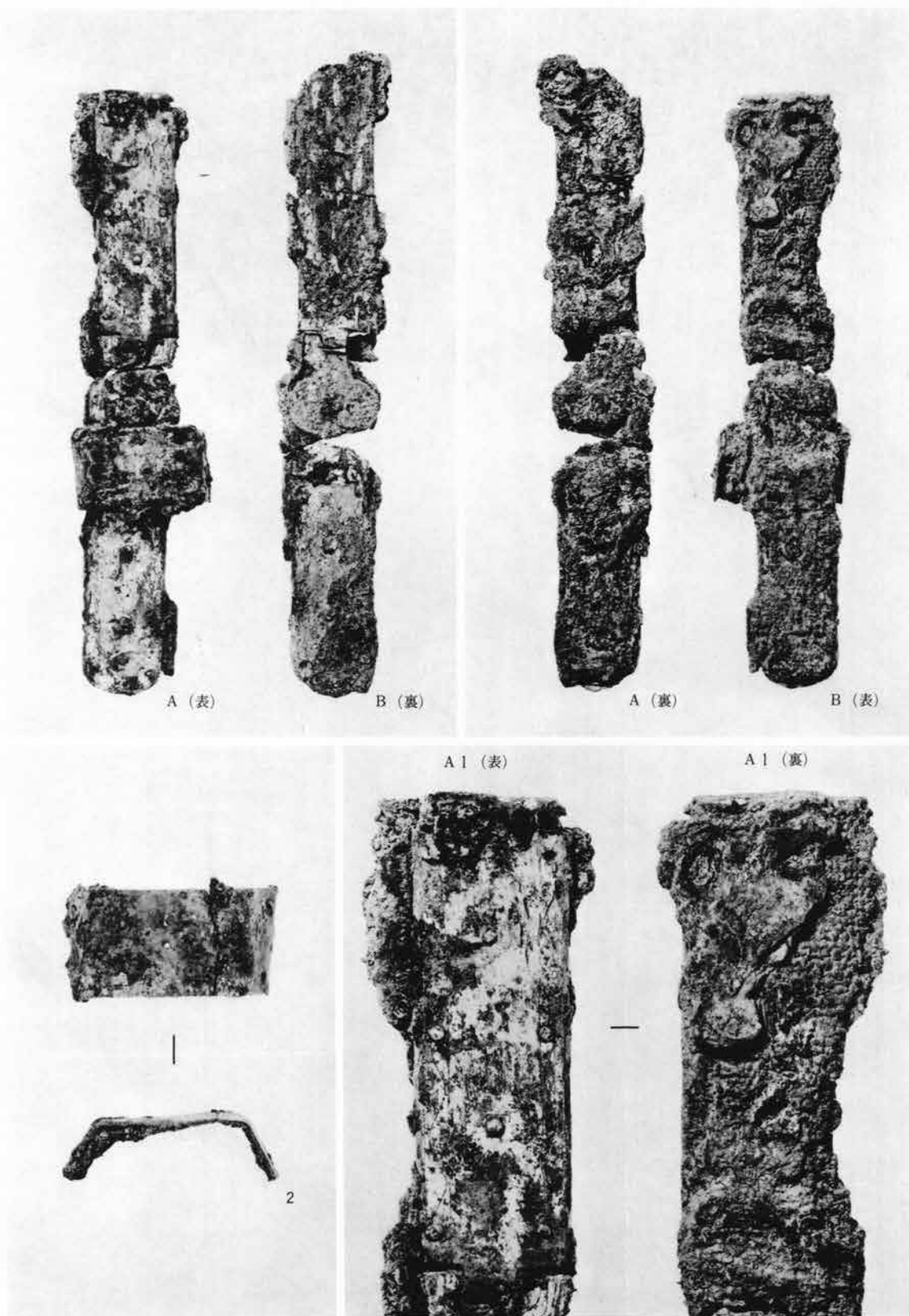


(1) 第1主体部短甲

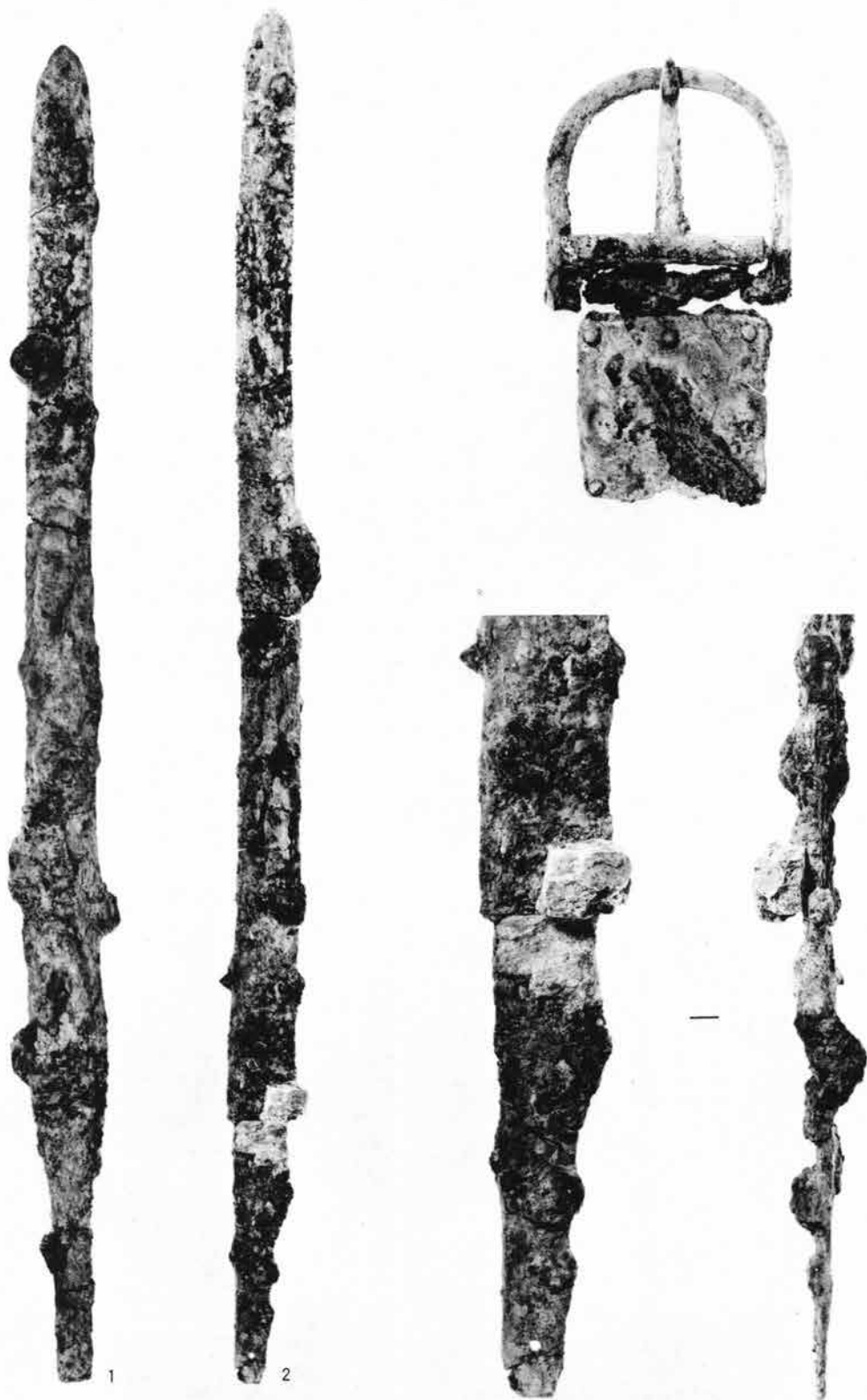


(2) 第1主体部短甲（左側面）

(3) 第1主体部短甲（右側面）



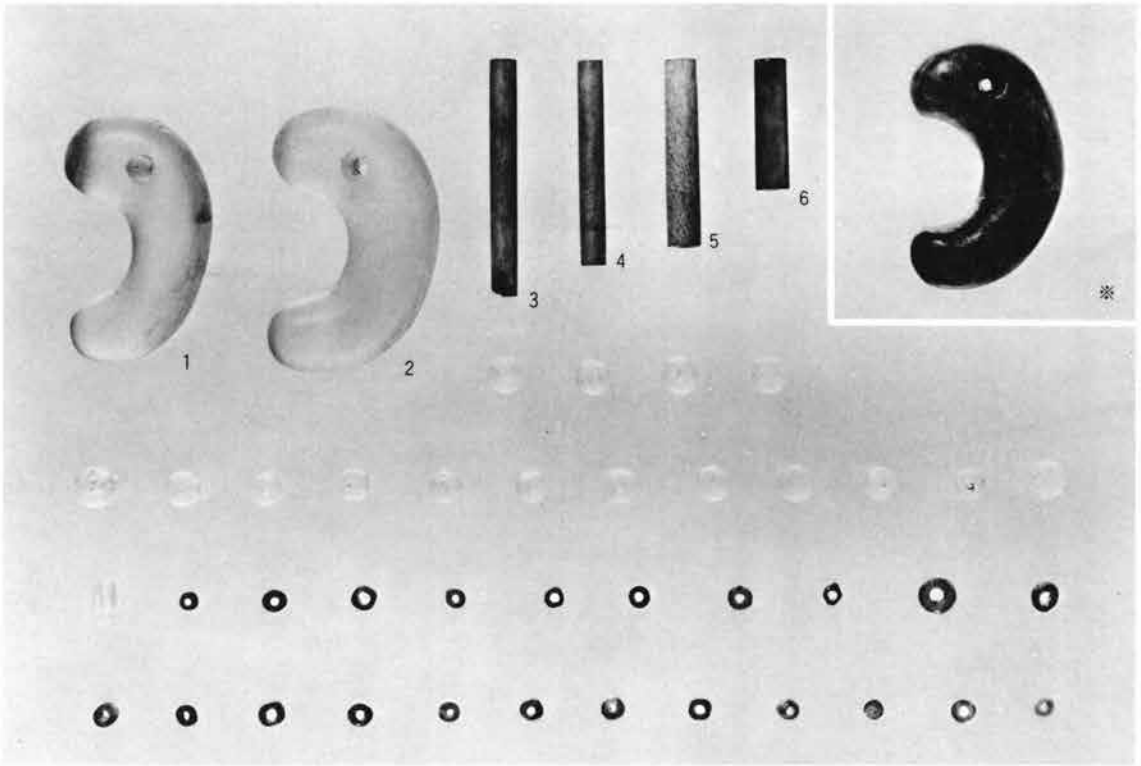
第1 主体部胡録金具



第1 主体部帯金具・鉄剣



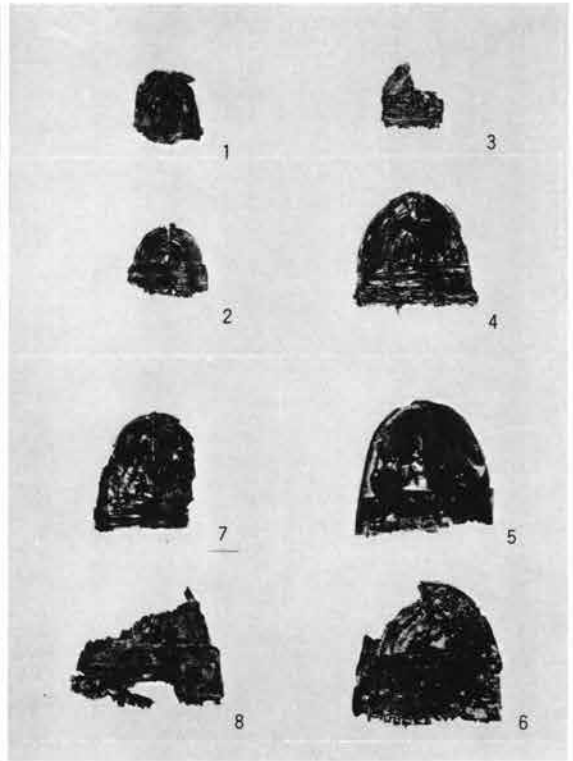
第1 主体部鉄鏃



(1) 第1主体部玉類 (*のみ第3主体部上部)



(2) 第1主体部鏡



(3) 第1主体部豎楯

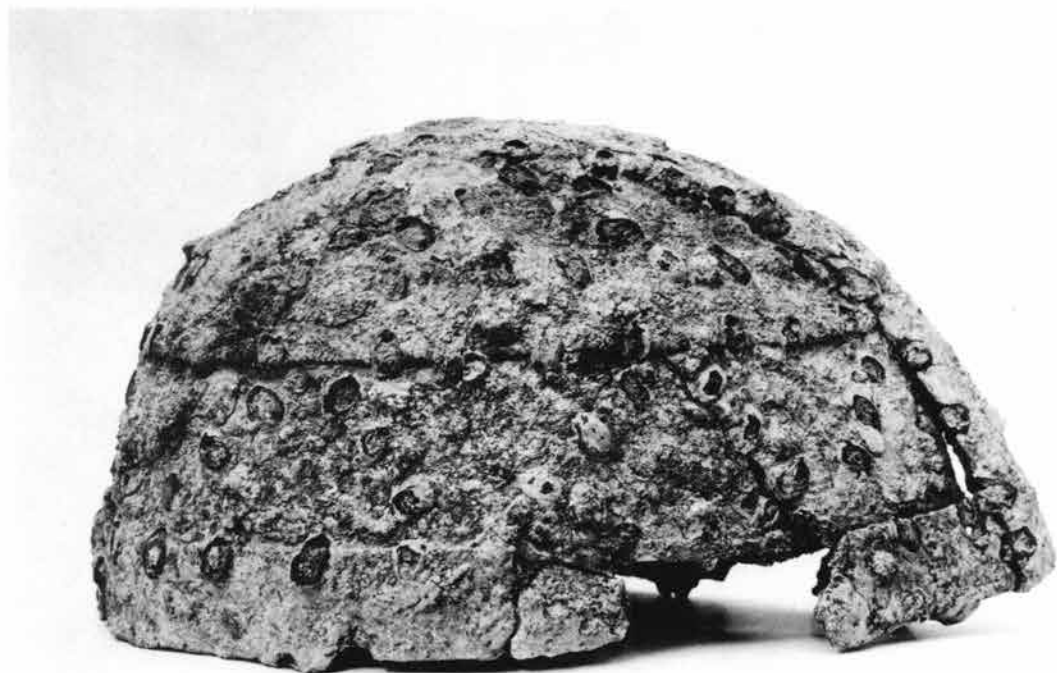


(1) 第2主体部冑

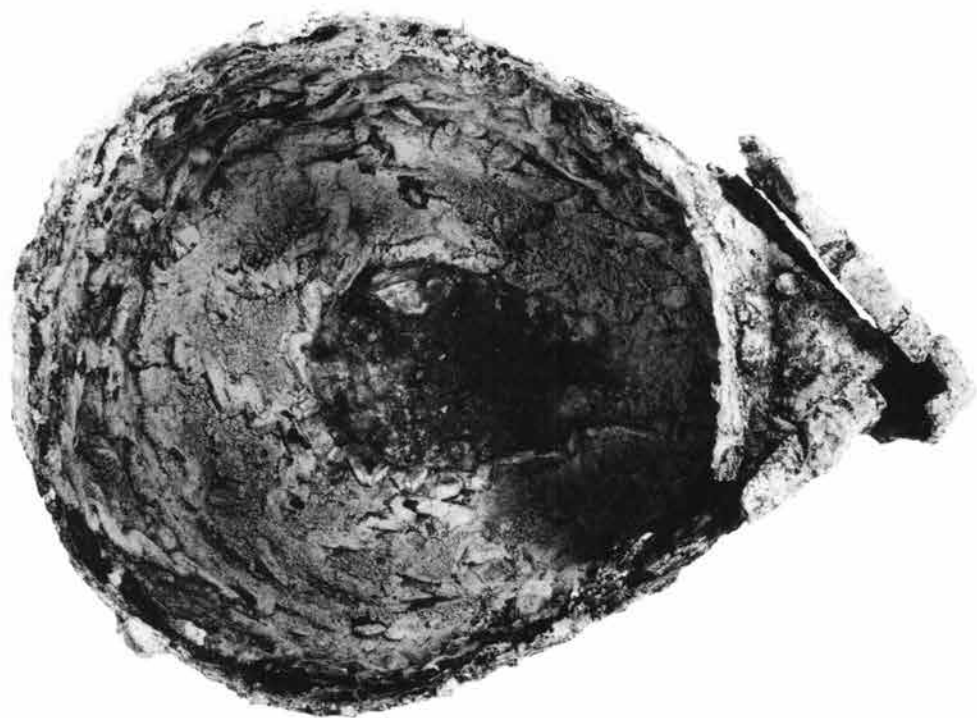


(2) 第2主体部冑・鋳（前部）

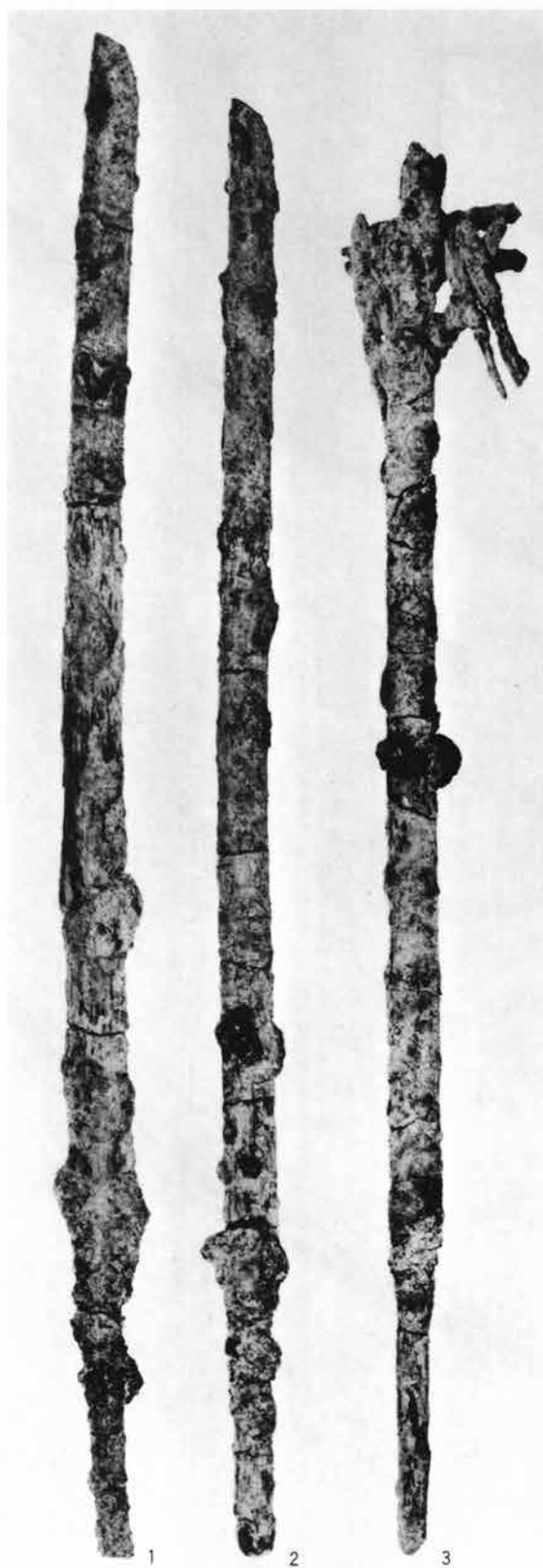
(3) 第2主体部冑・鋳（後部）



(1) 第2主体部冑 (右側面)



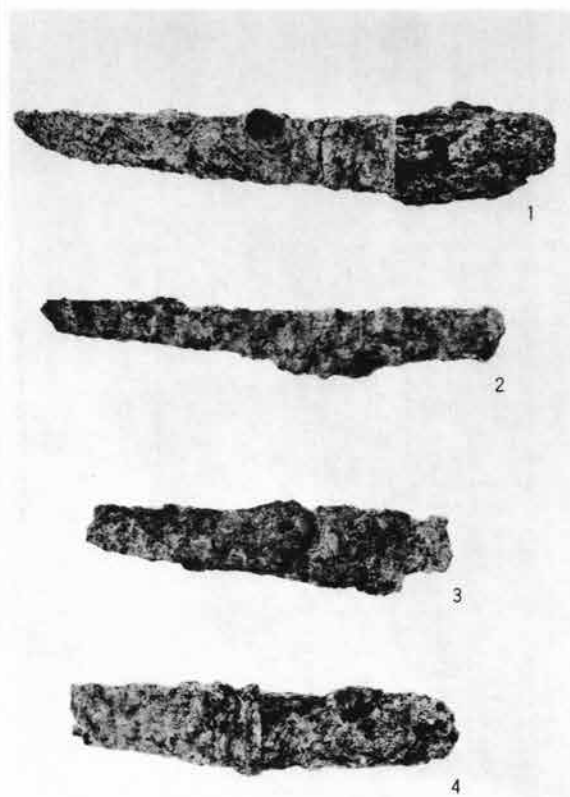
(2) 第2主体部冑 (内面)



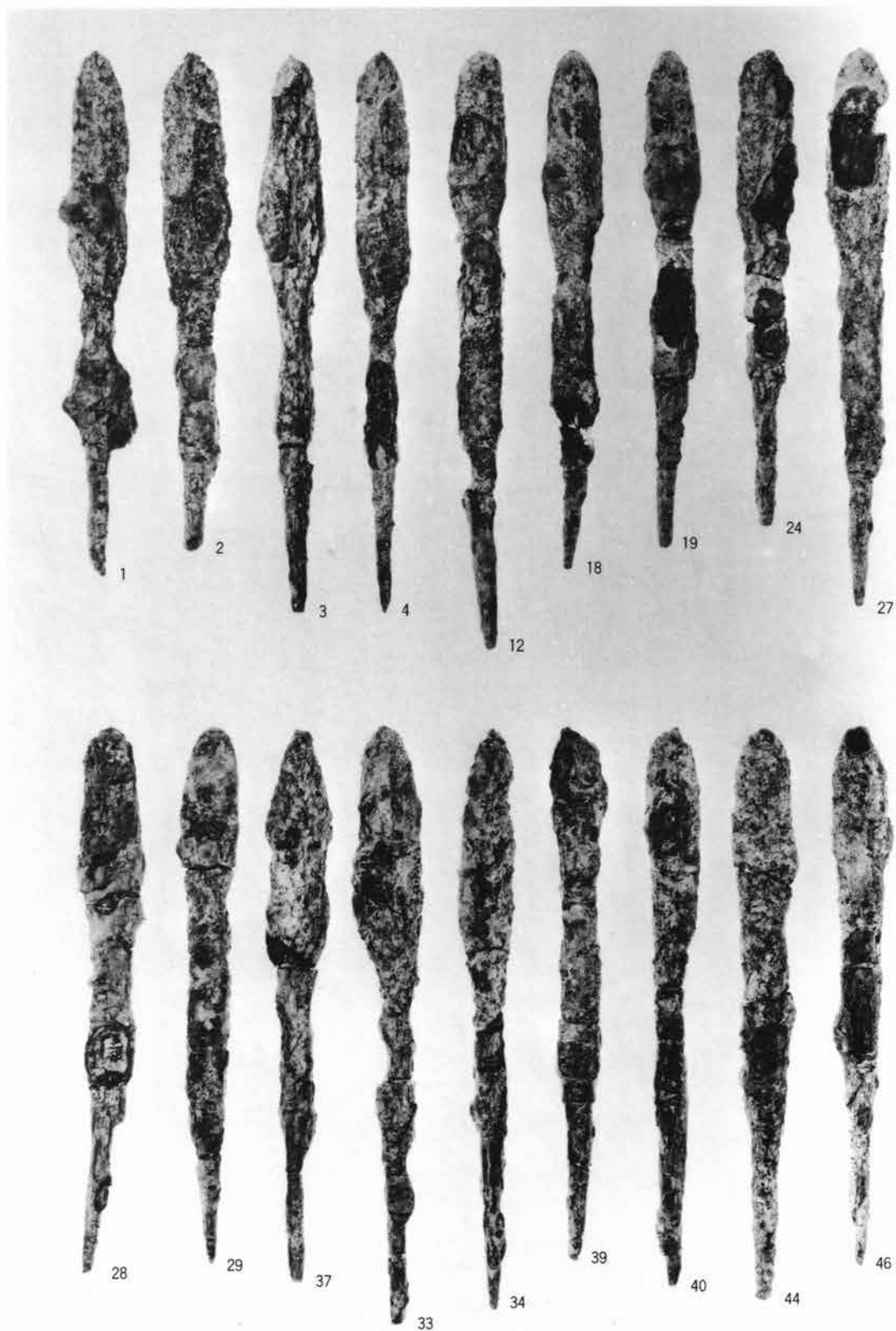
(1) 第2主体部鉄刀

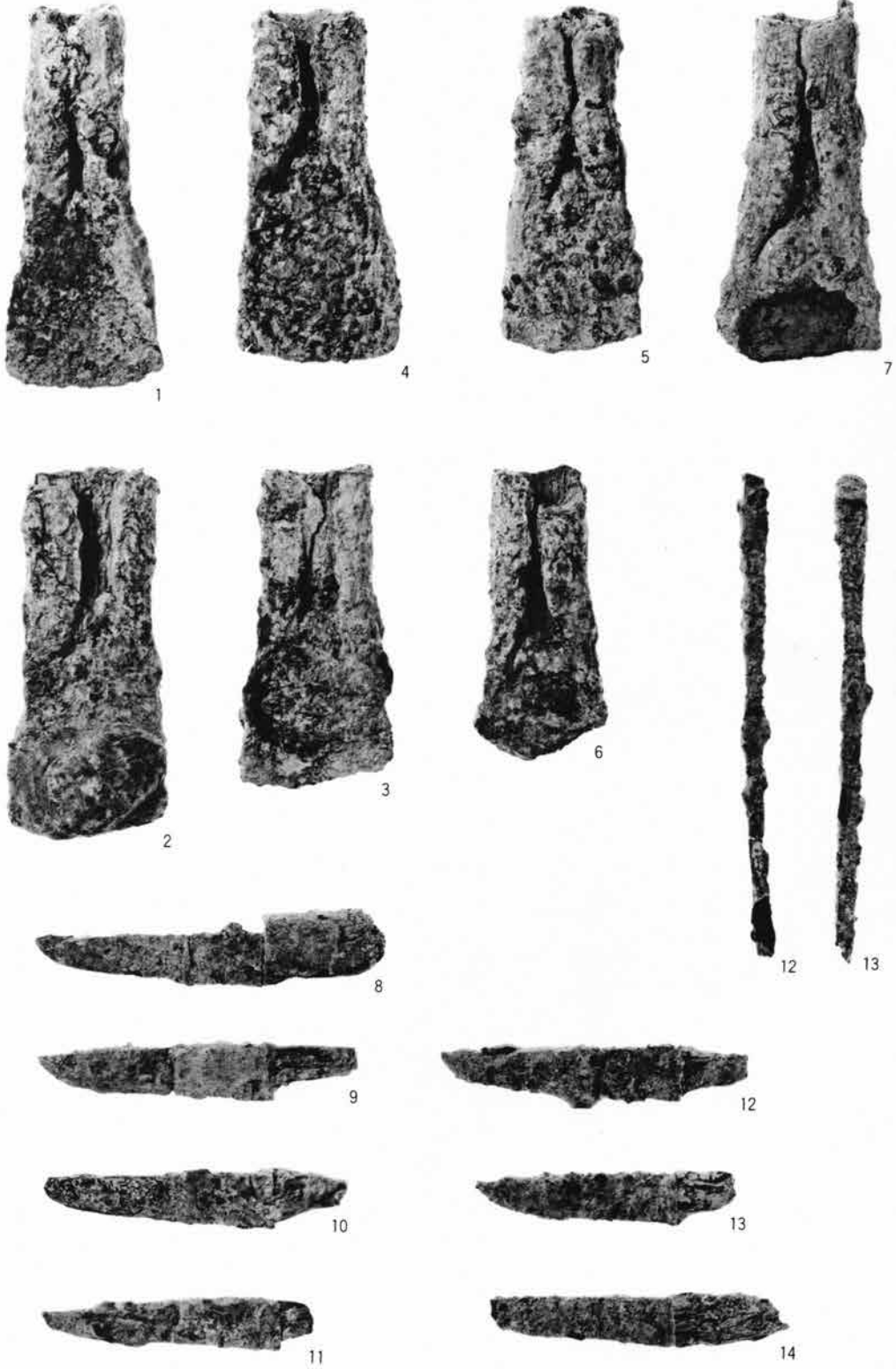


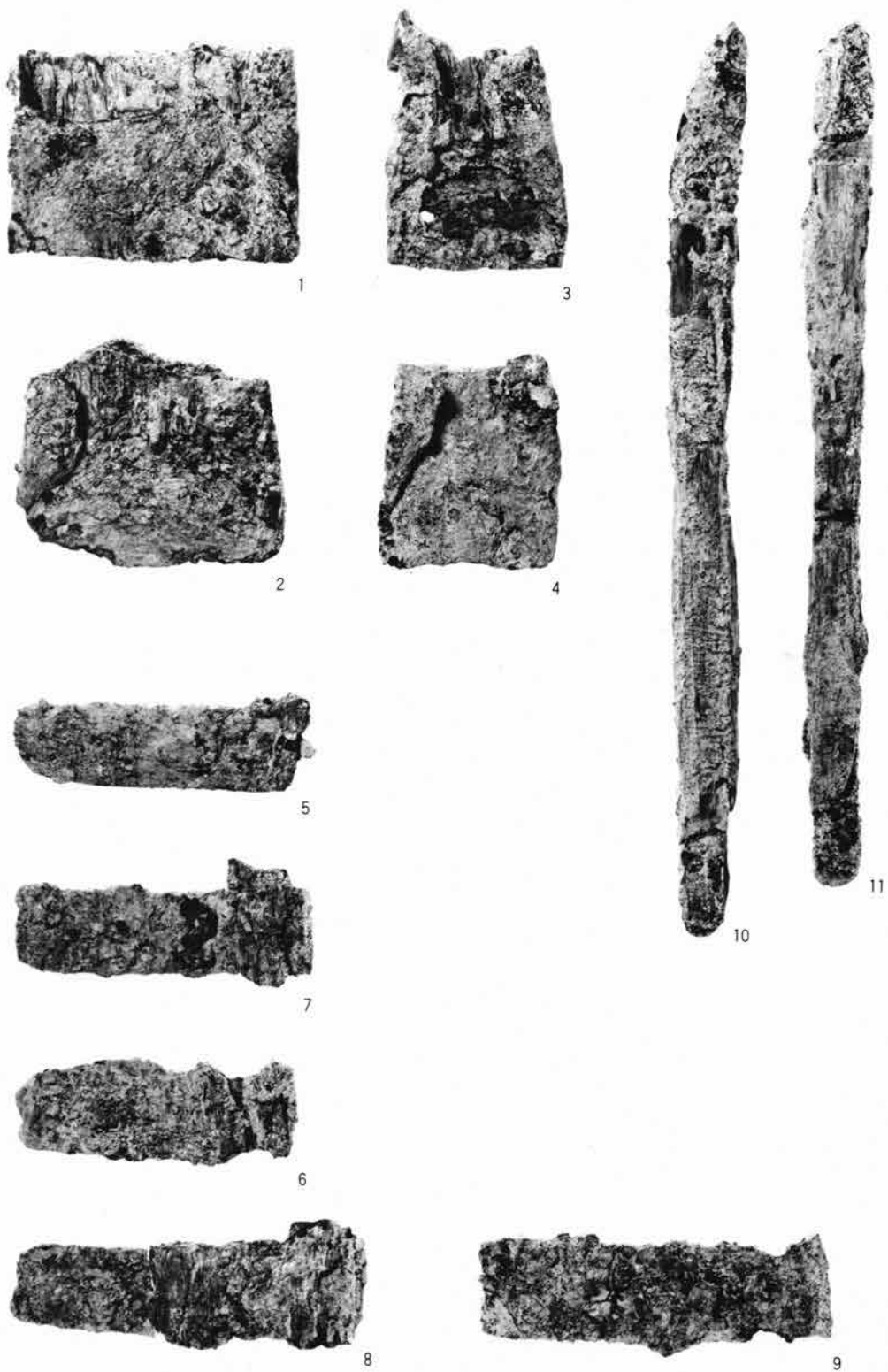
(2) 第2主体部鏡

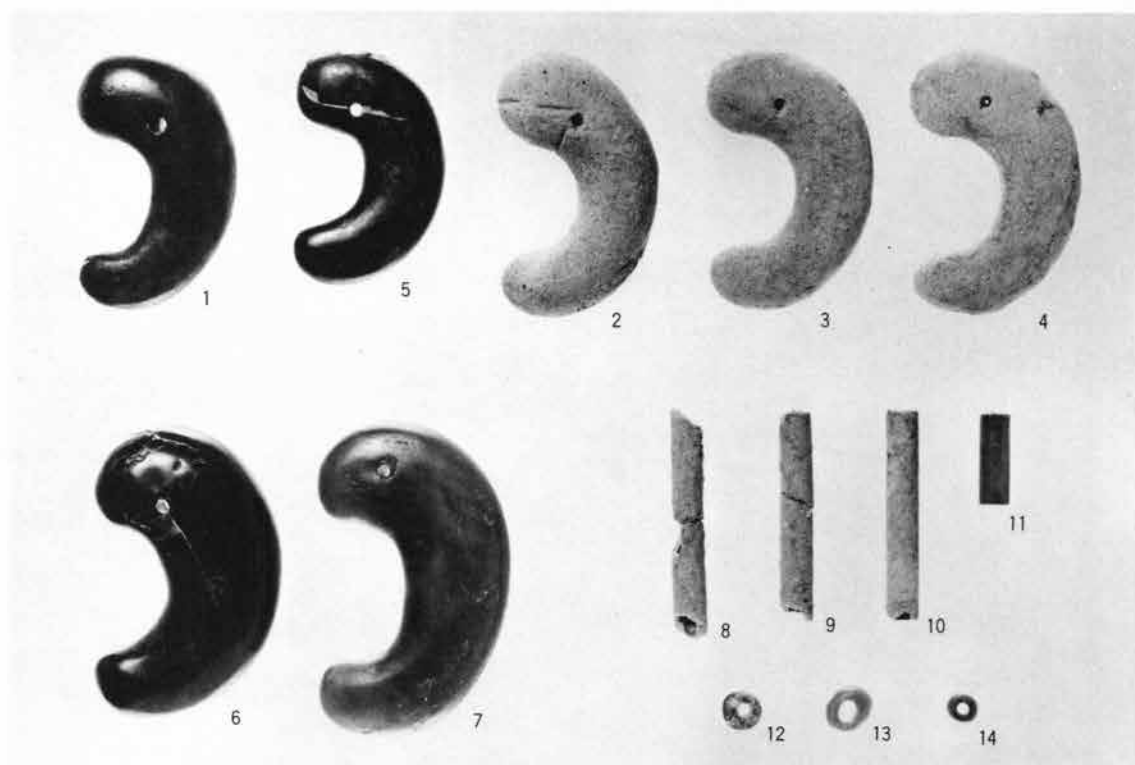


(3) 第2主体部刀子

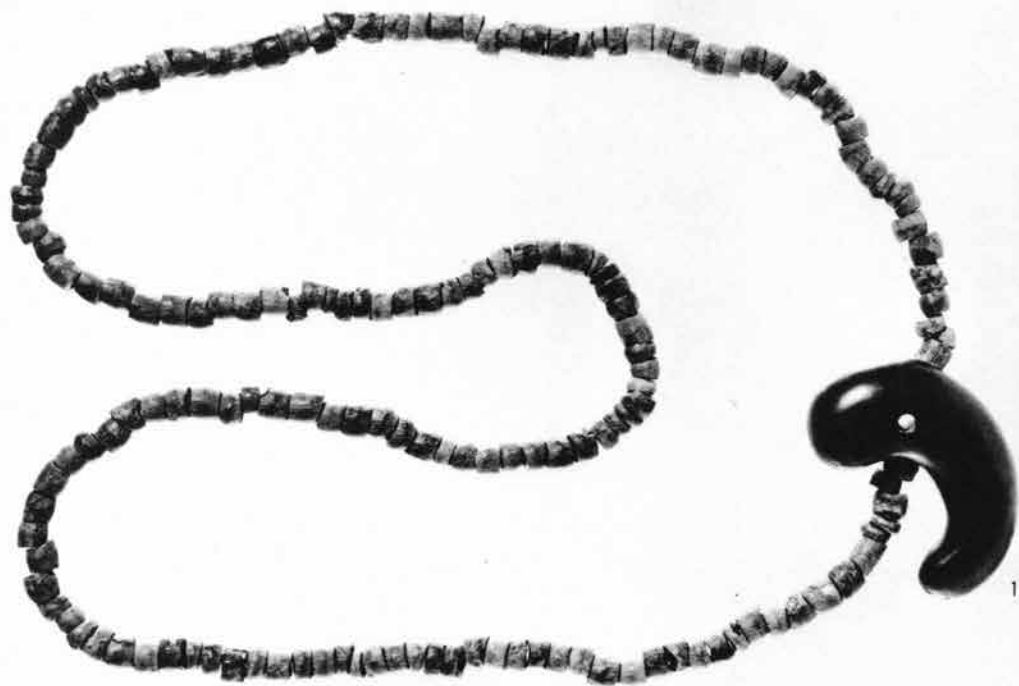




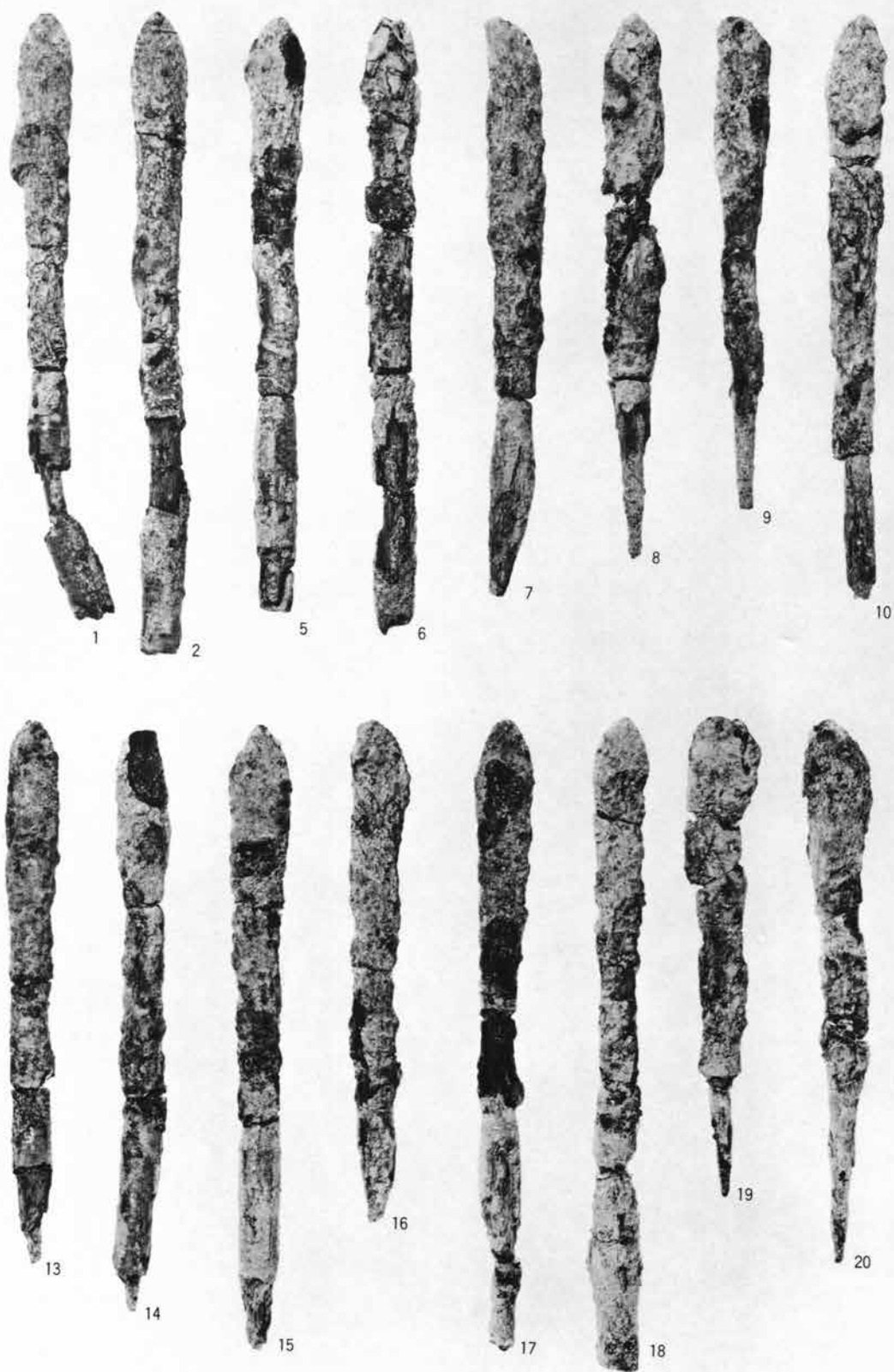




(1) 第2主体部玉類



(2) 第2主体部玉類



第3主体部鉄鏃(1)



第3主体部鉄鏃(2)



1



3



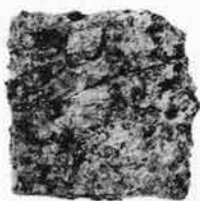
4



2



5



8



6



7



(1) 第Ⅱ調査区三宅4号墳東部周溝（東北から）



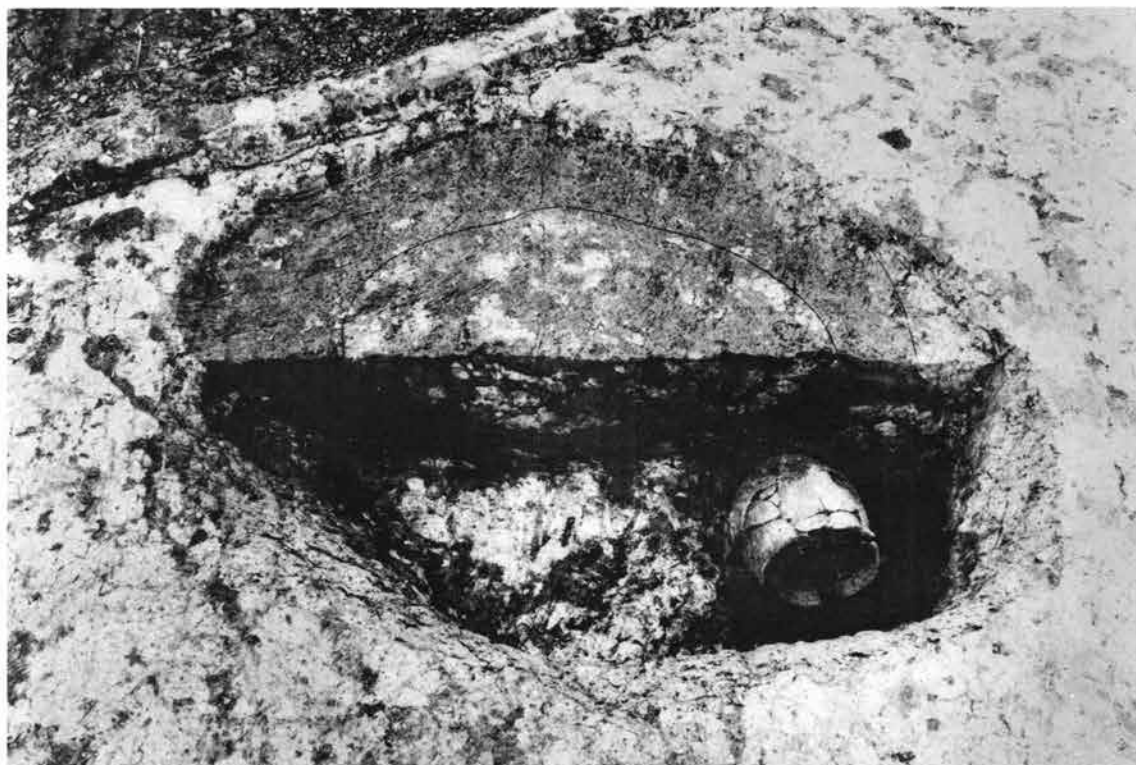
(2) 第Ⅱ調査区北部畑地および中世溝（西南から）



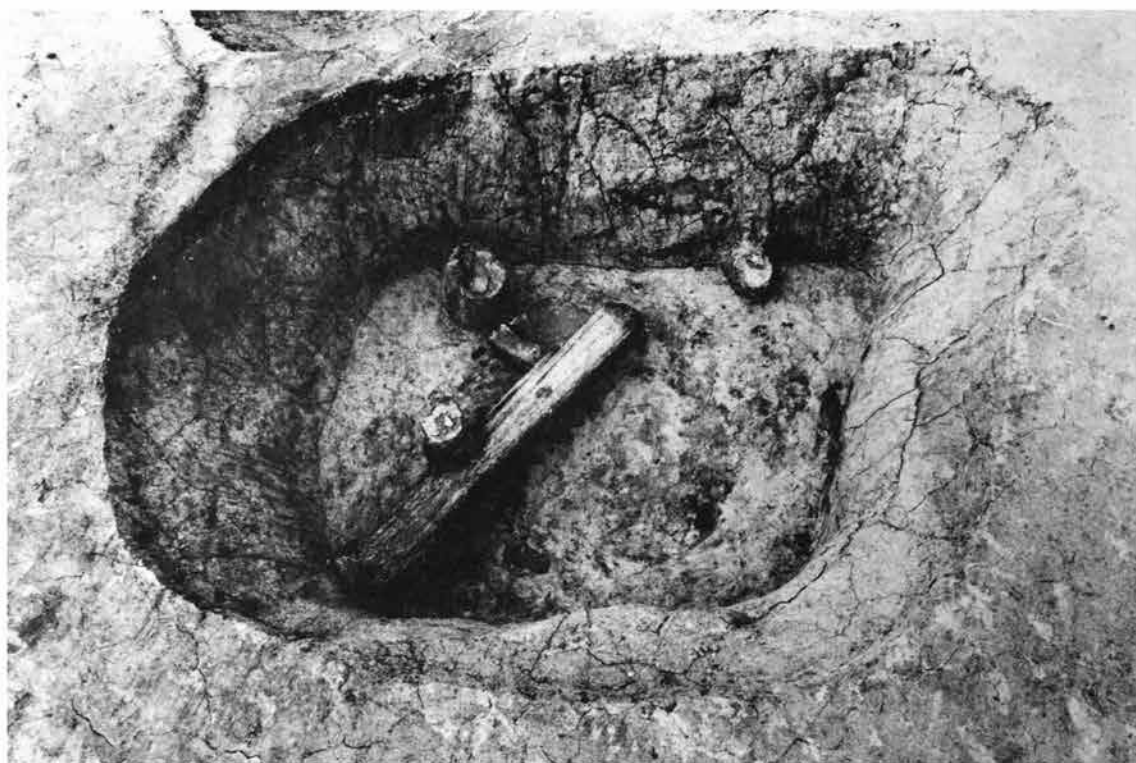
(1) 第Ⅱ・第Ⅵ調査区S D04 (北から)



(2) 第Ⅳ調査区土坑群 (北から)



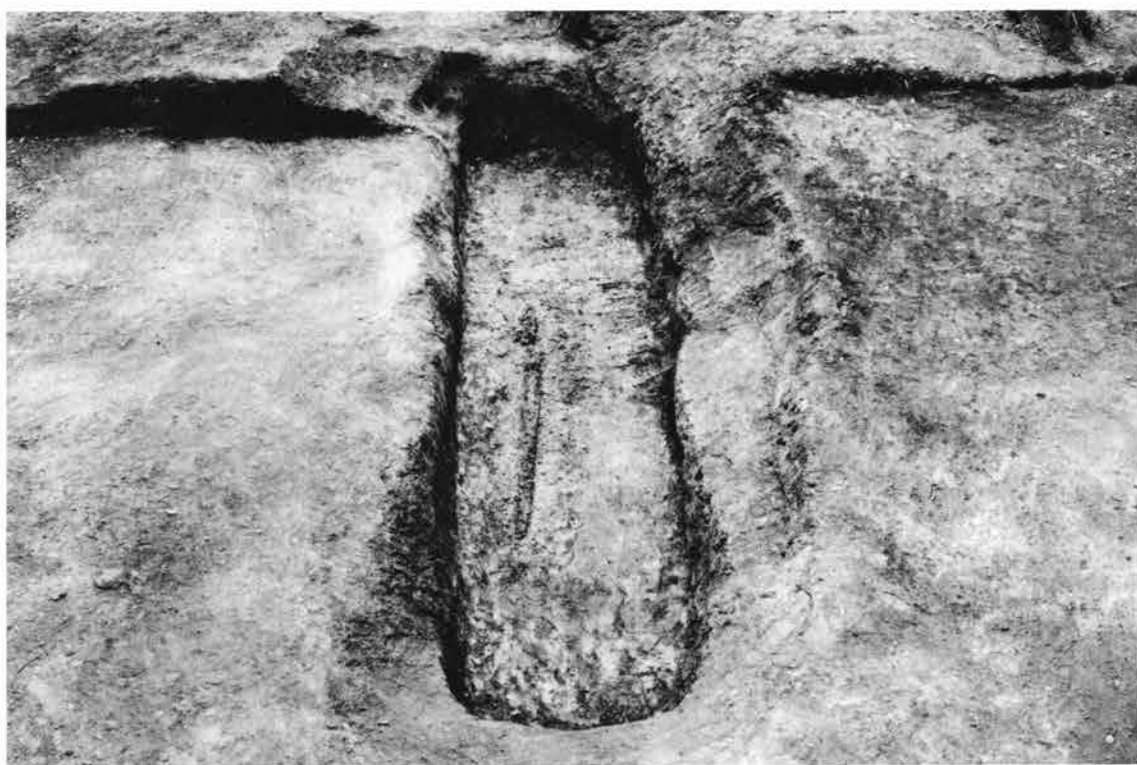
(1) S K 497土器出土状況（西南から）



(2) S K 515遺物出土状況（東南から）



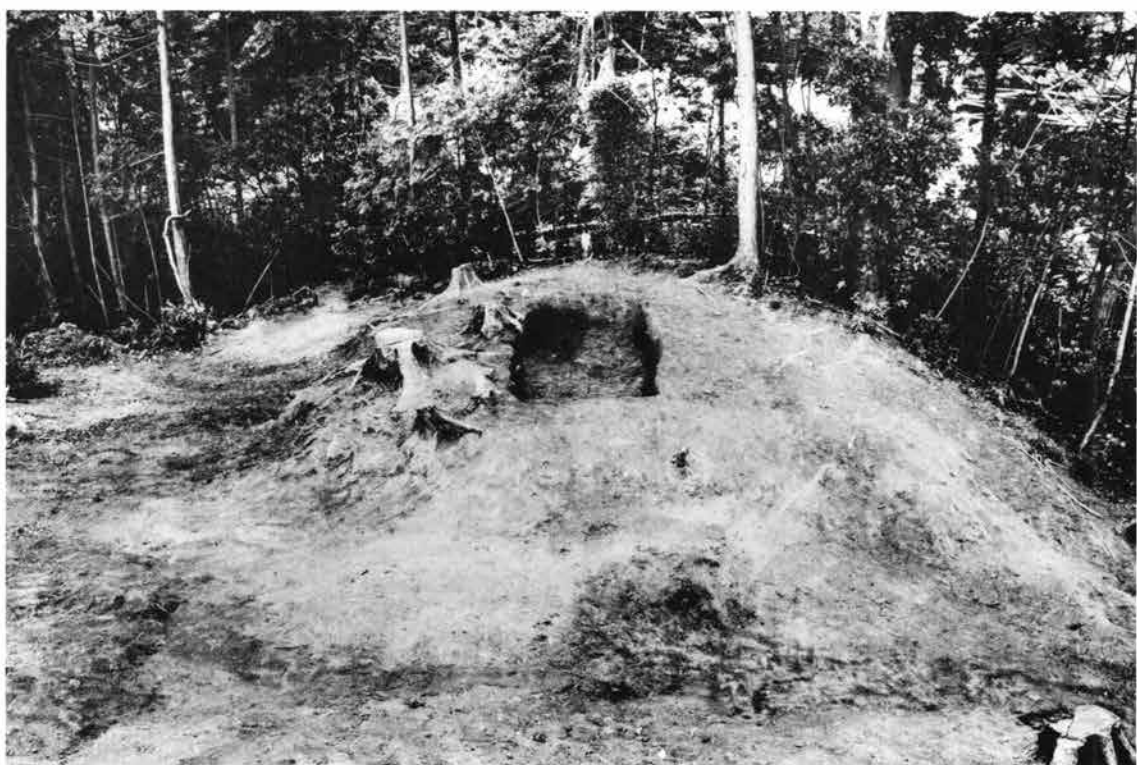
(1) E地点掘削状況



(2) 6号墳主体部検出状況



(1) 1号墳全景 (掘削前)



(2) 1号墳全景 (掘削後)



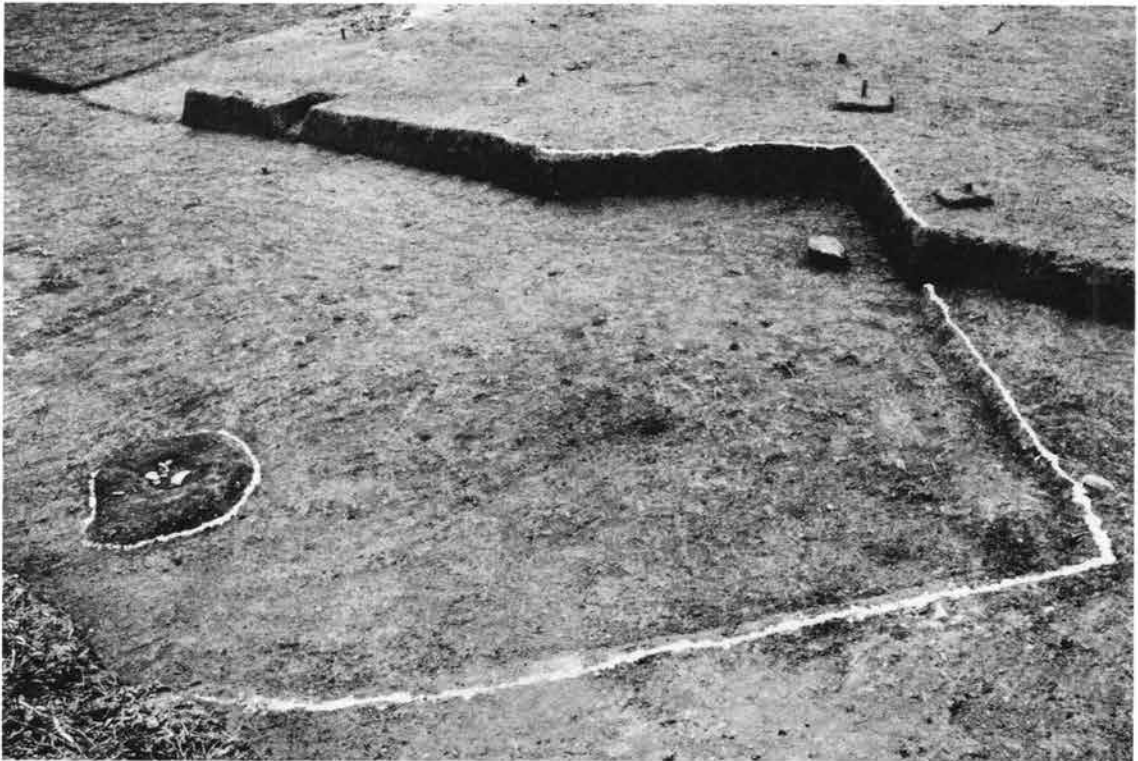
(1) 2号墳全景 (掘削前)



(2) 2号墳全景 (掘削後)



(1) B地点全景（北東から）



(2) 竪穴住居 S H01検出状況（北東から）



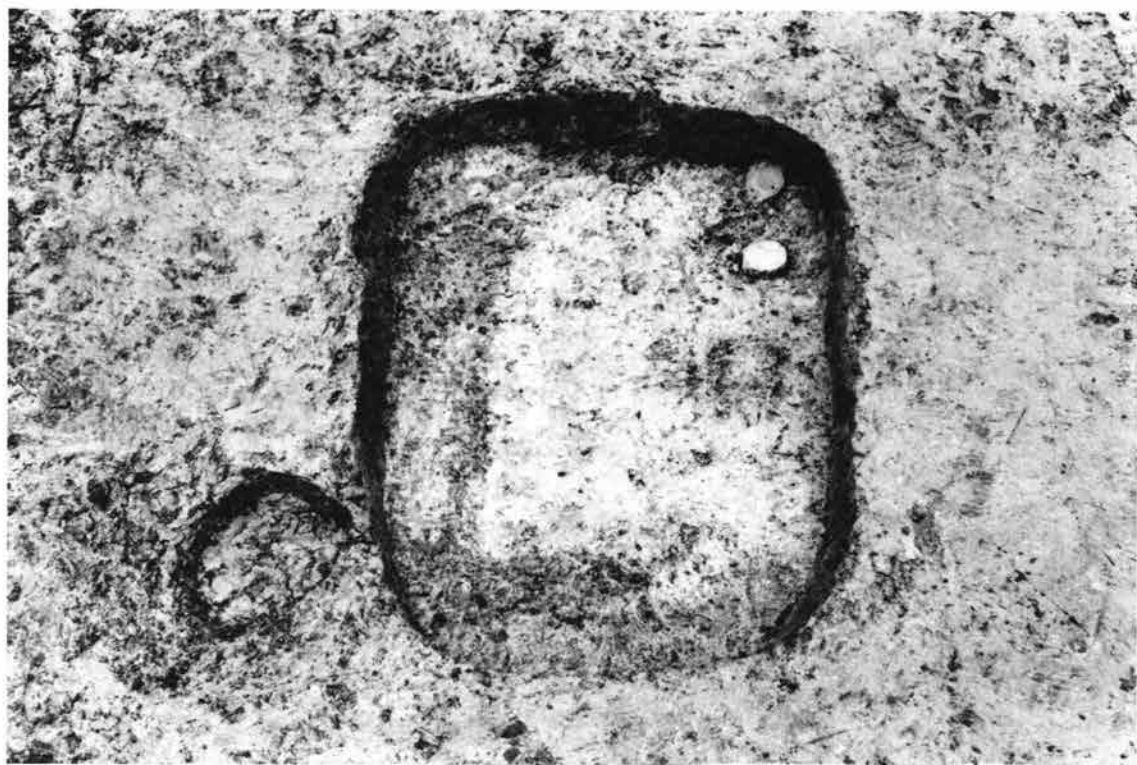
(1) 調査前全景（北から）



(2) 調査後全景（北から）



(1) A地区 S D01, S D04検出状況



(2) A地区 S K06検出状況

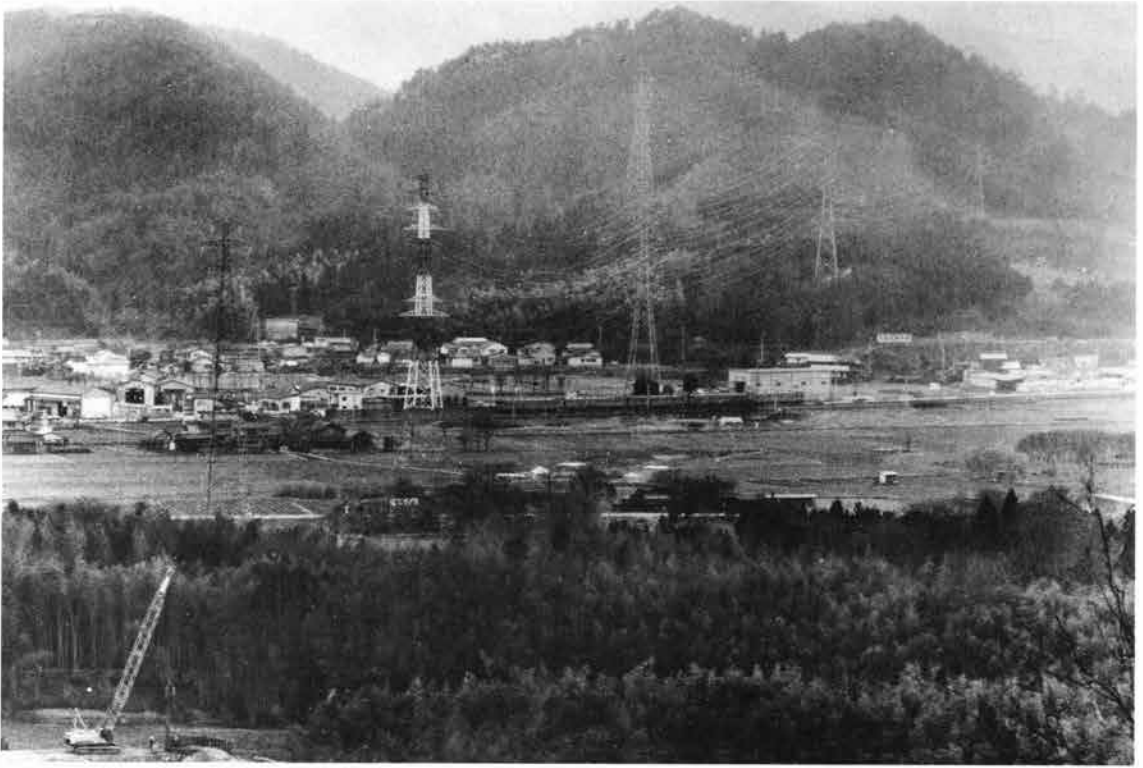


(1) A地区 S K01検出状況

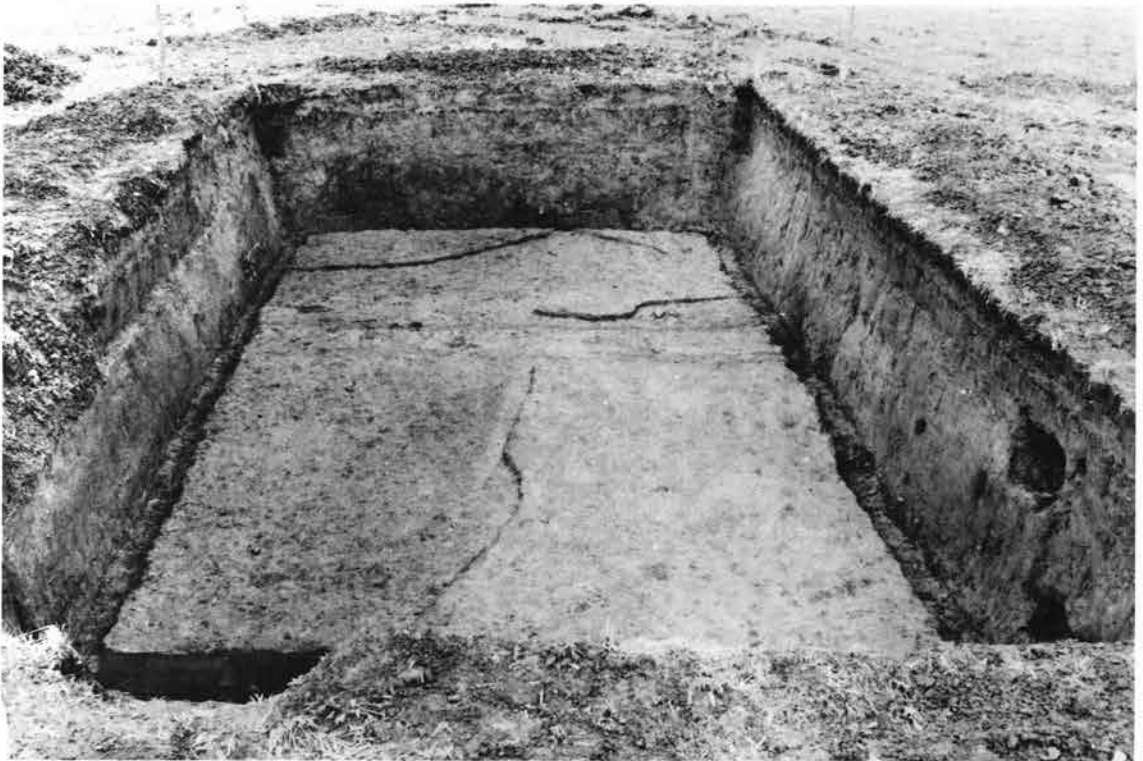


(2) A地区 S K01土師器出土状況

図版第47 観音寺遺跡



(1) 遠景（北から）



(2) 第15トレンチ溝検出状況（北東から）



(1) 第5トレンチ溝検出状況（南西から）



(2) 第5トレンチ溝内堆積状況（南西から）

京都府遺跡調査概報 第36冊

平成元年12月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)